ISSN 1341-6952

東北大学埋蔵文化財調査年報19

第1分冊

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点の調査
芦ノ口遺跡第5次調査

東北大学埋蔵文化財調査研究センター
2006

東北大学埋蔵文化財年報19第1分冊　正誤表

箇所		誤	正
78頁	図39　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(5)	図中のスケールの単位1m	図中のスケールの単位10cm

東北大学埋蔵文化財調査年報19

第1分冊

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点の調査
芦ノ口遺跡第5次調査

東北大学埋蔵文化財調査研究センター
2006

3．武家屋敷地区第７地点２号遺構・24号土坑（Ⅱ期、南から）

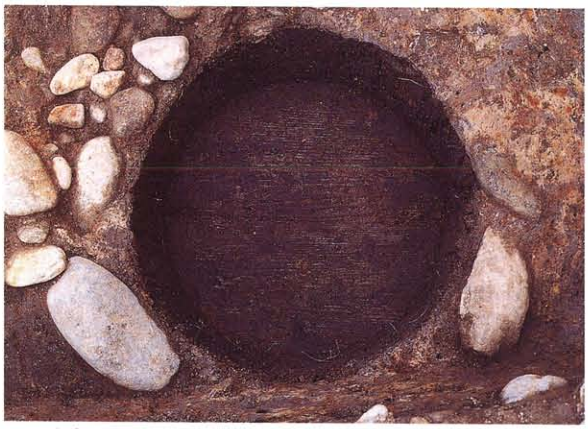
4．武家屋敷地区第７地点２号遺構堆積土の状況（Ⅱ期、東から）

5．武家屋敷地区第７地点１号遺構検出の犬全身骨格（Ⅱ期、西から）

6．武家屋敷地区第７地点２号遺構漆器出土状況（Ⅱ期、東から）

7．武家屋敷地区第７地点１号井戸と内部に残された梯子（Ⅱ期、北から）

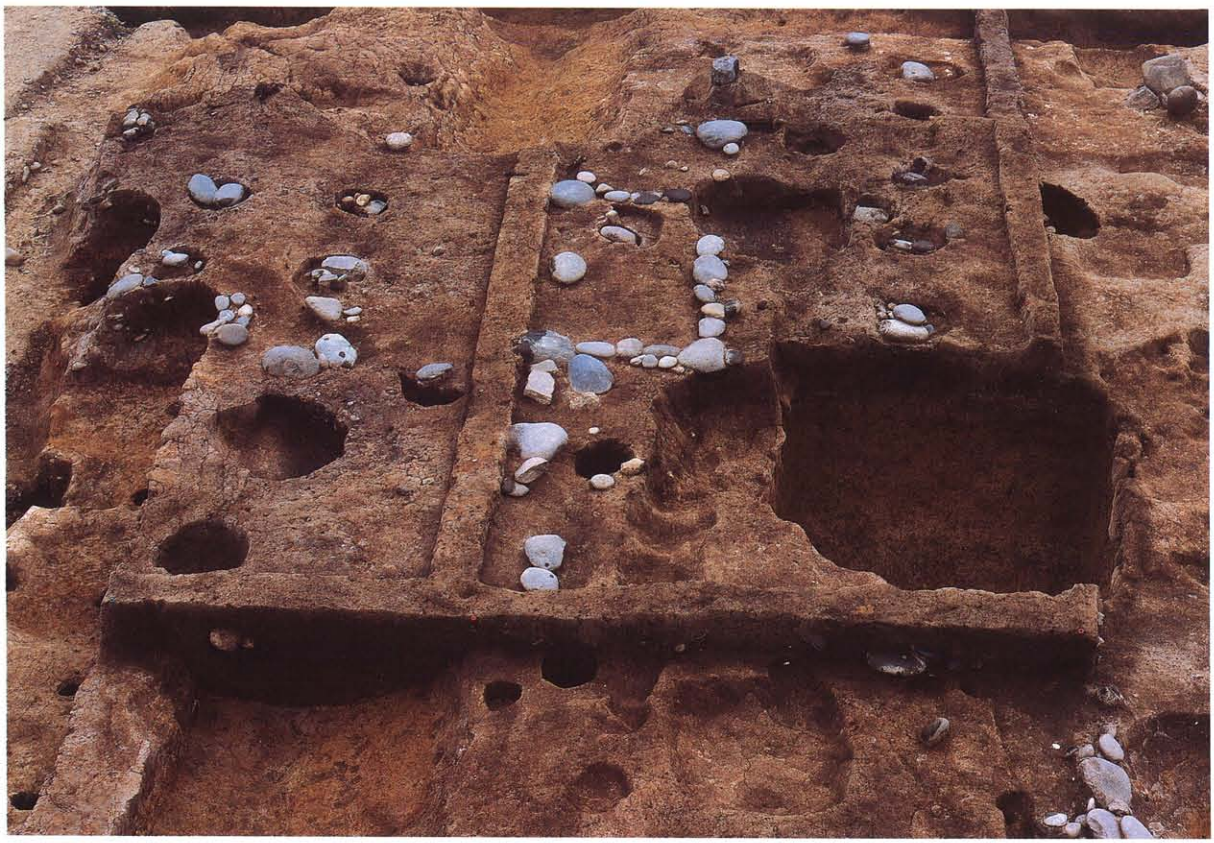
8．武家屋敷地区第７地点４号土坑出土の俵（Ⅱ期、西から）



9．武家屋敷地区第７地点桶埋設遺構（Ⅲ期、西から）

10．武家屋敷地区第７地点２号土坑遺物出土状況（Ⅲ期、北から）

11．武家屋敷地区第７地点池状遺構（Ⅲ期、西から）



12. 武家屋敷地区第７地点１号建物・２号建物（Ⅲ期、北から）

13. 武家屋敷地区第７地点Ⅳ期の遺構全景（北から）

序

東北大学構内には、仙台城跡二の丸地区をはじめとして、多くの埋蔵文化財包蔵地が知られている。本書は、2001年度に東北大学構内で実施した、施設整備に伴う埋蔵文化財調査や、それに関わる整理作業、研究活動などの事業概要をとりまとめたものである。当年度には、富沢キャンパスおいて芦ノ口遺跡の第５次調査、川内北キャンパスにおいて仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点の調査を実施した。

芦ノ口遺跡第５次調査では、古墳時代の粘土採掘抗が発見された。従来は縄文時代の粘土採掘抗が知られていたが、それとは異なる時代にも粘土が採掘されていたことが明らかとなった。粘土採掘抗の調査例は少なく、貴重な調査事例となるであろう。

二の丸北方武家屋敷地区第７地点では、礎石建物跡をはじめ様々な遺構が検出された。特筆されるものとして、極めて大規模なゴミ穴が検出され、膨大な量の遺物が出土した。木簡も大量に出土し、その記載内容から、18世紀前葉の享保年間に二の丸地区から出たゴミを捨てたものと考えられる。報告する遺物の量も極めて多くなるため、５分冊に分けて刊行することとした。第１分冊は、芦ノ口遺跡第５次調査の報告と、二の丸北方武家屋敷地区第７地点については検出遺構の報告までを掲載している。今後、第２分冊以降で、武家屋敷地区第７地点の出土遺物を順次報告していく予定である。年代の明らかな様々な種類の遺物が得られたこととなり、東北地方の近世考古学研究上、基準となる資料を提供することになると思われます。これらの成果が、広く活用されることを願うものです。

最後になりますが、調査の実施から報告書の刊行に至るまで、施設部を始め、大学内外の関係者および関係機関には、多くの御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

東北大学埋蔵文化財調査研究センター長
阿子島　香

例　言

1．本年報は、東北大学構内において、東北大学埋蔵文化財調査研究センターが2001年度に行った遺跡調査、ならびに研究成果をまとめたものである。

2．報告される遺跡と略号、調査期間、調査担当者は以下の通りである。

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７）

本調査　2001年４月４日～11月23日　藤沢敦・柴田（旧姓京野）恵子・高木暢亮

芦ノ口遺跡第５次調査（ＴＭ５）

本調査　2001年11月26日～12月20日　柴田恵子・高木暢亮

3．報告書の紙幅の関係から、2001年度の年報19は、５分冊に分けて刊行する。本書は、その第１分冊である。本書には、上記２遺跡の調査報告を掲載するが、その内、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点については、検出遺構の報告までを本書に掲載し、出土遺物については、第２分冊以降で報告する。

4．調査・整理作業は、東北大学埋蔵文化財調査研究センターが行った。

5．本年報の編集は、阿子島香の指導のもとに、藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮が担当した。

6．本文は、藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮が分担執筆した。本文執筆分担は、以下のとおりである。第Ⅲ章４の検出遺構については、３名で共同して執筆した。

第Ⅰ章：藤沢敦

第Ⅱ章：柴田恵子

第Ⅲ章１～３：藤沢敦

第Ⅲ章４：藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮

英文要旨については、柴田恵子が作成し、阿子島香が校訂した。

7．発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げる（敬称略）。

仙台市教育委員会、東北大学考古学研究室

8．出土遺物・調査記録は、東北大学埋蔵文化財調査研究センターで保管・管理している。

凡　例

1．方位は真北に統一してある。

2．図１と図２は、それぞれ国土地理院作成の、２万５千分の１地形図「仙台西北部」と「仙台西南部」、１万分の１地形図「青葉山」を使用した。

3．川内地区の仙台城跡二の丸地区、および二の丸北方の武家屋敷地区にあたる地域の地形測量図は、仙台市教育委員会の作成による「仙台城跡地形図」（縮尺500分の１）を使用した。

4．国土座標値を用いる場合には、日本測地系と世界測地系の別を、それぞれ記入した。

5．遺物の実測図および写真の縮尺は、それぞれに示した。

6．引用・参考文献は、巻末にまとめた。また本文中で、『東北大学埋蔵文化財調査年報』を引用する場合は、年報１という形で略記した。

7．挿図中のスクリーントーンは、特に指示しないものについては、以下の通りである。

遺構断面図　礫：　木：

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会（2001年度）

委員長	センター長（文学研究科　教授）	須藤　隆
委　員	川内地区協議会協議員（経済学研究科　教授）	田中素香
	青葉山地区協議会協議員（薬学研究科　教授）	小笠原國郎
	星陵地区協議会協議員（医学研究科　教授）	伊藤恒敏
	片平地区協議会協議員（電気通信研究所　教授）	中村慶久
	文学研究科　教　授	今泉隆雄
	文学研究科　教　授	大藤　修
	文学研究科　教　授	阿子島　香
	東北アジア研究センター　教　授	入間田宣夫
	理学研究科　教　授	藤巻宏和
	工学研究科　教　授	飯淵康一
	総合学術博物館　教　授	柳田俊雄
	施　設　部　長	加太孝司
幹　事	施設部　企画課長	佐々木紀安

東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会（2001年度）

委員長	センター長（文学研究科　教授）	須藤　隆
委　員	文学研究科　教　授	今泉隆雄
	文学研究科　教　授	大藤　修
	文学研究科　教　授	阿子島　香
	東北アジア研究センター　教　授	入間田宣夫
	理学研究科　教　授	藤巻宏和
	工学研究科　教　授	飯淵康一
	総合学術博物館　教　授	柳田俊雄
	調査研究員（文学研究科　助手）	藤沢　敦
	調査研究員（文学研究科　助手）	京野恵子
	調査研究員（文学研究科　助手）	高木暢亮
	施設部　企画課長	佐々木紀安

目　次

巻頭カラー図版
序
例言
凡例
東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会
東北大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会
目次
図目次
表目次
図版目次

第Ⅰ章　2001年度（平成13年度）事業の概要……1
1．はじめに……1
2．運営委員会・専門委員会……1
3．埋蔵文化財調査の概要……4
(1) 川内地区の調査……4
(2) 青葉山地区の調査……10
(3) 富沢地区の調査……10
4．遺物整理作業……10
5．保存処理事業……10
6．資料保管状況……13
7．研究活動……13
(1) 受託研究・共同研究等……13
(2) 学会発表等……13
(3) 資料調査……13
(4) 科学研究費採択状況……13
8．教育普及活動……13
(1) 非常勤講師……13
(2) 保管資料の貸出……14
(3) 外部からの派遣依頼等……14
(4) 広報活動……14

第Ⅱ章　富沢芦ノ口遺跡第５次調査（ＴＭ５）……15
1．芦ノ口遺跡の立地と周辺の遺跡……15
2．調査の経緯……15
(1) 2000年度までの調査……15
(2) 調査地点の位置……17
(3) 調査の方法と経過……17
3．基本層序……18
4．検出遺構……19
5．出土遺物……23
6．まとめ……25

第Ⅲ章　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７）の調査……27
1．仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の立地と歴史……27
(1) 仙台城と城下の沿革……27
(2) 二の丸北方の武家屋敷地区の変遷……28
2．調査経緯……35
(1) 2000年度までの調査……35
(2) 調査地点の位置……36
(3) 調査の方法と経過……36
①1984年度試掘調査……36
②2001年度本調査……36
③記録方法……41
④遺構の名称について……42
⑤遺物の取り上げについて……42
⑥整理作業……43
3．基本層序と時期区分……44
(1) 基本層序……44

(2) 遺構の変遷段階の設定 ……50
(3) 各期の推定時期 ……50
4．検出遺構 ……55
(1) 江戸時代以前の遺構 ……56
(2) 江戸時代以降の遺構 ……58
①Ⅰ期の遺構 ……58
②Ⅱ期の遺構 ……70
③Ⅲ期の遺構 ……99
④Ⅳ期の遺構 ……118
(3) 小結 ……124

引用・参考文献
英文要旨

写真図版

※以上第１分冊

第Ⅲ章　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７）の調査
5．出土遺物１〈陶磁器・土器・土製品・瓦〉 ……第２分冊
6．出土遺物２〈木簡・墨書ある木製品〉 ……第３分冊
7．出土遺物３〈その他の遺物〉 ……第４分冊
8．分析・考察 ……第５分冊

図　目　次

図１　東北大学と周辺の遺跡 ･････････････････ 2
図２　仙台城と二の丸の位置 ･････････････････ 3
図３　仙台城跡二の丸・武家屋敷地区調査地点 ･･･ 5
図４　青葉山地区調査地点 ･････････････････ 7
図５　富沢地区調査地点 ･････････････････ 9
図６　保存処理作業室平面図 ･････････････････11
図７　保存処理作業室の状況 ･････････････････11
図８　収蔵遺物量の推移 ･････････････････12
図９　芦ノ口遺跡第５次調査区と
周辺調査区の位置 ･････16
図10　芦ノ口遺跡第５次調査層序模式図 ･････････18
図11　芦ノ口遺跡第５次調査６層上面遺構配置図 ･20
図12　芦ノ口遺跡第５次調査検出遺構(1) ････････21
図13　芦ノ口遺跡第５次調査検出遺構(2) ････････22
図14　芦ノ口遺跡第５次調査出土石器 ･････････24
図15　二の丸北方武家屋敷地区における
江戸時代の道路の復元 ･････29
図16　武家屋敷地区第７地点周辺の
絵図・地図(1) ･･････32
図17　武家屋敷地区第７地点周辺の
絵図・地図(2) ･･････33
図18　武家屋敷地区第７地点調査区の位置 ･･････37
図19　武家屋敷地区第１地点調査区と
第７地点調査区の関係 ･････38
図20　武家屋敷地区第７地点調査区模式図 ･･････40
図21　武家屋敷地区第７地点基本層序模式図 ･････44
図22　武家屋敷地区第７地点基本層序断面図(1) ･･46
図23　武家屋敷地区第７地点基本層序断面図(2) ･･47
図24　武家屋敷地区第７地点基本層序断面図(3) ･･48
図25　武家屋敷地区第７地点基本層序断面図(4) ･･49
図26　武家屋敷地区第７地点江戸時代以前の遺構 ･57
図27　武家屋敷地区第７地点Ⅰ期遺構配置図 ･････59
図28　武家屋敷地区第７地点Ⅰ期の遺構(1) ･･････60
図29　武家屋敷地区第７地点Ⅰ期の遺構(2) ･･････61
図30　武家屋敷地区第７地点Ⅰ期の遺構(3) ･･････62
図31　武家屋敷地区第７地点Ⅰ期の遺構(4) ･･････63
図32　武家屋敷地区第７地点Ⅰ期の遺構(5) ･･････64
図33　武家屋敷地区第７地点
Ⅱ期遺構配置図(1) ･･････72
図34　武家屋敷地区第７地点
Ⅱ期遺構配置図(2) ･･････73
図35　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構(1) ･･････74
図36　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構(2) ･･････75
図37　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構(3) ･･････76
図38　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構(4) ･･････77
図39　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構(5) ･･････78
図40　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構(6) ･･････79
図41　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構(7) ･･････80
図42　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構(8) ･･････81
図43　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構(9) ･･････82
図44　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構(10) ･････83
図45　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構(11) ･････84
図46　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構(12) ･････85
図47　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構(13) ･････86
図48　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構(14) ･････87
図49　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構(15) ･････88
図50　武家屋敷地区第７地点
Ⅲ期遺構配置図(1) ･････100
図51　武家屋敷地区第７地点
Ⅲ期遺構配置図(2) ･････101
図52　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構(1) ･････102
図53　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構(2) ･････103
図54　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構(3) ･････104
図55　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構(4) ･････105
図56　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構(5) ･････106
図57　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構(6) ･････107
図58　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構(7) ･････108
図59　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構(8) ･････109
図60　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構(9) ･････110
図61　武家屋敷地区第７地点Ⅳ期遺構配置図 ････119
図62　武家屋敷地区第７地点Ⅳ期の遺構(1) ･････120
図63　武家屋敷地区第７地点Ⅳ期の遺構(2) ･････121
図64　武家屋敷地区第７地点Ⅳ期の遺構(3) ･････122

表目次

表1　2001年度調査概要表 ……1
表2　芦ノ口遺跡第5次調査出土遺物集計表 ……24
表3　芦ノ口遺跡第5次調査出土土師器観察表 …24
表4　芦ノ口遺跡第5次調査出土石器観察表 ……24
表5　主要な仙台城下絵図 ……31
表6　武家屋敷地区第7地点関連絵図人名 ……34
表7　仙台藩の家格 ……34
表8　武家屋敷地区第7地点時期別遺構一覧表 …52
表9　武家屋敷地区第7地点遺構名称対照表(1) ‥53
表10　武家屋敷地区第7地点遺構名称対照表(2) ‥54

図版目次

図版1　芦ノ口遺跡
第5次調査全景・検出遺構(1) ……131
図版2　芦ノ口遺跡第5次調査検出遺構(2) ……132
図版3　芦ノ口遺跡第5次調査検出遺構(3) ……133
図版4　芦ノ口遺跡第5次調査
検出遺構(4)・出土遺物 ……134
図版5　武家屋敷地区第7地点全景(1) ……135
図版6　武家屋敷地区第7地点全景(2) ……136
図版7　武家屋敷地区第7地点全景(3) ……137
図版8　武家屋敷地区第7地点全景(4) ……138
図版9　武家屋敷地区第7地点
広域セクション(1) ……139
図版10　武家屋敷地区第7地点
広域セクション(2) ……140
図版11　武家屋敷地区第7地点
広域セクション(3) ……141
図版12　武家屋敷地区第7地点
広域セクション(4)、縄文時代の遺構 …142
図版13　武家屋敷地区第7地点Ⅰ期の遺構(1) …143
図版14　武家屋敷地区第7地点Ⅰ期の遺構(2) …144
図版15　武家屋敷地区第7地点Ⅰ期の遺構(3) …145
図版16　武家屋敷地区第7地点Ⅰ期の遺構(4) …146
図版17　武家屋敷地区第7地点
Ⅰ期・Ⅰ～Ⅱ期の遺構 ……147
図版18　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(1) …148
図版19　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(2) …149
図版20　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(3) …150
図版21　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(4) …151
図版22　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(5) …152
図版23　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(6) …153
図版24　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(7) …154
図版25　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(8) …155
図版26　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(9) …156
図版27　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(10) ‥157
図版28　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(11) ‥158
図版29　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(12) ‥159
図版30　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(13) ‥160
図版31　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(14) ‥161
図版32　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(15) ‥162
図版33　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(16) ‥163
図版34　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構(17) ‥164
図版35　武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(1) …165
図版36　武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(2) …166
図版37　武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(3) …167
図版38　武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(4) …168
図版39　武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(5) …169
図版40　武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(6) …170
図版41　武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(7) …171
図版42　武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(8) …172
図版43　武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(9) …173
図版44　武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(10) ‥174
図版45　武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構(11) ‥175
図版46　武家屋敷地区第7地点Ⅳ期の遺構(1) …176
図版47　武家屋敷地区第7地点Ⅳ期の遺構(2) …177

第Ⅰ章　2001年度（平成13年度）事業の概要

1．はじめに

東北大学には、仙台市内の各キャンパスに加えて、多くの研究施設がある。これらの各地区構内には、多くの埋蔵文化財が存在している（図１）。特に川内地区は、ほぼ全域が近世の仙台城跡二の丸地区と二の丸北方武家屋敷地区にあたっている（図２）。東北大学構内での施設整備等に伴う埋蔵文化財調査については、1983年度に東北大学埋蔵文化財調査委員会が組織されて以降、その実務機関である埋蔵文化財調査室が、調査の任にあたってきた。1994年度には、埋蔵文化財調査委員会を改組し、学内共同利用施設としての埋蔵文化財調査研究センターが設置され、調査委員会の事業を引き継いでいる。

2001年度においても、川内北地区で大規模な調査が実施され、新たな資料を提供することとなった。本年報は、これらの調査成果、および同年度のセンターの研究教育活動など、各種事業についてまとめたものである。

2．運営委員会・専門委員会

東北大学埋蔵文化財調査研究センターでは、センターの運営に関する重要事項を審議する運営委員会と、運営委員会の下に埋蔵文化財調査に関する専門的事項を審議する専門委員会が設置されており、両委員会の審議をもとに運営が進められている。通常は、運営委員会は年度当初に一回開催し、そこで年間の事業予定・予算等を審議し、調査に関わる具体的な事項は、専門委員会をその都度開催して審議することとしている。

2001年度（平成13年度）は、運営委員会を３回、専門委員会を２回開催した。それぞれの開催月日・議事内容は以下の通りである。

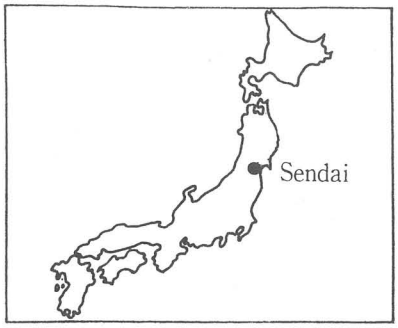
埋蔵文化財調査研究センター運営委員会

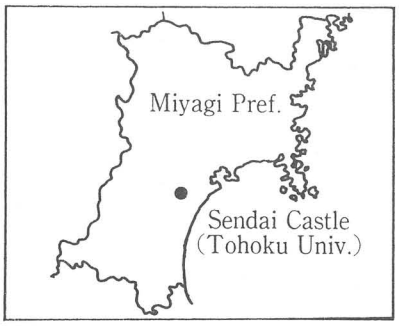
４月12日　審議事項　（１）平成13年度埋蔵文化財調査計画について
（２）平成13年度センター運営費について
（３）平成13年度整理作業計画について
（４）東北大学埋蔵文化財調査研究センターの組織見直しについて
（５）平成13年度非常勤講師の委嘱について
（６）その他

報告事項　（１）平成12年度埋蔵文化財調査結果について
（２）平成12年度センター運営経費決算について
（３）平成12年度整理作業について
（４）調査研究員の流用定員について
（５）その他

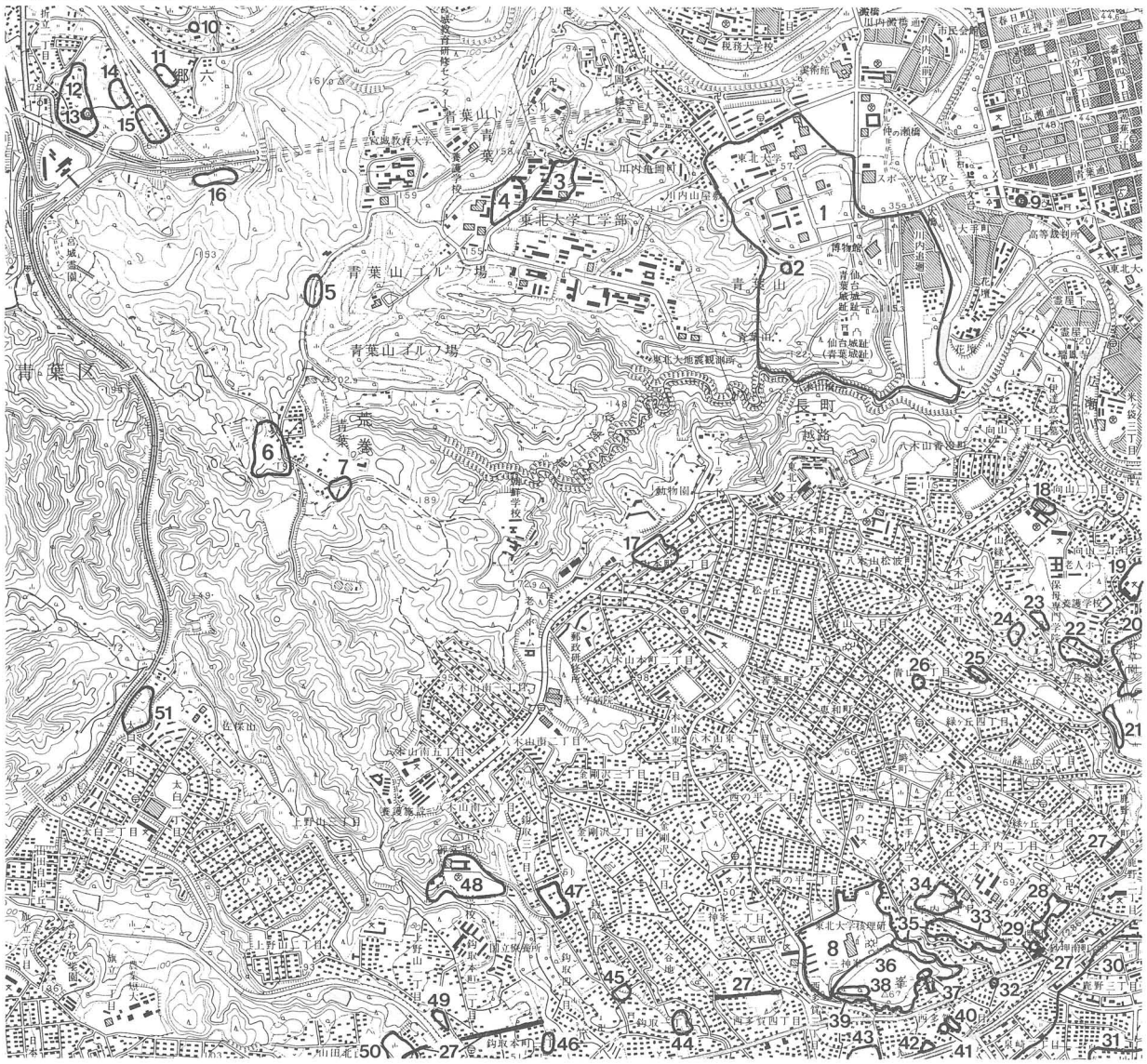
表１　2001年度調査概要表
Tab.1　Excavations on the campus in the fiscal year 2001

調査の種類	調　査　地　点（略号）	原　　因	調査期間	面　積	時　期
本 調 査	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（BK7）	マルチメディア総合研究棟新営	5/7～11/23	810㎡	近世
	青葉山Ｅ遺跡第７次調査（AOE７）	理学研究科総合研究棟（Ⅲ期）新営	11/1～19	300㎡	縄文
	芦ノ口遺跡第５次調査（TM5）	GeV γ線実験室新営	11/26～12/20	512㎡	縄文～古墳
立会調査	川内北地区駐輪場（2001－1）	駐輪場工事	4/9	—	—
	川内総合研究棟東側（2001－2）	川内総合研究棟新営	6/11	—	—
	マルチメディア総合研究棟南側（2001－3）	汚水管工事	12/17～25	—	—
	図書館2号館東側（2001－4）	電気ケーブル埋設	3/18	—	—





1 : Ruin of Sendai Castle
2 : Kawauchi steles
3 : Aobayama Site Loc. B
4 : Aobayama Site Loc. E
5 : Aobayama Site Loc. C
6 : Aobayama Site Loc. A
7 : Aobayama Site Loc. D
8 : Ashinokuchi Site



1：仙台城跡　2：川内古碑群　3：青葉山遺跡B地点　4：青葉山遺跡E地点　5：青葉山遺跡C地点　6：青葉山遺跡A地点
7：青葉山遺跡D地点　8：芦ノ口遺跡　9：片平仙台大神宮の板碑　10：郷六大日如来の碑　11：葛岡城跡　12：郷六城跡
13：郷六建武碑　14：沼田遺跡　15：郷六御殿跡　16：郷六遺跡　17：松ヶ岡遺跡　18：向山高裏遺跡　19：萩ヶ丘遺跡
20：茂ヶ崎城跡　21：二ツ沢横穴墓群　22：萩ヶ岡B遺跡　23：八木山緑町遺跡　24：二ツ沢遺跡　25：青山二丁目遺跡
26：青山二丁目B遺跡　27：杉土手（鹿除土手）　28：砂押屋敷遺跡　29：砂押古墳　30：富沢遺跡　31：泉崎浦遺跡
32：金洗沢古墳　33：土手内窯跡　34：土手内遺跡　35：土手内横穴墓群　36：三神峯遺跡　37：金山窯跡　38：三神峯古墳群
39：富沢窯跡　40：裏町東遺跡　41：裏町古墳　42：原東遺跡　43：原遺跡　44：八幡遺跡　45：後田遺跡　46：町遺跡
47：神漉山遺跡　48：御堂平遺跡　49：上野山遺跡　50：北前遺跡　51：佐保山東遺跡

図1　東北大学と周辺の遺跡
Fig.1　Archaeological sites and Tohoku University

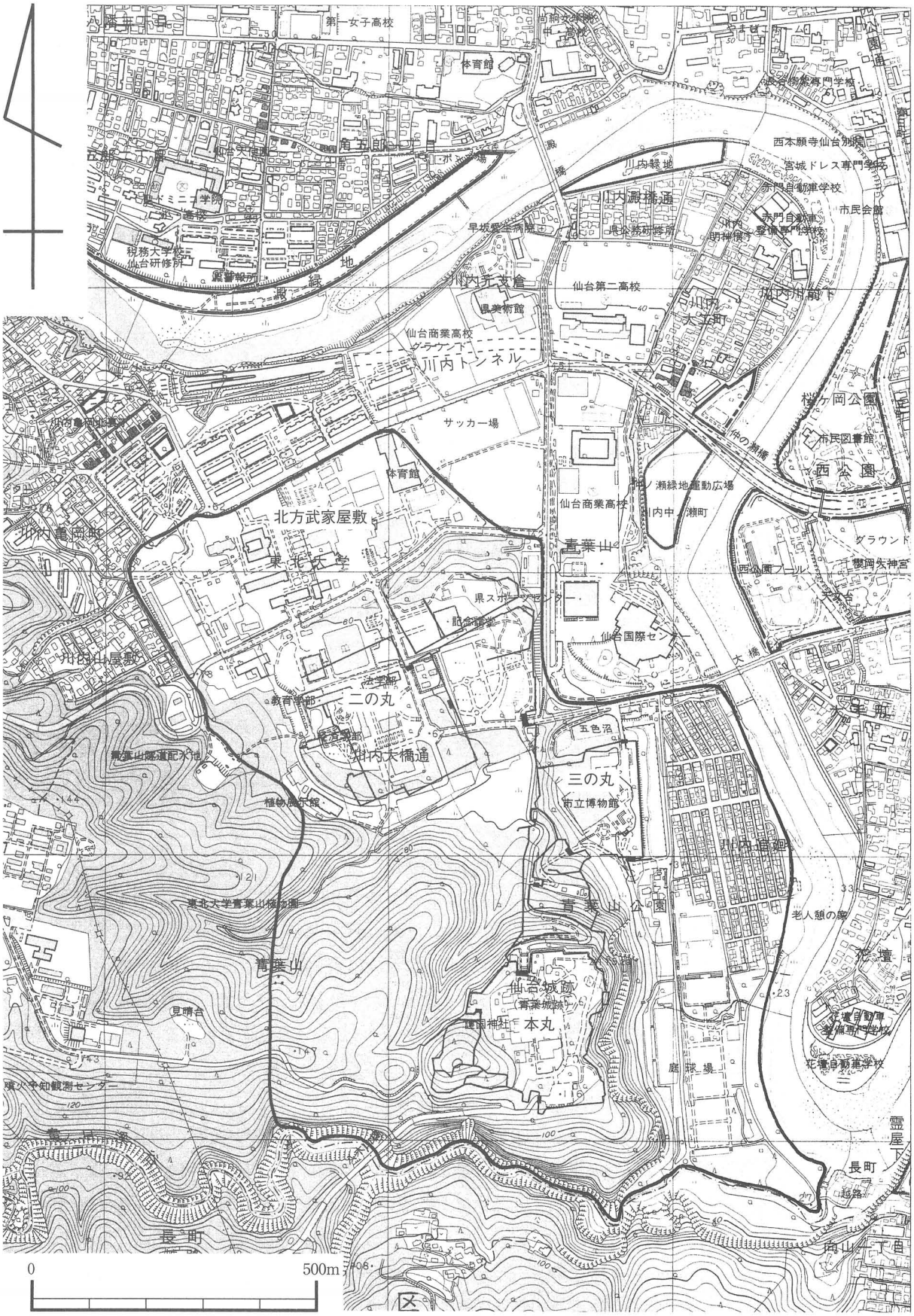


図２　仙台城と二の丸の位置
Fig.2　Distribution of Sendai Castle

7月27日　審議事項　（1）東北大学埋蔵文化財調査研究センターの組織見直しについて
（2）その他
報告事項　（1）東北大学百周年記念事業準備ＷＧへの対応について
（2）東北大学埋蔵文化財調査年報14の作成と刊行について
（3）その他
8月8日　審議事項　（1）東北大学埋蔵文化財調査研究センターの組織見直しについて
（2）その他
報告事項　（1）その他

埋蔵文化財調査研究センター運営委員会専門委員会

4月12日　審議事項　（1）平成13年度埋蔵文化財調査計画について
（2）平成13年度整理作業計画について
（3）その他
報告事項　（1）平成12年度埋蔵文化財調査結果について
（2）平成12年度整理作業について
（3）その他
10月10日　審議事項　（1）（川内）マルチメディア総合研究棟新営に伴う埋蔵文化財調査について
（2）（青葉山2）総合研究棟Ⅲ期新営に伴う埋蔵文化財調査について
（3）（理）核理研GeＶγ線実験棟新営に伴う埋蔵文化財調査について
報告事項　（1）その他

3．埋蔵文化財調査の概要

2001年度は、川内地区・青葉山地区・富沢地区において、本調査3件、立会調査4件の、合計7件の調査を実施した。（表1）。

(1) 川内地区の調査

川内地区では、本調査1件と立会調査4件を実施した（図3）。

本調査を実施したのは、川内北地区のマルチメディア総合研究棟新営に伴う、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点（BK7）の調査である。この調査では、多数の遺構・遺物が発見された。特に、18世紀前葉の巨大なゴミ穴が検出され、木簡を始めとする、多種多様な遺物が大量に出土している。そのため、報告する必要のある遺物量が多く紙幅が膨大になるため、5分冊とすることにした。本書が相当する第1分冊では、検出遺構の報告までを掲載した（第Ⅲ章1～4）。出土遺物については、第2分冊以降において報告することとし、来年度以降に刊行する予定である。

立会調査は川内北地区が2件、川内南地区が2件であった。

川内北地区の1件は、駐輪場の整備に関わる工事に伴うものである。掘削規模が極めて小規模であったため、立会調査とした。もう1件は、マルチメディア総合研究棟新営工事に伴い、汚水管を迂回させる必要があったため、その工事に伴うものである。工事区域が、明治以降の盛土が厚い範囲と考えられたため、立会調査とした。いずれにおいても、遺構・遺物は発見されていない。

川内南地区の2件は、前年度に本調査を実施した、文系総合研究棟新営に関連する付帯工事に伴うものである。1件は、新研究棟周辺の整備に関わるもので、建物東側の環境整備や、建物北側の渡り廊下設置などである。本調査の際に確認した近代以降の盛土の範囲に収まると考えられたため、立会調査とした。もう1件は、新研究棟

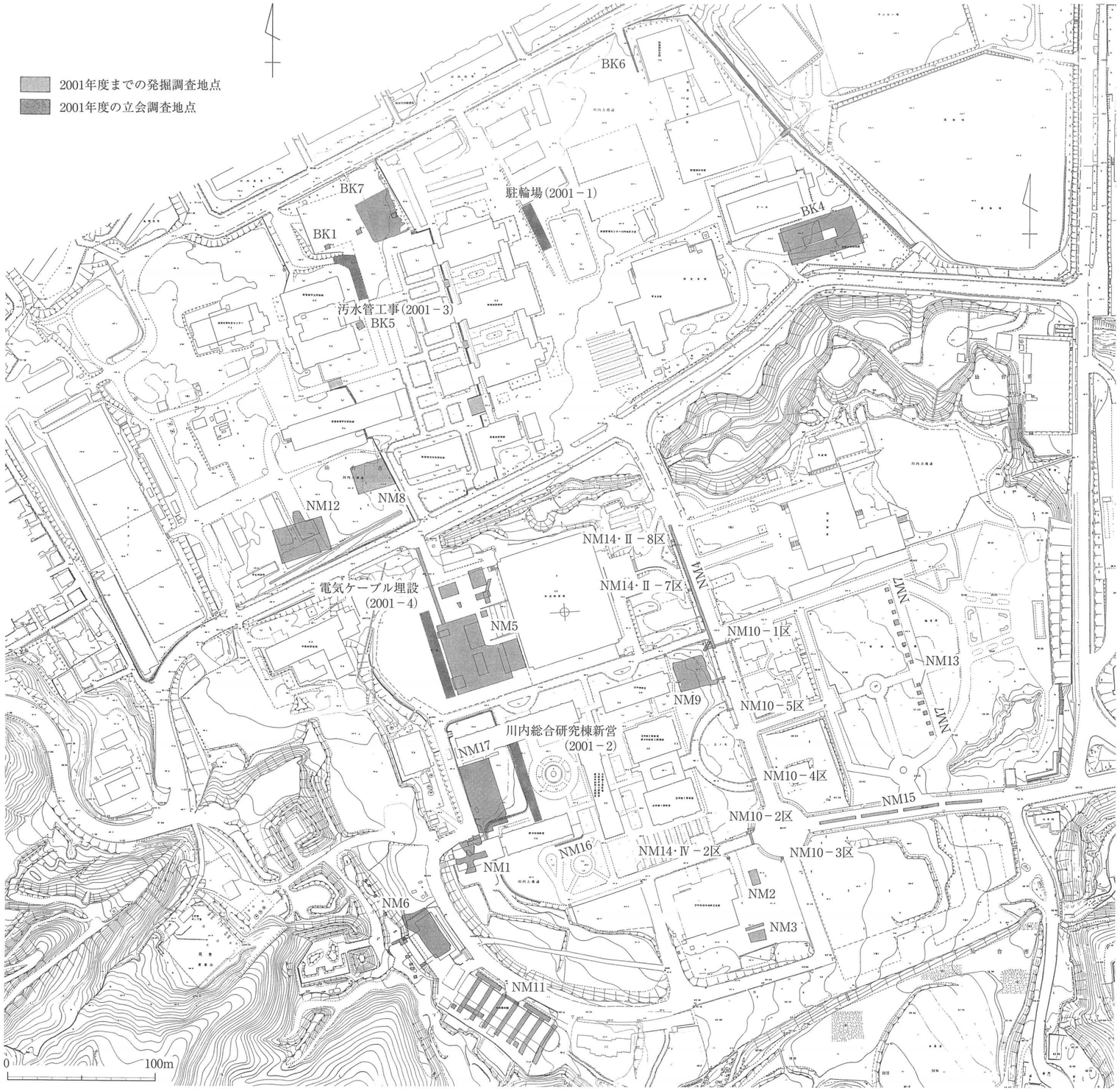


図３　仙台城跡二の丸・武家屋敷地区調査地点
Fig.3　Location of excavations until 2001 at *Ninomaru*（NM i.e. Secondary Citadel）and *samurai* residence（BK）

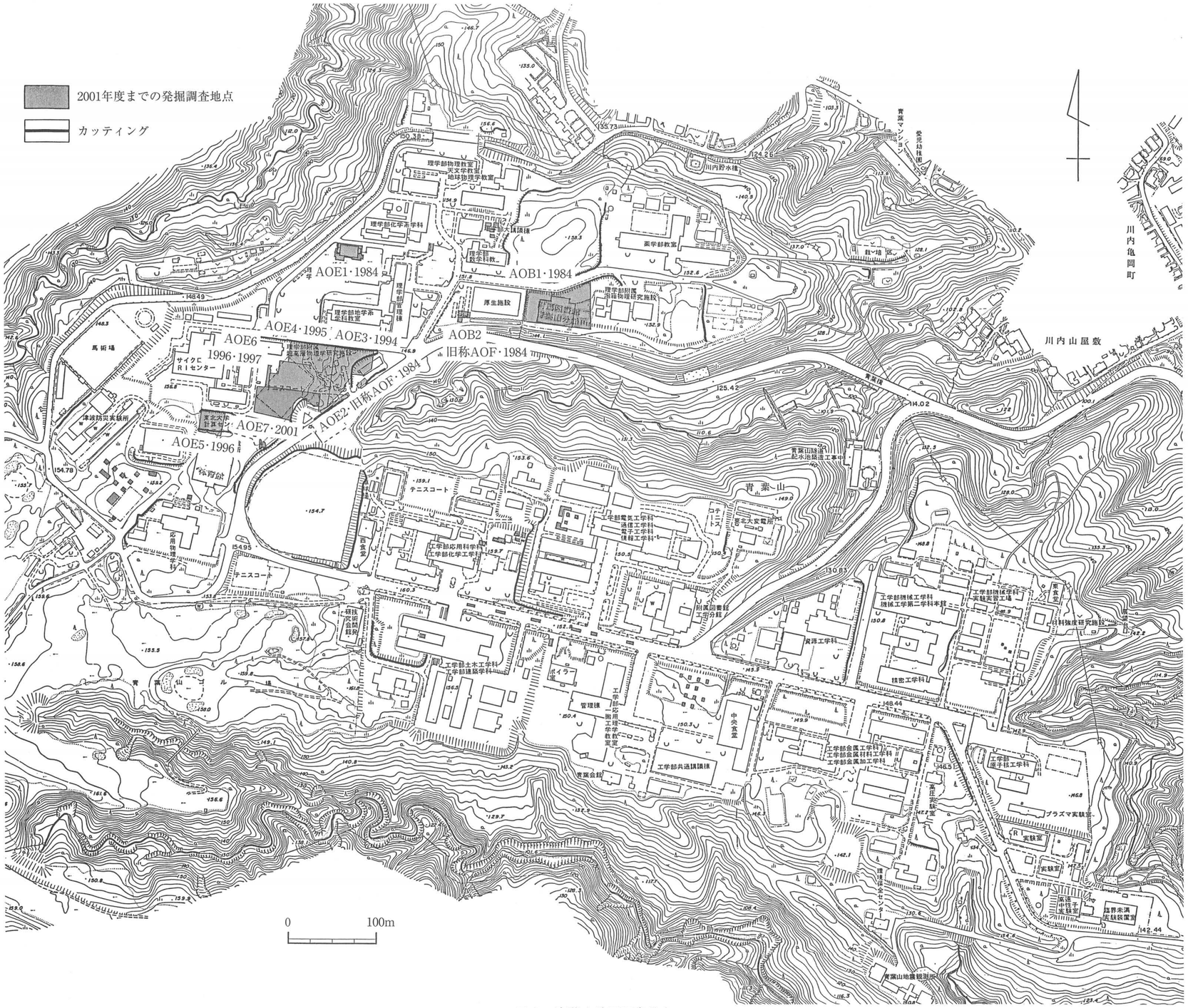


図４　青葉山地区調査地点
Fig.4　Location of excavations at Aobayama campus

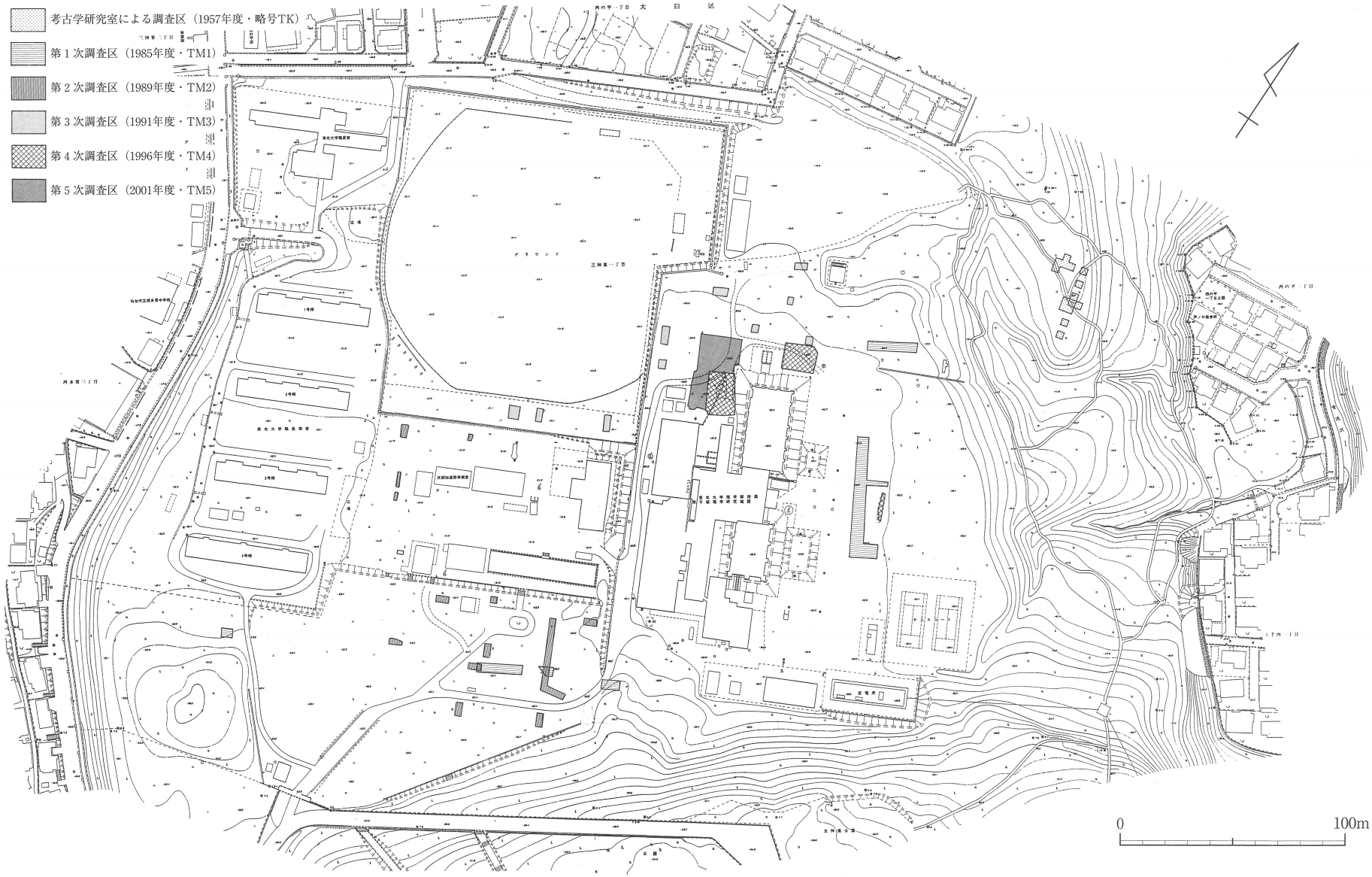


図５　富沢地区調査地点
Fig.5　Location of excavations at Tomizawa campus（TM i.e. Tomizawa Ashinokuchi site）

で使用する電気ケーブルを敷設するための工事に伴うものである。従来の知見から、近代以降の盛土の範囲に収まると考えられたため、立会調査とした。いずれの調査においても、遺構・遺物は発見されていない。

(2) 青葉山地区の調査

青葉山地区では、本調査１件を実施した（図４）。

本調査を実施したのは、理学研究科実験研究棟新営に伴う、青葉山Ｅ遺跡第７次調査（ＡＯＥ７）である。この理学研究科実験研究棟については、１～３期に分けて建設工事を進める計画である。本年度は、２期工事分の事業化が認められたため、この２期工事と一部並行しつつ、３期工事区域の調査を実施することとなった。しかし、本年度の調査予定にほとんど余裕がない状態であったため、この調査については、翌年度の2002年度に実施することとした。ただし、２期分の工事との関係で、先行して調査を進める必要のある区域のみを、今年度に実施した。このように当地点の調査は２ヶ年に渡るため、調査成果については、2002年度事業を取りまとめる調査年報20において、まとめて報告する。

(3) 富沢地区の調査

富沢地区では、本調査１件を実施した（図５）。

本調査を実施したのは、理学研究科附属原子核理学研究施設のGeＶγ線実験棟新営に伴う、芦ノ口遺跡第５次調査（ＴＭ５）である。これについては、本書の第Ⅱ章において報告する。

４．遺物整理作業

2001年度には、1999年度事業を取りまとめた『東北大学埋蔵文化財調査年報17』を刊行した。1999年度に実施した調査は、翌年度事業である仙台城跡二の丸第17地点の調査を、一部前倒しで行った以外は、立会調査だけであった。そのため、年報17に掲載した調査報告はない。立会調査結果や、他の事業内容を要約して掲載した。

2001年度の遺物整理作業は、前年度に調査を実施した、仙台城跡二の丸第17地点の出土遺物の整理が中心となった。出土遺物の水洗・注記は、現場作業中にかなり進めてあった。そのため当年度の整理作業は、水洗・注記の残った分を終わらせること、各種遺物の接合・分類など、基礎的な作業を中心に行った。その一方で、当年度に調査を実施した二の丸北方武家屋敷地区第７地点で大量の木製品が出土し、その水洗を優先して進めなければならない事態が生起した。二の丸北方武家屋敷地区第７地点の調査が終了した12月以降は、同地点出土の木製品の水洗作業に、多数の人手を割かねばならなくなった。この影響で、二の丸第17地点の整理作業は、当初計画通りには進行しない結果となった。

５．保存処理事業

東北大学埋蔵文化財調査研究センターでは、仙台城跡二の丸出土遺物を中心に、木製品・漆塗製品・金属製品など、保存処理を必要とする遺物を多数保管している。この内、木製品と金属製品については、当センターで保存処理を進めてきている。木製品については、1997年度以降、糖アルコール（ラクチトール）を利用した処理を行っている（年報16）。2001年度は、仙台城跡二の丸第９地点（1990年度調査）の出土木製品を中心に、保存処理を進めた。

当センターでの保存処理作業は、1992年度に含浸槽を設置して以来、専用に使用できる場所がなかったため、やむなくガレージの空きスペースを利用して行ってきた。厳冬期には気温が零下に下がる環境のため、冬期間の作業は困難で、作業効率の点からも問題を残していた。そのためセンターと施設部で対策を検討してきたが、保存処理作業のためのプレハブ（平屋建・79.1㎡）を設置できることとなり、2000年度の末に工事が行われ、2001

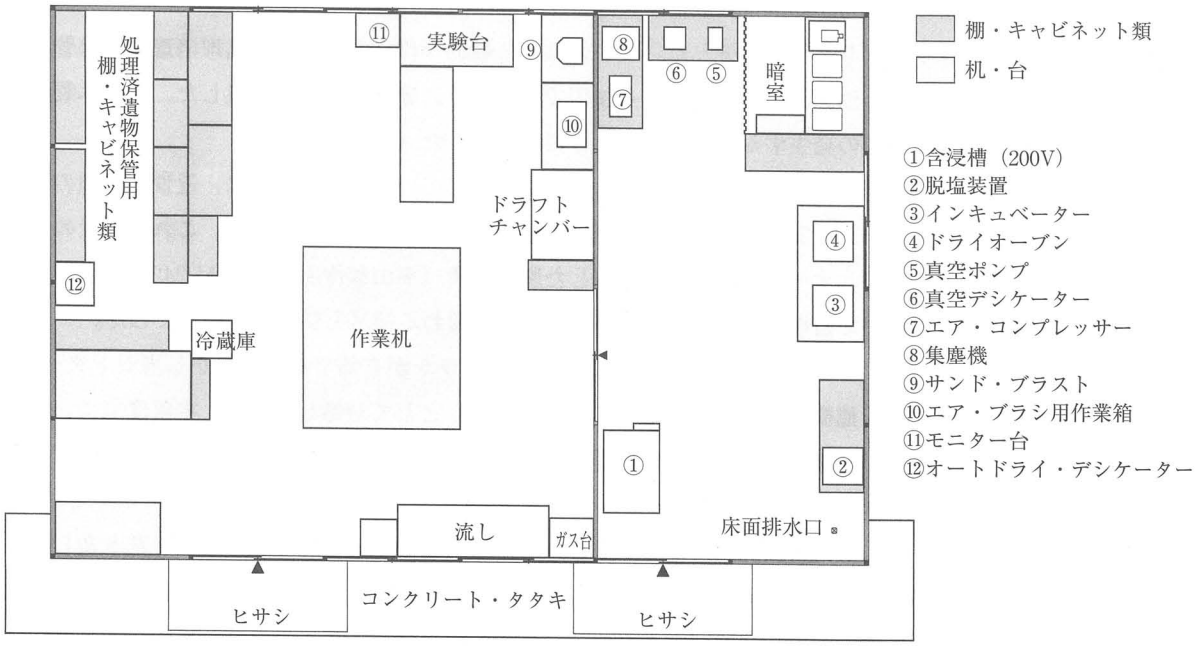
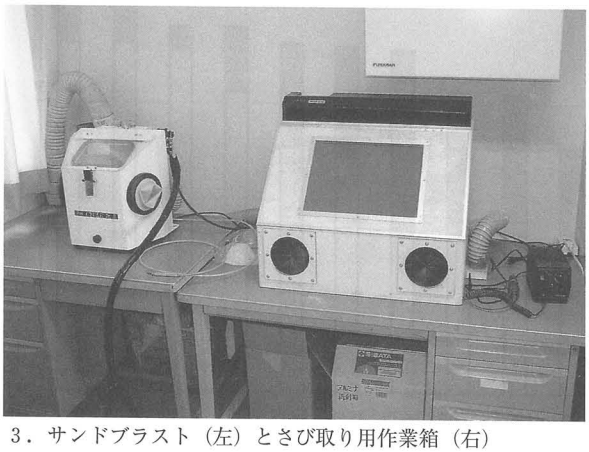


図６　保存処理作業室平面図
Fig.6　Sketch map of a laboratory to conserve the archaeological remains

１．保存処理作業室外観

２．木製品処理室の様子


３．サンドブラスト（左）とさび取り用作業箱（右）

４．エアコンプレッサー（左）と集塵機（右）

図７　保存処理作業室の状況
Fig.7　Views of a laboratory to conserve the archaeological remains

年度から使用を開始した。施設の平面図と、主要な機器の配置は、図６の通りである。

保存処理作業室は、仕切により２室に区分した。広い側は、一般的な作業室、および処理済遺物の保管場所として使用するようにした。狭い側は、洗い場としても使用できるよう、床面排水口を設置した。主に木製品の処理関係の機器と、稼働時に騒音の発生する機器を、こちら側に配置した（図７）。

当センターが実施している調査においては、鉄製品も大量に出土している。鉄製品では、近世の釘類の出土数量が膨大で、充分なクリーニングも実施できず、未処理のまま保管する状態が続いていた。これら大量の鉄製品を効率良く脱塩処理するために、オートクレーブを改良した脱塩装置（平山製作所製・DSM-242Ⅱ-K）を昨年度末に購入した。これに引き続いて当年度は、金属製品の保存処理に関わる機器を整備することとした。

金属製品のさび取りには、グラインダーなどとともに、エアーブラシが有効である。しかし当センターには、これまでエアーブラシがなく、他機関の機材を使用させていただくなどして対処してきた。本年度末に、予算上のやり繰りがついたため、エアーブラシと関連する機器を購入することとした。金属製品のさび取りには、歯科用のサンドブラストを利用する場合が多いが、従来良く使用されていた機器が製造停止となっていた。そのため、同様の機能を有するものとして、大榮歯科産業製のサイクルジュニアⅢを使用することとし、一部改造した上で納入させた。これに伴い必要となる、エア・コンプレッサー（日立ベビコン0.4LP-7SA）と集塵機（日立RG-70S2）も同時に購入した。作業中の騒音を軽減するために、仕切壁の裏側にエア・コンプレッサーと集塵機は設置した。また、従来から使用していた、金属製品のさび取り用に独自に製作した作業箱についても、集塵機とつなげることができるように改造した。

これら以外の金属製品処理に関わるものとして、実体顕微鏡（カートン光学NSZT-1LHT）、顕微鏡用CCDカメラとモニター、真空ポンプ（DA-200型）、導電率計（ES-12型）などを購入した。

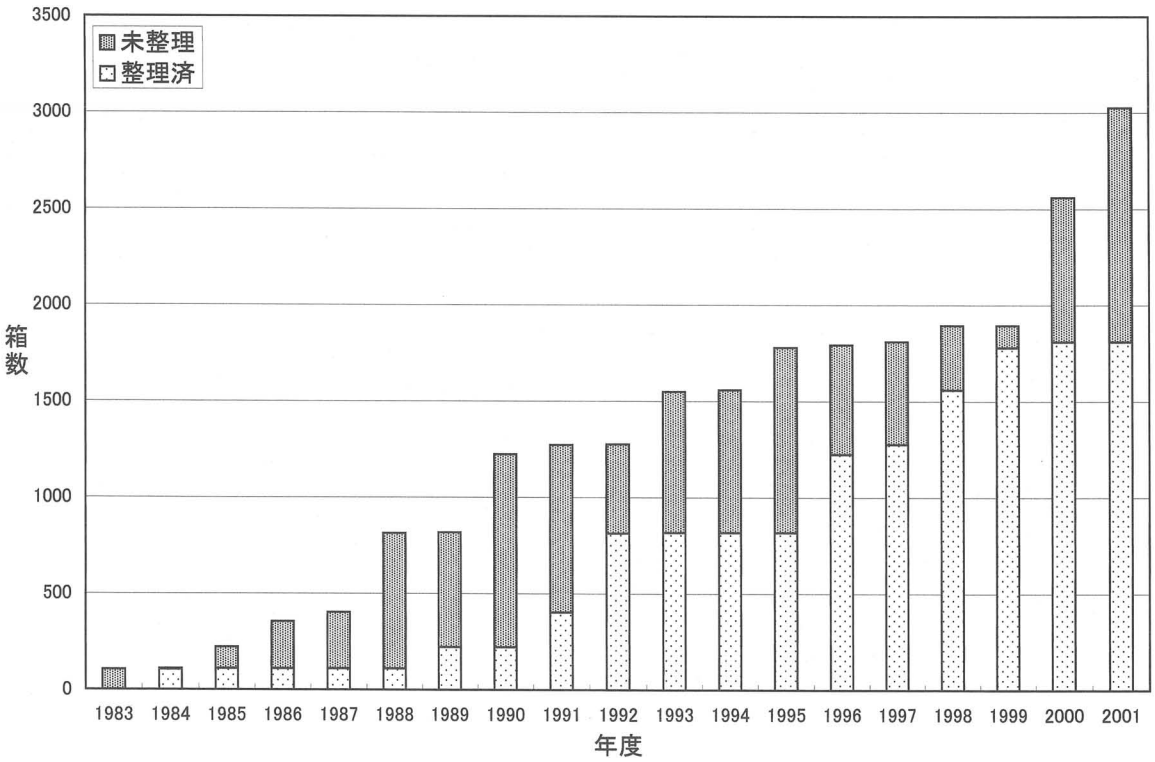


図８　収蔵遺物量の推移
Fig.8　Graph showing transition of amount of artifact in storage（showed by number of case）

6．資料保管状況

東北大学埋蔵文化財調査研究センターでは、ほとんどの遺物は容量30.3リットルのコンテナ（ポリプロピレン製・サンボックス＃32）に収納している。このコンテナに入らない大型のものについては、さらに大きなコンテナや、適宜木箱を作成して収納している。全体の遺物総量を把握するために、容器の大小にかかわらず、箱の数で数量を管理している。ただし、保存処理を行う必要のあるものは、別に保管しているため、これには入っていない。当センターの前身である東北大学埋蔵文化財調査委員会が発足した1983年度からの、遺物総量の推移を箱数で比較したのが、図８である。

2001年度末時点で、当センターで保管している遺物総量は3,026箱となった。前年度からは466箱の増加である。この内訳は、当年度に調査を実施した仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点出土のものが464箱、青葉山Ｅ遺跡第７次調査の当年度分が１箱、芦ノ口遺跡第５次調査出土のものが１箱である。一方整理作業は、2000年度に調査を実施した、仙台城跡二の丸第17地点の作業が継続中のため、整理終了分で新たにカウントしたものはない。その結果、1,809箱が整理・報告済みで、未整理は1,217箱となる。全体の箱数の内、整理・報告済みのものの比率は59.8%となる。

7．研究活動

(1) 受託研究・共同研究等

2001年度は、受託研究・共同研究等は実施していない。

(2) 学会発表等

センターの業務にかかわる、学会での研究発表等としては、次の発表を行った。

・東北史学会2001年度大会考古学部会　2001年10月７日　於：米沢女子短期大学

「近世建物遺構の基礎構造」　発表者：藤沢敦・京野恵子・高木暢亮

・平成13年度宮城県遺跡調査成果発表会　2002年１月19日　於：岩沼市民会館

「仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点」　発表者：京野恵子

また、宮城県考古学会からの依頼を受けて、同会の会誌『宮城考古学』第４号（2002年５月発行）の「2001年度宮城県内主要発掘紹介」に、「仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点」として、同地点の調査概要を寄稿して紹介した。

(3) 資料調査

センター業務に関わる資料調査等としては、以下のとおりである。

2002年２月14・15日　「文化財保存修復国際会議　専門家会議」　於：奈良県文化会館

藤沢敦・京野恵子

(4) 科学研究費採択状況

2001度は、当センターの調査研究員で、科学研究費等の交付を受けたものはなかった。

8．教育普及活動

(1) 非常勤講師

2001年度に、当センターの調査研究員で非常勤講師を担当したのは、次のとおりである。

藤沢敦　宮城教育大学　考古学講義（後期）

(2) 保管資料の貸出

当センター保管の資料の貸出等としては、次のとおりであった。

・貸出先：仙台市富沢遺跡保存館　平成13年度企画展「土の中からのメッセージ・発掘された仙台の遺跡５」
　貸出資料：青葉山Ｅ遺跡第３次調査出土縄文土器・石器42点
　　青葉山Ｅ遺跡第３次調査　住居跡写真１点
　　青葉山Ａ遺跡採集石器３点
　　仙台城跡二の丸出土陶器５点
　貸出期間：2001年４月18日～７月31日

・貸出先：仙台市博物館　仙台市史『通史編３　近世１』への写真掲載
　貸出資料：仙台城跡二の丸第５地点　西屋敷の建物調査状況写真１点

・貸出先：仙台市教育委員会　第35回文化財展「仙台城とその時代－城と町の暮らし－」
　貸出資料：仙台城跡二の丸出土陶磁器15点および同写真１点
　貸出期間：2001年11月７日～30日

(3) 外部からの派遣依頼等

当センターの業務に関わって、あるいは調査研究員の専門領域に関わる事項での、外部から派遣等の依頼は、2001年度にはなかった。

(4) 広報活動

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点の調査成果の概要が明らかとなった10月21日に、現地説明会を開催した。参加者は、約100名であった。なお、一般公開に先立って、報道機関向けの発表を行っている。

〈引用・参考文献〉

仙台市教育委員会　1994　『仙台市青葉区文化財分布地図』
仙台市教育委員会　1995　『仙台市太白区文化財分布地図』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1985～1994　『東北大学埋蔵文化財調査年報』１～７
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1997～2005　『東北大学埋蔵文化財調査年報』８～18
宮城県教育委員会　1998　『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第176集

第Ⅱ章　芦ノ口遺跡第５次調査（TM5）

１．芦ノ口遺跡の立地と周辺の遺跡

芦ノ口遺跡は、仙台市南部の名取川沿いの沖積平野に接する三神峯丘陵の北側に位置している（図１）。現在は、東北大学富沢地区にある理学研究科附属原子核理学研究施設と職員宿舎として利用されている。この場所は、敗戦までは陸軍幼年学校が置かれており、戦後、これらの建物を利用して、東北大学の教養部として使用されていた。その後、1963年に現在の原子核理学研究施設が建設されている。

三神峯丘陵は、標高65m前後で、丘陵の南東側は沖積平野となっている。この間の境界線が長町―利府線にあたる。長町―利府線は、仙台市太白区長町から宮城郡利府町にかけて北東―南西方向に、約17kmにわたって延びるもので、北西上がりの逆断層と考えられている（中田高他1976）。また、長町―利府線の北西側には、大年寺断層と鹿落坂断層が並行して走っており、副断層を形成している。大年寺断層は、南東上がりの逆断層である。この長町―利府線と大年寺断層にはさまれた、幅約１km弱、長さ約８kmの範囲は、隆起帯を形成しており、三神峯丘陵がこれに相当する。三神峯丘陵と東北大学富沢地区との間の急斜面は、大年寺断層によって形成された低断層崖にあたる。三神峯丘陵上の平坦面は、台の原段丘に相当し、芦ノ口遺跡周辺は上町段丘に相当すると考えられる。上町段丘は、台の原段丘より一段標高が低く、調査地点では50～54mである。現在の富沢地区構内は、ほぼ平坦に造成されているが、本来は三神峯丘陵の裾から北側の金洗沢に向かって、緩やかに傾斜して下っていく地形であったものと考えられる。

芦ノ口遺跡の周辺は、仙台平野でも多くの遺跡が存在する地域である。三神峯丘陵一体に広がる三神峯遺跡は、縄文時代前期の集落として古くから知られており、住居跡も発見されている。丘陵の南西端には、円墳２基からなる三神峯古墳群が存在し、埴輪が採集されている（伊東信雄1950）。また、丘陵の北側には土手内横穴墓群が存在するほか、周辺には多くの古墳や横穴墓などが存在している。三神峯丘陵のさらに南側の沖積地では、富沢遺跡（佐藤甲二他1988、太田昭夫他1991）、山口遺跡（田中則和他1984）、郡山遺跡（長島栄一1992）、高田B遺跡（荒井格他2000）などの縄文時代晩期の遺構・遺物が確認されている。富沢遺跡では、約2万年前にさかのぼる埋没林などが発見され、当時の環境の復元にとって極めて重要な資料となっている。また、富沢遺跡では、弥生時代から近世に至る各時期の水田跡が発見されている。

三神峯丘陵とその周辺は、窯業生産が盛んに行われた地域でもあり、古墳時代の埴輪窯跡である富沢窯跡（５世紀）、須恵器窯跡である金山窯跡（５世紀）や土手内窯跡（７世紀）などが知られている（主浜光朗他1992）。

２．調査の経緯

(1) 2000年度までの調査（図５）

芦ノ口遺跡は、1976年に野球場建設に伴って発見された。雑木を伐採した際に、若干の土器片が発見されたため、建設工事を中断し、急遽東北大学考古学研究室によって試掘調査が行われた。その結果、平安時代の竪穴遺構などが発見され、土師器・須恵器・須恵系土器が多数出土したほか、縄文時代・弥生時代の土器や石器も出土している（年報３）。

その後、原子核理学研究施設で放射光リングをはじめとした大規模な施設拡充計画が持ち上がり、この計画に先立って遺跡の範囲・性格を確認するために、1985年（TM1）・1989年（TM2）・1991年（TM3）の３次にわたる調査が行われている（年報９）。これらの調査の結果、密度は低いものの、各所で縄文時代・古墳時代・平安時代の遺構・遺物が確認されている。これにより、富沢地区の全域を含む形に遺跡範囲が拡大された。

1996年には、原子核理学研究施設の電源室と照射・測定室の新営と、排水管改修工事に伴って第４次調査が行

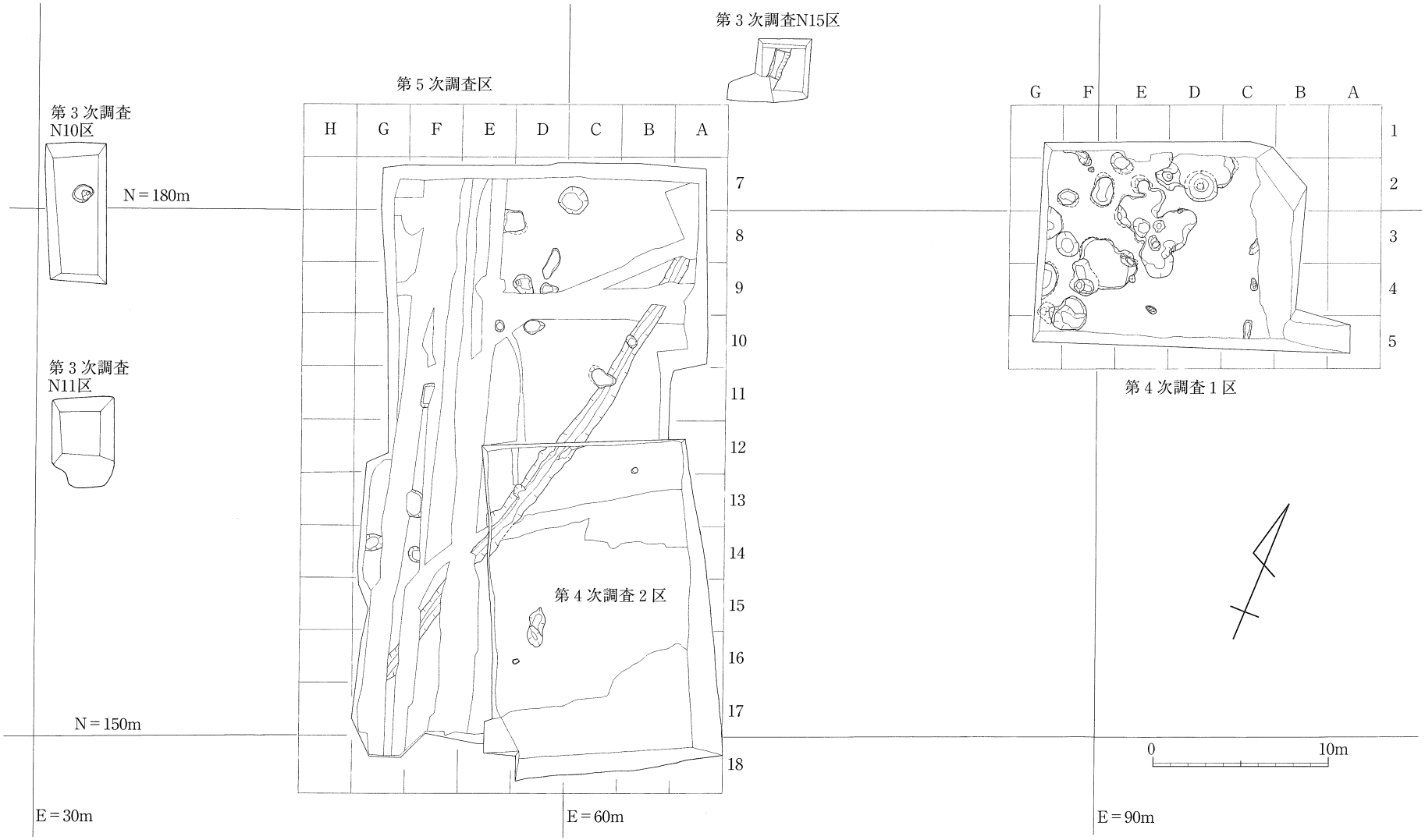


図９　芦ノ口遺跡第５次調査区と周辺調査区の位置
Fig.9　Location of TM5 and around other excavations

われた（年報14）。１区からは縄文時代晩期前葉の粘土採掘坑が12基と土器埋設遺構が１基検出された。粘土採掘坑の検出事例は東北地方においても少なく、縄文時代の土器生産を知る上で貴重な資料となっている。２区からは、間層を挟んで２時期の埋没林が確認されている。また、排水管区からは、古代の竪穴住居跡と考えられる遺構の一部が検出された。埋没林は、C14年代測定法によってより精度の高い測定を行ったが、測定限界を超えており、年代値は得られなかった。しかし、自然環境を考える上での貴重な資料ととらえることができる。

(2) 調査地点の位置

調査地点は、仙台市太白区三神峯一丁目、東北大学理学研究科附属原子核理学研究施設構内の北寄りの場所にあたる。今回の調査地点の南側には研究施設の実験室等が存在する。調査は、原子核理学研究施設のGeＶγ線実験棟新営に伴って行われた。

今回の調査地点の南東側には、芦ノ口遺跡第４次調査２区が隣接している（図９）。また、東側には第４次調査１区が、北東側と西側にはそれぞれ第３次調査N15区とN10区が近接している。上記のように、第４次調査１区からは縄文時代晩期前葉の粘土採掘坑などが検出されている。また、年代は明確でないものの、第３次調査N15区からは溝跡１基が、N10区からはピット１基が検出されている。

(3) 調査の方法と経過

調査は、2001年11月26日より開始された。重機により盛土を除去した。しかし、調査地点は実験施設内のため、地中には南北方向に何本もの高圧電気ケーブルが埋設されており、誤ってケーブルを切断してしまわないように細心の注意を払って行わなければならなかった。そのため、手掘りで盛土を除去しなければならない箇所も多かった。また、ケーブルのたわみによる切断を防ぐため、十分に盛土を除去しきれない場所も存在した。既存の排水管の下部についても、一部、調査できなかった箇所が存在する。

12月４日から手掘りにより旧表土（３層）の掘り下げを開始した。３層からは石鏃が１点出土している。また、調査位置と層序の確認のため、第４次調査２区についても、一部埋め戻し土を除去した。３層直下の６層上面からは、溝やピットなどのプランが検出され、12月11日以降、本格的に６層上面の遺構検出にとりかかった。６層上面からは、散漫な分布ながらも土坑が数基検出された。いずれもプランは不明確な長円形をしており、第４次調査１区で検出された粘土採掘坑の埋土と非常に似た様相を呈していた。粘土採掘坑の壁はオーバーハングしたり、埋土と壁の区別が付きにくいことなどから、遺構の掘り下げは慎重に行った。また、土坑から出土した土器には、保存状態の悪いものが多く、「水を含んだクッキー」状であった。そのため、周囲を発泡ウレタンで固めた上で取り上げた土器もあった。

また、12月18日には、埋没林と層序の確認のため、第４次調査2区の深堀調査区を利用して、土層断面の剥ぎ取りを行った。剥ぎ取りは、土層断面に変性ウレタン合成樹脂「トマックNS－10」を塗布し、その上からガーゼを密着させ、トマックを固結させた。

上記のように、本調査区は第４次調査２区に隣接している。そのため、２区の調査グリッドを継続して、本調査グリッドを設けることとした。しかし、２区の南北方向のグリッド名は、北側から１、２、３・・・と付しており、本調査区は２区より北に位置するため、通し番号を付すことができなかった。そのため、２区南北方向のグリッド名に10を加え、２区における１、２、３・・・を、本調査区ではそれぞれ11、12、13・・・とすることとした。

調査を行った部分の平面図・遺構断面図は縮尺1/20で作成した。写真は35mmのモノクロとカラーリバーサルで撮影した。

3．基本層序

今回の調査区は、第４次調査２区と隣接しているため、基本的に２区の層序と一致する（図10）。つまり、第４次調査２区北壁が本調査区南壁に当たり、２区西壁が本調査区東壁の一部と一致することとなる。基本層序に違いがないことを確認した上で、今回の調査では層序の断面図は作成しなかった。そのため、層序断面図については、年報14を参照されたい。

１層は大学による盛土、２層は戦前この地にあった陸軍幼年学校時代の盛土と考えられる。層厚は１・２層を合わせて約１～２ｍである。いずれも近代以降の盛土であり、大半を重機によって除去している。これらの盛土がなされる以前の旧表土として３層が存在する。３層の層厚は約20cm前後である。第２次調査では３層の下に縄文時代の遺物を含む４層と、その下のローム層（５層）が確認された場所も一部あったが、今回の調査区には、４層、５層は存在しなかった。３層直下は６層となっており、６層上面が縄文時代の地表面にほぼ相当すると考えられる。６層は砂と粘土からなる水性堆積層であり、第４次調査１区では約１ｍ、本調査区では約1.2ｍの厚みを有する。層相の違いから６層は、第４次調査区１区では８枚の層に、本調査区では6A、6B、6Cの３層に細分されている。１区6a～6d層が２区6A層に、１区6e～6h層が２区6B・6C層に対応することがこれまでの調査で確認されている。このうち、6e～6h層、および6B・6C層は、極めて粘性の強い粘土層である。第４次調査区１区と本調査区における粘土採掘坑は、これらの粘土を採掘するためのものと考えられる。

７層は、本調査区では約70cmと厚く堆積する。７層は7a～7d層の４層に細分できた。このうち7a層と7c層が多量の木材や球果などを含んだ泥炭層である。その間には、間層として砂質シルトの7b層が存在する。

８層は、６層と同様の水性堆積層である。本調査区において９層は確認していない。

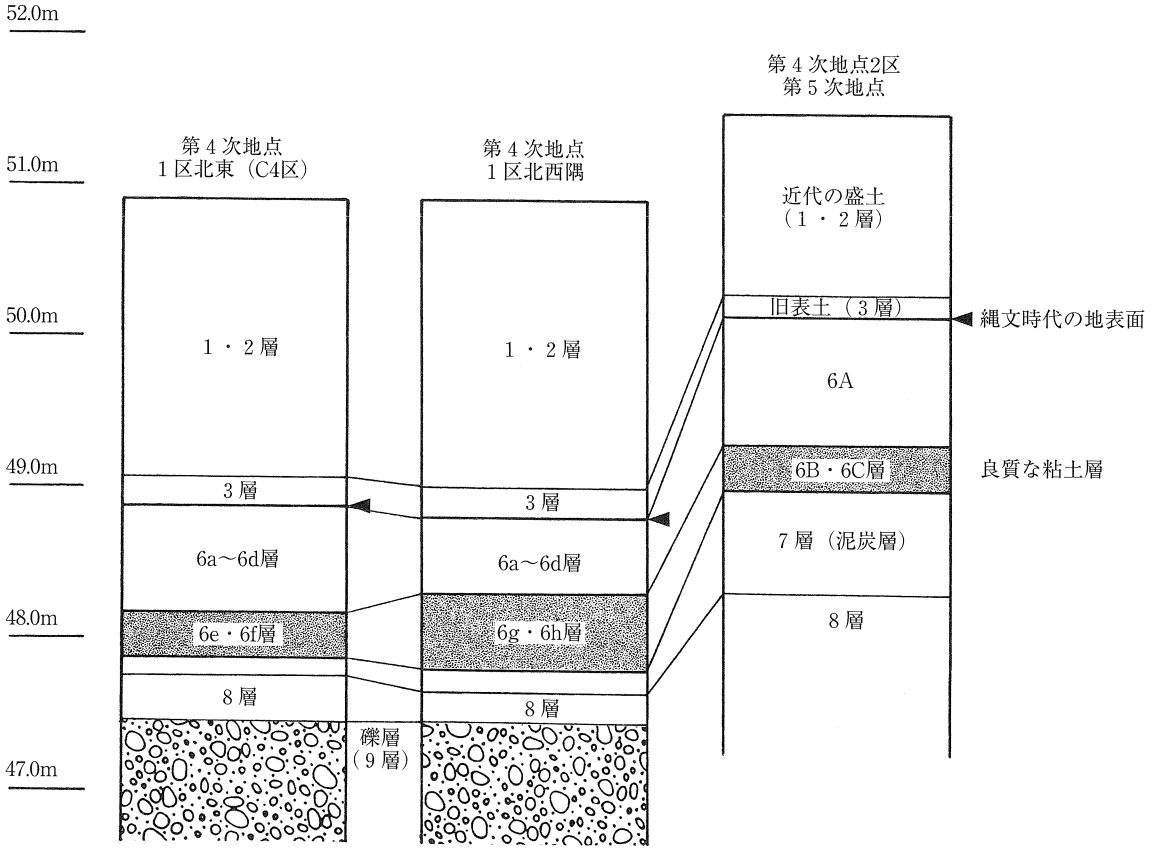


図10　芦ノ口遺跡第5次調査層序模式図
Fig.10　Schematic profiles of TM5

４．検出遺構

今回の調査では、６層上面から溝１条、土坑10基、ピット３基が検出された（図11）。土坑の多くは、プランが明確ではなく、初めに確認した黒褐色の埋土を掘り下げると、土坑の壁にこの黒褐色土が入り込むようになり、改めてプランを確認すると、当初に土坑の壁と考えていた部分は、周囲の粘土層が崩落等によって堆積した埋土であることが判明した。土坑の形状や埋土の堆積状況は、第４次調査１区で検出された粘土採掘坑と類似し、これらも粘土採掘坑である可能性が考えられる。しかし、第４次調査１区の粘土採掘坑のような密集した分布はみられず、個々の土坑の規模も小さい。

【１号溝】（図12、図版１）

上幅約90～130cm、下幅約30～50cm、深さ30～50cmである。溝の方向は北側でN―10°―E、南側ではわずかに東に傾きN―17°―Eである。埋土は５層に分かれる。この溝は、第４次調査２区で検出された１号溝の延長部分であり、第３次調査N15区で検出された溝につながるものと考えられる。埋土５層から土器片が１点出土しているが、表面の劣化が激しく、時期は不明である。この溝は、４号土坑、ピット２を切って掘られているため、これらより新しい時期のものと考えられるが、他に遺物が出土していないため、年代は特定できていない。

【１号土坑】（図12、図版１）

Ｇ－14区で検出された。高圧ケーブルが上方にあり、東半部分は調査することができなかったため、全体の形状は不明である。検出面からの深さはおおよそ70cmである。埋土の下層には周囲の地山由来の粘土が堆積しており、埋没過程で土坑の壁の崩落等によって堆積したものと考えられる。埋土上層は褐灰色の自然堆積と考えられる層がみられ、埋土４層・埋土５層は埋没過程で、崩落した粘土層と自然堆積層が混ざったような堆積状況が観察できる。剥片が１点出土しているが、年代は不明である。

【２号土坑】（図12、図版１）

Ｆ－11区で検出された。東西方向の両端が、高圧ケーブルによって調査が不可能であったため、全体の形状は不明である。南北方向の幅は上端ではで約160cm、底面付近では約100cmである。検出面からの深さは約60cmである。底面は北側に向かってわずかに深くなる。埋土の下層には地山由来の粘土層が堆積している。遺物は出土せず、土坑の時期は不明である。

【３号土坑】（図12、図版１・２）

Ｄ－10区で検出された。形状は長楕円形を呈している。長軸方向では、検出面で約120cm、底面付近では100cmで、北西側にややオーバーハングしている。深さは約60cmであった。埋土は、地山由来の粘土層が堆積し、粘土層がブロック状に混じり合う箇所も観察できる。

底面近くから、土師器の甕とみられる体部上半破片が出土した。古墳時代前期の塩釜式ものと考えられることから、この土坑の年代もおおよそこの頃であると推測する。この土師器は、器体が非常に脆弱で、そのままの状態で取り上げると崩壊する危険があった。そのため、土器面をキムタオルで覆って養生し、硬質発泡性ウレタン樹脂で固めて取り上げた。また、埋土中から木材の破片が出土しているが、残存状況がよくなく、加工の痕跡などはわからなかった。

【４号土坑】（図13、図版２）

Ｃ－10・11区で検出され、１号溝に切られている。長楕円形で、西側にオーバーハングした形状をしている。長軸方向では、検出面で約140cm、底面付近では約150cm、検出面からの深さは約60cmであった。埋土は、黒褐色土の間に、地山由来の粘土層が入り込むような堆積を示している。自然堆積の過程で周囲の地山が崩壊して堆積していった可能性が考えられる。遺物が出土していないため、時期は不明である。

【５号土坑】（図12、図版２）

Ｄ－９区で検出された。南側部分は、排水管を撤去できないため調査できず、全体の形状は不明である。底面

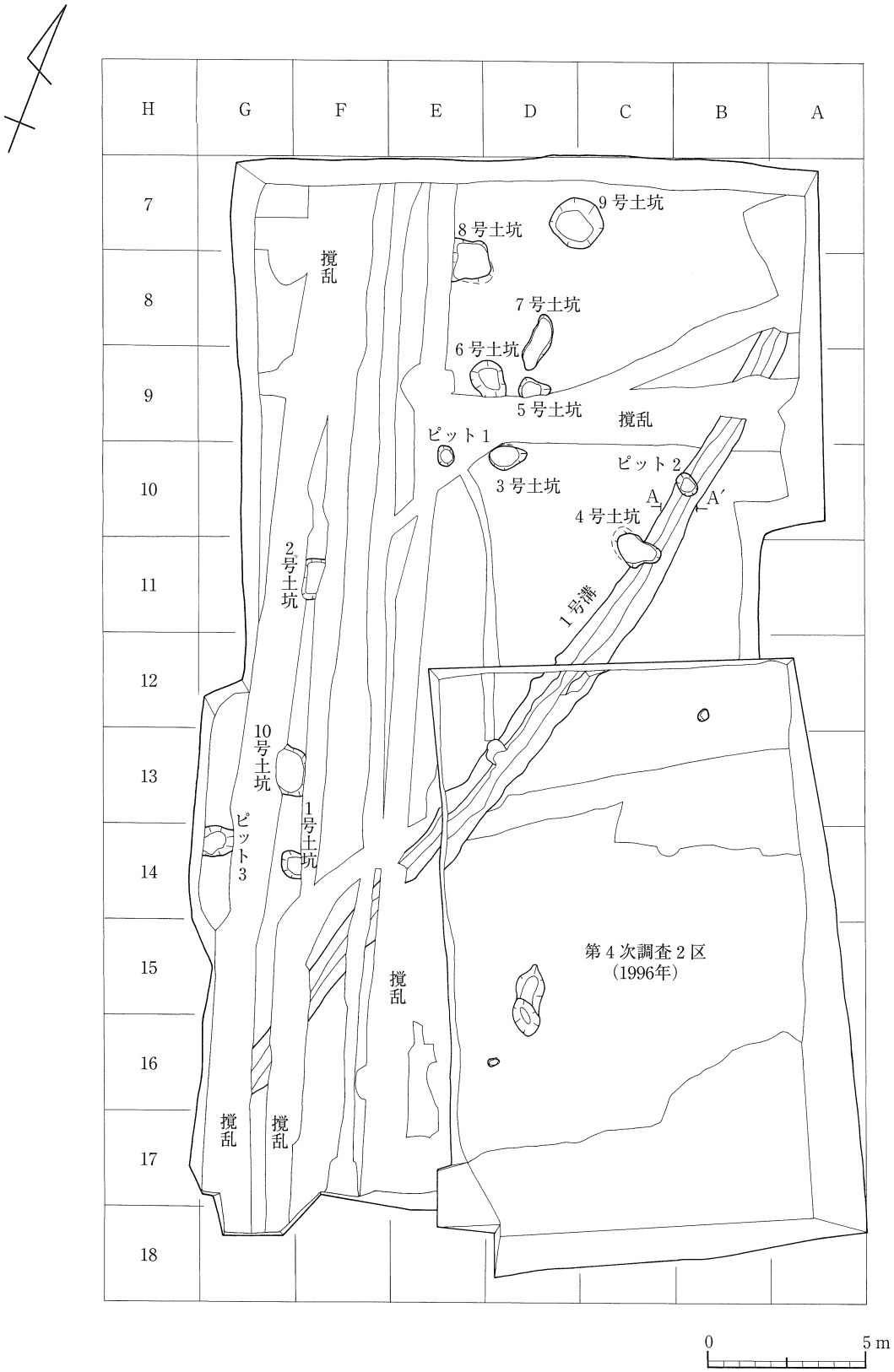


図11　芦ノ口遺跡第5次調査6層上面遺構配置図
Fig.11　Plan of archaeological features on the surface of stratum 6 of TM5

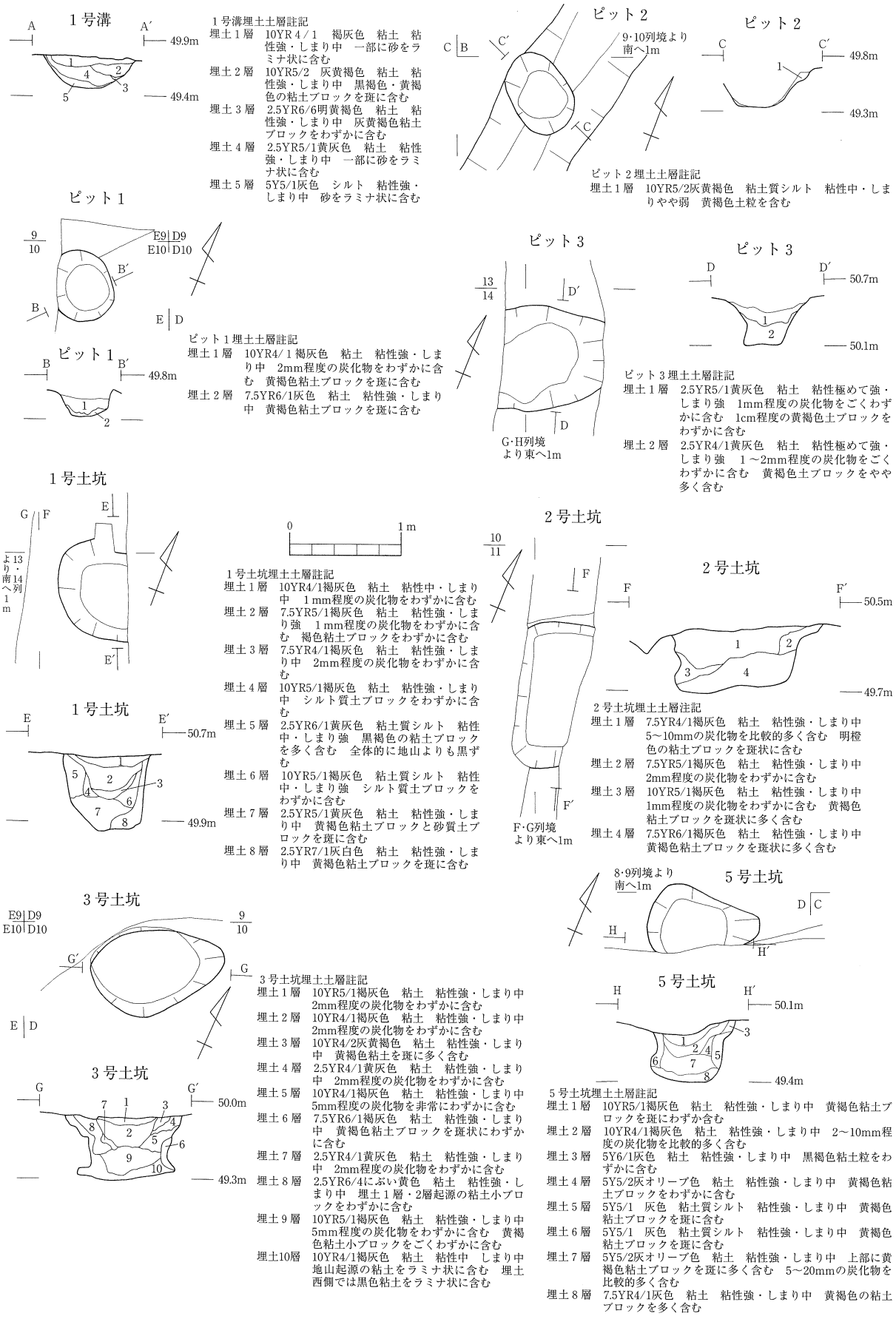
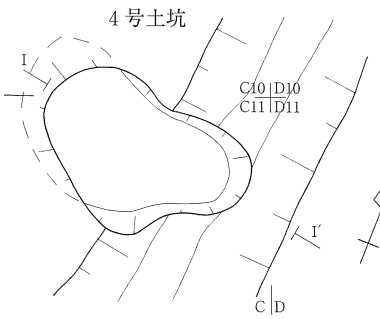


図12　芦ノ口遺跡第5次調査検出遺構（1）
Fig.12　Plans and sections of pits at TM5（1）



4 号土坑埋土土層註記

埋土 1 層　10YR5/2灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり強　指先大の礫をわずかに含む

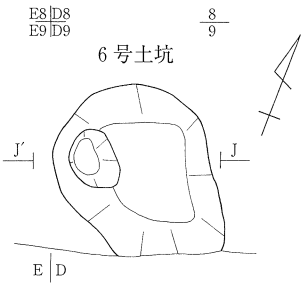
埋土 2 層　7.5YR3/3暗褐色　粘土　粘性強・しまり中　2 mm程度の炭化物をわずかに含む

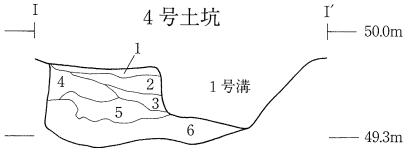
埋土 3 層　10YR5/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　1 mm程度の炭化物をわずかに含む　黄褐色粘土ブロックを斑状にわずかに含む

埋土 4 層　10YR4/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　黄褐色粘土ブロックを多量に含む

埋土 5 層　7.5YR4/1黄灰色　粘土　粘性強・しまり中　2mm程度の炭化物をわずかに含む　黄褐色粘土ブロックを斑状に多量に含む

埋土 6 層　7.5YR4/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　黄褐色粘土ブロックを多量に含む





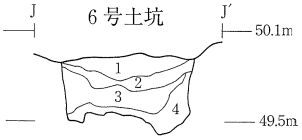
6 号土坑埋土土層註記

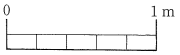
埋土 1 層　10YR3/1　黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　2mm程度の炭化物をわずかに含む

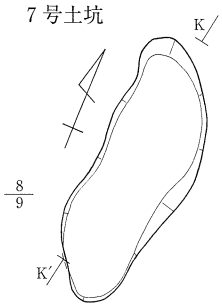
埋土 2 層　10YR4/1褐灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　1～2mm程度の炭化物をわずかに含む

埋土 3 層　10YR4/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　5mm程度の炭化物をわずかに含む　黄褐色粘土小ブロックを含む

埋土 4 層　10YR3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　3mm程度の炭化物をやや多く含む　黄褐色粘土ブロックをわずかに含む







7 号土坑埋土土層註記

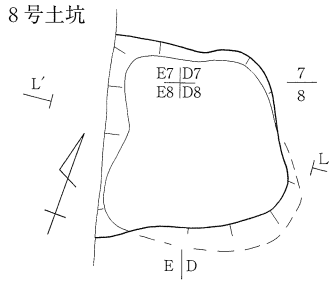
埋土 1 層　10YR5/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　3mm程度の炭化物をわずかに含む　東側部分では黄褐色粘土ブロックを斑に含む

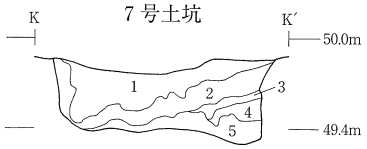
埋土 2 層　10YR5/2灰黄褐色　粘土　粘性強・しまり中　2mm程度の炭化物をわずかに含む

埋土 3 層　10YR4/2灰黄褐色　粘土　粘性強・しまり中　2mm程度の炭化物を比較的多く含む

埋土 4 層　10YR5/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　1mm程度の炭化物をごくわずか含む

埋土 5 層　2.5Y　6/2灰黄色　粘土　粘性強・しまり中　黒褐色の粘土を含む





8 号土坑埋土土層註記

埋土 1 層　10YR3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　2～5mm程度の炭化物を比較的多く含む　暗灰色粘土小ブロックを斑に少量含む

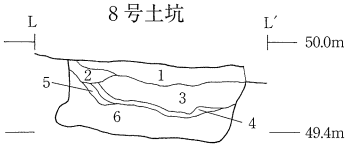
埋土 2 層　10YR4/2褐灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　3mm程度の炭化物をわずかに含む　砂をブロック状にわずかに含む

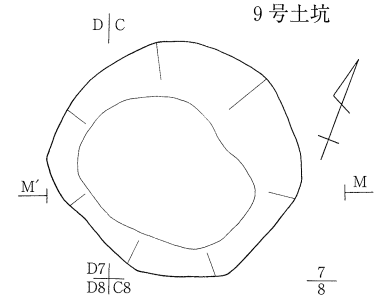
埋土 3 層　10YR5/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　明灰色粘土小ブロックを斑に含む

埋土 4 層　10YR4/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　2mm程度の炭化物を比較的多く含む

埋土 5 層　10YR5/2灰黄褐色　粘土　粘性強・しまり中　1mm程度の炭化物をわずかに含む

埋土 6 層　7.5YR6/1褐灰色　シルト　粘性中・しまり中　黄褐色粘土ブロックと砂のブロックを斑に含む　埋土東側部分に粘土層をラミナ状に含む





9 号土坑埋土土層註記

埋土 1 層　10YR3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　1mm程度の炭化物をわずかに含む

埋土 2 層　10YR4/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　2mm程度の炭化物をわずかに含む　黄褐色粘土小ブロックをわずかに含む

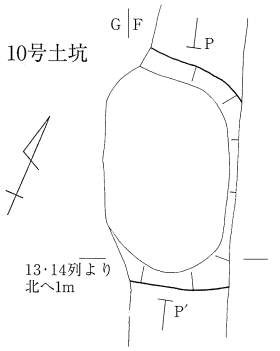
埋土 3 層　10YR5/2灰黄褐色　粘土　粘性強・しまり中　指先大の小礫をわずかに含む

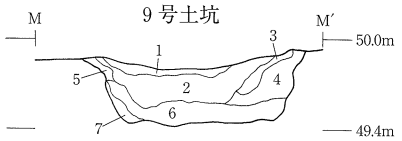
埋土 4 層　2.5YR5/2暗灰黄色　粘土　粘性強・しまり中　2mm程度の炭化物を非常にわずかに含む

埋土 5 層　10YR5/3にぶい黄褐色　粘土　粘性中・しまり中　1mm程度の炭化物をわずかに含む　地山起源の粘土小ブロックをわずかに含む

埋土 6 層　10YR4/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　5mm程度の炭化物をわずかに含む　砂をブロック状にわずかに含む

埋土 7 層　5Y5/1灰色　砂質シルト　粘性中・しまり中　地山の漸移層





10号土坑埋土土層註記

埋土 1 層　7.5YR3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　2mm程度の炭化物を比較的多く含む

埋土 2 層　7.5YR5/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　1mm程度の炭化物をわずかに含む

埋土 3 層　10YR4/1　褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　2mm程度の炭化物を含む　黄褐色粘土粒をわずかに含む

埋土 4 層　7.5YR5/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　2mm程度の炭化物をわずかに含む

埋土 5 層　10YR5/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　1mm程度の炭化物をわずかに含む　砂をブロック状にわずかに含む

埋土 6 層　2.5Y7/2　灰黄色　粘土　粘性強・しまり強　黒褐色粘土ブロックを斑状に含む

埋土 7 層　7.5YR6/2　灰色　粘土　粘性強・しまり中　白色土粒小ブロックをわずかに含む

埋土 8 層　10Y6/1　灰色　粘土　粘性強・しまり中　砂のブロックを斑に含む

埋土 9 層　7.5YR7/2　灰色　粘土　粘性強・しまり中　白色土粒小ブロックをわずかに含む

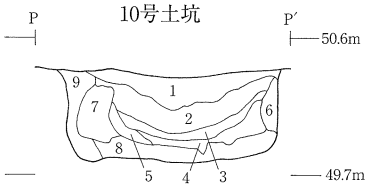


図13　芦ノ口遺跡第 5 次調査検出遺構（2）
Fig.13　Plans and sections of pits at TM5（2）

の西側でややオーバーハングした形状をしている。検出面からの深さは約50cmであった。埋土には、地山由来の粘土層がブロック状に入り込んでおり、土坑の壁の土が混入したものと推測できる。本来はもっとオーバーハングした形状を示していたのかもしれない。遺物の出土はなく、時期は不明である。

【6号土坑】（図13、図版2）

E・D－9区で検出された。排水管残存部分のため、調査できない部分があったが、長楕円形を呈すると考えられる。底面は、一部分だけさらに掘り下げたような状況が観察され、凹凸が顕著である。検出面からの深さは最大で約60cmである。埋土下部には黄褐色粘土がブロック状に混ざっている。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

【7号土坑】（図13、図版2・3）

D－8・9区で検出され、不整な長楕円形を呈している。長軸方向で約170cm、深さ約60cmで、南側部分でわずかに深くなる。遺物の出土はなく、時期は不明である。

【8号土坑】（図13、図版3）

E・D－7・8区で検出された。土坑の東側は、高圧ケーブルのため調査できず、全体形状はわからない。底面は南西側で一部オーバーハングする。埋土は、黒褐色土の間に、地山由来の粘土層が入り込むような堆積を示している。深さは約50cmである。遺物は出土せず、時期は不明である。

【9号土坑】（図13、図版3）

C・D－7区で検出された。ほぼ円形を呈しており、直径約170cm、底径120cm、深さ約50cmである。底面付近では、黄褐色粘土層が堆積している。遺物の出土はなく、時期は不明である。

【10号土坑】（図13、図版3）

F・G－13区で検出された。東西両端が高圧ケーブルのため調査できず、全体形状は不明である。深さは約60cmである。埋土6～9層は、地山と非常によく似た黄褐色粘土層であり、土坑の壁面が崩落して堆積したような様相が確認できる。遺物は出土しておらず、年代は不明である。

【ピット】（図12、図版3・4）

ピットは3基検出した。ピット2は、1号溝に切られており、わずかに埋土が残存する程度であった。いずれも褐灰色～黄灰色土に黄褐色粘土ブロックが混ざった埋土をしており、比較的浅い円形をしている。ピット3からは土師器と思われる土器片が出土しているが、小破片で器面の状態も悪いことから時期は断定できない。

5．出土遺物

出土遺物は非常に少ない（表2）。年代がわかるものは、3号土坑から出土した土師器の破片で、甕の体部とみられる。古墳時代前期の塩釜式期のものであると考える。その他では、1号溝とピット3から土器の小破片が各1点ずつ出土したが、いずれも残存状態がよくなく年代は不明である。土器以外では、旧表土から石篦が1点、1号土坑から剥片が1点出土しているが、いずれも年代はわからない（図14、図版4、表3・4）。

また、出土した土器はいずれも脆弱であったため、アクリル系合成樹脂「バインダーNo.17」を含浸させて補強している。

表２　芦ノ口遺跡第５次調査出土遺物集計表
Tab.2　Distribution of various implements from TM5

出　土　場　所	土　　器	石　　器
旧表土		石篦１
１号溝埋土	不明１	
１号土坑埋土		剥片１
３号土坑埋土最下層	土師器１	
ピット３埋土最下層	不明１	

表３　芦ノ口遺跡第５次調査出土土師器観察表
Tab.3　Attribute list of pottery from TM5

No.	出土場所	器種	部位	内面調整	外面調整	文様	炭化物	器厚（cm）	図	図版
C1	3号土坑埋土最下層	甕	体部	ナデ・ヘラナデ	ハケメ後、ナデ	無	内外面	0.5	－	4

表４　芦ノ口遺跡第５次調査出土石器観察表
Tab.4　Attribute list of stone implements from TM5

No.	出土場所	器　　種	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	石　　材	図	図版
S1	1号土坑埋土	剥片	43.9	53.7	16.6	23.4	珪質頁岩	14	4
S2	旧表土	石篦	75.3	40.1	15.8	40.2	珪質頁岩	14	4

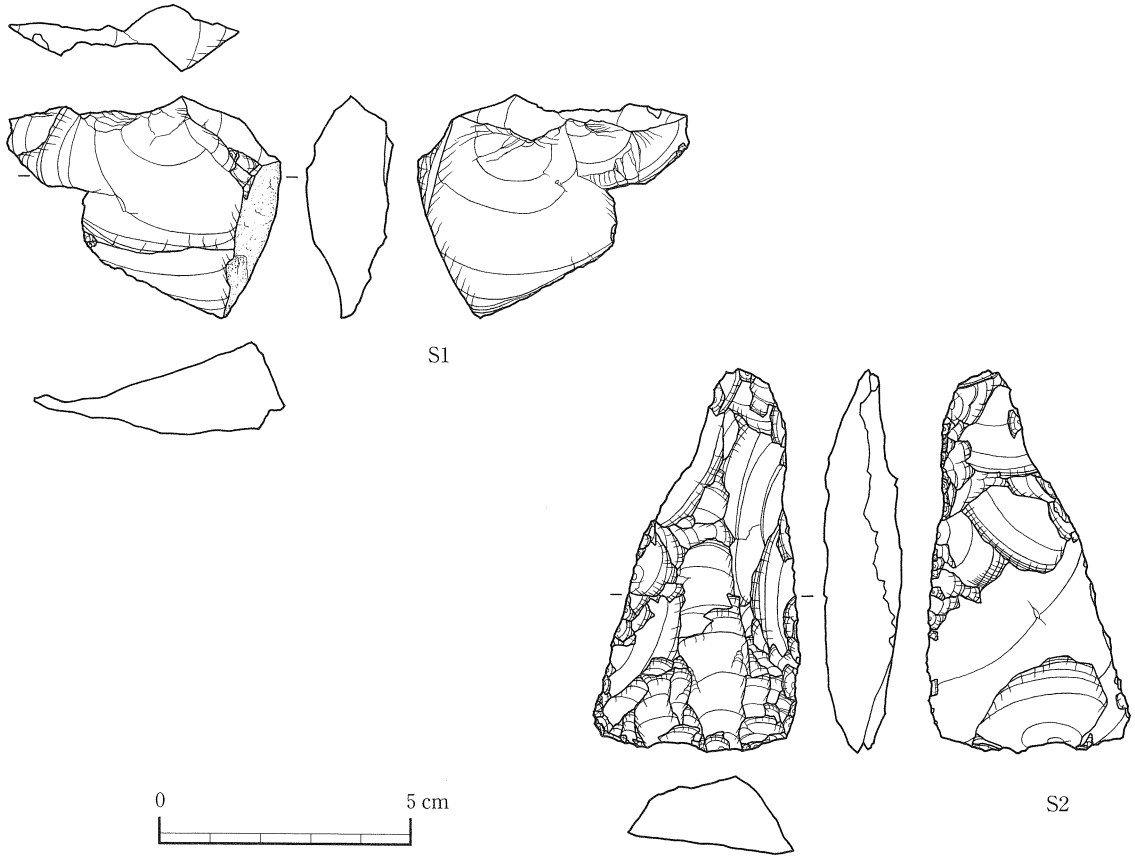


図14　芦ノ口遺跡第５次調査出土石器
Fig.14　Stone implements from TM5

6．まとめ

今回の調査区からは、溝１条、土坑10基、ピット３基が検出された。

溝は、これまでの第３次調査N15区、第４次調査２区でも検出されていたものの延長部分であり、南北方向に延びる一連の溝であることが確認された。しかし、明確な遺物などは出土しておらず、年代は不明である。４号土坑、ピット２などを切って掘り込まれていることから、これらよりは新しい時期のものであることが考えられる。

今回の調査区からは、第４次調査１区で検出された粘土採掘坑と堆積状況などが類似した土坑が検出されており、これらも粘土採掘坑であった可能性が高い。検出された土坑はいずれも深さ50～70cm程度で共通しており、底面付近で横に掘り進んだ結果、オーバーハングした形状のものや、オーバーハングした壁が崩落して堆積したような埋土の状況が観察された。しかし、個々の土坑の大きさが小型であること、分布が散漫で重複して掘られた土坑がみられないことなど、第４次調査１区との相違点も挙げられる。

これらをまとめると次の可能性が考えられる。今回の調査区と１区とでは18mほど離れており、縄文時代晩期前葉の粘土採掘坑の密集地点からは距離がある。第４次調査で検討した結果、２区では１区よりも6B・6C層の良質な粘土層が薄くなり、上層の6A層が厚くなることがわかっている。そのため、土坑を掘り下げたが良質な粘土を効率よく採取できなかったため、土坑も小規模であった可能性が推測できる。出土遺物では、土師器が出土しており、１区の縄文時代の粘土採掘坑群とは別の時代の粘土採掘坑が存在するものと考えられる。芦ノ口遺跡の周辺には古墳時代の窯跡なども存在し、古くから窯業生産が盛んに行われた地域でもあることから、縄文時代以降の土器生産体系についても、今後検討していくことが必要であろう。

〈引用・参考文献〉

荒井格他　2000　『高田B遺跡』仙台市文化財調査報告書第242集

伊東信雄　1950　「仙台市内の古代遺跡」『仙台市史３別編１』

宇佐見義春　1998　「多摩ニュータウンNo.949遺跡」『多摩ニュータウン遺跡』先行調査報告９
東京都埋蔵文化財センター調査報告第52集

及川良彦　2000　『多摩ニュータウン遺跡No.247・248遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第80集

生出慶司・中川久夫・蟹沢聡史　1989　『日本の地質２　東北地方』

太田昭夫他　1991　『富沢遺跡第30次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第149集

北村信・石井武政・寒川旭・中川久夫　1981　『仙台地域の地質　地域地質研究報告（５万分の１地質図幅）』
地質調査所

佐藤甲二他　1988　『富沢遺跡第28次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第114集

主浜光朗他　1992　『土手内　―土手内遺跡・土手内窯跡・横穴墓群（B地点）発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第165集

須藤隆・藤沢敦・関根達人　1998　「仙台市芦ノ口遺跡の縄文時代晩期の粘土採掘坑群」
『1998年度東北史学会・福島大学史学会合同大会　研究発表要旨』

仙台市教育委員会　1995　『仙台市太白区文化財分布地図』

仙台市史編さん委員会　1991　『仙台市史　特別編２　考古資料』

仙台市史編さん委員会　1999　『仙台市史　通史編１　原始』

田中則和他　1984　『山口遺跡Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第61集

東北大学埋蔵文化財調査委員会　1996　『東北大学埋蔵文化財調査年報３』

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1998　『東北大学埋蔵文化財調査年報９』

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2001　『東北大学埋蔵文化財調査年報14』

中田高・大槻憲四郎・今泉俊文　1976　「仙台平野西縁・長町－利府線に沿う新期地殻変動」『東北地理』28

永塚澄子・石川隆司・上條朝宏　1992　「多摩ニュータウンNo.248遺跡の粘土採掘坑の層位について」
『研究論集』XI pp.133～149　東京都埋蔵文化財センター

長島栄一　1992　『郡山遺跡第65次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第156集

谷地薫・柴田陽一郎　1992　『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　家ノ後遺跡』
秋田県文化財調査報告書第229集

山内幹夫他　1988　『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XII　羽白Ｃ遺跡（第１次）』
福島県文化財報告書第194集

第Ⅲ章　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（BK７）の調査

１．仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の立地と歴史

(1) 仙台城と城下の沿革

東北大学の川内地区は、沢とその脇を東西に走る道路によって、川内南地区と北地区に分かれている。この川内南地区は仙台城二の丸が置かれた場所であり、北地区は家臣の屋敷が存在した区域に相当する。

仙台城は、仙台藩初代藩主である伊達政宗によって、慶長５年（1600年）12月24日の縄張始めを嚆矢として、本丸の築造が始められる。この段階では、二の丸は造られておらず、後に二の丸が造られる場所には、政宗の四男である伊達宗泰の屋敷があったとも伝えられる。元和６年（1620年）には、伝伊達宗泰屋敷の北側に、政宗の長女五郎八姫の居館である「西屋敷」が造られる。

政宗は寛永13年（1636年）に死去し、伊達忠宗が二代藩主となる。忠宗は、寛永15年（1638年）に、伝伊達宗泰の屋敷跡に二の丸を造営する。二の丸が造られると、仙台藩の政治・諸儀式のほとんどは二の丸へ移され、藩主の居所も二の丸へ移る。これ以降、二の丸が仙台城の実質的な中枢となり、この状態は幕末まで維持されていくこととなる。

寛永15年に二の丸が造営された時点では、五郎八姫の「西屋敷」が、二の丸の北隣に存続していた。五郎八姫が寛文元年（1661年）に死去すると、もとの「西屋敷」は「天麟院様元御屋敷」と呼ばれ、蔵や作業所など、二の丸に附属する実務的な施設が置かれるように変化する。そして二の丸は、四代藩主伊達綱村によって、元禄年間に大改造が施される。その際、もとの「西屋敷」の敷地は二の丸に取り込まれ、中奥がもとの「西屋敷」の範囲に大きく拡張された。この改造によって、仙台城は完成した姿を迎えた。その中で二の丸は、文化元年（1704年）の火災でほぼ全焼する被害を受けつつも従来通り再建され、幕末まで仙台城の中枢として機能していく。

仙台城下は、仙台城本丸の造営に伴って造られていく。慶長６年（1601年）の正月11日に、仙台城の普請始めが行われ、同じ日に「御城下地形ノ絵図ヲ以テ諸士等ノ屋敷割仰付ラル。」との記録が残されている（『貞山公治家記録巻之二十一』）。この時以降、城下の建設が進められていったものと考えられる。

正保２年（1645年）の『奥州仙台城絵図』では、仙台城の周辺に「侍屋敷」が広がっていたことが判り、本丸の造営が開始された頃から屋敷が造られていったものと思われる。正保絵図は幕府提出用絵図のため、細かな屋敷割は記されず、屋敷を使っていた人名は判らない。それ以降の藩政用絵図には、屋敷割が記され、人名が書き込まれたものが多くある。川内地区においては、大手門の周囲などに最も上級の家臣の屋敷が置かれ、それ以外の区域にも上級家臣の屋敷が多い。東北大学の川内北地区も、比較的上級の家臣の屋敷が置かれていた。

明治維新による新政府の成立と幕藩体制の崩壊により、仙台城とその周辺も大きく変化する。明治２年（1869年）の版籍奉還により二の丸には勤政庁が置かれ、明治４年（1871年）の廃藩置県後は、仙台城が明治政府の管轄下に移り二の丸には東北鎮台（後に仙台鎮台）が置かれる。本丸の建物は明治の早い時期に取り壊されるが、二の丸の建物は鎮台本営として引き続き利用された。しかし、明治15年（1882年）の火災で、ほとんどが焼失してしまう。そして明治19年（1886年）には仙台鎮台から陸軍第二師団に改称され、明治21年（1888年）には正式に師団常備軍制度が施行され、敗戦まで続くこととなる。二の丸跡には、第二師団の司令部が置かれた。

川内地区の仙台城周辺の武家屋敷地も、明治に入ると取り壊され、その多くは後の第二師団の用地となっていく。東北大学川内北地区には、第二師団の歩兵隊や輜重隊などが置かれていた。

戦後は、川内地区のかつての軍用地一帯が、米軍の駐留地となる。昭和32年（1957年）に米軍から返還された後、川内北地区には東北大学教養部が、川内南地区には文系４学部や図書館などが置かれ、現在に至っている。

(2) 二の丸北方の武家屋敷地区の変遷

仙台城下の様相を検討するに際して、基本となる史料が城下絵図である。表5に、これまでに知られている仙台城下絵図の主要なものを示した。城下を描いた絵図でも、簡略なものは除外している。仙台城下絵図の研究は、旧制第二高等学校長の阿刀田令造による『仙台城下絵図の研究』が嚆矢であり、今日に至る研究の基礎となっている。そのため表5には、『仙台城下絵図の研究』における番号と、掲載された付図の番号を記して対照を行い易くした。また近年、『絵図・地図で見る仙台』および『絵図・地図で見る仙台第二輯』が刊行され、主要な仙台城下絵図や仙台市街地の地図が大判の印刷で刊行され、利用の便が増した。これらに収録されている絵図については、両書で付された番号を表5に示しておいた。かつて伊達家が所蔵していたものなど、江戸時代の絵図を多数所蔵している宮城県図書館にあるものについては、同館による『宮城県図書館所蔵絵図・地図解説目録』に掲載された番号を、表5にあわせて記載した。

これらの仙台城下絵図には、年代が近接するものもあるため、時期による変遷が判るように選択して、川内北地区周辺の部分を示したのが図16・17である。道路の変化を見るために、明治時代の地図についても、あわせて示しておいた。

現存する仙台城下を描いた最も遡る絵図は、正保2年（1645年）のものであるが、これは幕府提出用の絵図であり、個々の屋敷の区画は描かれていない（図16－1）。道路を見ると、正保絵図以降、明治15年（1882年）の地図（図17－13）に至るまで、基本的に変化がないことが判る。二の丸と北方の武家屋敷との境には、千貫沢とそれを広げた堀がある。この千貫沢や堀沿いに道路が東西に走っているが、それより北側には東西方向の道路は2本ある。ところが現在は、千貫沢沿いの道路の北側には、東西方向の道路は1本だけである。現在のような道路は明治26年（1893年）の地図（図17－14）において、初めて見られるようになる。この東西方向の道路が改変されるのと同時に、大手門前から北へ延びる道路も改変されている。大手門前から北へ延びる道路は、もともとは、千貫沢を渡る筋違橋の北側で鍵の手状に屈曲していたが、この時に屈曲せずにまっすぐ北へ延びる道路へ変わっている。おそらく一連の道路整備として、改変が行われたのであろう。

図17には示さなかったが、明治22年（1889年）製作の「改正仙台市明細全図」という地図も存在する。しかし明治22年の地図では、第二師団司令部に、明治15年（1882年）に焼失した二の丸の旧状を残す建物が描かれ、全体の表現が明治13年（1880年）の地図（図17－12）に類似している。そのため、明治13年の地図をもとに作成された可能性があり、明治22年の地図に描かれた道路が、その時点の状態を表していたのか疑問である。したがって、明治15年から明治26年の間に、川内北地区周辺の道路は、現在見る形に変わっていったものと考えられる。おそらく、明治21年（1888年）の陸軍第二師団の設置に前後して、この区域の整備が進められていったものと考えられる。

明治時代の地図も、その初期のものは、全てを正確に測量して作成されたものではない。明治15年の地図に至っても、現状から見て明らかに方向や距離がずれている部分も多い。ある程度信頼が置けるものは、明治26年の地図以降であるが、この段階では川内北地区周辺の道路は、改変された後である。改変以前の道路の位置を、正確に測量した地図は、今のところ確認できていないことになる。したがって、絵図や明治時代初期の地図をもとに、江戸時代の道路を正確に復元することは難しい。確実に復元するためには、発掘調査で道路を検出し、その位置を確定する他ないが、今までの調査では発見されていない。このような限界を踏まえ、絵図・地図の記載を比較しつつ、江戸時代の道路の位置を、現在の地図上に推定復元したのが図15である。

千貫沢の北脇を東西に走るのが「筋違橋通」である。その北側に東西に走る2本の道路が、「中ノ坂通」と「亀岡通」である。二の丸裏門である台所門を出て、千貫橋を渡って北に延びる道路が「裏下馬通」で、それとほぼ併行して西側にあるのが「大堀通」である。今回の調査地点は、この4本の道路に囲まれた、ほぼ方形の区画に相当するものと考えられる。細かな位置関係は、道路の復元が推定に留まるため、厳密には確定できない。

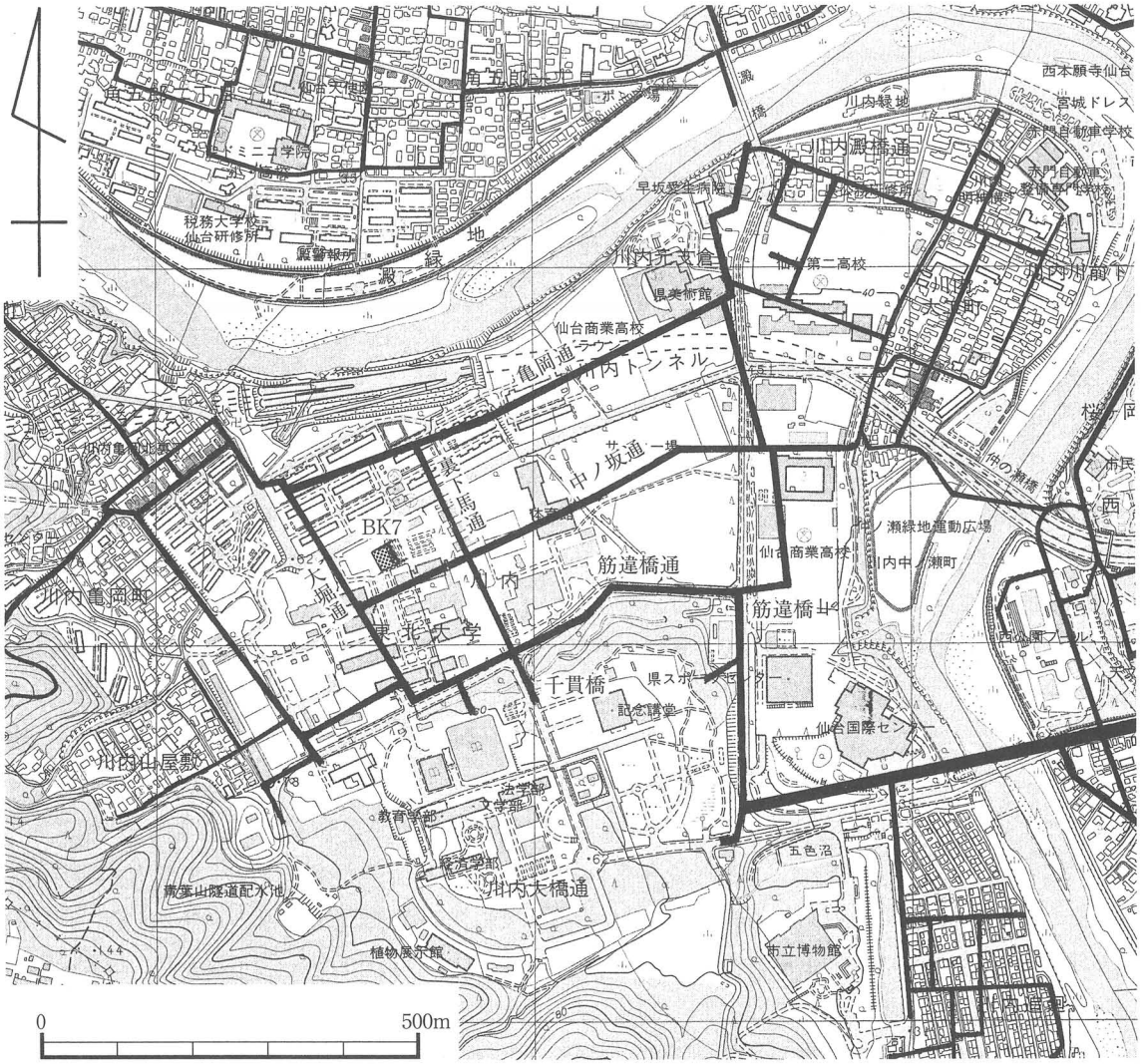


図15　二の丸北方武家屋敷地区における江戸時代の道路の復元
Fig.15　Reconstruction map of the road of Edo period at BK7

しかし、細かな修正は今後必要としても、これが大きく変わることは考え難く、今回の調査区が、このほぼ方形の区画に相当することは間違いないと考えられる。

この区画内に屋敷を構えていた人名を、城下絵図から拾い出したものが表６である。記載されている人名をもとに、これらの家臣の禄高や家格などについて、次に見てみたい。ただ、記載された家臣の全てについて、詳細が判明している訳ではないが、おおよその傾向は判明する。検索にあたっては、『私本仙台藩士事典』などを利用した。なお仙台藩では、生産高や知行高を、一般的な石高ではなく、戦国時代以来の貫高で表示していた。貫高と石高の換算は、寛永検地を経て、１貫（1000文）を10石に換算するように定められた。寛永検地以前の換算については、いくつかの説がある。ただし、ここで検討材料とする屋敷拝領者が記載されている藩政用絵図が、寛文４年（1664年）以降のものしか存在せず、全て寛永検地より新しい時期のものとなるので、１貫を10石と換算すれば良いこととなる。

仙台藩の家格は、家格の高い順から、一門・一家・準一家・一族・宿老・着座・太刀上・召出・平士・組士・卒というように分けられていた（表７）。平士は、仙台藩家臣団の主力を構成した家臣で、多くは大番組に属する大番士であった。平士（大番士）は、登城した際に控える部屋の名前をとって、上位から虎の間番士・中の間番士・次の間番士・広間番士に分けられた。組士と卒が下級藩士となる。

調査地点が入るほぼ四角の区画は、元禄４・５年（1691・92）の絵図（図16－６）までは、区画をほぼ４つに分けた大きさか、あるいはそれよりやや小さく分けられている。享保９年以降は、より細かく区分される場合が多くなり、頻繁に屋敷拝領者が入れ替わっていく傾向がある。幕末になると（図17－10）、この区画の南東側に、「小学校」が置かれる。仙台藩では、藩校として養賢堂を置いて、家臣の教育にあたっていた。嘉永５年（1852年）に、門閥子弟の講学所として川内に置かれたのが「小学校」であった。鈴木省三の『仙台風俗志』には、「嘉永五年に建る所にして川内中の坂通りにあり（中略）養賢堂の外こゝに学校を建てられたるは川内一帯は門閥大家が住し居れは其等子弟が通学の便を謀るがためにして樂山公の好学の思召しより出たるものといふ」とされている。樂山公とは、13代藩主伊達慶邦のことである。

この区画を４分する大きさ、あるいはそれよりやや小さい程度の屋敷を拝領していたものとしては、青木掃部（36貫104文・召出）、中村伊右衛門（48貫612文・格式不明）、山崎平左衛門（102貫613文・虎の間）、白石七十郎（30貫文・虎の間）、宮内権六（36貫文・召出）、大河内源太夫（90貫文・召出）、濱田平十郎（33貫313文・虎の間）、市川三右衛門（30貫文・虎の間）、久世平八郎（64貫624文・虎の間）など、家格は召出から平士の中でも最も上位の虎の間番士で、禄高は30貫文以上のもので占められている。その中でも、屋敷地が広い者ほど、禄高が高い傾向があるが、厳密には対応しないようである。

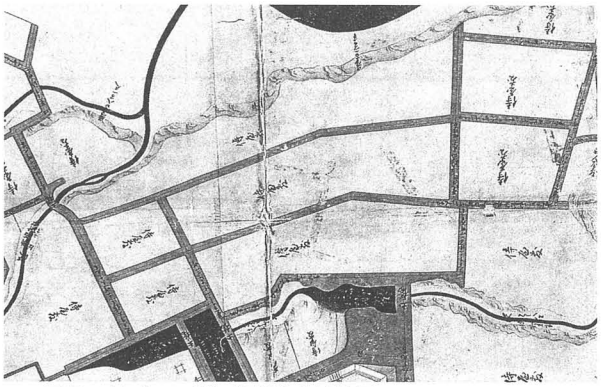
この中でも山崎平左衛門は、虎の間番士でありながら、禄高が102貫613文あり、石高に直すと千石を超える。大河内源太夫が90貫文で続くが、召出であり家格は上である。山崎平左衛門は、この区画の他の家臣と比べると、禄高が著しく高い。しかし、これは例外的な事例と思われる。山崎平左衛門の父は、もとは近江の家で、織田信長の家臣であった。本能寺の変での信長死後は、豊臣秀頼に仕えている。大阪夏の陣で秀頼が死去すると、元和２年（1616年）に伊達政宗に35貫文で仕えることとなった。これ以降、知行地で野谷地開発を活発に行い、102貫を越える禄高はそれによって増加していった結果である。なお、山崎平左衛門は、延宝３年（1675年）には108貫613文となり、禄高はこの時に最も高くなる。その後、天和３年（1683年）には、山崎平左衛門景貞の弟の六兵衛が、宮内家に婿養子となり、それに伴い６貫文が宮内家に分与され102貫613文となった。この宮内家に婿養子に入ったのが宮内六兵衛重篠（権六）で、図16－４・５を見ると、山崎平左衛門の屋敷の南西側に屋敷を構えていることが判り興味深い。山崎六兵衛が宮内家の婿養子となった天和３年は、図16－５の絵図が描かれた頃にあたる。

一方、享保９年以降に現れる、小さく分割された屋敷を拝領していたものには、横沢軍蔵（30貫文・虎の間）のような禄高の者もいるが、渋谷権七郎（15貫940文・中の間）、志茂傳之助（７貫200文・次の間）、藤間仲左衛門（７貫47文・広間）、喜多山大吉（300俵・虎の間）というように、先に見た広い屋敷地を使っていた家臣よりは、禄高も家格も下がってくる。なお松井玄亮は、30貫文という禄高の割には屋敷は小さいが、医師という立場によるのであろうか。

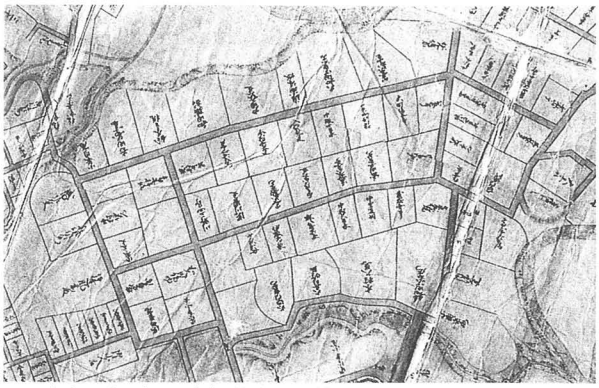
このように、調査地点がある区画は、17世紀には、30貫文以上の虎の間番士以上の家格の家臣が屋敷を構えていた場所であった。18世紀以降に、屋敷地が小さく区分されるようになってからは、より家格や禄高が下の家臣も、この場所に屋敷を拝領するようになっていった。

表５　主要な仙台城下絵図
Tab.5　List of picture maps where Sendai town was drawn in Edo period

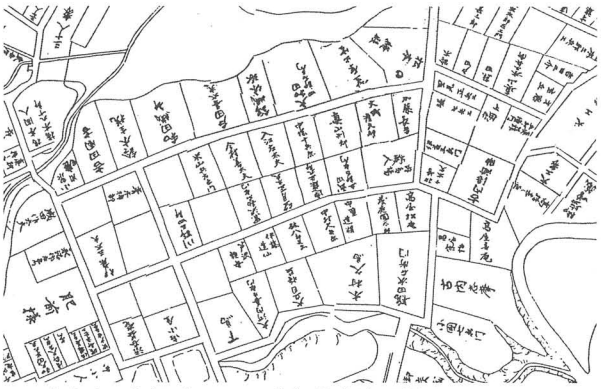
製作年代（西暦）	名称	『仙台城下絵図の研究』	『絵図・地図で見る仙台』	『絵図・地図で見る仙台』2	現所蔵	旧所蔵	図
正保２年 1645	奥州仙台城絵図	一 付図１・14	①		斎藤報恩会	斎藤報恩会	図16－１
寛文４年 1664	仙台御城下絵図	二 付図２	②		宮城県図書館73	伊達家	図16－２
寛文８・９年 1668～69	仙台城下絵図	三 付図15				第二高等学校	図16－３
寛文９年 1669	仙台城下絵図	四 付図３			宮城県図書館74	伊達家	－
寛文・延宝年間（天和2） （1682）	奥州仙台城并城下絵図	五 付図なし			宮城県図書館75	伊達家	－
延宝６～８年 1678～80	仙台市街絵図	六 付図なし			宮城県図書館76	伊達家	－
延宝６～８年 1678～80	仙台城下大絵図				宮城県図書館77		－
延宝６～８年 1678～80	仙台城下大絵図	七 付図４・16			宮城県図書館78	宮城県図書館	図16－４
延宝６～８年 1678～80	仙台藩治絵図	八 付図５				第二高等学校	－
延宝６～８年 1678～80	仙台城下絵図				宮城県図書館79		－
延宝６～８年 1678～80	仙台御城下絵図	九 付図なし			宮城県図書館80	宮城県図書館	－
延宝９年～天和３年 1681～83	仙台城下絵図			①	仙台市歴史民俗資料館		図16－５
天和２年 1682	奥州仙台城并城下絵図	十 付図６			宮城県図書館81	伊達家	－
天和２年 1682	仙台御城下御絵図	十一 付図７				個人	－
元禄４・５年 1691～92	仙台城下五厘掛絵図		③		斎藤報恩会		図16－６
元禄16～享保17年 1703～32	仙台城下絵図	十二 付図８				個人	－
享保９年以降 1724～	仙台城下絵図			②	東北歴史博物館		図16－７
宝暦10年～明和３年 1760～66	仙台城下絵図			③	斎藤報恩会		図17－８
安永１～７年 1772～78	仙台城下絵図	十三 付図９				個人	－
安永１～７年 1772～78	仙台城下絵図	十四 付図なし				斎藤報恩会	－
天明３年～寛政元年 1783～89	仙台城下絵図	十五 付図なし				個人	－
天明６年～寛政元年 1786～89	仙台城下絵図	十六 付図10	④		仙台市博物館	個人	図17－９
文化９～14年 1812～17	仙台城下絵図	十七 付図11				個人	－
文政３年 1820	仙台城下絵図	十八 付図12				個人	－
安政３～６年 1856～59	安政補正改革仙府絵図	十九 付図13・17	⑤		戦災焼失	第二師団	図17－10



1．正保二年（1645年）奥州仙台城絵図



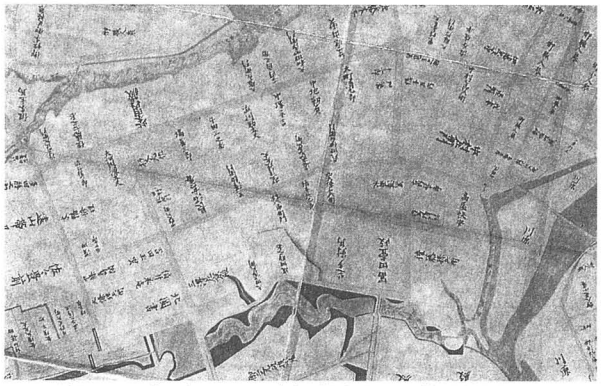
2．寛文四年（1664年）仙台城下絵図



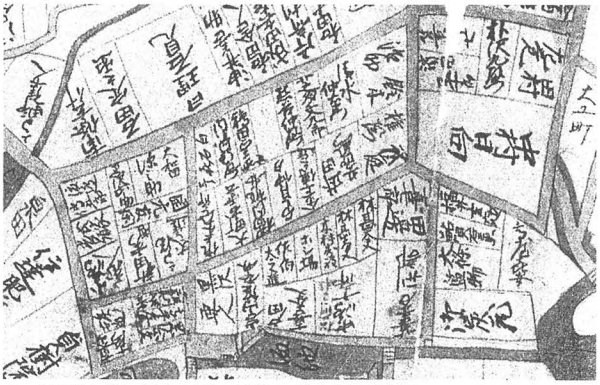
3．寛文八・九年（1668・69年）仙台城下絵図

4．延宝六～八年（1678～80年）仙台城下大絵図

5．延宝九～天和三年（1681～83年）仙台城下絵図



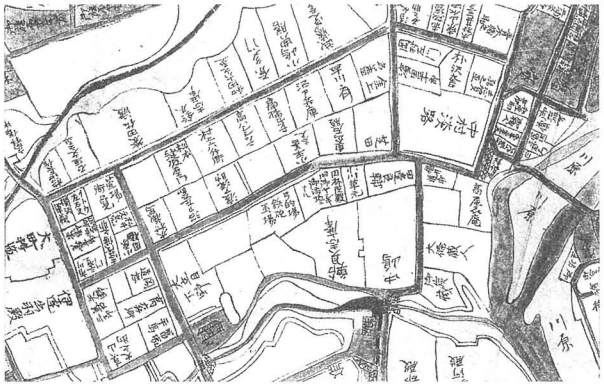
6．元禄四・五年（1691・92年）仙台城下五釐卦絵図



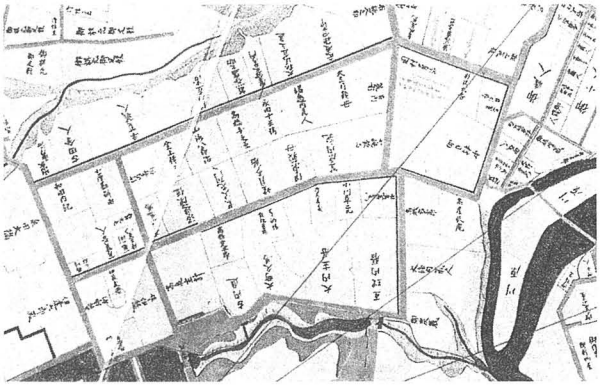
7．享保九年（1724年）以降　仙台城下絵図

1・2・6『絵図・地図で見る仙台』
5・7『絵図・地図で見る仙台　第二輯』
3・4『仙台城下絵図の研究』

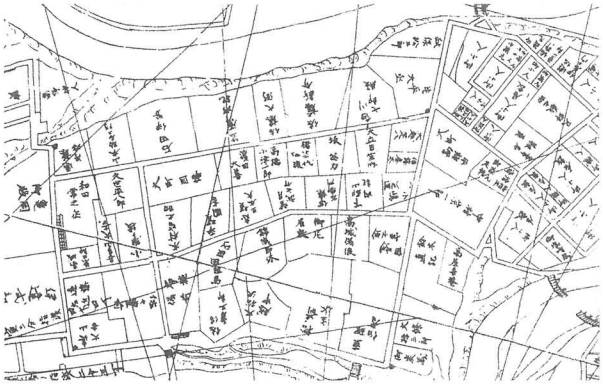
図16　武家屋敷地区第７地点周辺の絵図・地図（1）
Fig.16　Picture maps around the area of BK7（1）



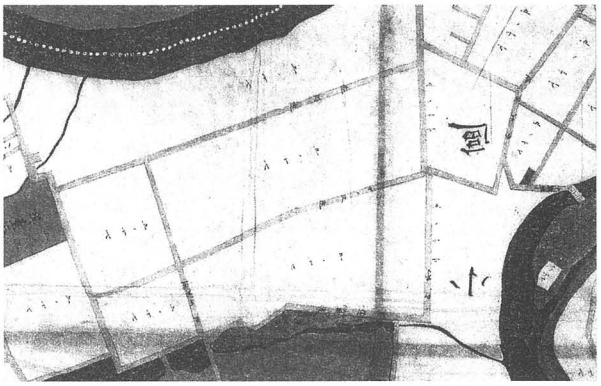
8．宝暦十～明和三年（1760～66年）仙台城下絵図



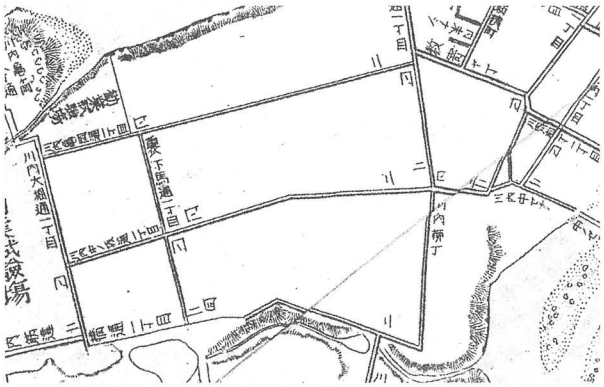
9．天明六～寛政元年（1786～89年）仙台城下絵図



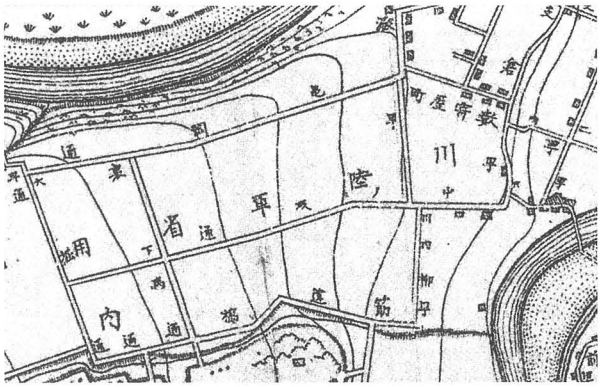
10．安政三～六年（1856～59年）安政補正改革仙府絵図



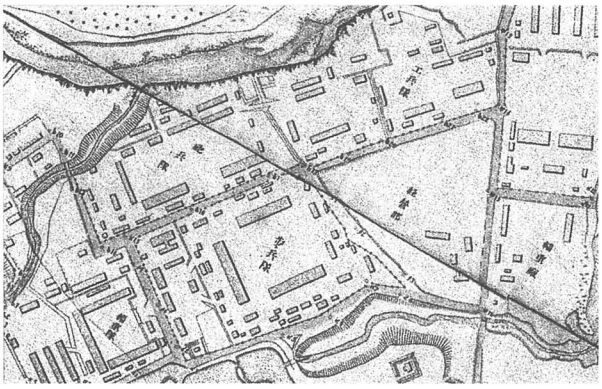
11．明治８年（1875年）宮城郡仙台町地引図



12．明治13年（1880年）宮城県仙台区全図



13．明治15年（1882年）仙台区及近傍村落之図



14．明治26年（1893年）仙台市測量全図

９・10・14『絵図・地図で見る仙台』
８・11～13『絵図・地図で見る仙台　第二輯』

図17　武家屋敷地区第７地点周辺の絵図・地図（2）
Fig.17　Picture maps around the area of BK7（2）

表６　武家屋敷地区第７地点関連絵図人名
Tab.6　List of names of *samurai* lived at this location

<table>
<tr><th rowspan="4">年代
（西暦）</th><th rowspan="4">図</th><th colspan="4">西　半　部</th><th colspan="5">東　半　部</th></tr>
<tr><th colspan="2">西＝北</th><th rowspan="3">西＝中</th><th rowspan="3">西＝南</th><th colspan="2">東＝北</th><th colspan="3">東＝南</th></tr>
<tr><th rowspan="2">西側</th><th rowspan="2">東側</th><th rowspan="2">西側</th><th rowspan="2">東側</th><th rowspan="2">西側</th><th colspan="2">東側</th></tr>
<tr><th>南側</th><th>北側</th></tr>
<tr><td>寛文４年
1664</td><td>図16－２</td><td colspan="2">無</td><td>中村伊右衛門</td><td>伊藤三太夫</td><td colspan="2">青木掃部</td><td colspan="3">無</td></tr>
<tr><td>寛文８・９年
1668～69</td><td>図16－３</td><td colspan="2">無</td><td colspan="2">伊藤三太夫</td><td colspan="2">青木掃部</td><td colspan="3">無</td></tr>
<tr><td>延宝６～８年
1678～80</td><td>図16－４</td><td colspan="2">白石七十郎</td><td>中村伊右衛門</td><td>宮内権六</td><td colspan="2">山崎平太左衛門</td><td colspan="3">明屋敷</td></tr>
<tr><td>延宝９年～天和３年
1681～83</td><td>図16－５</td><td colspan="2">白石七郎左衛門</td><td>中村伊右衛門</td><td>宮内権六</td><td colspan="2">山崎平左衛門</td><td colspan="3">月畊和尚</td></tr>
<tr><td>元禄４・５年
1691～92</td><td>図16－６</td><td>無</td><td>渋谷
権七郎</td><td>木幡修理</td><td>濱田平十郎</td><td colspan="2">大河内源太夫</td><td colspan="3">無</td></tr>
<tr><td>享保９年以降
1724～</td><td>図16－７</td><td colspan="2">渡邊伝五郎</td><td>氏家養順</td><td>小嶋蔵人</td><td>黒沢
武？之助</td><td>大和田
源之助</td><td>新田
秀哲</td><td>高橋
丈？之進</td><td>岡元友閑</td></tr>
<tr><td>宝暦10年～明和３年
1760～66</td><td>図17－８</td><td>横沢軍蔵</td><td>イトウ
左太夫</td><td>米野華三郎・
和田松之助</td><td>市川
三右衛門</td><td colspan="2">萱場衛覚</td><td>志茂
傳之助</td><td>小原周伯</td><td>松井玄亮</td></tr>
<tr><td>天明６年～寛政元年
1786～89</td><td>図17－９</td><td colspan="2">和田内記</td><td>無</td><td>市川三治</td><td colspan="2">小原勘解由</td><td>芳賀
皆人</td><td>藤間
仲左衛門</td><td>松井元鳧</td></tr>
<tr><td>安政３～６年
1856～59</td><td>図17－10</td><td colspan="2">和田常之丞</td><td colspan="2">高城兼三郎</td><td colspan="2">久世平八郎</td><td>喜多山
大吉</td><td colspan="2">小學校</td></tr>
</table>

表７　仙台藩の家格
Tab.7　List of status in *Sendai-han*

家　　格	人数	備　　考
一門	11	角田石川氏・亘理伊達氏・水沢伊達氏・涌谷伊達氏・登米伊達氏・岩谷堂伊達氏・岩出山伊達氏・宮床伊達氏・川崎伊達氏・白河氏・三沢氏
一家	17	鮎貝・秋保・柴田・小梁川・塩森・大条・泉田・村田・黒木・石母田・瀬上・中村・石川・中目・亘理・梁川・片倉
準一家	10	猪苗代・天童・松前・葦名・本宮・高泉・葛西・上遠野・保土原・福原
一族	22	大立目・大町（胆沢郡）・大塚・大内・西大条・小原・西大立目・中島（江刺郡）・宮内・中島（伊具郡）茂庭・遠藤・佐藤・畠中・片平・下郡山・沼辺・大町（宮城郡）・高城・大松沢・石母田・坂
宿老	3	着座のうち一番座の三家（遠藤・但木・後藤）
着座	28	正月等の儀式で登城し着座して藩主に挨拶する家臣
太刀上	10	正月賀礼に太刀を献上し藩主から盃を頂戴する家柄
召出一番座	38	正月宴会に召し出される家柄
召出二番座	51	正月宴会に召し出される家柄
平士（1000石以上）	6	
平士（500石以上）	68	
平士（100石以上）	994	
合計	1258	

2．調査経緯

(1) 2000年度までの調査

1978年、川内北地区のプール西側の排水管埋設工事の際、石組の井戸などが発見された。この時、本学の文学部考古学研究室によって緊急の調査が行われたのが、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区における最初の考古学的調査であった。しかしこの時は、既に掘削が実施された後に、露出した遺構の記録を作成する緊急の調査であったため、ごく部分的な調査に留まらざるをえなかった。

東北大学に埋蔵文化財調査委員会が1983年に設置され、構内遺跡の組織的な調査が開始されると、川内北地区についても遺跡が広がっている可能性に配慮し、必要な措置が取られるようになった。すなわち、施設建設が計画されている場所については試掘調査を行うとともに、営繕工事に際しては、立会調査を実施してきた。その結果、いくつかの調査において、江戸時代の遺構面が残存していることが明らかとなってきた。また、1986年度に実施した二の丸地区第８地点は、二の丸北側に東西に延びていた堀の、北側の岸の部分の調査であった（年報４）。二の丸に伴う堀の部分にかかるため、調査地点名称は二の丸地区の名称を採用したが、調査を実施した場所は川内北地区であった。

これらの調査において、川内北地区においても、江戸時代の遺構面が良好に残存していることが判明してきた。しかも、二の丸の遺構面から、途切れることなく、周辺の遺構面が連続して残っていることも明らかとなってきた。このような成果を受けて、仙台市教育委員会・宮城県教育委員会とも協議した結果、1993年度に仙台城跡の範囲を拡大する措置がとられた。川内北地区に江戸時代の遺構面が良好に残存していることと、二の丸のすぐ外側に位置し、二の丸と密接に関連することから、仙台城跡の一部として扱うこととなった。これにより川内北地区のほとんどが、周知の遺跡の範囲に含まれることとなった。

2000年度までに、当センターおよび前身である埋蔵文化財調査委員会で実施した二の丸北方武家屋敷地区の調査は、第１・４・５・６地点の４地点である（図３）。1985年度に実施した第２地点（BK２）と第３地点（BK３）の調査は、結果的に立会調査で終了したため、欠番としている。

第１地点は、今回の第７地点と一部重なる区域で、1984年度に実施した試掘調査である。当時、課外活動施設の建設候補地であったため、江戸時代の遺構・遺物の有無を確認する目的で、２×２ｍの試掘調査区を３ヶ所設けて調査を行っている。その結果、東よりの調査区で、江戸時代の遺構面が残存していることが確認されている。この試掘調査を実施した後に、課外活動施設の建設場所は変更されたため、今回の第７地点の調査が行われるまでは、それ以上の調査は実施されていない。

第４地点は、1985年度に試掘調査を実施し、1994～1995年度に本調査を行った。試掘調査時には保健管理センターの建設予定地であったが、その後の計画見直しによって課外活動施設が建設されることとなり、工事に先立って本調査を実施した。二の丸北方武家屋敷地区では、初めての大規模な調査となった。江戸時代の初頭から幕末に至る、多数の遺構が検出された（年報13）。

第５地点（BK５）は、教養部学生実験施設（当時）にエレベーターを設置するのに伴い、1989年度に実施した。当初は試掘調査という位置づけであったが、江戸時代の遺構が検出されたため、本調査に切り替えて実施したものである。40㎡という小規模な調査であったが、南北方向に延びる溝が１条検出されている（年報７）。

1996年度に実施した第６地点は、給水管埋設に伴う調査である。調査面積は少なかったが、比較的多くの遺構が検出されている（年報14）。

今回の第７地点の調査は、川内北地区における二の丸北方武家屋敷地区の大規模な調査としては、1994～95年度に実施した第４地点の調査以来、２ヶ所目の調査となる。

(2) 調査地点の位置

今回の調査は、マルチメディア総合研究棟新営に伴う調査である。調査地点は、川内北キャンパスの中でも、北端に近い場所で、自転車置き場などとして使われていた場所である（図18)。今回の調査区の東側には、高さ２ｍを越える段差がある。この段差は、近代以降に人工的に造られたものである。新築される建物は、この段差をまたぐ形で、東西に長く造られる計画であった。段差の下側は、大規模に削平されていると考えられたことから、段差の上の部分を発掘調査の対象とした。

前述のように、今回の調査地点は、二の丸北方武家屋敷地区第１地点の試掘調査と一部重なる場所である。この第１地点の調査以外には、近隣では発掘調査は実施されていない。小規模な掘削に伴う立会調査が実施されたことがあるだけである。

絵図との対比、江戸時代の道路の推定復元などについては第３章１．で述べたが、二の丸北側の、武家屋敷が広がっていた区域にあたる場所である。

(3) 調査の方法と経過

①1984年度試掘調査

調査地点が重なるため、1984年度の試掘調査（BK１）についても、ここで簡単に触れておく。

当時この区域は、課外活動施設の建設予定地となっていたため、江戸時代の遺構面の残存の有無などを確認するために、試掘調査が実施された。建設予定範囲に合わせる形で、２ｍ×２ｍの調査区を３ヶ所設定し、合計12㎡を調査している（図19)。調査は、重機で地山まで掘削して断面を観察する方法で行われており、平面的な精査は全く行われていない。

東側の調査区である１区は、今回の調査区の中に重なる。江戸時代の遺物を含む地層が残存し、江戸時代の遺構面が残っていることが明らかとなった。しかし、平面精査を行わず、江戸時代の遺構面を掘り抜く形で調査されたため、結果的に礎石建物跡などの一部を破壊し、遺構の展開状況が判らなくなる結果をもたらしている。

中央の２区は、今回の調査区のすぐ西側にあたる位置に設けられた。ここでは、表土と近代以降の盛土を除去すると、すぐに地山層が露出し、江戸時代の地層は削平されていた。

西側の３区でも、表土と近代以降の盛土を除去すると、すぐに地山層が露出し、既に削平を受け江戸時代の遺構面は残存していないことが明らかとなった。

②2001年度本調査

2001年度予算においてマルチメディア総合研究棟新営が決定し、段差をまたぐ形で、東西に長い建物が建てられることとなった。段差の上側にあたる区域は、第１地点の試掘１区の結果から、江戸時代の遺構面が残存していることは確実であったため、工事で破壊される範囲の全面を調査することとした。段差の下側にあたる東側は、大規模に削平されていると考えられたため、この区域については重機で表土を掘削し、遺構が検出された場合には、その区域だけ調査することとした。ただし、段差の東側は、その一部を排土置き場として利用することとしたため、東側部分の掘削は、調査の進行状況に応じて実施することとした。

調査区域は、段差の西側も東側も、それまで自転車置き場として利用され、上屋が設置されていた。この上屋などの支障物の撤去や、現場事務所のプレハブの設置などの諸準備が、年度当初には間に合わなかった。そこで、1984年度の試掘調査１区の周囲を、先行して一部を調査し、基本層序などの確認を行うこととした。

調査は、４月４日から開始した。最初は、少人数で機材置き場や通路の設置などを行った。続いて４月９日に試掘１区周辺の重機掘削を実施した。試掘区の周辺を一回り大きく方形に掘削し、そこから２ｍ幅のトレンチ状に、西側へ約10ｍ掘削した。試掘１区の埋め戻し土を除去したところ、第４地点で確認されているのと同様の、

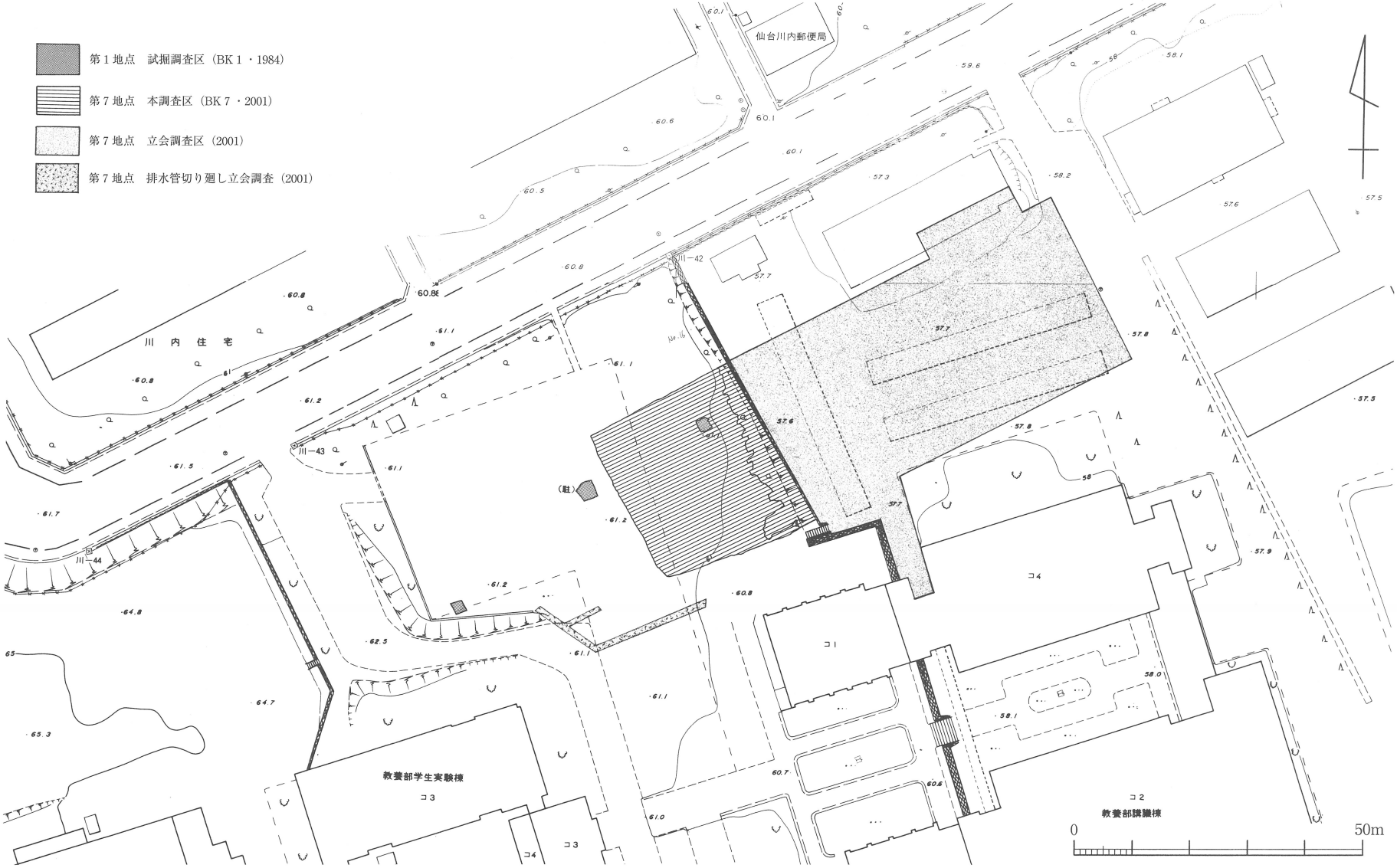


図18　武家屋敷地区第７地点調査区の位置
Fig.18　Location of BK7（BK7 i.e. Location 7 of *samurai* residence）

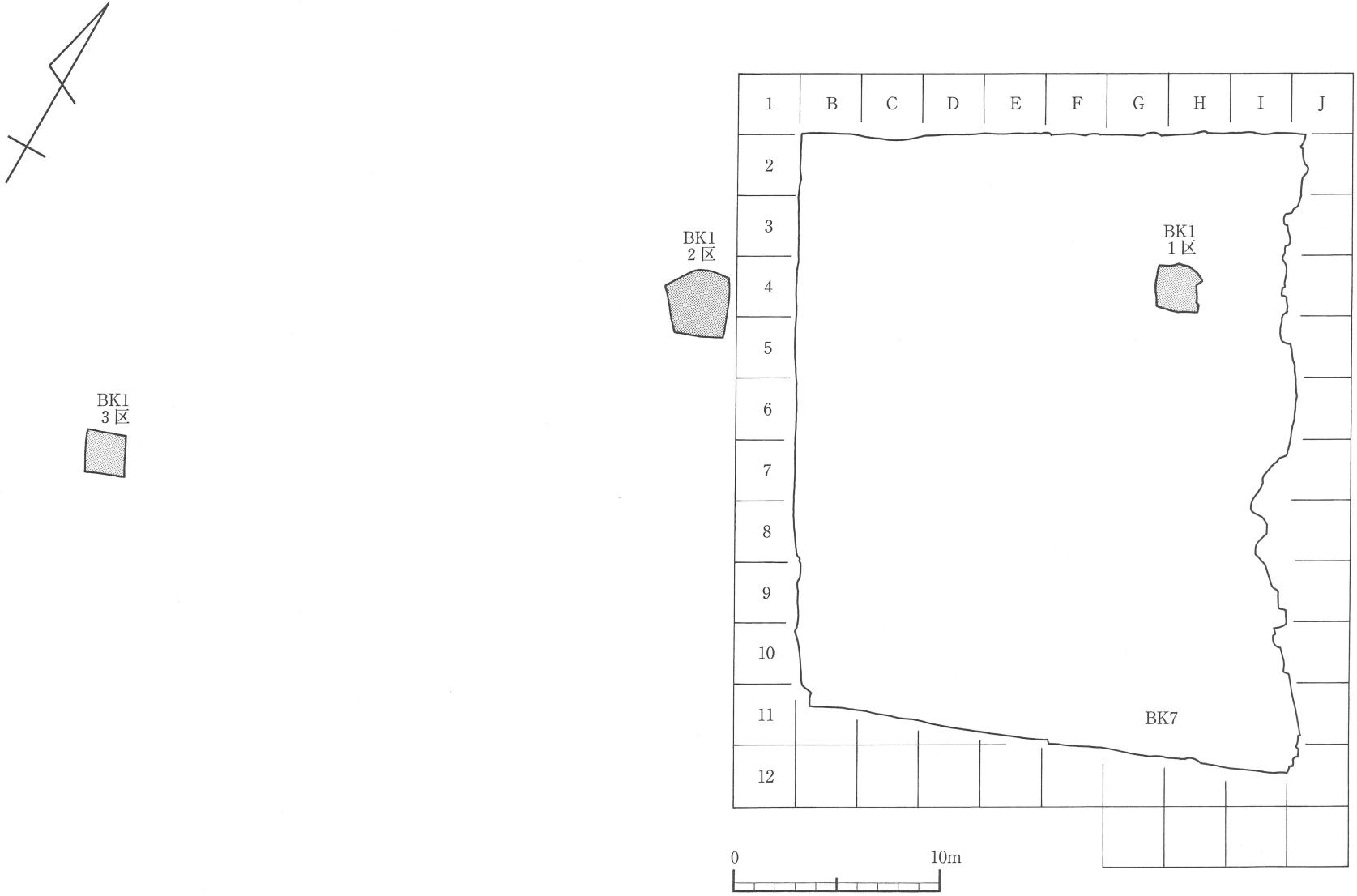


図19　武家屋敷地区第１地点調査区と第７地点調査区の関係
Fig.19　Location of BK1 and BK7

明治初頭頃の畑耕作土が残存しているのが確認され、これを２層とした。第４地点での経験から、明治初頭の畑耕作土には、江戸時代の遺物が多数入り込んでいることが予想されたため、２層上面から精査を行うこととして、周辺は２層上面の精査までを行った。

この試掘区周辺の先行調査と併行して、４月19日より支障物撤去や仮囲設置などを進め、23日から段差西側の調査範囲全体の重機掘削を開始した。重機掘削は５月２日に終了した。

連休明けの５月７日から、作業員を投入した。先行する部分的な調査によって、２層上面に畑の畝状の遺構が存在することが明らかとなっていたため、２層が露出するまで重機で除去すると、畝状遺構を壊してしまうおそれがあった。そのため、１層としてまとめた表土や近代以降の盛土は、若干残して除去した。残った１層の除去と、攪乱内の埋土の除去から作業を開始した。

川内地区の調査では、大規模な攪乱が多く存在するのが通常である。これらの攪乱の中には、かなり深いものも多いが、深さの大小にかかわらず、最初の段階で全て掘り上げることを基本方針としている。これは、井戸などの深い遺構が、攪乱の底面で検出される可能性もあることと、攪乱内の埋土に由来する新しい遺物の混入を防ぐことが目的である。また、整地層をはさむ複雑な遺構の様相を把握するため、調査の最初の段階で攪乱を完全に掘り上げ、断面を充分に観察できるようにするためでもある。

今回の調査区でも、近代以降の攪乱が各所に存在し、全体的な保存状態は良好とは言えない（図20）。２層上面まで達しているものが広範囲に存在する。調査区西よりのＣ列を、調査区を南北に横切っている大規模な攪乱は、米軍の共同溝によるものである。米軍共同溝内の掘り方は、底面の凹凸が激しく、重機で除去しきれない埋土が多量に残り、除去に手間取った。攪乱内の埋土を完全に除去し、その中に深い遺構がないことを確認した。この米軍共同溝の掘り方は、場所によってかなり深くなり危険なため、２層上面の精査が終了し、全景写真を撮影した後に、一定の深さまで埋め戻すこととした。

Ｆ・Ｇ－５区からＦ・Ｇ－９区にかけて南北に並ぶ、３ヶ所のほぼ方形の攪乱は、大学造成時に重機で掘られたものである。東北大学が川内北地区を利用するようになってからしばらくは、米軍キャンプの建物を使用していた。大学での建物の建設が進められるとともに、これらの米軍時代の建物が壊されていったが、その時の廃材と思われるガラスなどが大量に捨てられていた。

Ｂ～Ｄ－４区からＢ～Ｄ－７区にかけて並ぶ方形の攪乱は、大きな礎石が２～３個重ねて入れられているもので、第４地点でも同様の礎石が発見されている（年報13）。これらは、陸軍第二師団の建物の基礎と考えられる。Ｅ～Ｈ－２区からＥ～Ｈ－７区にかけて並ぶ方形の攪乱は、掘り方の内側いっぱいにまでコンクリートが充填されたもので、米軍時代の建物の基礎と考えられる。Ｈ～Ｊ－10・11区の、段差の脇にあるほぼ長方形の攪乱には、周囲の壁に沿って丸太を組み上げたような施設が、一部残っていた。おそらく、段差から横に入る形で造られた防空壕と思われる。

これらの大規模な攪乱以外にも、大小の攪乱が存在する。攪乱内の埋土の除去にあたっては、重機も利用したが、周囲を破壊しかねない場合には、手掘りによって掘り上げているものも多い。攪乱の中には、掘り方の内側いっぱいまでコンクリートが充填されている場合もあり、重機で撤去すると、周囲の地層を破壊してしまう。そのため、コンクリートの破砕のため、電動ハンマーを多用した。このような状況のため、攪乱の掘り上げと清掃に予想以上に手間取り、一部は６月下旬までを要した。これが終了した部分から、順次精査に移った。

精査は、２層上面から開始した。２層は畑の耕作土として使用された部分もあり、全体に遺構は少なく、７月６日に終了した。その後、２層以下を掘り下げつつ、順次遺構を確認して精査を続けた。

段差の東側については、排土置き場としていた関係と、この場所に置かれていた自転車置き場の撤去作業の日程から、９月29日から10月５日に、重機での掘削を実施した。建設予定範囲全体にわたって表土を除去したが、さらに深くまで近代以降の盛土が続いていることが明らかとなった。そのため、江戸時代の遺構面が残存してい

図20　武家屋敷地区第７地点調査区模式図
FIg.20　Pattern diagram of location at BK7

る可能性はきわめて低いものと判断して、それ以上の調査は実施しないこととした。

調査が進行し、全体の状況がほぼ明らかとなってきた10月20日には、現地説明会を開催した。それに先だって、19日に報道機関対象の記者発表を行った。

今回の調査では、調査区南東側に、２号遺構とした大規模なゴミ穴が確認され、膨大な量の木簡や木製品が出土した。調査の進め方との関係で、この２号遺構とその周辺が、最後まで作業が残ることとなった。10月末には、他の区域の調査はほぼ終了し、２号遺構とその周辺の調査に集中して取りかかることとなった。多量の遺物の出土により、作業は難航したが、11月16日に最終状況の全景写真を撮影した。その後、１号遺構で出土した犬の骨格などの特殊な遺物を、ウレタンで包埋して取り上げる作業などを行いつつ、撤収作業を進め、11月23日には全ての作業を終了した。

なお、本建物の付帯工事として実施された、渡り廊下取設工事は９月18日に、汚水管迂回工事は12月17・21・25日に立会調査を実施した。いずれにおいても、江戸時代の遺構・遺物は検出されなかった。

③記録方法

調査にあたっては、建物建設予定区域の方向に合わせて、３ｍグリッドを作成した（図20）。調査に際して設定した基準点の国土座標値は、以下のとおりで、基準点の位置は図20に示した。平面直角座標系は、Ｘ系である。グリッドは、北で28°18′18″西偏している。

ＢＫ７－Ａ	日本測地系	Ｘ＝－193,381.587	世界測地系	Ｘ＝－193,072.854
		Ｙ＝＋　1,784.902		Ｙ＝＋　1,485.011
ＢＫ７－Ｂ	日本測地系	Ｘ＝－193,367.362	世界測地系	Ｘ＝－193,058.630
		Ｙ＝＋　1,811.315		Ｙ＝＋　1,511.424

なお、本年報にも掲載した、現在使用している縮尺500分の1地形図などは、旧来の日本測地系によるものである。そこで当面の間、基準点の国土座標値は、日本測地系と世界測地系の座標値を、両方とも掲載することとしている。掲載図版中の座標値についても、日本測地系か、世界測地系のものか、それぞれに明示している。

遺構の実測は、平面図・断面図ともに縮尺1/20を基本とした。ただし、１号遺構で検出された犬の全身骨格については、等倍で実測図を作成している。

近世の遺跡は、その場所が近代以降に様々に利用されている場合が多く、必然的に近代以降の攪乱が多数存在することとなる。また頻繁な建て替えなどにより、多数の変遷段階が認識されることがほとんどである。このような場合、古い段階では、新しい段階の遺構による破壊を受け、保存状況が良くない場合が多い。攪乱や後世の遺構による破壊を遺構実測図で表現する場合、通常は線の太さを最も細くして表現する方法がとられている。しかし、遺構の数が多く複雑に切り合う場合、線の太さの違いだけでは、必ずしも判り易い表現方法とは言えない場合もある。そこで先の年報18に引き続いて、攪乱や後世の遺構による破壊部分を、破線で表現した。これは、新潟県新発田市の新発田城跡の調査報告書などで試みられている方法である（鶴巻ほか1997）。

記録写真は、35mmのカラーリバーサルとモノクロを基本として使用し、全景写真などでは、６×７のカラーリバーサルとモノクロ写真を撮影している。調査状況の写真撮影にあたっては、調査区全域の変遷段階を合わせて、それぞれの段階での全景写真を撮影することが望ましいことは言うまでもない。しかし今回の調査では、調査区全体に広がる整地層がほとんどなく、遺構を掘り上げて含まれる遺物を確認するまで、それぞれの遺構の帰属時期を決定できなかった。そのため、調査途中に変遷段階を設定することは難しく、段階ごとの全景写真を撮影することは不可能であった。次善の策として、できるだけ頻繁に広域での写真を撮影するようにしたが、全景写真を撮影したのは、２層上面と最終状況の２回だけとなっている。

④遺構の名称について

近世遺跡の調査においては、多種多様な遺構が検出される。その際、遺構の詳しい用途まで判明する場合もある一方で、遺構の形状からしか名称を付けられないものも存在する。そのため、異なる基準での名称が混在する場合が多い。本来は、同一基準での命名が望ましいが、作業を進める上での判り易さという点も無視できない。今回使用した遺構名称は、次の通りである。

建物・柱列・杭列・石列・溝・畝状遺構

土坑・井戸・池状遺構・石敷遺構・桶埋設遺構・桝埋設遺構・ピット・落ち込み

これら以外に、大規模なゴミ穴が2基確認された。これらは検出時には池になる可能性を考え、1号池・2号池と呼称したが、調査の進行とともにゴミ穴であることが明らかとなった。そのため、池という呼称はふさわしくなくなってしまった。もともとゴミ穴として掘られたのかも判然としないため、1号遺構・2号遺構との名称を使うことにした。ピット以外の、各時期ごとの遺構の一覧を、表8に掲げておく。

柱穴などのピットについては、建物や柱列を構成することが現場で判明している場合でも、ピット番号として、全体で一連の通し番号を現地で付けた。根固状の礫が検出され、掘り方が判然としない場合も、ピットとして一連番号を付けている。川内地区での調査の場合、遺構が複雑に重なり合うと、現場での検討では、組み合う全ての柱穴を確認できない場合が多い。調査後の図面整理の過程で、建物跡や柱列を確認している場合が多数を占める。現地で組み合うことが判明したものについて柱番号を付すと、その後に同じ建物跡などを構成することが判明したピットの番号と、柱番号が前後する場合が生じる。整理後に柱番号を付け直すと、現地での呼称との間で混乱をきたしかねない。そのため、現地で付ける遺構名称は、通し番号のピット番号に統一し、建物跡や柱列を構成するピットについては、図面整理後に柱番号を新たに付ける形で、名称を変更している。表9・10に、現地で付した遺構名称と、本報告にあたっての遺構名称の対照表を示している。遺物に付された注記は、全て現地での遺構名称となっている。

土坑については、ピットとの区分を、どこにするかという点が問題となる。基本的には規模の大きなものを土坑としている。また、ピットとして名称を付けたが、土坑とした方が良いと考えられるものについても、名称を変更した。溝については、素掘りのものも、石組溝も、合わせて通し番号を付けた。また、木樋が埋められたものも、溝として名称を付けた。

⑤遺物の取り上げについて

近世以降の遺跡の調査においては、それ以前の時代の遺跡と比較すると、遺物の出土量が極めて多くなるのが通常である。その際、破片では特徴が判別し難い瓦などについて、全てを取り上げるか否かが問題となる。

当センターの調査においては、江戸時代に遡る可能性がある遺物については、全て採集することを基本方針としている。今回の調査では、明治時代の早い時期と考えられ、畑の耕作土として利用された可能性のある、2層より下位の層序から出土した遺物については、基本的に全ての遺物を採集している。それより上位の整地層や現在の表土は、まとめて1層として、明らかに近現代のもの以外について、遺物を回収した。ただし、1層と攪乱から出土した遺物の内、瓦については、一定の基準を設けて現地で選別を行った。瓦は、江戸時代のものと、明治以降のものを識別することが、破片の場合ほとんど不可能なものも多い。そこで、長さと幅の判明するもの、軒瓦、刻印や線刻のあるもの、その他特殊なものについては採集するという基準を設けた。刻印や線刻の有無などについては、土壌が付着したままでは判別が難しいので、高圧洗浄機で土壌をおおよそ落とした上で、上記の基準に当てはまる資料のみを収集している。

⑥整理作業

今回の調査では、木簡を始めとする木製品が、調査終盤に大量に出土した。出土遺物の水洗と注記の作業は、調査中に一部実施していたが、多くが調査終盤に出土したため、本格的な整理作業は調査終了後に開始することとなった。調査終了と同時に、木製品の水洗作業を優先して開始した。最初に木簡の水洗を行い、続いてその他の木製品の水洗を実施することとした。結果的に、木簡の水洗作業だけで当年度末まで費やこととなった。引き続き翌年度は、木簡以外の水洗と注記から、整理作業を進めた。なお注記作業は、瓦や土師質土器などは、自動注記機械を利用して行った。

当センターでは、調査の翌々年度中に整理作業を終え、報告書を刊行することを基本方針としていた。しかし、2000年度に調査を実施した仙台城跡二の丸第17地点の調査成果を掲載した年報18の刊行が、予算上の問題などもあり、大きく遅れることとなった。また、二の丸第17地点の整理作業も、全般に遅れていた。その影響を受け、二の丸第17地点に引き続いて整理作業を実施する予定の、当地点の整理作業と報告書刊行も遅れることとなった。2004年度に年報18を刊行する目処がたったため、本年報は2005年度に刊行することとした。しかし、多数の木簡を始め、報告書に掲載することが必要な資料の数が膨大なため、一つの冊子とすると、頁数が大きくふくらむことが明らかとなった。当センターの整理作業と報告書刊行は、毎年度ほぼ同じ予算額で進めている。特定の年度だけ報告書の頁数が増大し、印刷費が大きくなることは、他の事業費を圧迫することとなり難しい。そのため、本年報は５分冊に分け、第１分冊を2005年度に、第２～５分冊は、作業の進行にあわせて順次刊行することとした。

近世遺跡の調査では、様々な材質の遺物が出土する。水浸木製品のように、材質に応じて特有の取り扱いを必要とするものも多いことから、遺物の種類ごとに整理作業を進めている。遺物の各種類ごとの細かな整理作業の方法、それぞれの分類基準ついては、第２分冊に掲載する遺物の報告の各項目の中で記述する。

図面ないし写真を、本報告書に掲載した遺物については、種類ごとに以下の頭文字を決め、その下に通し番号の登録番号を付けている。実測図・写真図版・観察表の番号は、いずれもこの登録番号に統一している。遺物を管理する台帳も、全てこの登録番号をもとに作成しており、保管にあたっても、この登録番号を基礎に管理するようにしている。

原始・古代の遺物

縄文土器・須恵器：ＣＺ　　石器：ＳＴ

江戸時代以降の遺物

磁器：ＣＪ　　陶器：ＣＴ　　軟質施釉土器：ＣＮ

土師質土器：ＣＨ　　瓦質土器：ＣＧ　　土製品：ＣＯ

瓦：Ｔ

古銭：ＭＣ　　古銭以外の金属製品：ＭＯ

石製品：Ｓ

木簡：ＷＴ　　木製品：Ｗ　　漆塗製品：ＷＬ

ガラス製品：Ｇ　　その他の遺物：ＯＴ

3．基本層序と時期区分

(1) 基本層序

調査地点周辺のもともとの地形は、全体的には、ごくゆるやかに東に向かって下っている（図21）。現在見られる平坦面と段差は、近代以降に行われた切り土と盛り土によって形成されたことが、今回の調査結果からも明らかである。そのため、標高の高い西側ほど、近代の切り土による削平が深くおよんでいるものと思われる。今回の調査地点より西側にあたる、第１地点の試掘２区と３区では、すでに江戸時代の地層は削平されて残存していなかった。今回調査した区域では、その西端に至るまで、近代以降の切り土による削平はまぬがれていた。しかし、近代以降の攪乱が多く、各所で分断され、地層のつながりを把握するのに苦慮する結果となった。

基本層序は、次のように区分した（図22～25）。

１層

現在の表層および近現代の整地層と考えられる地層を、１層として一括した。次の２層より上位にある層は、全て１層としてまとめたこととなる。掘削も、ほとんどは重機で行っている。

２層

灰黄褐色からにぶい黄褐色を基調とするが、場所によって色調の変異があり、黒褐色から暗褐色の暗い色調の部分や、褐灰色のような明るい色調の部分もある。土質はシルトで、炭化物や小礫を含む場合が多い。

調査範囲の一部に留まるが、２層の上面は畝状になっている部分がある。二の丸北方武家屋敷地区では、第４地点で広範囲に畝状遺構が検出され、それらは溝状遺構で区画されていた。このような遺構の形態から、畑の跡であると考えられている（年報13）。今回の第７地点では、畑の区画を示すような遺構は検出されていないが、

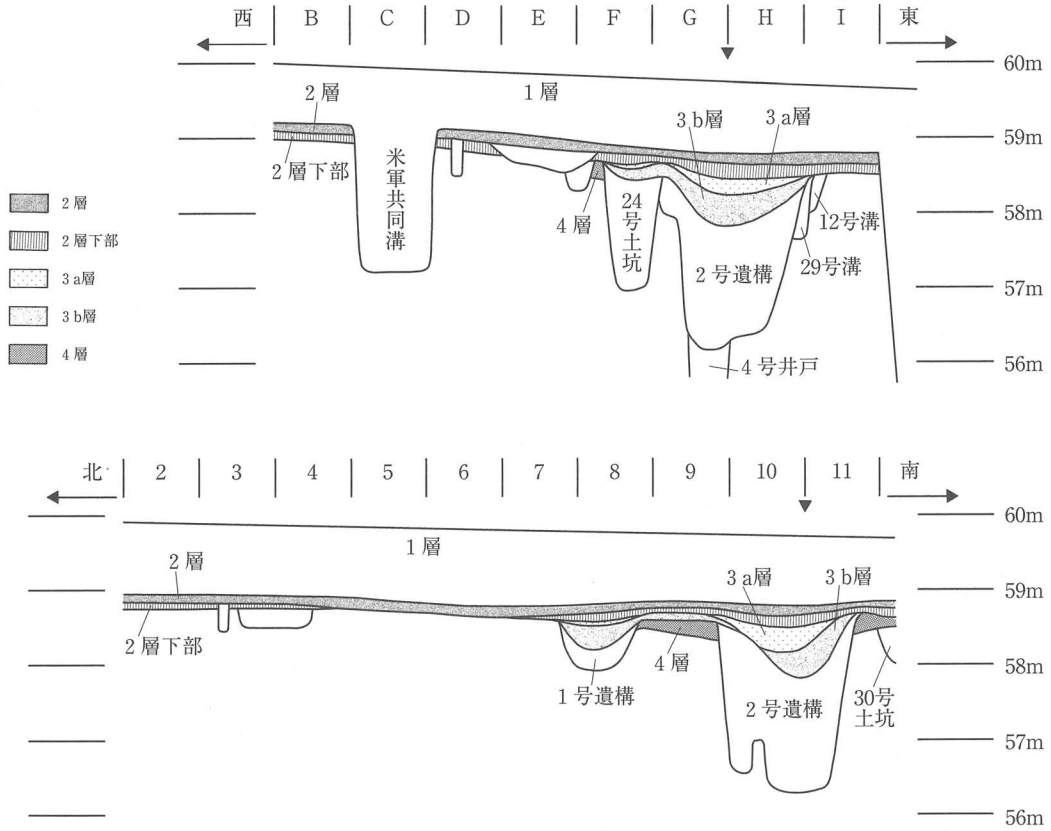


図21　武家屋敷地区第７地点基本層序模式図
Fig.21　Schematic Profiles of BK7

畝状遺構の様相は、第４地点のものに良く類似している。したがって、この２層は、畑の耕作土の可能性が高いと考えられる。

２層下部

土色・土質をはじめ、層相は２層との類似性が強い。灰黄褐色からにぶい黄褐色を基調とするが、場所によって色調の変異がある。２層同様、色調は黒褐色から暗褐色の暗い色調の部分や、褐灰色のような明るい色調の部分もあるが、全般的に変異の割合が２層より大きい傾向がある。土質はシルトであるが、砂の部分もある。炭化物や小礫を含む場合があることは２層と同じであるが、場所によっては多くの小礫を含む場合もある。

２層と層相の違いが少なく、２層・２層下部とも部分ごとに変異があったため、両者を明確に区分することが難しかった。そのため当初は、２層の一部と考えて調査を進め、２層下部と呼称した。調査が進むにしたがい、この２層下部の上面から掘り込んでいる遺構と、２層下部の下位から掘り込んでいる遺構が、両方とも存在することが明らかとなった。そのため２層下部は、江戸時代の整地層と考えられる。ただし層相から見て、当時の表層に堆積していた土を動かしたものと思われ、地山を削って大規模に土を運んで行われた整地ではない。また、２層下部に相当する層準で、様相の異なる地層も、各所に見られた。いずれも分布範囲が狭く、層の厚さも薄いという傾向がある。分布範囲が狭いため、相互の関係をつかむことは困難であった。層位的関係では、いずれも２層下部相当として矛盾しないものであったため、これらの地層も２層下部に含めた。

3a層

黒褐色シルトを主体とするが、粘土や砂質シルトの部分もある。全体的に、炭化物を多く含む。

次の3b層は大規模なゴミ穴の上面をふさぐように整地したものであるが、ゴミ穴内の堆積層が窪み、それに伴い3b層も窪んだところに堆積したのが3a層である。3a層には多数の遺物が含まれ、この窪みが再度ゴミ穴として利用されたものと考えられる。調査を進めていた過程では、3b層上の窪みは人為的な遺構と考え、20号土坑との名称を付けた。後の遺構の記載でも、20号土坑として説明しているが、陥没に伴う窪みを利用したものであり、20号土坑埋土と3a層は一連の堆積層である。

3b層

黄褐色粘土を主体とする整地層である。地山の黄褐色粘土層を用いたものと思われる。ほとんどは黄褐色粘土で占められ、含有物は少ないが、黄褐色粘土と黒褐色シルトがブロック状に混ざり合った部分もある。大規模なゴミ穴である１号遺構と２号遺構、およびその周辺に分布し、廃棄物を多量に含む地層を、覆い隠すようにして整地されている。

４層

灰黄褐色から褐灰色を基調とし、地山上部の漸移層に近い色調である。土質は、場所によりシルトから粘土まで見られ、一様でない。黒褐色土に、地山起源の黄褐色粘土がまだらに混じっている部分もある。

調査区南東側の、２号遺構の西側から南側にかけての範囲だけに分布していた整地層である。４層が分布している範囲は、地山上面の標高が若干低くなっており、この低い部分にだけ整地を行ったものと考えられる。２号遺構は、この４層上面から掘り込まれている。分布範囲が狭いことと、層の様相から、当時の表層に堆積していた土が給源と思われる。

地山

地山は黄褐色粘土を基調とする、ローム起源の水性堆積層で、土色・土質は場所による変異がある。川内地区一帯で観察される地山層と、基本的に変わらない。地山の最上部には、漸移層が形成されている部分も多い。漸移層は、にぶい黄褐色や灰黄褐色を基調とする。調査にあたっては、漸移層も含めて、地山として扱った。なお今回の調査区では、深い攪乱の部分を含めて、段丘礫層が露出しているところは見られなかった。

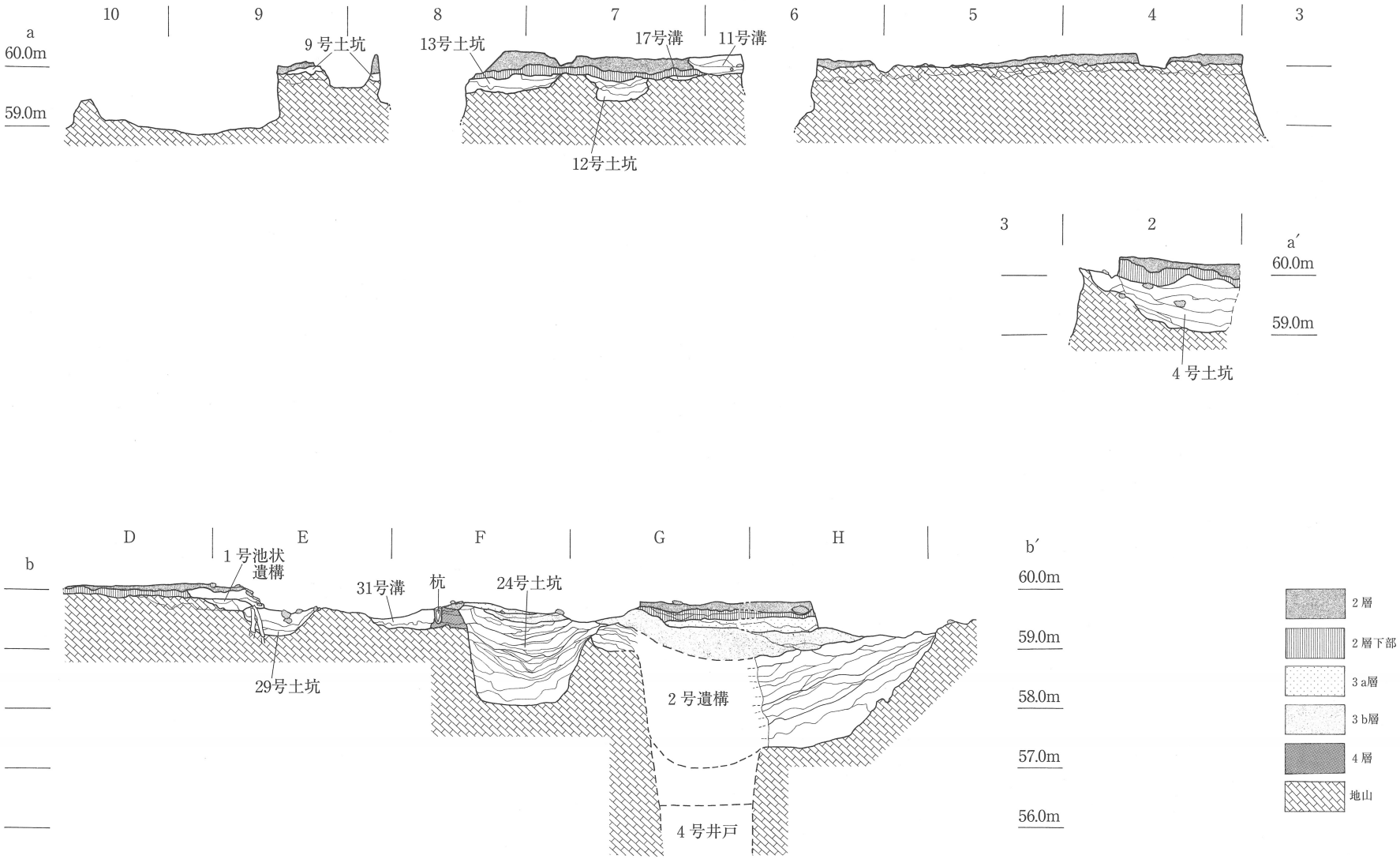


図22　武家屋敷地区第７地点基本層序断面図（1）
Fig.22　Fundamental layer sections at BK7（1）

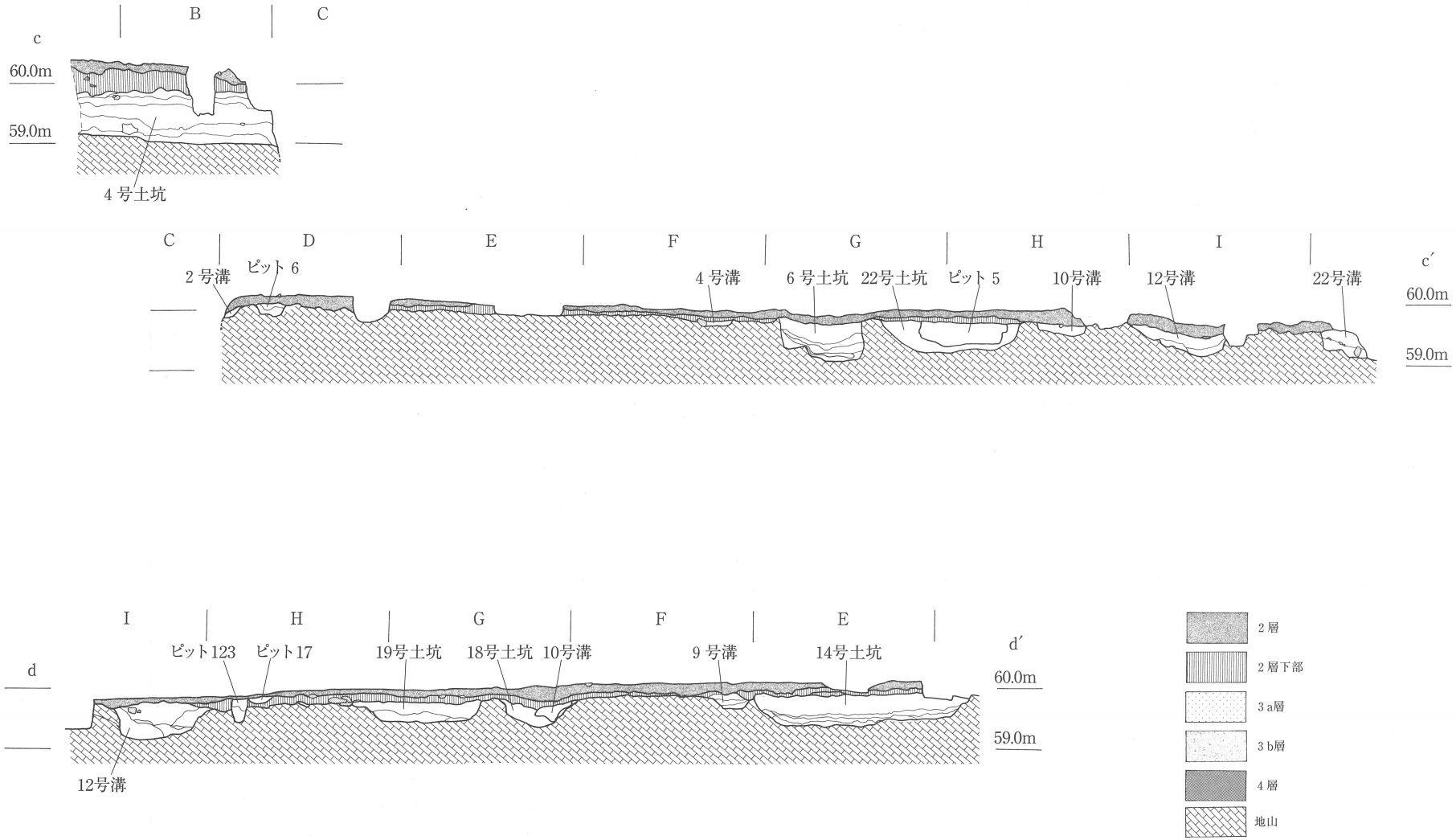


図23　武家屋敷地区第７地点基本層序断面図（2）
Fig.23　Fundamental layer sections at BK7（2）

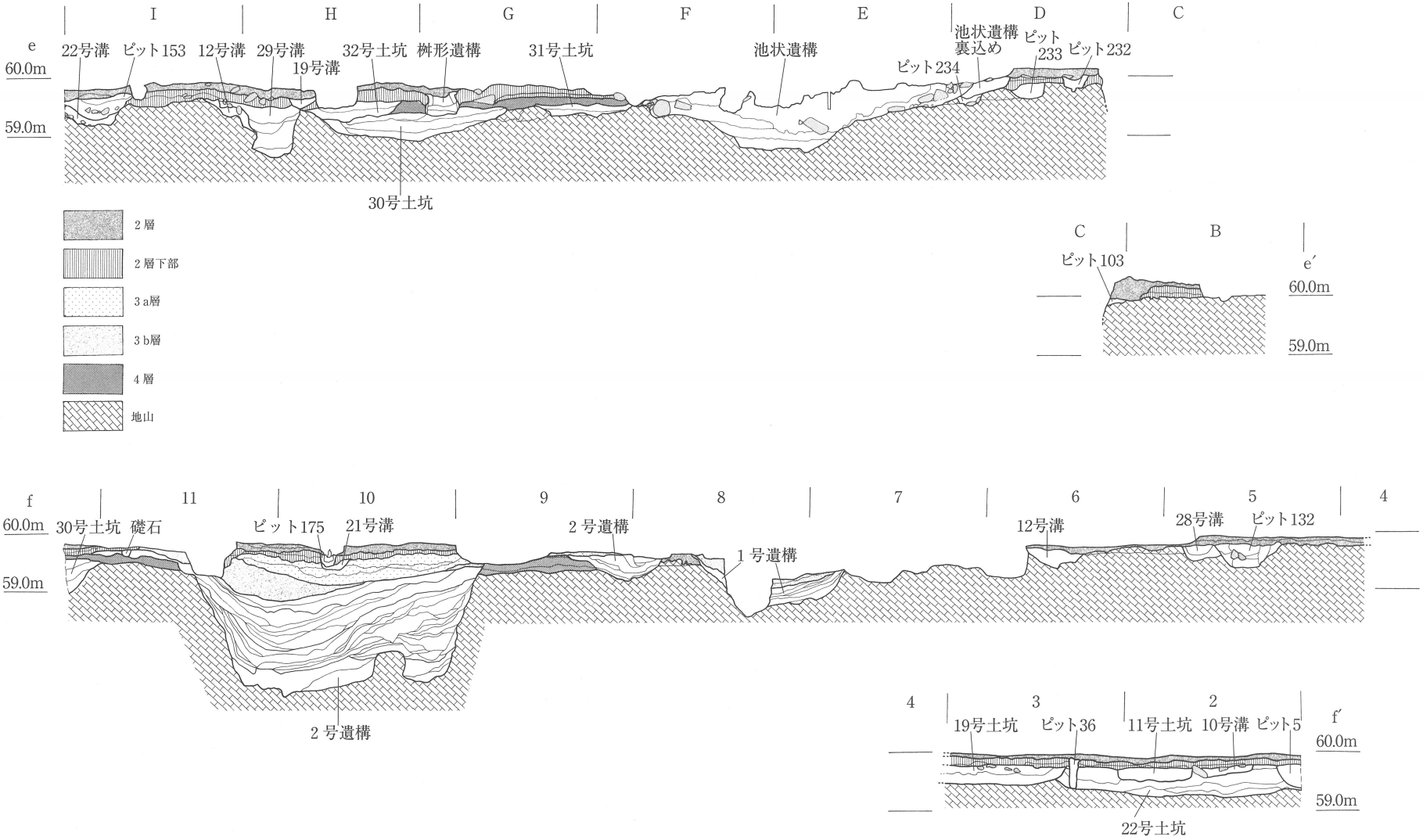


図24　武家屋敷地区第７地点基本層序断面図（3）
Fig.24　Fundamental layer sections at BK7（3）

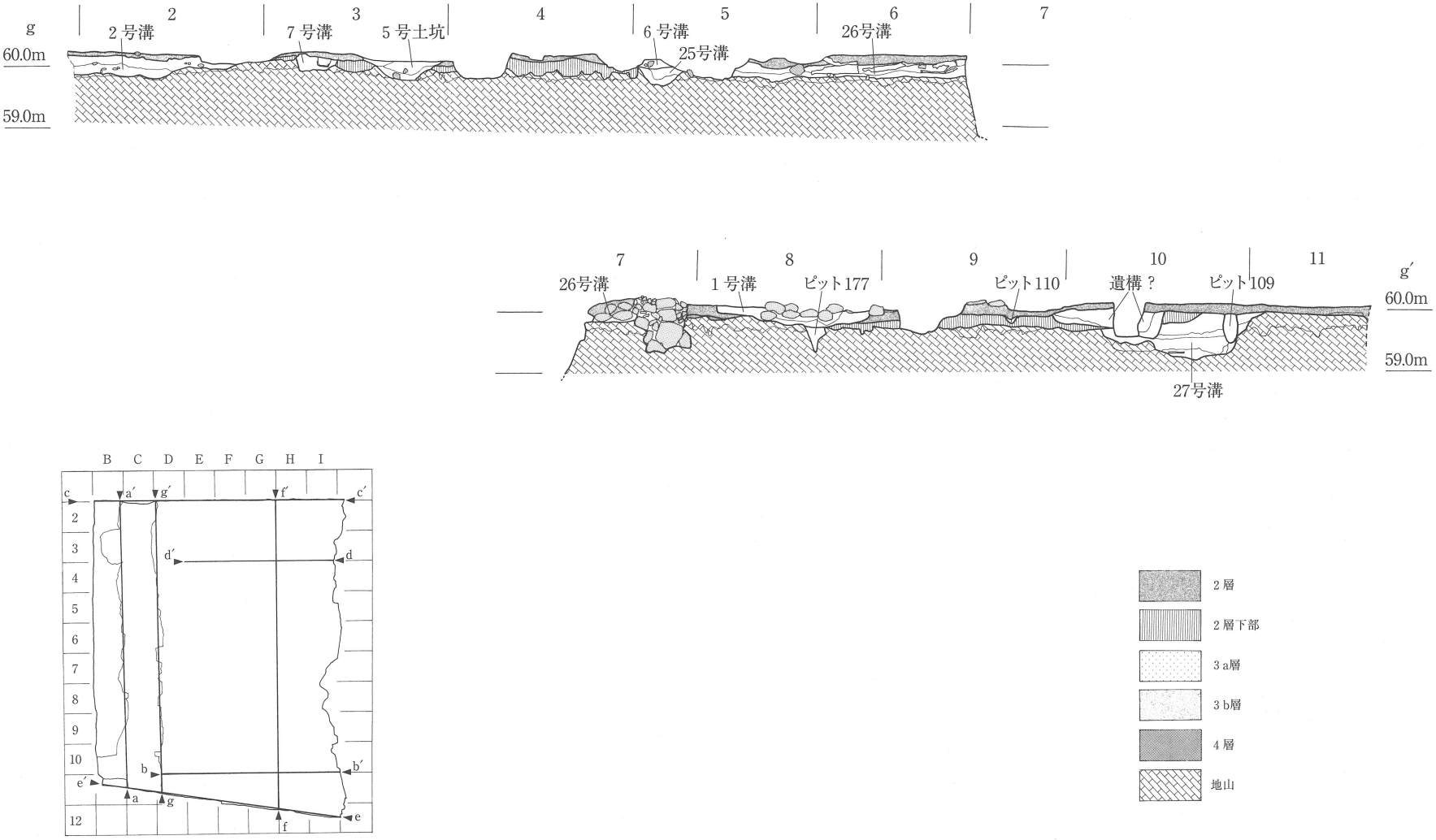


図25　武家屋敷地区第７地点基本層序断面図（4）
Fig.25　Fundamental layer sections at BK7（4）

(2) 遺構の変遷段階の設定

江戸時代より遡る遺構は、縄文時代の陥し穴と考えられる土坑が1基発見されている。これは、江戸時代以前の遺構として別に扱う。遺構の変遷段階の設定は、江戸時代以降のものの中で行った。

江戸時代の遺構は、遺構の掘り込み面を基準として時期区分を行うこととし、Ⅰ期からⅣ期に大別した。しかし、2層以下の層が、調査区の全域に存在する訳ではないので、それらの層との関係が判明しない遺構も少なくない。また、全般に遺構の検出は難しく、少しずつ掘り下げながら確認作業を繰り返した。そのため、掘り込み面が確定できていない遺構も多い。要所に土層観察用のベルトを残して調査を進めたが、ベルトにかかっていない遺構については、掘り込み面が確認できないものも少なくない。検出された時点の標高を参考にして、掘り込み面を想定した遺構も多い。

出土遺物から遺構の年代を特定することも、遺物の出土量が少ない場合、困難であった。今回の調査地点では厚い整地層は見られず、同じ場所を繰り返し利用しているため、必然的に新しい遺構に古い遺物が混入する頻度が高くなったと考えられる。しかも、18世紀前葉の享保年間に極めて大規模なゴミ穴が造られ、この時に大量の遺物が当地点に持ち込まれたと考えられる。その結果、18世紀前葉に持ち込まれた可能性の高い遺物が、それ以後の時期に下る遺構にも、多数入り込んでいる。このような状況の中では、遺物が少ない遺構の場合、出土遺物から時期を確定することは難しくなる。

以上のような状況から、所属時期を不明とせざるを得ない遺構も存在する。個々の遺構を区分した理由については、各期の記載において述べるが、全体的な時期区分は、次のような基準で行った。

Ⅰ期

基本層4層より下位から掘り込まれている遺構を、Ⅰ期とした。しかし前述のように、4層の分布範囲が極めて狭く、4層との上下関係が判明する遺構は、わずかしかない。続くⅡ期の遺構の中で、4層上面から掘り込んでいることが明らかな遺構から出土した遺物は、細かな点は明確でないところも残るが、おおむね18世紀代に下るものであった。そのため、17世紀代に遡る可能性が高い遺構については、Ⅰ期に含めることとした。

Ⅱ期

基本層序の2層下部の下位で、4層より上位から掘り込まれている遺構をⅡ期とした。当期は、遺構の重複が多い区域もあり、検出遺構の全体配置を、ひとまとめにして図示することが困難である。そのため、遺構配置図を二つに分けて図示する。しかし、両者は明確に様相の異なる段階として区分できる訳ではなく、図面を提示する上での便宜的なものである。

Ⅲ期

基本層序の2層より下位で、2層下部の上面から掘り込まれている遺構をⅢ期とした。前述のように2層と2層下部の区分が難しい部分も多く、実際の調査においては、Ⅱ期とⅢ期の遺構を区別することは、あまりできていない。調査後の整理において区分している場合がほとんどである。

Ⅳ期

2層上面の遺構をⅣ期とした。

(3) 各期の推定時期

Ⅰ期

Ⅰ期の遺構の中には、江戸時代初頭に遡る遺物がまとまって出土している遺構もあり、当期の開始が江戸時代の早い時期まで遡ることは確実である。下限については、次のⅡ期の開始時期との関係から、おおむね17世紀末ごろまでとしておきたい。

Ⅱ期

4層を掘り込んでいるⅡ期の2号遺構と24号土坑からは、享保年間の年号が記された木簡が大量に出土している。年号には幅があるが、おおむね1720年前後に廃棄されたものと考えられる。この24号土坑より切り合い関係から先行することが確実で、なおかつ4層上面から掘り込んでいる遺構が、27号溝である。この27号溝に切られる31号溝が、4層上面から掘り込まれている。したがって、Ⅱ期の開始は、2号遺構・24号土坑の1720年前後という年代よりは、更に遡ることは確実である。ただし、27号溝から出土している陶磁器類は、2号遺構出土のものと、大きくは変わらないもので構成されており、大きく遡るものとは考え難い。なお31号溝からは、年代の明らかな遺物は出土していない。このように、4層上面から掘り込んでいる遺構の中で、18世紀前葉を大きく遡る時期のものは確認できていない。また、4層から出土した遺物は少ないが、京焼系陶器が含まれており、この点からも17世紀まで大きく遡らせることは難しい。なお確実でない部分も残るが、以上の点から、Ⅱ期の開始はおおむね18世紀初頭頃と考えておきたい。

下限については、2層下部が形成された時期が問題となる。2層下部に含まれている遺物は、ほとんどが18世紀代のものであるが、18世紀の中でも幅があるようである。一方、2層下部より下位から掘り込まれている遺構からは、19世紀に下る遺物が出土しているものもある。4号溝・5号溝からは、大堀相馬産の土瓶が出土している。これらは19世紀まで下るものであるが、19世紀中葉以降に多く見られる、筒描きで文様を描いたものは含まれていない。このことから、19世紀前葉頃が、Ⅲ期の下限と考えておきたい。

Ⅲ期

Ⅲ期の開始については、Ⅱ期の下限との関係から、19世紀前葉頃と考えられる。下限については、次のⅣ期が屋敷が取り払われた後の時期であることから、明治初頭頃と考えられる。ただし、次に検討するように、明治維新後、直ちに屋敷が取り壊された訳ではなく、若干の年数は経過していた可能性が高い。

Ⅳ期

Ⅳ期は、畑として利用されていることから、この区域の武家屋敷が取り払われた後であることは確実である。川内地区の武家屋敷が、いつごろ取り払われたのかを明確に示す史料は確認できていないが、古写真や地図から、ある程度の推定は可能である。

大手門近くから大橋方向を撮影した写真が、国際日本文化研究センターに所蔵されており、『日本名城古写真集成』で紹介されている。この写真には、大橋から大手門にいたる道路の北側にあった、登米伊達家と水沢伊達家の屋敷が写っている。内部の様子は判然としないが、両家とも門は撤去されているが、門脇の建物は残っている。この写真の撮影時期は確実でないが、大橋の中程が大きく補修されているように見える。これは、明治8年（1875年）7月の水害で、大橋の中央部が流失した後である可能性が高い。この推定が正しいなら、明治8年頃までは、川内地区の屋敷は、完全には取り払われていないこととなる。今回の調査地点の状況を直接示すものではないが、明治維新後、直ちに屋敷が取り払われたのではない可能性が高いと考えてよいであろう。

明治15年（1882年）の地図（図17－13）では、市街地の建物がある部分には、簡略ながら建物を示す記号が記されているが、今回の調査区周辺には建物を示す記号はない。陸軍省用地のため省略された可能性もあるが、片平地区など市街地の陸軍省用地では記号が記されており、建物が存在しなかった可能性が高いと考えられる。

明治26年（1893年）作成の地図（図17－14）では、既に第二師団関係の建物が整備されており、Ⅳ期が明治26年までは下らないことは間違いない。本章1．で検討したように、明治20年を前後する頃に、道路の位置が動かされて整備されたと考えられる。第二師団関係の建物の整備も、この道路のつけ替えと連動して行われた可能性が考えられる。そのため、Ⅳ期は、おおむね明治20年を前後する時期までと考えて良いであろう。

以上の点から、厳密に確定することはできないが、Ⅳ期は明治初期から明治20年前後までの間に限定され、中でも明治10年代を中心とする可能性が高いと考えられる。

表８　武家屋敷地区第７地点時期別遺構一覧表
Tab.8　List of all strucutual remains divided in period

確定名称	現場名称	備　　考
縄文時代		
33号土坑	ピット204	
Ⅰ期		
５号建物	なし	個別ピット番号
12号溝	12号溝	
24号溝	24号溝	
25号溝	25号溝	
28号溝	28号溝	
29号溝	29号溝	
30号溝	30号溝	
32号溝	32号溝	
33号溝	33号溝	
９号土坑	９号土坑	13号土坑と一連？
13号土坑	13号土坑	
14号土坑	14号土坑	
25号土坑	25号土坑	
26号土坑	26号土坑	
30号土坑	30号土坑	
31号土坑	31号土坑	南壁セクションのみ
Ⅰ～Ⅱ期		
８号柱列	なし	個別ピット番号
９号柱列	なし	個別ピット番号
Ⅱ期		
７号柱列	なし	個別ピット番号
４号溝	４号溝	
５号溝	５号溝	
８号溝	８号溝	
９号溝	９号溝	
10号溝	10号溝	
13号溝	13号溝	
15号溝	15号溝	
16号溝	16号溝	
17号溝	17号溝	
21号溝	21号溝	
22号溝	22号溝	
23号溝	23号溝	16号溝と一連？
27号溝	27号溝	
31号溝	31号溝	
１号井戸	１号井戸	
３号井戸	３号井戸	
４号井戸	４号井戸	
１号遺構	１号池	
２号遺構	２号池	
池状遺構古段階	１号石敷	
３号土坑	３号土坑	
４号土坑	４号土坑	
６号土坑	６号土坑	
７号土坑	７号土坑	
８号土坑	８号土坑	
11号土坑	11号土坑	
12号土坑	12号土坑	
15号土坑	15号土坑	
16号土坑	16号土坑	
18号土坑	18号土坑	
19号土坑	19号土坑	
20号土坑	20号土坑	埋土は３ａ層と一連
21号土坑	21号土坑	
22号土坑	22号土坑	
23号土坑	23号土坑	
24号土坑	24号土坑	
27号土坑	27号土坑	
28号土坑	28号土坑	
29号土坑	29号土坑	
32号土坑	32号土坑	南壁セクションのみ

確定名称	現場名称	備考
Ⅲ期		
１号建物	１号建物	
２号建物	２号建物	
３号建物	なし	個別ピット番号
４号建物	なし	個別ピット番号
１号柱列	なし	個別ピット番号
２号柱列	なし	個別ピット番号
３号柱列	なし	個別ピット番号
４号柱列	なし	個別ピット番号
５号柱列	なし	個別ピット番号
６号柱列	なし	個別ピット番号
２号溝	２号溝	
３号溝	３号溝	
６号溝	６号溝	
７号溝	７号溝	
14号溝	14号溝	
18号溝	18号溝	
19号溝	19号溝	
26号溝	26号溝	
２号井戸	２号井戸	
２号土坑	２号土坑	
17号土坑	17号土坑	
池状遺構新段階	１号石敷	
石敷遺構	２号石敷	
桝埋設遺構	桝埋設遺構	
桶埋設遺構	桶埋設遺構	
Ⅳ期		
１号溝	１号溝	
11号溝	11号溝	
１号土坑	１号土坑	
５号土坑	５号土坑	
１号石列	１号石列	
畝状遺構	畝状遺構	

表９　武家屋敷地区第７地点遺構名称対照表（1）
Tab.9　List of the strubtual remains name which are collated (1)

Pit番号	確定名称	備考	時期	Pit番号	確定名称	備考	時期	Pit番号	確定名称	備考	時期
1	ピット１		Ⅲ	86	３号柱列　柱４		Ⅲ	171	欠番	記録無	－
2	ピット２		Ⅲ	87	ピット87		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	172	５号建物　柱４		Ⅰ
3	ピット３		Ⅳ	88	１号柱列　柱10		Ⅲ	173	ピット173		Ⅱ
4	ピット４		Ⅱ・Ⅲ	89	ピット89		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	174	欠番	記録不備	－
5	ピット５		Ⅱ	90	７号柱列　柱３		Ⅱ	175	ピット175		Ⅲ
6	ピット６		Ⅲ	91	１号柱列　柱３		Ⅲ	176	８号柱列　柱２		Ⅰ・Ⅱ
7	６号柱列　柱１		Ⅲ	92	ピット92		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	177	ピット177		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
8	３号建物　柱３		Ⅲ	93	５号建物　柱２		Ⅰ	178	ピット178		Ⅱ
9	３号建物　東辺		Ⅲ	94	５号建物　柱１		Ⅰ	179	ピット179		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
10	ピット10		Ⅲ	95	ピット95		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	180	ピット180		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
11	５号柱列　柱１		Ⅲ	96	ピット96		Ⅱ	181	１号建物　柱19		Ⅲ
12	３号建物　柱１		Ⅲ	97	ピット97		Ⅲ	182	１号柱列　柱15		Ⅲ
13	３号建物　東辺		Ⅲ	98	７号柱列　柱２		Ⅱ	183	８号柱列　柱１		Ⅰ・Ⅱ
14	３号建物　東辺		Ⅲ	99	１号柱列　柱12		Ⅲ	184	１号柱列　柱16		Ⅲ
15	３号建物　柱２		Ⅲ	100	１号柱列　柱11		Ⅲ	185	１号建物　柱２		Ⅲ
16	１号建物　柱29		Ⅲ	101	ピット101		Ⅱ・Ⅲ	186	１号建物　柱１		Ⅲ
17	ピット17		Ⅱ・Ⅲ	102	ピット102		Ⅲ	187	１号建物　柱４		Ⅲ
18	ピット18		Ⅲ	103	ピット103		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	188	１号建物　柱３		Ⅲ
19	ピット19		Ⅲ	104	ピット104		Ⅲ	189	１号建物　柱９		Ⅲ
20	ピット20		Ⅲ	105	欠番	記録不備	－	190	１号建物　柱８		Ⅲ
21	ピット21		Ⅲ	106	７号柱列　柱１		Ⅱ	191	１号建物　柱７		Ⅲ
22	ピット22		Ⅲ	107	欠番	記録無	－	192	１号建物　柱６		Ⅲ
23	１号建物　柱22		Ⅲ	108	ピット108		Ⅱ・Ⅲ	193	ピット193		Ⅱ・Ⅲ
24	１号建物　柱23		Ⅲ	109	２号柱列　柱１		Ⅲ	194	２号建物　柱１		Ⅲ
25	１号建物　柱24		Ⅲ	110	２号柱列　柱４		Ⅲ	195	１号建物　柱15		Ⅲ
26	１号建物　柱25		Ⅲ	111	ピット111		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	196	２号建物　柱４		Ⅲ
27	１号建物　柱26		Ⅲ	112	２号柱列　柱２		Ⅲ	197	ピット197		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
28	４号建物　柱２		Ⅲ	113	２号柱列　柱３		Ⅲ	198	ピット198		Ⅲ
29	４号建物　柱３		Ⅲ	114	ピット114		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	199	ピット199		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
30	ピット30	４号溝側石据方？	Ⅱ	115	２号柱列　柱５		Ⅲ	200	ピット200		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
31	ピット31	４号溝側石据方？	Ⅱ	116	ピット116		Ⅲ	201	欠番	記録無	－
32	５号柱列　柱３		Ⅲ	117	ピット117		Ⅱ・Ⅲ	202	２号建物　柱７		Ⅲ
33	４号建物　柱４		Ⅲ	118	ピット118		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	203	２号建物　柱６		Ⅲ
34	１号建物　柱16		Ⅲ	119	ピット119		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	204	33号土坑		縄文
35	４号建物　柱６		Ⅲ	120	１号建物　柱11		Ⅲ	205	ピット205		Ⅲ
36	３号建物　東辺		Ⅲ	121	ピット121		Ⅱ・Ⅲ	206	ピット206		Ⅱ・Ⅲ
37	３号建物　東辺		Ⅲ	122	ピット122		Ⅱ・Ⅲ	207	ピット207		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
38	３号建物　東辺		Ⅲ	123	６号柱列　柱２		Ⅲ	208	ピット208		Ⅱ・Ⅲ
39	ピット39	４号溝側石据方？	Ⅱ	124	ピット124		Ⅲ	209	ピット209		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
40	２号建物　柱12		Ⅲ	125	４号建物　柱７		Ⅲ	210	ピット210		Ⅱ・Ⅲ
41	４号柱列　柱５		Ⅲ	126	３号柱列　柱５		Ⅲ	211	１号建物　柱33		Ⅲ
42	ピット42		Ⅲ	127	ピット127		Ⅰ・Ⅱ	212	ピット212		Ⅰ
43	ピット43		Ⅱ	128	ピット128		Ⅰ・Ⅱ	213	９号柱列　柱２		Ⅰ・Ⅱ
44	ピット44		Ⅲ	129	１号柱列　柱９		Ⅲ	214	ピット214		Ⅲ
45	ピット45		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	130	１号柱列　柱８		Ⅲ	215	ピット215		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
46	ピット46		Ⅲ	131	１号柱列　柱７		Ⅲ	216	欠番	記録不備	－
47	４号柱列　柱１		Ⅲ	132	ピット132		Ⅱ・Ⅲ	217	ピット217		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
48	４号柱列　柱３		Ⅲ	133	ピット133		Ⅱ・Ⅲ	218	８号柱列　柱３		Ⅰ・Ⅱ
49	ピット49		Ⅱ	134	ピット134		Ⅱ・Ⅲ	219	欠番	記録不備	－
50	ピット50		Ⅲ	135	欠番	記録不備	－	220	ピット220		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
51	６号柱列　柱３		Ⅲ	136	ピット136		Ⅲ	221	９号柱列　柱３		Ⅰ・Ⅱ
52	ピット52		Ⅲ	137	ピット137		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	222	欠番	１号建物柱33の残り	－
53	ピット53		Ⅲ	138	ピット138		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	223	ピット223		Ⅰ・Ⅱ
54	３号柱列　柱３		Ⅲ	139	ピット139		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	224	１号柱列　柱１		Ⅲ
55	ピット55		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	140	欠番	記録無	－	225	ピット225		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
56	ピット56		Ⅱ	141	９号柱列　柱１		Ⅰ・Ⅱ	226	ピット226		Ⅱ・Ⅲ
57	１号建物　柱21		Ⅲ	142	ピット142		Ⅲ	227	ピット227		Ⅱ・Ⅲ
58	１号建物　柱14		Ⅲ	143	ピット143		Ⅰ・Ⅱ	228	ピット228		Ⅱ
59	ピット59		Ⅱ	144	ピット144		Ⅱ・Ⅲ	229	ピット229		Ⅰ・Ⅱ
60	ピット60		Ⅲ	145	ピット145		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	230	ピット230		Ⅰ・Ⅱ
61	ピット61		Ⅲ	146	ピット146		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	231	ピット231		Ⅱ
62	ピット62		Ⅲ	147	１号建物　柱13		Ⅲ	232	ピット232		Ⅲ
63	１号柱列柱4･13	柱４と控え柱	Ⅲ	148	１号建物　柱18		Ⅲ	233	ピット233		Ⅰ・Ⅱ
64	１号柱列　柱５		Ⅲ	149	１号建物　柱27		Ⅲ	234	ピット234	南壁セクションのみ	Ⅰ・Ⅱ
65	５号柱列　柱２		Ⅲ	150	１号建物　柱30		Ⅲ	なし	ピット235	番号混乱	Ⅱ・Ⅲ
66	ピット66		Ⅱ・Ⅲ	151	３号柱列　柱２		Ⅲ	なし	ピット236	番号記載無し	Ⅱ
67	ピット67		Ⅲ	152	１号柱列　柱14	柱８の控え柱	Ⅲ	なし	ピット237	番号記載無し	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
68	ピット68		Ⅰ・Ⅱ	153	ピット153		Ⅲ	なし	１号建物　柱５		Ⅲ
69	１号柱列　柱６		Ⅲ	154	ピット154		Ⅲ	なし	１号建物　柱10		Ⅲ
70	４号柱列　柱４		Ⅲ	155	１号建物　柱17		Ⅲ	なし	１号建物　柱12		Ⅲ
71	ピット71		Ⅲ	156	ピット156		Ⅱ・Ⅲ	なし	１号建物　柱20		Ⅲ
72	ピット72		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	157	ピット157		Ⅱ・Ⅲ	なし	１号建物　柱28		Ⅲ
73	４号建物　柱５		Ⅲ	158	ピット158		Ⅱ	なし	１号建物　柱31		Ⅲ
74	ピット74		Ⅱ・Ⅲ	159	ピット159		Ⅱ	なし	１号建物　柱32		Ⅲ
75	１号柱列　柱２		Ⅲ	160	ピット160		Ⅲ	なし	２号建物　柱２	石のみ記録	Ⅲ
76	ピット76	４号溝側石据方？	Ⅱ	161	ピット161		Ⅲ	なし	２号建物　柱３	石のみ記録	Ⅲ
77	ピット77		Ⅳ	162	ピット162		Ⅲ	なし	２号建物　柱５	石のみ記録	Ⅲ
78	ピット78		Ⅱ・Ⅲ	163	欠番	記録無	－	なし	２号建物　柱８	石のみ記録	Ⅲ
79	ピット79		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	164	ピット164		Ⅱ	なし	２号建物　柱９	石のみ記録	Ⅲ
80	４号建物　柱１		Ⅲ	165	ピット165		Ⅱ	なし	２号建物　柱10	石のみ記録	Ⅲ
81	欠番	記録不備	－	166	ピット166		Ⅱ	なし	２号建物　柱11	石のみ記録	Ⅲ
82	３号柱列　柱１		Ⅲ	167	ピット167		Ⅱ	なし	２号建物　柱13	石のみ記録	Ⅲ
83	ピット83		Ⅲ	168	ピット168		Ⅲ				
84	４号柱列　柱２		Ⅲ	169	５号建物　柱３		Ⅰ				
85	ピット85		Ⅳ	170	ピット170		Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ				

表10　武家屋敷地区第７地点遺構名称対照表（2）
Tab.10　List of the strubtual remains name which are collated (2)

現場名称	確定名称	備考	時期
1号建物	1号建物		Ⅲ
2号建物	2号建物		Ⅲ
なし	3号建物	個別ピット番号	Ⅲ
なし	4号建物	個別ピット番号	Ⅲ
なし	5号建物	個別ピット番号	Ⅰ
なし	1号柱列	個別ピット番号	Ⅲ
なし	2号柱列	個別ピット番号	Ⅲ
なし	3号柱列	個別ピット番号	Ⅲ
なし	4号柱列	個別ピット番号	Ⅲ
なし	5号柱列	個別ピット番号	Ⅲ
なし	6号柱列	個別ピット番号	Ⅲ
なし	7号柱列	個別ピット番号	Ⅱ
なし	8号柱列	個別ピット番号	Ⅰ・Ⅱ
なし	9号柱列	個別ピット番号	Ⅰ・Ⅱ
1号溝	1号溝		Ⅳ
2号溝	2号溝		Ⅲ
3号溝	3号溝		Ⅲ
4号溝	4号溝		Ⅱ
5号溝	5号溝		Ⅱ
6号溝	6号溝		Ⅲ
7号溝	7号溝		Ⅲ
8号溝	8号溝		Ⅱ
9号溝	9号溝		Ⅱ
10号溝	10号溝		Ⅱ
11号溝	11号溝		Ⅳ
12号溝	12号溝		Ⅰ
13号溝	13号溝		Ⅱ
14号溝	14号溝		Ⅲ
15号溝	15号溝		Ⅱ
16号溝	16号溝		Ⅱ
17号溝	17号溝		Ⅱ
18号溝	18号溝		Ⅲ
19号溝	19号溝		Ⅲ
20号溝	欠番	22号溝と混同	－
21号溝	21号溝		Ⅱ
22号溝	22号溝		Ⅱ
23号溝	23号溝	16号溝と一連？	Ⅱ
24号溝	24号溝		Ⅰ
25号溝	25号溝		Ⅰ
26号溝	26号溝	18号溝と一連？	Ⅲ
27号溝	27号溝		Ⅱ
28号溝	28号溝		Ⅰ
29号溝	29号溝		Ⅰ
30号溝	30号溝		Ⅰ
31号溝	31号溝		Ⅱ
32号溝	32号溝		Ⅰ
33号溝	33号溝		Ⅰ

現場名称	確定名称	備考	時期
1号土坑	1号土坑		Ⅳ
2号土坑	2号土坑		Ⅲ
3号土坑	3号土坑		Ⅱ
4号土坑	4号土坑		Ⅱ
5号土坑	5号土坑		Ⅳ
6号土坑	6号土坑		Ⅱ
7号土坑	7号土坑		Ⅱ
8号土坑	8号土坑		Ⅱ
9号土坑	9号土坑	13号土坑と一連？	Ⅰ
10号土坑	欠番		－
11号土坑	11号土坑		Ⅱ
12号土坑	12号土坑		Ⅱ
13号土坑	13号土坑		Ⅰ
14号土坑	14号土坑		Ⅰ
15号土坑	15号土坑		Ⅱ
16号土坑	16号土坑		Ⅱ
17号土坑	17号土坑		Ⅲ
18号土坑	18号土坑		Ⅱ
19号土坑	19号土坑		Ⅱ
20号土坑	20号土坑	埋土は3a層と一連	Ⅱ
21号土坑	21号土坑		Ⅱ
22号土坑	22号土坑		Ⅱ
23号土坑	23号土坑		Ⅱ
24号土坑	24号土坑		Ⅱ
25号土坑	25号土坑		Ⅰ
26号土坑	26号土坑		Ⅰ
27号土坑	27号土坑		Ⅱ
28号土坑	28号土坑		Ⅱ
29号土坑	29号土坑		Ⅱ
30号土坑	30号土坑		Ⅰ
31号土坑	31号土坑	南壁セクションのみ	Ⅰ
32号土坑	32号土坑	南壁セクションのみ	Ⅱ
ピット204	33号土坑		縄文
1号井戸	1号井戸		Ⅱ
2号井戸	2号井戸		Ⅲ
3号井戸	3号井戸		Ⅱ
4号井戸	4号井戸		Ⅱ
1号池	1号遺構		Ⅱ
2号池	2号遺構		Ⅱ
1号石敷	池状遺構	新古2段階に区分	Ⅱ・Ⅲ
2号石敷	石敷遺構		Ⅲ
桝埋設遺構	桝埋設遺構		Ⅲ
桶埋設遺構	桶埋設遺構		Ⅲ
1号石列	1号石列		Ⅳ
畝状遺構	畝状遺構		Ⅳ

4．検出遺構

前述した各期ごとに、検出遺構を以下に報告していく。

各期の最初に遺構配置図を示した。Ⅰ期とⅣ期については、遺構配置図は1枚にまとめたが、Ⅱ期とⅢ期については、遺構配置図を2つに分けて作成している。このⅡ期とⅢ期は、時期的に新旧2段階に区分できる訳ではない。1枚で図示しようとすると、切り合いが多いことなどから、煩雑で判り難い図面となることから、2枚に分離したものである。その際、比較的古い遺構と新しい遺構に分けて図示したが、それぞれが新旧の段階差を示すものではない。あくまでも、判りやすく図示するための、便宜的な措置である。本来は、2枚の遺構配置図を合わせたのが、Ⅱ期・Ⅲ期の遺構配置図となるものと考えていただきたい。

検出遺構の個々の報告にあたっては、重なり合う遺構を分離して、別々に図面を提示すると、膨大な紙幅が必要となる。そのため、区域ごとにまとめて平面図を提示する。平面図は、おおむね調査区北東部→北西部→南東部→南西部の順に提示した。ただし、当該期の遺構の多寡によって、まとめて提示している場合もある。断面図は、直前の平面図と対応する形で、平面図に続けて掲載している。

各時期の状況が把握しやすいように、前節の説明と重複する部分もあるが、全体的な配置状況を各時期の最初に記述する。その後に、個々の遺構について記載する。遺構の記述は、、遺構の種類ごとにまとめ、遺構番号順とした。平面図の掲載順序とはずれるが、平面図に合わせて配列しようとすると、逆に煩雑になると思われることから、遺構の種類ごとにまとめて記載することとした。1号遺構・2号遺構・池状遺構などの大規模な遺構を最初にし、次いで建物跡・柱列・溝・井戸・土坑・その他の遺構の順序を基本とした。写真図版も、記載順序と同様に配置したが、配列の便宜によって、一部変更した部分もある。

川内地区の調査においては、整地層や古い遺構の埋土に、新たな遺構が造られていた場合、遺構確認が難しい部分も多い。そのため、必ずしも全ての遺構を認識できているか、不確実な場合もある。建物や柱列などで、当然柱穴が想定されるにもかかわらず検出されていない場合には、本来存在しないのか、検出できていないのか、両方の可能性がある。個々の遺構の報告において逐一記載しないが、常に両方の可能性が想定される。

先述したとおり、今回の調査では、遺構の掘り込み面を基準として時期区分した。しかし、それらの基準となる地層が調査区の全域に存在する訳ではなく、それらの地層との関係が判明しない遺構も多い。遺構の検出が難しく、基本層序との関係が充分確認できなかった場合も多い。特に、2層下部の上面か、それとも2層下部の下面からの掘り込みであるか、判別が難しい事例が多数存在した。そのため、所属時期が不確実であったり、不明とせざるを得ない遺構も存在する。主要な遺構については各期に区分したが、その根拠や、他の時期に動く可能性が残る場合などは、個別の遺構の項目で記載した。個別のピットなどでは、所属時期が確定できず、複数時期にまたがる可能性が残る場合が多数ある。それらについては、可能性のある全ての時期の平面図に記載した。

掘立柱の建物・柱列については、柱材が残存している場合には、柱の形状は判明し易い。今回の調査においては、柱痕跡を検出することは全般に難しく、柱材が遺存してない場合には、柱形状はほとんど判明していない。柱形状を判別できなかった場合には、特に形状を記載していない。柱の大きさについては、丸柱では径、角柱では一辺の長さとなるが、形状がはっきりしないものも含めて、全て太さとして記載した。

遺構の方向は、真北からの方向を、0.5度きざみで記載した。その際、比較が行いやすいように、東西方向に延びる遺構である場合にも、直交する方向に直し、北からの傾きとして示している場合もある。

出土遺物の詳細は第2～4分冊で報告するので、遺構の報告においては、詳細に述べることはしない。まとまって出土している場合や、時期決定に関係するような遺物、その他特徴的なことを中心に記載する。

（1）江戸時代以前の遺構（図26、図版12）

今回の調査地点では、江戸時代以降の遺構が圧倒的多数を占める。それより古い時期の遺構は、縄文時代の陥し穴と考えられる33号土坑が、１基発見されただけである。出土遺物も、江戸時代以降のものが圧倒的多数を占め、それより古いものは、縄文土器２点、須恵器１点、古代の瓦１点、石器２点が出土しているだけである。これらの遺物は、江戸時代以降の地層・遺構から出土しており、本来の位置を保ったものではない。

二の丸北方武家屋敷地区では、いくつかの地点で、江戸時代以前の遺物が出土している。第４地点では、江戸時代以前に遡る自然の沢状の落ち込みが検出され、その埋土最上部から、縄文時代中期前葉、弥生時代前期後半から中期中頃にかけての、縄文土器・弥生土器と石器が出土している（年報13）。縄文土器・弥生土器104点、石器374点と、ややまとまった数が出土しているが、沢状の落ち込みの埋土最上部から、散漫な分布状態で出土しており、周囲からの流れ込んだものである可能性が高い。同地点では、古代の瓦３点や須恵器１点も出土している。また、武家屋敷地区第８地点（2002年度調査）では、石器が２点出土している。武家屋敷地区第９地点（2003年度調査）では、縄文土器１点と古代の土師器１点が出土している。

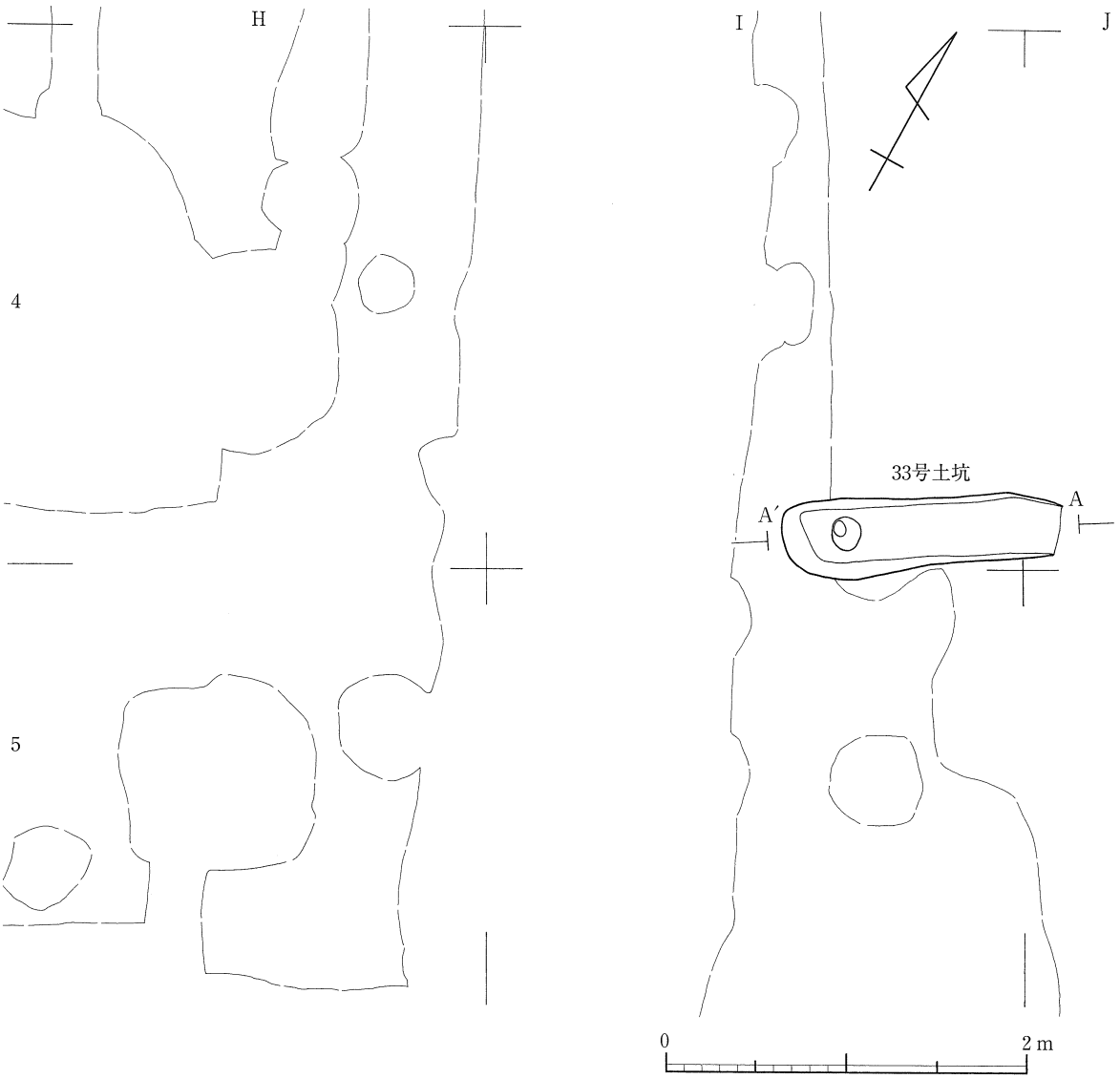
千貫沢を渡った二の丸地区でも、江戸時代以前の遺構や遺物が発見されている。第４地点では石器５点、縄文土器１点が出土している（年報５）。第６地点では、断面の観察だけなので詳細は不明ながら、底面が焼けた横穴状の遺構が発見され、窯跡の可能性も指摘されている。ここからは、ロクロ成形の土師器甕が１点出土しており、平安時代のものと考えられる（年報３）。

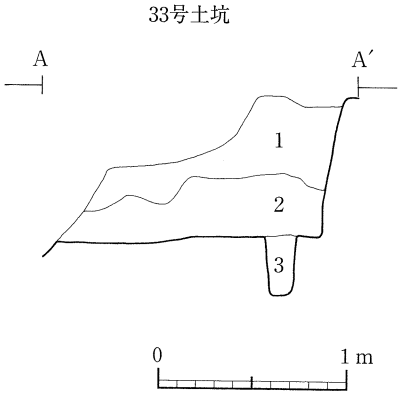
このように、川内地区では、千貫沢をはさんだ南北両側において、縄文時代や弥生時代、あるいは古代の遺構や遺物が、散発的ではあるが発見されてきた。今回検出された陥し穴と考えられる土坑は、遺物が伴っていないことから時期を確定することはできないが、形態的特徴から縄文時代の陥し穴の可能性が高いと考えた。縄文時代の陥し穴と断定することはできないが、本地点では縄文土器や石器が出土していることから、本地点やその周辺に、縄文時代の何らかの活動領域が存在したことは間違いないものと推測される。

【33号土坑】（図26、図版12）

Ｉ・Ｊ－４・５区の地山面で検出された。東側は撹乱によって破壊されている。残存部分の形態から、本来は東西に長い長方形状の平面形と推定される。長軸方向はＮ－58°－Ｅである。東西の残存部分の長さは160cm。幅は上幅で48cm、底面の幅は28cm程度である。深さは、76cmを測る。壁の傾斜は少なく、垂直に近い急傾斜で掘られている。底面の西側には、直径18cm、深さ32cmの円形の小ピットが１基認められる。埋土の上半部には、ブロック状の土を多く含み、埋め戻されている可能性がある。この点は、陥し穴とするには、やや疑問が残る部分である。遺物は出土しておらず、遺物から時期を特定することはできない。

東側が残存していないため、平面形状には明確ではないところが残るが、細長い形態になるものと思われる。このような平面形態や、深く急傾斜に掘られている点、底面に小ピットが存在するなどの特徴から、細長い形状の陥し穴である可能性が高いものと考え、縄文時代に所属する可能性が高いと考えた。





1　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　黄褐色粘土ブロックをまだらに多く含む。　φ5mm程度の炭化物をわずかに含む。小礫をわずかに含む。
2　10YR4/4褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　灰黄褐色の粘土ブロックをわずかに含む。
3　10YR5/4にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　φ10mm程度の炭化物をわずかに含む。地山起源と思われる黄褐色粘土ブロックを多く含む。

図26　武家屋敷地区第７地点江戸時代以前の遺構
Fig.26　Features belonging to before Edo period

(2) 江戸時代以降の遺構

①Ⅰ期の遺構（図27～32、図版13～17）

Ⅰ期は、基本層４層より下位から掘り込まれている遺構であるが、４層の分布範囲が調査区東南部の極めて狭い範囲に限られているため、４層との上下関係が判明する遺構はわずかしかない。以下のⅠ期の遺構の記載で、４層との関係を特に記していないものは、４層が分布しないため関係が判らない場合である。続くⅡ期の開始時期との関係から、Ⅰ期はおおむね17世紀末までと考えられる。そのため、出土遺物から17世紀代に遡る可能性が高い遺構については、Ⅰ期に含めている。

Ⅰ期の遺構は、溝が展開する以外、全体に遺構密度は低いと言える。

調査区東よりのＨ・Ⅰ列には、規模の大きな12号溝が南北方向に延びている。12号溝は、17世紀でも中葉以降の可能性が高い。この12号溝と直交する小規模な溝が、12号溝の西側に展開し、同時に存在した可能性も考えられる。これらは、屋敷地を区画する施設の可能性が考えられるであろう。26号土坑も、これらの溝と一連の施設となる可能性がある。これら以外の遺構はあまり多くない。

Ｄ・Ｅ－３～５区の14号土坑は、出土遺物から17世紀初頭に遡るもので、今回の検出された江戸時代の遺構では、最も古いものである。17世紀でも古い段階に確実に遡る遺構は、今回の調査では、この14号土坑だけである。調査区西端のＢ－７・８区で検出された９号土坑・13号土坑は、一連の遺構となる可能性があり、出土遺物から17世紀後半代と考えられる。調査区南端のＧ・Ｈ－12区には30号土坑がある。４層下面から掘り込んでおりⅠ期に所属することは確実であるが、遺物が出土していないため、細かな時期は判らない。このように、Ⅰ期には規模の大きな土坑が存在することが特徴の一つと言えるが、それらの細かな時期は一致せず、特に集中して造られている区域がある訳ではない。

Ｅ・Ｆ－８・９区には、５号建物と25号土坑が存在する。これらは、切り合い関係などからⅠ期の可能性が高いと考えたが、更に新しい時期に下る可能性も残っている。

Ｄ・Ｅ－７～９区で検出された８号柱列と９号柱列は、切り合い関係からⅢ期より遡る可能性が高いが、Ⅰ期かⅡ期の両方の可能性が考えられる。どちらに所属させるべきか判断に困ったため、Ⅰ期とⅡ期の両方の平面図に記載している。断面図はⅠ期の中に含めて示した。遺構の報告は、Ⅰ期の最後に記載することとした。写真図版も、Ⅰ期の最後に示した。

【５号建物】（図31・32、図版13）

Ｅ・Ｆ－９区で検出した、掘立柱建物である。後世の削平が激しい場所にあり、掘り込み面は判明しない。後述する25号土坑の傾きと、方向が類似する。このような方向の遺構は、今回の調査区では５号建物と25号土坑以外には見られないことから、両者は関連する遺構である可能性が高いと考えられる。25号土坑は、多数のピットが重なりあうこの区域の中でも、最も古い遺構であり、検出レベルも低い事から、Ⅰ期に遡る可能性が考えられた。この25号土坑との関係で、５号建物もⅠ期に含めた。ただし、推定を重ねたものであり、Ⅱ期以降に下る可能性も残っている。

北辺と東辺が検出されただけである。北辺では、６尺３寸を１間とした場合の半間の間隔で、柱穴が３基検出された（柱２・３・４）。柱４の西側には、25号土坑が存在するが、寸法はそろわず、直接つながるものか否か判らない。東辺は、半間の間隔で柱が１基（柱１）南側に延びる。これより南側は撹乱が激しく、続きは判らない。仙台城の二の丸地区や二の丸北方武家屋敷地区におけるこれまでの調査では、江戸時代の中で柱間寸法が、６尺５寸から６尺３寸へ変化することが確認されている。６尺５寸は、元和６年（1620）の西屋敷造営まで使われていたことが確実である（年報９）。６尺３寸は、17世紀末の元禄年間より前から使われたことが判っているが、どこまで遡るかは確定できていない（年報18）。また、寛永４年（1627）に造営が開始された、伊達政宗の隠居城である仙台市若林区の若林城では、６尺５寸が使用されていたと考えられる（仙台市教育委員会2005）。

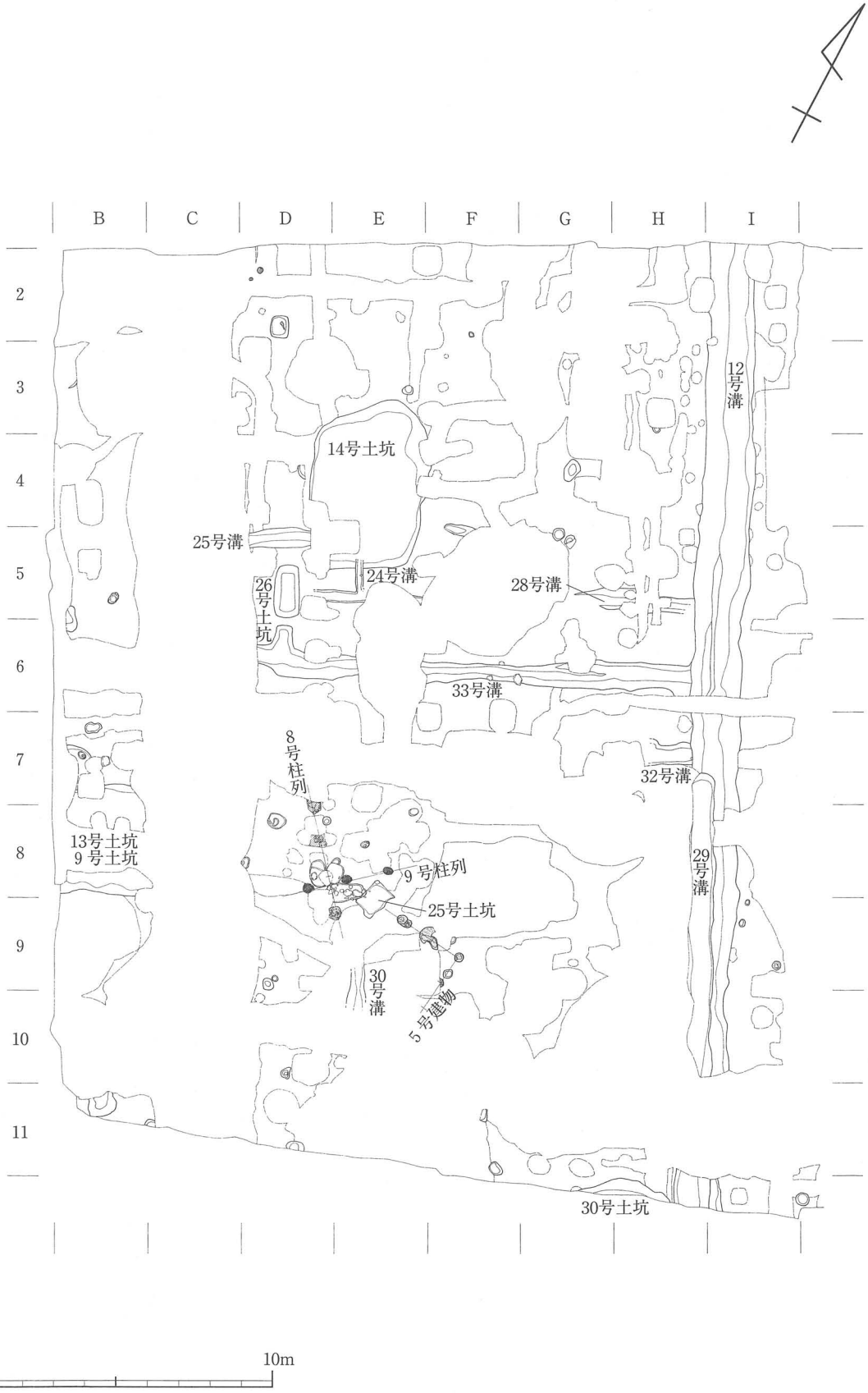


図27　武家屋敷地区第７地点Ⅰ期遺構配置図
Fig.27　Distribution of features belonging to phase Ⅰ at BK7

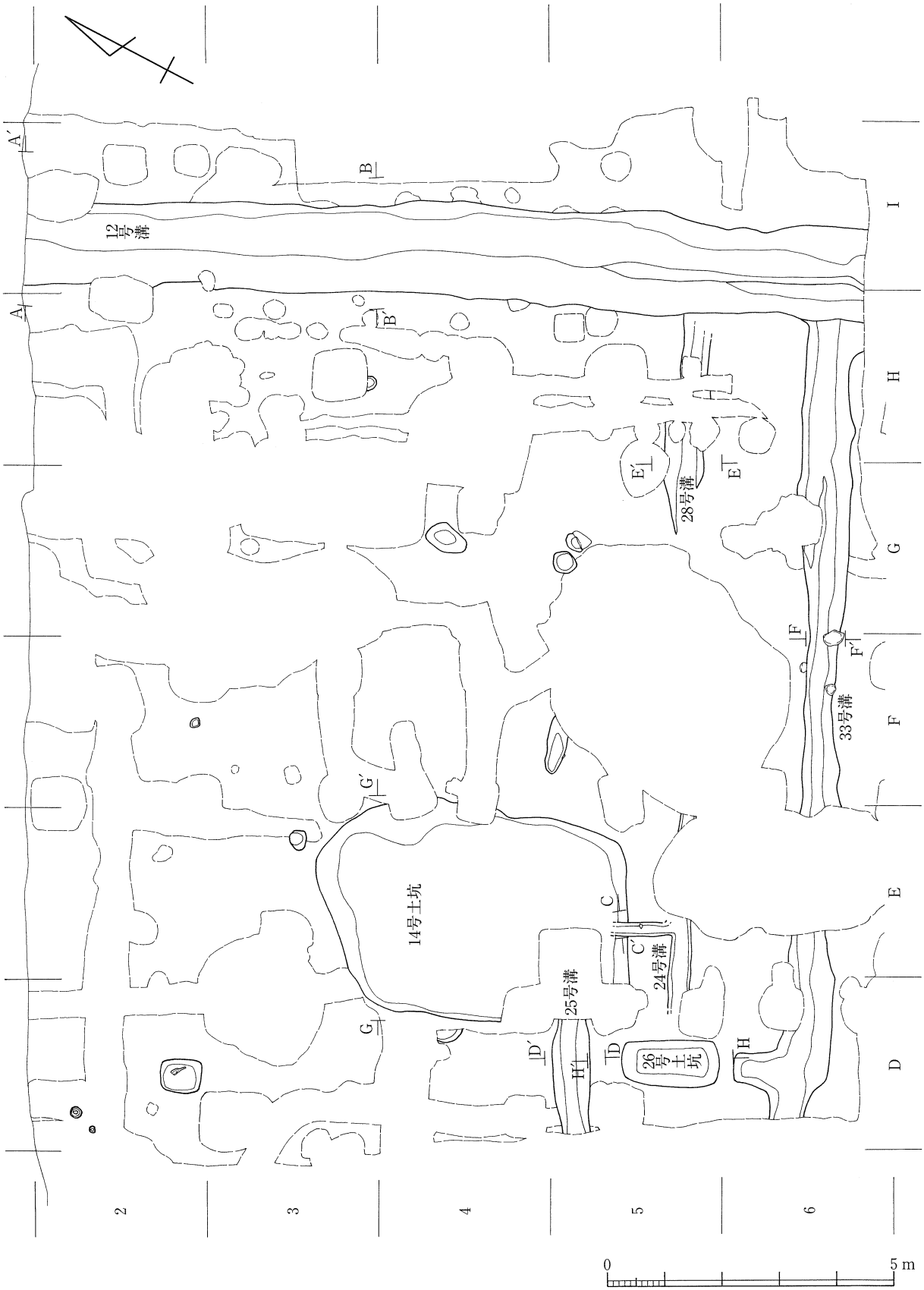
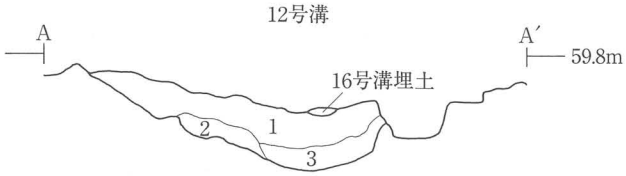
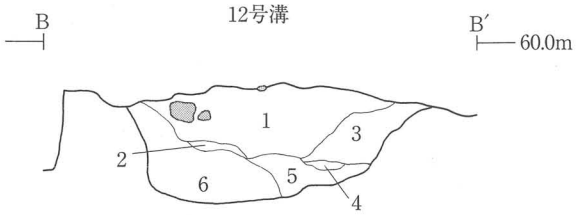


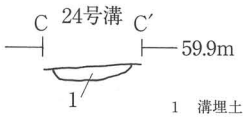
図28　武家屋敷地区第７地点Ⅰ期の遺構（1）
Fig.28　Features belonging to phase Ⅰ at BK7（1）



1　10YR3/3暗褐色　粘土質シルト　粘性中・しまりやや強　黄褐色土ブロックをわずかに含む　酸化鉄を含む
2　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　酸化鉄を含む　地山起源の黄褐色粘土をブロック状に含む
3　10YR4/1褐灰色　砂質シルト　粘性中・しまり中　酸化鉄・砂・地山起源の粘土をわずかに含む

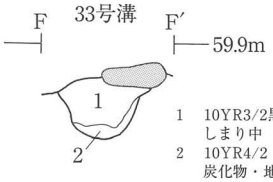


1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　黄褐色土小ブロックをわずかに含む　炭化物を含む　酸化鉄・白色粒子を非常に多く含む
2　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　黄褐色土ブロックを含む　炭化物・酸化鉄をわずかに含む
3　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　黄褐色シルト質砂を含む　黄褐色土小ブロックをわずかに含む　酸化鉄・白色粒子を非常に多く含む
4　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　黄褐色土ブロックを多く含む　炭化物をごくわずかに含む
5　10YR5/4にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性中・しまりやや強　黄褐色土ブロックを含む　炭化物・白色粒子・酸化鉄をわずかに含む
6　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　黄褐色土小ブロックを含む　炭化物を少量含む　酸化鉄・白色粒子を多く含む

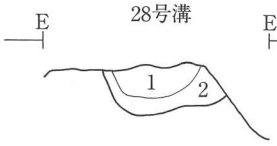


1　溝埋土

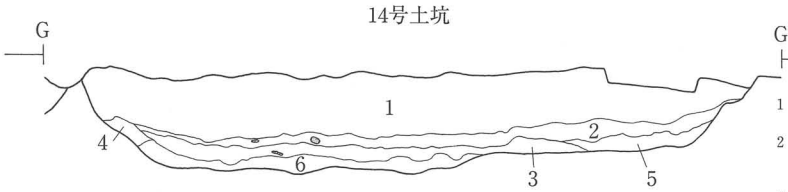
1　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物をわずかに含む
2　10YR3/1黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　砂・黄橙色土小ブロックをわずかに含む



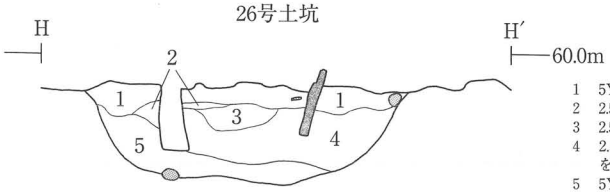
1　10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強　しまり中　炭化物・白色粒子をわずかに含む
2　10YR4/2　灰黄褐色　粘土　粘性強　しまり　炭化物・地山起源の黄色粘土を含む



1　10YR4/4褐色　シルト　粘性弱・しまり中　灰黄褐色土ブロックをわずかに含む
2　10YR4/3にぶい黄褐色　粘性弱・しまり中　灰黄褐色土ブロック・炭化物をわずかに含む

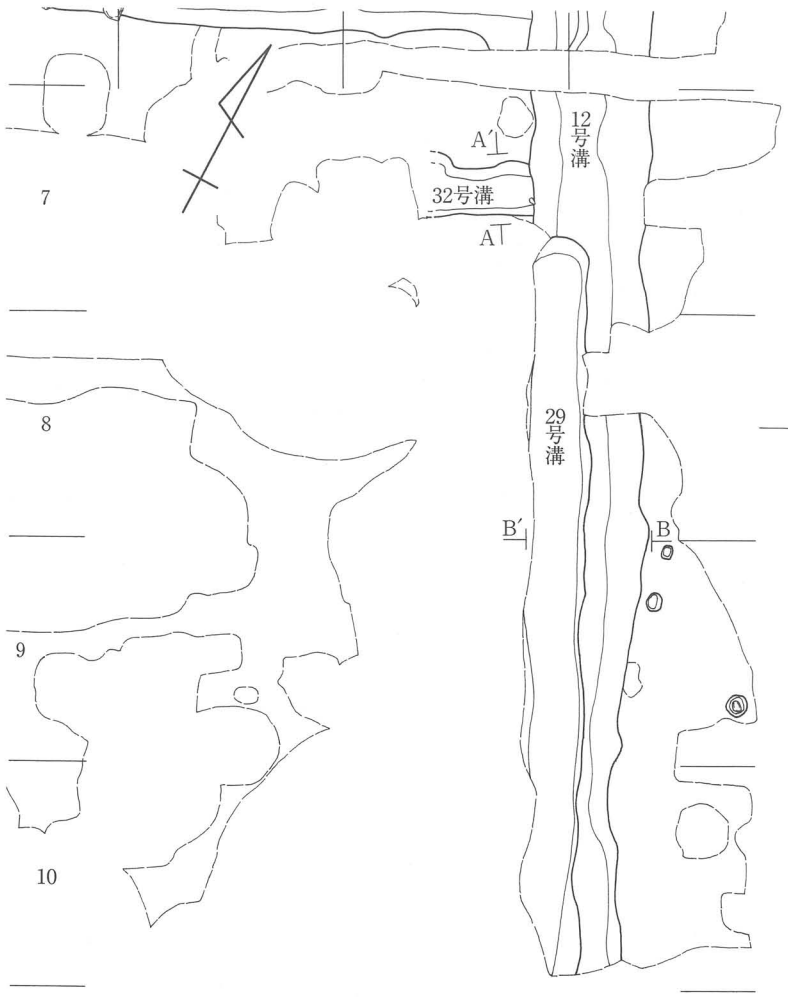


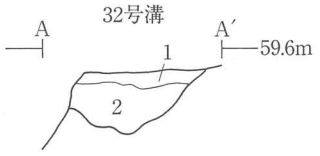
1　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性やや強・しまり中　炭化物を比較的多く・小礫をわずかに含む　黄褐色土粒を含む
2　10YR2/2黒褐色　シルト　粘性強・しまり中　中央に炭化物を多く含む　黄褐色土粒・小礫をわずかに含む　下部に木羽が堆積する
3　10YR4/1褐灰色　粘土質シルト　粘性強しまり中　下部に黄褐色土粒を含む　木片を含む　炭化物をわずかに含む
4　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性やや強・しまり中　黄褐色土粒を多く含む
5　10YR5/1褐灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　黄褐色土粒を含む
6　10YR5/2灰黄褐色　粘土　粘性強・しまり中　地山起源の黄褐色粘土を多く含む



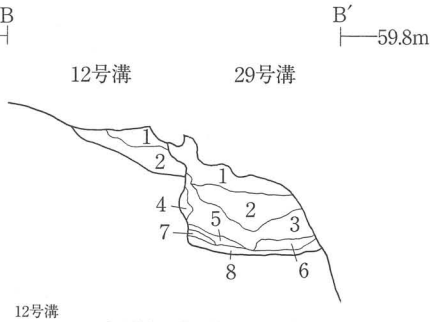
1　5Y3/1オリーブ黒色　シルト　粘性弱・しまり中　炭化物を含む
2　2.5Y6/4にぶい黄色　砂　粘性なし・しまり弱　オリーブ色土を含む
3　2.5Y2/1黒色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　炭化物をわずかに含む
4　2.5Y3/1黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　黄褐色砂と互層を成す　炭化物をわずかに含む
5　5Y3/1オリーブ黒色　粘土　粘性強・しまり中炭化物をわずかに含む

図29　武家屋敷地区第7地点Ⅰ期の遺構（2）
Fig.29　Features belonging to phase Ⅰ at BK7



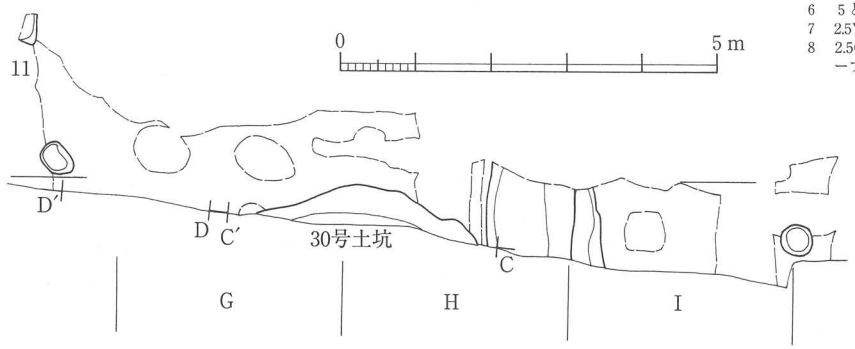


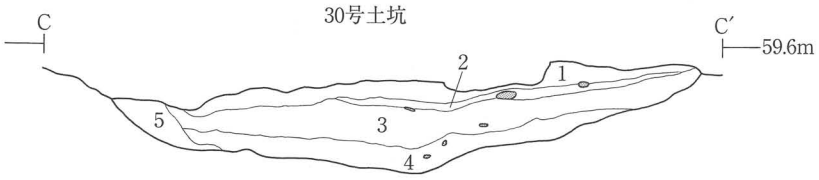
1　10YR5/3にぶい黄褐色　シルト　粘性なし・しまり強　黄褐色土粒を少量・白色土粒を比較的多く含む　炭化物をわずかに含む
2　10YR4/2灰黄褐色　シルト質粘土　粘性強・しまり強　黄褐色土粒を多く含む　酸化鉄を含む



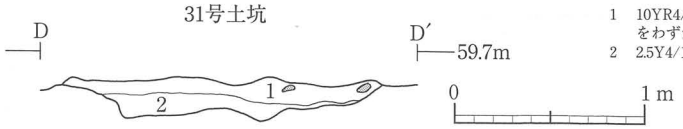
12号溝
1　2.5Y4/2暗灰黄色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　黒褐色粘土・黄褐色土を含む　白色粒子をわずかに含む
2　10YR5/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり強　明褐色土を含む　白色粒子を多く・炭化物をわずかに含む

29号溝
1　5Y3/1オリーブ黒色　粘土　粘性強・しまり中　黒褐色粘土・白色粒子を含む　炭化物をわずかに含む
2　5BG2/1青黒色　粘土　粘性強・しまり中　オリーブ黒色粘土小ブロックをまだらに含む
3　5Y3/1オリーブ黒色　粘土　粘性強・しまり中　黒褐色土・青黒色粘土を含む
4　2.5GY5/1オリーブ灰色　粘土　粘性強・しまり中　黄灰色粘土・黄褐色土を含む
5　2.5Y3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　黒褐色粘土を含む
6　5と同様
7　2.5Y3/2黒褐色　砂質シルト　粘性中・しまり中
8　2.5GY5/1オリーブ灰色　粘土　粘性強・しまり中　オリーブ黒色粘土を含む





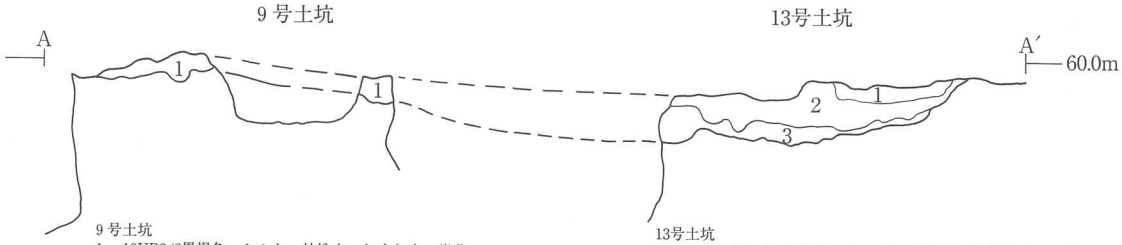
1　7.5Y3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり弱　小礫をわずかに含む　均質な堆積層
2　10YR3/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり弱　炭化物少量
3　10YR3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり弱　小礫・黄色粘土小ブロックをわずかに含む
4　2.5Y3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり弱　砂をラミナ状に含む　浅黄色粘土小ブロックをわずかに含む
5　10YR4/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり弱　浅黄色粘土ブロック・炭化物をわずかに含む



1　10YR4/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　拳大の礫・黄褐色粘土ブロックをわずかに含む
2　2.5Y4/1黄灰色　粘土　粘性強・しまり中　黄褐色粘土ブロックを含む

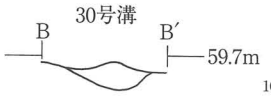
図30　武家屋敷地区第７地点Ⅰ期の遺構（3）
Fig.30　Features belonging to phase Ⅰ at BK7（3）

図31　武家屋敷地区第７地点Ⅰ期の遺構（4）
Fig.31　Features belonging to phase Ⅰ at BK7（4）

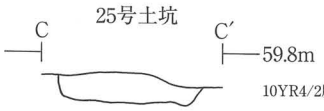


9 号土坑
1　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物・白色粒子・黄褐色土粒・小礫をわずかに含む

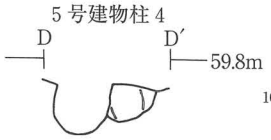
13号土坑
1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性弱・しまり強　小礫・炭化物をわずかに含む　白色粒子を含む
2　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性弱・しまり強　炭化物をわずかに含む　白色粒子を含む
3　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性弱・しまり強　炭化物をわずかに含む　黄褐色土粒をブロック状に含む
4　10YR3/4暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　粘土ブロックを多く含む　白色粒子を含む



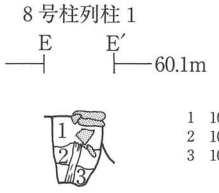
10YR4/3にぶい黄褐色　シルト質粘土　粘性強・しまり中　黄橙色粘土質シルトのブロックを含む　炭化物をわずかに含む



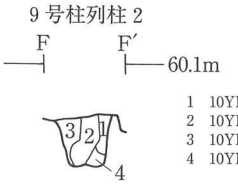
10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　鉄分を多く含む　炭化物をごくわずかに含む　褐色土を含む



10YR3/3　暗褐色　鉄分を多く含む　埋土中に木質部（樹皮のみ残存）を含む



1　10YR5/1　褐灰色　粘土　粘性強　しまり中　拳大の礫を含む　黄褐色粘土ブロックをまだらに含む
2　10YR4/1　褐灰色　粘土　粘性強　しまり中　地山起源の粘土ブロックをまだらに含む
3　10YR3/1　黒褐色　粘土　粘性強　しまり中　地山起源の粘土ブロックをまだらに含む



1　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり中　鉄分をわずかに含む
2　10YR4/1　褐灰色　シルト　粘性中　しまり中　鉄分を含む　埋土下部に木質の部分が残る
3　10YR4/2　灰黄褐色　シルト　粘性中　しまり中　鉄分をわずかに含む
4　10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性中　しまり中

図32　武家屋敷地区第７地点Ⅰ期の遺構（5）
Fig.32　Features belonging to phase Ⅰ at BK7（5）

これらの知見から、寛永４年（1627）までは確実に６尺５寸が使われ、遅くとも17世紀末までに６尺３寸へ変化していたと考えられる。したがって、５号建物がⅠ期に所属するとしても、17世紀前葉より古い時期には遡らないものと考えられる。

南北方向の柱筋の方向は、Ｎ－５°－Ｅとなる。柱４がピット170に切られている。柱穴の形状は、柱３が不整形を呈する以外は、直径25～30cm程度の、ほぼ円形である。深さは20cm程度である。柱痕跡は確認できていないが、柱４では木質部の痕跡が確認されており、これが柱の痕跡であるとすると、太さは17cmほどとなる。いずれの柱穴からも、遺物は出土していない。

【12号溝】（図28・29・30、図版13・14）

Ｈ・Ⅰ列を南北に延びる素掘りの溝で、南北とも調査区外へ延びる。途中、撹乱で途切れる部分もあるが、31m分を検出した。４層との関係ははっきりしないが、Ⅱ期の２号遺構より古い29号溝に切られており、さらに遡ることは間違いない。出土遺物は磁器・陶器・土師質土器・瓦をはじめ、各種の遺物が出土しているが、量は多くない。陶磁器は、17世紀代に遡る。遺物量がさほど多くないため、確実に時期を限定することは難しいが、唐津や志野・織部のような、17世紀でも初頭や前葉の資料は含まれていないので、中葉以降と考えられる。ただしＨ－12区では、大堀相馬産碗など18世紀代に下る遺物が、比較的まとまって出土している。これらは、他の区域と明らかに様相が異なっており、混入の可能性が高い。Ｈ－12区では、12号溝埋土に掘り込む形で18世紀代の遺構が造られていたにもかかわらず、検出できずに合わせて12号溝埋土として調査してしまった可能性が高いものと考えられる。

ほぼ一直線に伸びる溝で、方向はＮ－26°－Ｗである。上幅140～165cm、下幅20～85cm、深さ60～70cmで、断面形状は船底形を呈する。底面レベルはほぼ平坦で大きな変化は無いが、調査区北壁際と比べると、南壁際では10cm以上低くなっており、北から南へ流れていたものと考えて良いであろう。28号溝、33号溝、32号溝が合流していた可能性がある。いずれの溝より底面レベルは12号溝が低く、12号溝に流れ込んでいたと考えられる。12号溝とそれと同時に存在した可能性のある溝の埋土は、いずれも自然堆積と考えられるが、ラミナ状の堆積はほとんど確認できない。

【24号溝】（図28・29、図版14）

Ｄ・Ｅ－５区で検出された素掘りの溝である。24号溝の東側の延長上には28号溝が位置している。いずれも西から東に向かって流れていたことが推測され、東西方向の向きもほぼ同じであることから、一連の溝であった可能性も考えられることからⅠ期に含めた。

Ⅰ期の14号土坑を切っている。Ｅ－５区で東西方向から北に分岐する。北端はⅢ期の18号溝に、西端はⅢ期の26号溝に、東端は撹乱によってそれぞれ切られており、その先は確認できなかった。さらに、Ⅱ期の15号土坑によって一部切られている箇所もあり、断片的な検出状況である。東西部分は長さ3.5mを検出し、南北部分は１mを検出した。溝の上幅は24～40cm、下幅12～24cm、深さ８cm前後と浅い。東西部分の方向はＮ－65°－Ｅ、南北部分の方向はＮ－28°－Ｗである。底面のレベルは東で若干低くなっており、北側、西側から東側に流れていた可能性が考えられる。遺物は出土していない。

【25号溝】（図28・29、図版14）

Ｄ－５区で検出された素掘りの溝で、東西方向に延びている。Ⅲ期の７号溝を切っており、東西両端は撹乱によって破壊されているため、続きは不明である。残っていた長さは２mである。上幅48～64cm、下幅20～32cm、深さ約24cm、断面形状は船底状を呈する。方向はＮ－59°－Ｅである。遺物は陶器と土師質土器がごくわずか出土している。陶器には呉器手碗が含まれる。切り合い関係から比較的遡る時期と考えられることと、溝の方向が25号溝や33号溝などと平行し、関連する遺構である可能性が考えられるため、Ⅰ期に含めた。

【28号溝】（図28・29、図版14）

G・H－5区で検出された東西方向に延びる素掘りの溝である。2層の下位から掘り込まれているが、2層下部以下の基本層が存在しない場所であるため、掘り込み面は不明である。Ⅱ期の遺構群に切られ、12号溝に合流する33号溝などと平行し、同様の溝である可能性が高いと考え、Ⅰ期に含めた。

東端は撹乱によって破壊されており、12号溝のところまでは残っていない。西端はG－5区で途切れてしまい、その先は検出されなかった。検出できた長さは3.8mである。Ⅱ期の8号溝・23号溝、Ⅲ期の1号建物・2号建物などに切られている。溝の上幅44～68cm、下幅16～28cm、深さ24cm程度で、断面形状は逆台形を呈する。方向はN－67°－Eである。底面のレベルは、他の遺構に切られている箇所があるため明確ではないが、東側で若干低くなっており、東に向かって流れていた可能性が考えられる。遺物は、瓦の破片が1点出土しているだけで、年代が判明する遺物は出土していない。28号溝の西側の延長上には24号溝が位置している。いずれも西から東に向かって流れていたことが推測され、東西方向の向きもほぼ同じであることから、一連の溝であった可能性も考えられる。12号溝との関係は、28号溝の東端が壊されているため明らかではない。南の6列を東西に延び、12号溝に合流する33号溝とほぼ平行していることから、同じように12号溝に直交し合流する溝である可能性が高いと考えられる。12号溝の東側に28号溝の続きが検出されないことは、28号溝と12号溝が合流していた可能性が高いことを示すものであろう。

【29号溝】（図30、図版14・15）

H・I－7～12区で検出した、南北方向に延びる素掘りの溝である。4層が分布しない区域にあるため、掘り込み面からは、Ⅰ期かⅡ期の区分はできない。12号溝の西端に重なるように造られている。7列より北側には延びないが、12号溝が埋没した後、ほぼ同じ場所で造り替えられた可能性が高いため、12号溝と同じⅠ期に所属させた。時期の判明するような遺物は出土しておらず、Ⅱ期に下る可能性も残っている。その場合、Ⅱ期の2号遺構に切られていることから、これよりは古くなる。

西側のほとんどが、Ⅱ期の2号遺構に壊されている。11列では、撹乱によって大きく破壊されている。北側は7列で途切れ、南側は調査区外へ延びている。検出した長さは、11mである。ほぼ真っ直ぐに延びており、方向は、N－27°－Wで、12号溝とほぼ同じである。底面レベルは、南側がわずかに低いことと、北側が途切れることから、北から南へ流れていたと推定される。上幅110cm前後、下幅60～70cm、深さ70～80cmで、壁は急激に立ち上がり、断面形状は箱形に近い。北端の壁も急に立ち上がる。埋土は、黒褐色土を主体とし、下部では粘土や砂がラミナ状に堆積している。水流のある状態で、自然に堆積したものと考えられる。遺物は磁器・陶器・土師質土器・瓦がわずかに出土しているが、細かな特徴が判るような資料はない。これら以外には、木製品や木羽がやや多く出土している。

【30号溝】（図31・32、図版15）

E－9・10区で検出した、南北方向に延びる素掘りの溝である。北側は撹乱で破壊され、南側はⅡ期の27号溝によって切られており、長さ1.4mを検出できただけである。Ⅱ期の27号溝は切り合い関係から、Ⅱ期の中でもかなり古い時期になることが考えられている。30号溝はそれよりさらに古いため、Ⅰ期に遡る可能性が高いものと考えた。ただし、Ⅱ期に下る可能性も残っており、その場合はⅡ期でも最も古い時期になるであろう。上幅45～65cm、下幅10～25cm、深さ15cmで、断面形状は浅い船底状を呈する。方向はN－28°－Wである。遺物は出土していない。

【32号溝】（図30、図版15）

H－7区で検出された、東西方向に延びる素掘りの溝である。西側は撹乱によって破壊されている。東側は12号溝にぶつかり、南側はⅡ期の2号遺構によって切られている。残存範囲はごく限られており、長さ1.3m分を検出しただけである。上幅64～88cm、下幅36～44cm、深さ30cm程度で、方向はN－62°－Eである。断面形状

は、船底状を呈する。12号溝との前後関係は、調査時には充分確認できなかった。当初は12号溝に切られると考えていたが、同時存在の可能性も残っている。12号溝の東側には延びていかないようであり、この点は同時存在の可能性が高いことを示す。いずれにせよ、12号溝と同時か、あるいは古いものであることからⅠ期に含めた。遺物は出土していない。

【33号溝】（図28・29、図版15）

D～H－6区で検出された。2層下部の下位から掘り込んでいるが、4層は分布しない区域であるため、4層との関係は不明である。東西方向に延びる素掘りの溝で、D－6区では一部北側に65cmほど突き出す部分が確認された。突き出した場所の北側には、26号土坑が存在し、関連する施設であった可能性が考えられる。西端は撹乱によって壊されており、東端は12号溝に連結するものと考えられる。東西の長さ14m分を検出した。Ⅲ期の3号溝・26号溝、Ⅱ期の15号土坑に切られており、撹乱によって部分的に破壊されている箇所もある。12号溝と一連の溝と考えられることから、12号溝と同様にⅠ期に含めた。ほぼ直線的に延びるが、D－6区では北側に若干屈曲するようであるが、すぐ西側が撹乱で破壊されており判然としない。上幅48～96cm、下幅16～48cm、深さは30cm前後で、方向はN－65°－Eである。底面のレベルは、東側が西側より30cm程度低くなっており、西から東に流れていたのではないかと推測される。33号溝として取り上げた遺物はない。ただし、調査時の遺物の取り上げに際して、混乱があった可能性がある。33号溝が12号溝と一連の溝であったため、両者を分離せずに、12号溝として遺物を取り上げてしまった可能性が排除できない。そのため、12号溝出土とした遺物に、33号溝出土の遺物が含まれる可能性が残っている。

【9号土坑】（図31・32、図版16）

B－8区で検出された土坑である。北側、東側、西側が撹乱によって破壊されており、南側の一部もⅣ期の1号土坑に切られているため、全体の形状は不明である。残存部分の大きさは、東西方向で300cm、南北方向で90cm、深さは15cmである。1号土坑に切られるため判然としないが、南辺の形状は、ほぼ直線的に延びるようである。検出面の標高や埋土の様相、出土遺物から見て、撹乱を挟んで北側に隣接する13号土坑と一連の土坑であった可能性が高い。掘り込みは浅い窪み状を呈し、壁はなだらかに立ち上がる。埋土からは磁器、陶器、土師質土器や瓦、木製品などが出土しているが、遺物量はいずれも少ない。出土遺物で細かな時期を確定できるものはないが、17世紀後半代に遡る可能性がある。一連の土坑であった可能性が高い13号土坑が、17世紀代に遡ると考えられることから、Ⅰ期の遺構であると判断した。

【13号土坑】（図31・32、図版16）

B－7区で検出された土坑である。東側、南側、西側が撹乱によって破壊されており、北側部分のみが残存しているため、全体の形状や規模は不明である。9号土坑の項目でも述べたように、9号土坑と一連の土坑である可能性がある。残存部の大きさは東西方向で240cm、南北方向で70cm、深さは30cmである。北辺も撹乱で破壊されており、一部が残るにすぎないが、直線状を呈している。9号土坑の南辺も直線状を呈しており、両者が一連の土坑であった場合、全体として方形を基調とする平面形状となるものと推定される。規模は、東西方向300cm以上、南北方向360cm程度となり、かなり大規模な土坑であったと考えられる。9号土坑と同様、掘り込みは浅い窪み状を呈し、壁はなだらかに立ち上がる。埋土は3層に分かれる。遺物はさほど多くないが、各種の遺物が出土している。磁器では碗・皿類、陶器では唐津の刷毛目大鉢や呉器手碗などが出土しており、17世紀後半代に遡るものと考えられる。古銭が2点出土し、1点は渡来銭であるが、もう1点は寛永通宝（古寛永）である。このことは、当遺構が寛永13年（1636）より遡らないことを示している。瓦類では平瓦・丸瓦類と亀形の据え物が出土している。その他には、土師質土器、瓦質土器や碁石が出土している。出土遺物からⅠ期の遺構であると判断した。

【14号土坑】（図28・29、図版16）

Ｄ・Ｅ－３～５区で検出された。２層下部の下位から掘り込まれている。14号土坑周辺には４層が分布していないため、４層との関係は不明である。出土遺物から、17世紀代でも早い時期に遡ることは間違いないと考えられることから、Ⅰ期の遺構と判断した。Ⅰ期の24号溝、Ⅲ期の18号溝・26号溝に切られる。撹乱によって部分的に破壊されている箇所があるが、おおよそ南北方向に長い長方形もしくは不整形を呈するものとみられる。南北約570cm、東西約380cm、深さ約52cmである。規模が大きいことが特徴と言えるが、遺構の性格は判然としない。埋土は６層に分けられ、埋土からは陶器・磁器・土師質土器・瓦質土器や加工木などが、比較的多く出土している。土坑の底部付近では、陶磁器類がややまとまって出土している。しかし、ゴミ穴といえるほどまとまって出土している訳ではない。陶器では、唐津産向付、志野産小中皿、瀬戸美濃産擂鉢、天目碗などがみられ、17世紀代でも初頭に遡るものと考えられる。今回検出された江戸時代の遺構の中では、最も遡る遺構で、当地点が江戸時代初頭から利用されていたことを示すものである。

【25号土坑】（図31・32、図版16）

Ｅ－８・９区で検出された土坑である。この周囲には、多数のピットが重なりあっているが、25号土坑は切り合い関係から見て、これらの中で最も古い。遺構が複雑に重なる区域のため、掘り込み面は確認できていないが、検出レベルも最も低い。これらの点から、Ⅰ期に遡る可能性が高いものと考えたが、Ⅱ期に下る可能性も残っている。ほぼ長方形を呈し、規模は南北の長さ120cm、東西の幅80cm、深さは16cmである。杭の痕跡と思われる小ピットが、西辺に沿って３ヶ所認められた。西辺の傾きはＮ－15°－Ｗで、東側の５号建物の方向と近い。遺物は、土師質土器の皿が１点出土しているだけである。

【26号土坑】（図28・29、図版17）

Ｄ－５区で検出された。Ⅲ期の26号溝の下面で検出されており、26号溝より古い。南北方向に長い、隅丸の長方形を呈しており、南北170cm、東西80cm、深さ52cmを測る。26号土坑の南側に東西に延びる33号溝には、北側へ突出する部分がある。この突出部分が、26号土坑に対応する位置に設けられている。この点から26号土坑は、33号溝と一連となり、区画の一部を担う遺構である可能性が考えられる。そのため、33号溝と同じくⅠ期にした。26号土坑と33号溝の間には、25cm程の間隔が空いている。埋土は黒色～黒褐色土が主体を占め、場所によっては砂と粘土質シルトがラミナ状に堆積する。流れ込んだ土砂や有機質分が、雨水などがたまった状態の中で堆積したものと考えられる。断面図に見える杭は、上部に存在した26号溝に伴う可能性が高い。陶器や加工木などがわずかに出土しているが、時期が判るような資料はない。

【30号土坑】（図30、図版17）

調査区南端のＧ・Ｈ－12区で検出した土坑で、南側は調査区外へ延びている。４層下面より掘り込んでいることから、Ⅰ期に遡る遺構である。ほとんどが調査区外へ延びるため、平面形状は判然としない。検出した範囲を見る限りでは、円形に近い形状を呈するものと考えられる。南壁際での東西の長さは315cmで、これより大きくなることは確実であろう。同じく南壁際での深さは60cm程で、さらに深くなる可能性がある。底面をほとんどを覆う下部の埋土は、砂がラミナ状に入るもので、少なくとも下部の埋土は、水流のある中で、自然に堆積したものと考えられる。遺物は出土していない。

【31号土坑】（図30、図版17）

平面精査では検出できなかったが、調査区南壁のセクションの検討の際に確認できたものである。南壁Ｆ・Ｇ列のセクションで確認したもので、４層下面から掘り込まれていることから、Ⅰ期に遡る。平面形状は不明であるが、南壁セクションでは、上幅173cm、下幅125cm、深さ22cmの逆台形の断面形状を呈する。平面精査を行えていないため、出土遺物はない。

【８号柱列】（図31・32・38、図版17）

８号柱列と次の９号柱列は、先述のようにⅠ期かⅡ期の判断がつかなかった遺構である。便宜的に、Ⅰ期の遺構の最後に記載する。

Ｄ・Ｅ－７～９区で検出された、北西－南東方向に延びる掘立柱列である。切り合い関係より、Ⅲ期の１号柱列より古いことは確実であるが、より詳しい時期は不明である。そのため、Ⅰ期あるいはⅡ期の遺構とした。８号柱列と次の９号柱列は、ほぼ直交する方向で、両者は近接した時期の所産である可能性が高いものと考えられる。このような方向を示す遺構は、当地点では他にない。

柱穴３基が確認され、柱間寸法は４尺と考えられる。柱１と柱２の間に、もう１基、柱穴が存在していたと推定されるが、１号柱列の柱７と重なるため、これによって壊されてしまったものと考えられる。柱１が１号柱列の柱６によって、柱２が１号柱列の柱８と柱14によって切られている。方向はＮ－42°－Ｗである。柱穴は、径45～60cmのほぼ円形を呈すが、方形に近いところもある。深さは35～40cm程度で、拳大から人頭大の石を、柱の脇に詰めるように入れているものもある。柱１では柱材が残存していた。保存状態が良くないので詳細は不明であるが、太さ10cm以下の細い柱であったようである。磁器や瓦がわずかに出土しているが、時期などが判明するような資料はない。

【９号柱列】（図31・32・38、図版17）

Ｄ・Ｅ－８区で検出された、南西－北東方向に延びる掘立柱列である。柱筋の傾きが、直交する方向に直してＮ－41.5°－Ｗとなり、８号柱列とほぼ同じである。先述のように、両者は近接した時期の所産である可能性が高いものと考えられ、同様にⅠ期あるいはⅡ期の遺構とした。

３基の柱穴が検出されており、柱間寸法は４尺２寸と考えられる。４尺２寸は、１間を６尺３寸とした場合の２間分、すなわち12尺６寸を３等分した寸法である。このような柱間寸法は、１間＝６尺３寸が採用されて以降に出現すると考えられる（年報18）。このことから、１間＝６尺５寸が使われていた17世紀前葉までは、少なくとも遡らないと考えられる。

柱穴はいずれも、径30～35cmのほぼ円形から楕円形を呈し、深さは15～25cm程度である。柱痕跡は、３基とも太さ10cm程度の細いものである。遺物は出土していない。

②Ⅱ期の遺構（図33～49、図版18～34）

基本層序の２層下部の下位で、４層より上位から掘り込まれている遺構をⅡ期とした。４層の分布範囲が調査区東南部の狭い範囲に限られるため、４層との上下関係が判明する遺構は少ない。以下で、特に４層との関係を記していないのは、４層が分布しないため関係が判らない場合である。

Ⅱ期は、遺構の重複が多い区域もあり、検出遺構の全体配置を、ひとまとめにして図示することが困難である。そのため先述のように、遺構配置図を２つに分けて図示する。しかし両者は、時期的に新旧２段階に区分できる訳ではない。比較的古い遺構と新しい遺構に分けて図33と図34に示したが、それぞれが新旧の段階差を示すものではない。あくまでも、判りやすく図示するための、便宜的な措置である。本来は、２枚の遺構配置図を合わせたものが、Ⅱ期の遺構配置図となるものと考えていただきたい。遺構の全体的な配置状況も、２つの配置図を合わせた形で記述する。

４層上面から掘り込んでいるⅡ期の遺構から出土した遺物の年代や、４層出土遺物の様相から、Ⅱ期の開始はおおむね18世紀初頭頃と考えられる。一方、19世紀前葉頃が、Ⅲ期の下限と考えられる。出土遺物から、この時期に入ると考えられる遺構については、Ⅱ期に含めている。

Ⅱ期は、遺構が集中する区域と、遺構が少ない区域とに分かれる。調査区の北東部や南東部では、多数の遺構が存在し、Ⅱ期を通じて、様々な遺構が造られ続けていたと考えられる。それ以外の区域では、遺構密度は低く、遺構が存在しない時期もあったと推定される。

調査区東端には、22号溝が南北に延びる。区画溝と考えられるⅠ期の12号溝を、東にずらして造り直した可能性を考え、当期に含めたもので、異なる時期に動く可能性も残っている。

調査区北東よりのＦ～Ｈ－２～４区では、多数の土坑が切り合って、次々と造られている。この中の18号土坑は、不整形の土坑で、遺物が比較的まとまって出土していることから、ゴミ穴の可能性がある。18号土坑以外の土坑の性格は明らかではないが、比較的浅く、長方形に近い形態のものが多い。形態の似た土坑が重なることは、性格の類似する土坑が、この区域で繰り返し造られた可能性を示している。これらの土坑が多数造られた後に、小規模な溝が展開する。これらの溝には、屈曲するものや、分岐するものもあり、全てが同時に存在したものではない。これらの溝も、何度か造り替えられたものと考えられる。

この調査区北東部において、切り合い関係から最も新しい４号溝や10号溝は、２層下部の下面から掘り込まれていることが確認でき、Ⅱ期に遡ることは確実である。一方、切り合い関係から最も古い段階と考えられる22号土坑からは、小片ながら大堀相馬産と考えられる陶器碗が出土しており、18世紀以降であることは間違いないと思われる。22号土坑とは切り合い関係がないため、直接の関係は判らないが、同様に最も古い段階と考えられる23号土坑からは、年代の判る遺物が出土していない。23号土坑を切っている18号土坑は、出土遺物から、18世紀中頃を前後する時期と考えられる。23号土坑は、それより古いことは確実であるが、どこまで遡るかは判らない。このように、23号土坑のみ不確定な部分が残るが、それ以外の一連の土坑や溝は、掘り込み面と切り合い関係から、全てⅡ期に所属することが明らかである。この区域の類似した土坑が、全てⅡ期のものであることから、23号土坑もⅡ期に含まれる可能性が高いものと考えた。

調査区中央に近いＥ－５～７区には、15号土坑がある。比較的多くの遺物が出土しており、ゴミ穴と考えられる。出土遺物から、18世紀末から19世紀初頭頃の可能性があり、Ⅱ期でも新しい遺構である。

調査区南東よりには、逆Ｌ字状に広がる２号遺構が存在する。大規模なゴミ穴で、膨大な量の各種遺物が出土した。多数の木簡が出土しており、年号を記したものから、享保５年（1720）を前後する頃に使われていたと推定される。木簡の記載内容からは、二の丸地区からゴミが運ばれて捨てられたものと考えられる。２号遺構の下面では、４号井戸が検出された。４号井戸を使用しなくなってから、さほど時間を空けずに２号遺構が造られた可能性を考え４号井戸もⅡ期に含めたが、Ⅰ期に遡る可能性も残っている。

２号遺構の北寄りには１号遺構が隣接し、２号遺構の西側には24号土坑が隣接する。これらからは、２号遺構と類似する遺物が大量に出土している。いずれもゴミ穴として利用されたもので、２号遺構とほぼ同時に使われていたと考えられる。

調査区南東部では、２号遺構などが埋まった後、3b層によって整地されている。3b層の整地は、ゴミ穴である２号遺構、１号遺構、24号土坑の上部一帯に施されており、廃棄物を大量に含むこれらのゴミ穴の埋土を、覆い隠すようにしている。3b層の整地は、本来平坦に施されたと推測されるが、ゴミ穴内の堆積層が窪み、それに伴って3b層も窪んだと考えられる。この窪んだ部分が、20号土坑である。遺構配置図には20号土坑は記載していないが、他の遺構と重なって表現が難しいため、別に図37に示した。20号土坑の埋土は、基本層3a層が相当する。3a層が堆積した後には、21号溝が造られている。

調査区東南部は、２号遺構の段階より新しい遺構は少なく、上述した20号土坑と21号溝以外には、16号土坑が存在する程度である。しかし、礎石と考えられるピットが、多数存在している（図版34）。列状に川原石を並べたものもある。この区域ではⅢ期にも多数の礎石が存在しているが、Ⅲ期の礎石とは検出レベルが異なる礎石があり、Ⅱ期のある時期に、この区域に礎石建物が存在したことは間違いないと思われる。しかし、確認された礎石の組み合わせは、充分把握できず、建物を復元できなかった。浅い掘り込みに川原石を据えただけのものもあり、石が動かされた場合、確認できなかったものが存在した可能性もある。

24号土坑の西側の、調査区中央南よりの区域には、27号溝が東西に延び、西端で南に屈曲する。この27号溝は24号土坑に切られている。27号溝の南側には31号溝が逆Ｌ字状に屈曲して造られているが、31号溝は27号溝に切られている。この31号溝は、４層上面から掘り込んでいることが確認されており、31号溝や27号溝がⅡ期に下ることは間違いない。27号溝の南側には、28号土坑と29号土坑が並んでいる。27号溝出土の陶磁器は、２号遺構や24号土坑と、基本的に共通するものであった。また、28号土坑と29号土坑、27号溝からは、少数ながら木簡が出土している。これらの点から、いずれも、２号遺構などと近い時期のものと考えられる。

27号溝の北側には、Ⅰ期かⅡ期かの判断がつかなかった８号柱列と９号柱列が存在するほか、27号土坑が存在するが、他の遺構は少ない。

調査区中央の南端では、27号溝や28号土坑・29号土坑より新しい段階に、池状遺構の古段階が造られたと考えられる。池状遺構の東岸は１時期のみであったが、西岸では新段階の岸の下層から、より古い段階の岸が確認された。池状遺構新段階はⅢ期に下る遺構であるが、古段階は、Ⅱ期に遡る可能性が高いと考えた。直接的な前後関係ははっきりしないが、２号遺構などのゴミ穴が機能していた時期よりは、新しいものと考えられる。

調査区西壁よりの、米軍共同溝から西側の区域では、遺構密度はあまり高くない。調査区北西隅には４号土坑がある。本来の形状は不明であるが、かなり大規模な遺構である。調査区南西隅には１号井戸と３号土坑が造られる。その間には、17号溝や12号土坑が存在する程度であった。

【１号遺構】（図38・39・40、図版18）

Ｇ・Ｈ－７・８区で検出された、ゴミ穴と考えられる遺構である。２号遺構と同様に、3b層の整地によって埋められており、ほぼ同時に存在したと考えられる。出土遺物の様相も、２号遺構と基本的に共通することから、Ⅱ期の遺構と判断した。

北側の一部と西側は、撹乱によって破壊されている。１号遺構の東側は、２号遺構と接している。近代以降の溝状の撹乱が、この場所で両遺構を横切る形で、東西に延びていた。それを利用して、先行して掘り下げを行い、埋土の状況を確認した（図40）。１号遺構と２号遺構がやや窪む程度まで埋没した段階で、3b層の整地で埋められていた。そのため、１号遺構埋土と２号遺構埋土の、直接の新旧関係はつかめなかった。ほぼ同じ時期に使われたと考えられる。

１号遺構の平面形状は、東西に長いほぼ楕円形を呈す。西側は撹乱で壊されているが東西の長さ330cm以上、

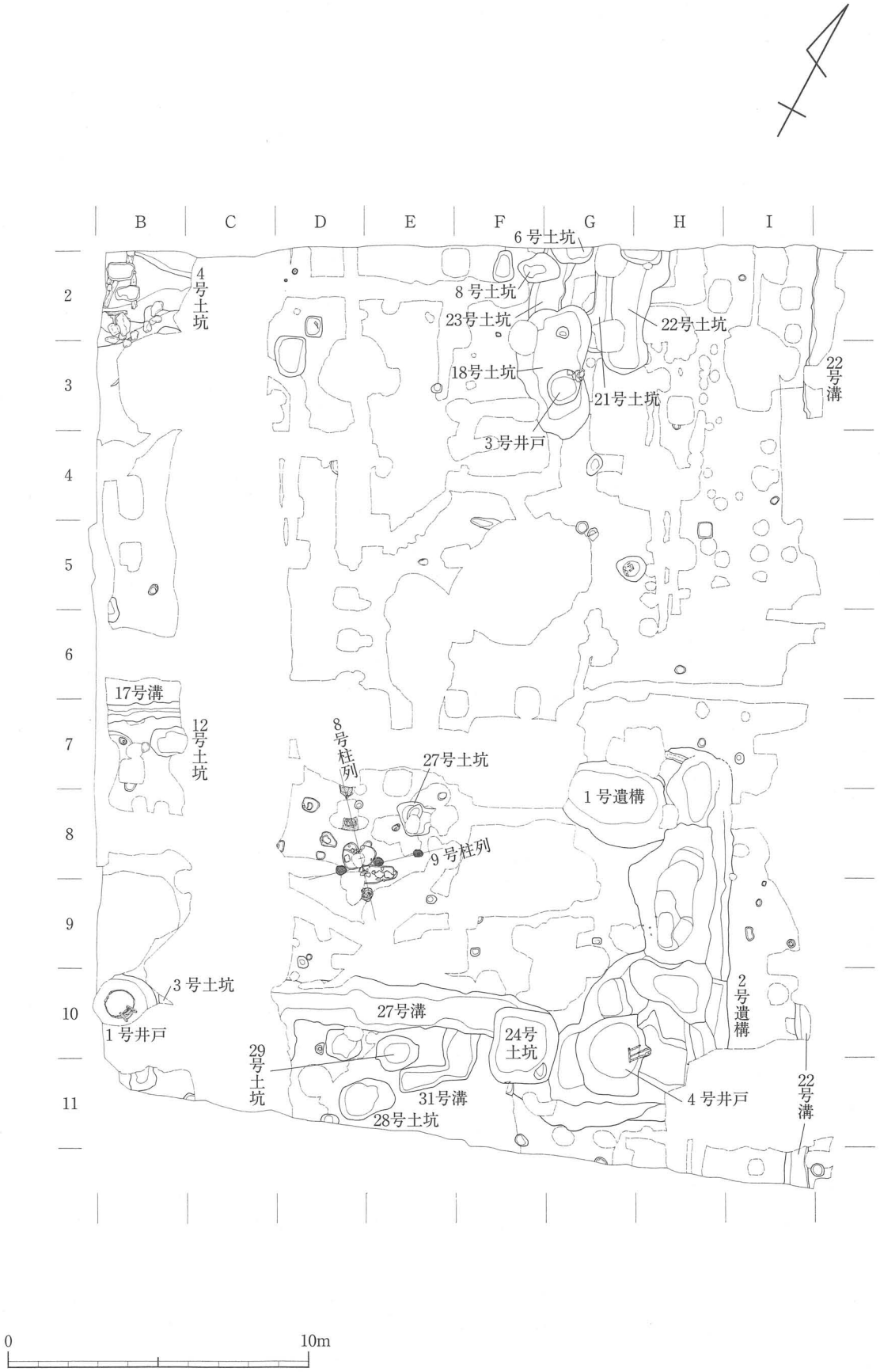


図33　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期遺構配置図（1）
Fig.33　Distribution of features belonging to phase Ⅱ at BK7 (1)

図34　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期遺構配置図（2）
Fig.34　Distribution of features belonging to phase Ⅱ at BK7（2）

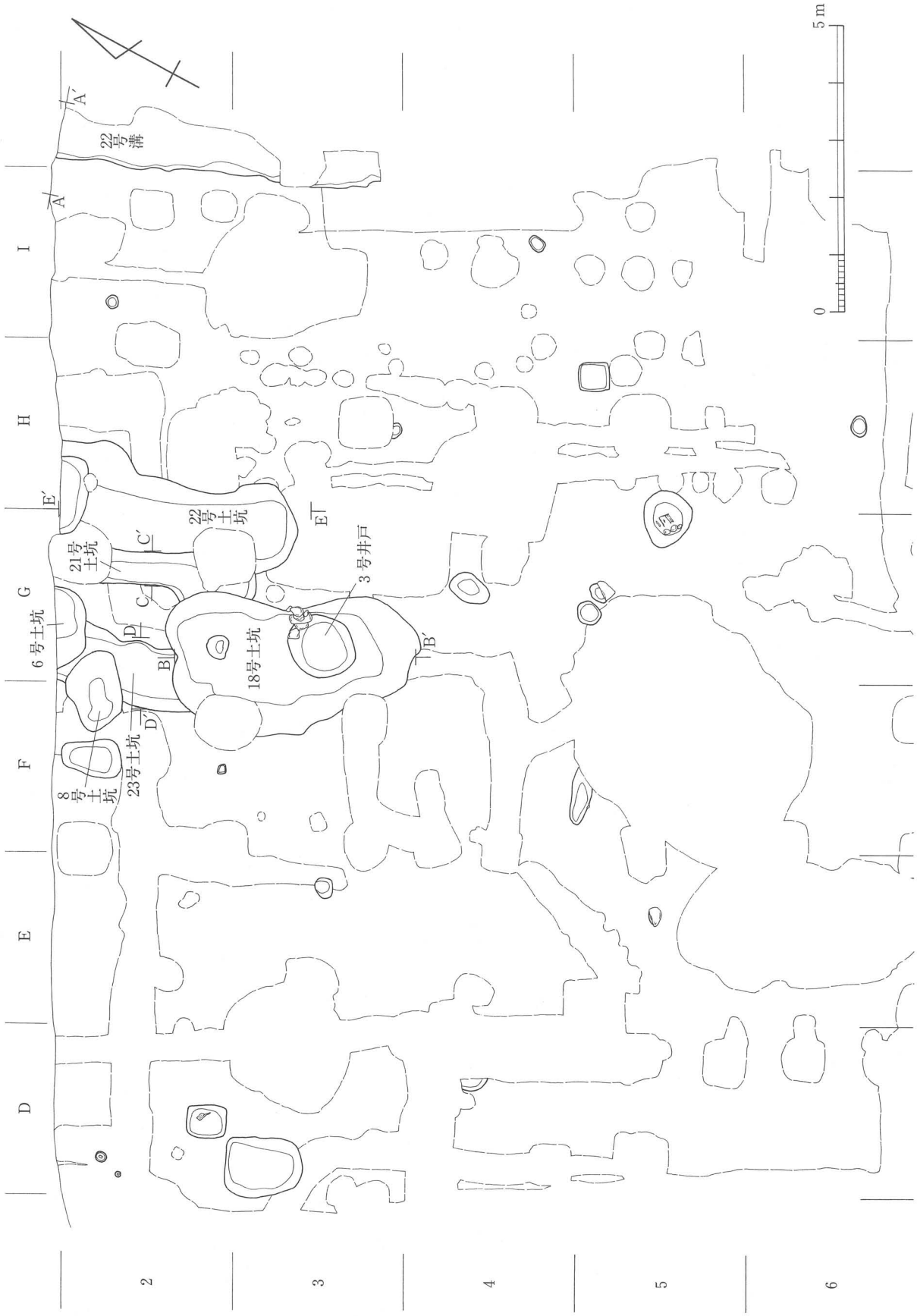
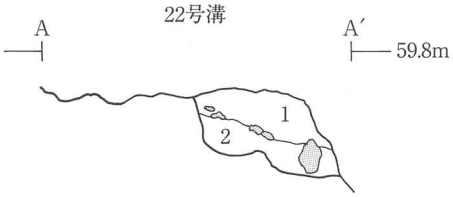
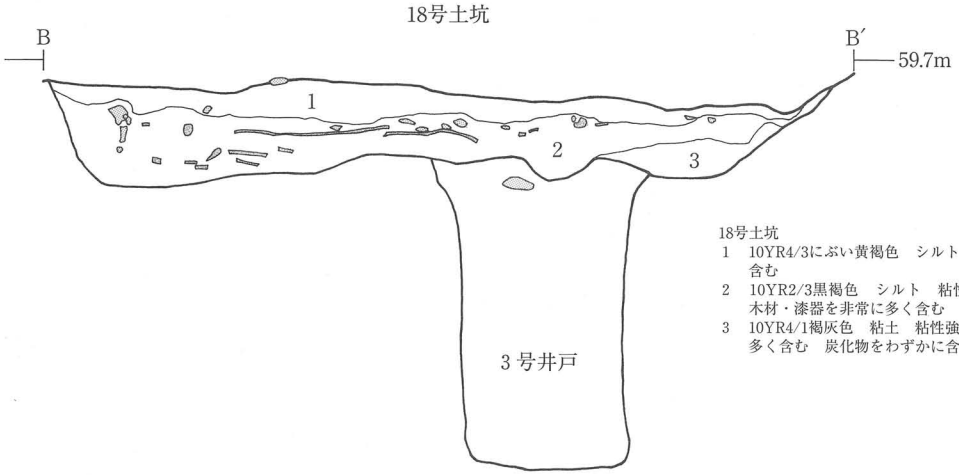


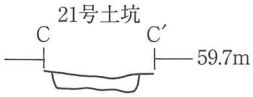
図35　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（1）
Fig.35　Features belonging to phase Ⅱ at BK7 (1)



1　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性弱・しまり強　下部に小礫を含む　炭化物をわずかに含む
2　10YR4/1褐灰色　シルト　粘性弱・しまり強　酸化鉄・白色粒子を多く含む

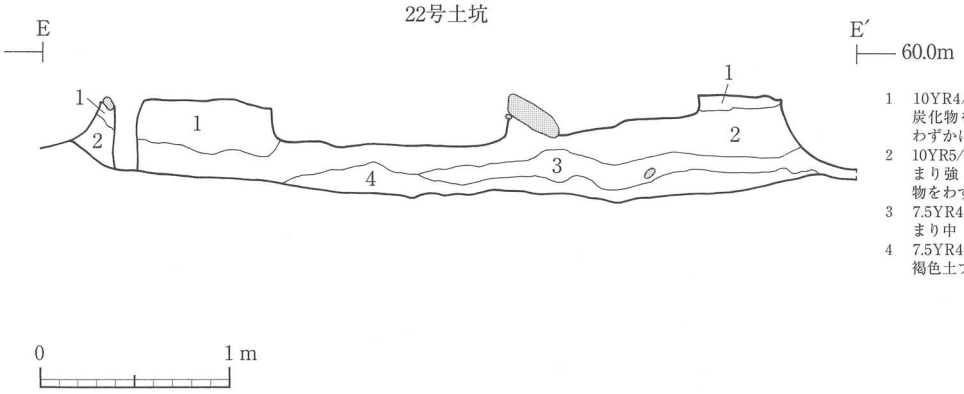


18号土坑
1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物を多く含む
2　10YR2/3黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物を多く含む　木材・漆器を非常に多く含む
3　10YR4/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　浅黄橙色土ブロックを多く含む　炭化物をわずかに含む



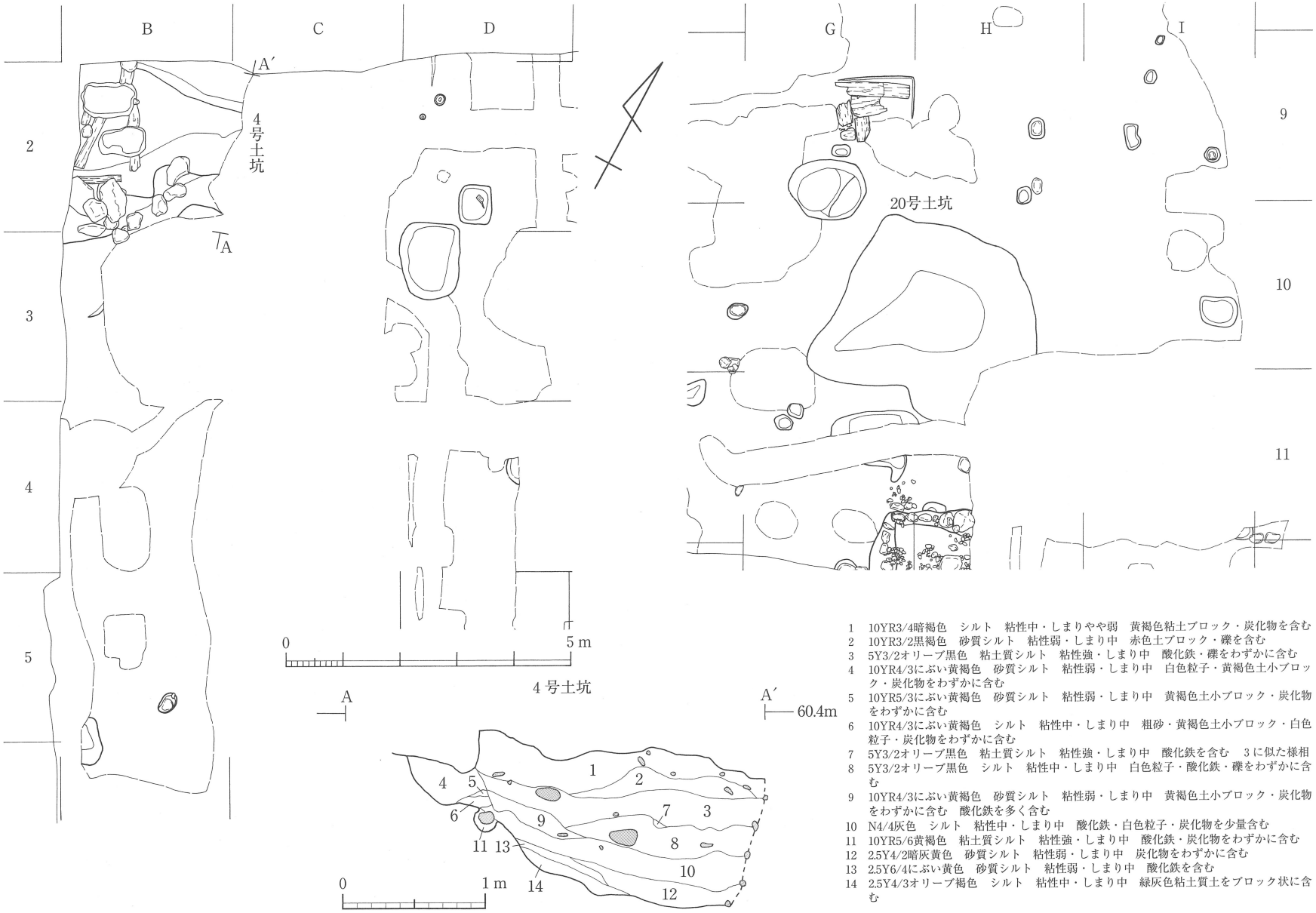
10YR3/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　地山起源の褐色粘土ブロックを斑状に含む　炭化物をわずかに含む

1　10YR4/2灰黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　炭化物をわずかに含む　黄褐色土ブロックを含む
2　10YR5/3にぶい黄褐色　粘土　粘性極めて強・しまり強　にぶい黄橙色小ブロックをわずかに含む



1　10YR4/4褐色　シルト　粘性弱・しまり中　炭化物を多く含む　明黄褐色土ブロックをわずかに含む
2　10YR5/1褐灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　黄橙色ブロックを多く含む　炭化物をわずかに含む
3　7.5YR4/4褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　褐灰色土ブロックを多く含む
4　7.5YR4/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり強　褐色土ブロックをわずかに含む

図36　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（2）
Fig.36　Features belonging to phase Ⅱ at BK7（2）



1 10YR3/4暗褐色　シルト　粘性中・しまりやや弱　黄褐色粘土ブロック・炭化物を含む
2 10YR3/2黒褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　赤色土ブロック・礫を含む
3 5Y3/2オリーブ黒色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　酸化鉄・礫をわずかに含む
4 10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　白色粒子・黄褐色土小ブロック・炭化物をわずかに含む
5 10YR5/3にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　黄褐色土小ブロック・炭化物をわずかに含む
6 10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　粗砂・黄褐色土小ブロック・白色粒子・炭化物をわずかに含む
7 5Y3/2オリーブ黒色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　酸化鉄を含む　3に似た様相
8 5Y3/2オリーブ黒色　シルト　粘性中・しまり中　白色粒子・酸化鉄・礫をわずかに含む
9 10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　黄褐色土小ブロック・炭化物をわずかに含む　酸化鉄を多く含む
10 N4/4灰色　シルト　粘性中・しまり中　酸化鉄・白色粒子・炭化物を少量含む
11 10YR5/6黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　酸化鉄・炭化物をわずかに含む
12 2.5Y4/2暗灰黄色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　炭化物をわずかに含む
13 2.5Y6/4にぶい黄色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　酸化鉄を含む
14 2.5Y4/3オリーブ褐色　シルト　粘性中・しまり中　緑灰色粘土質土をブロック状に含む

図37　武家屋敷地区第7地点II期の遺構（3）
Fig.37 Features belonging to phase II at BK7 (3)

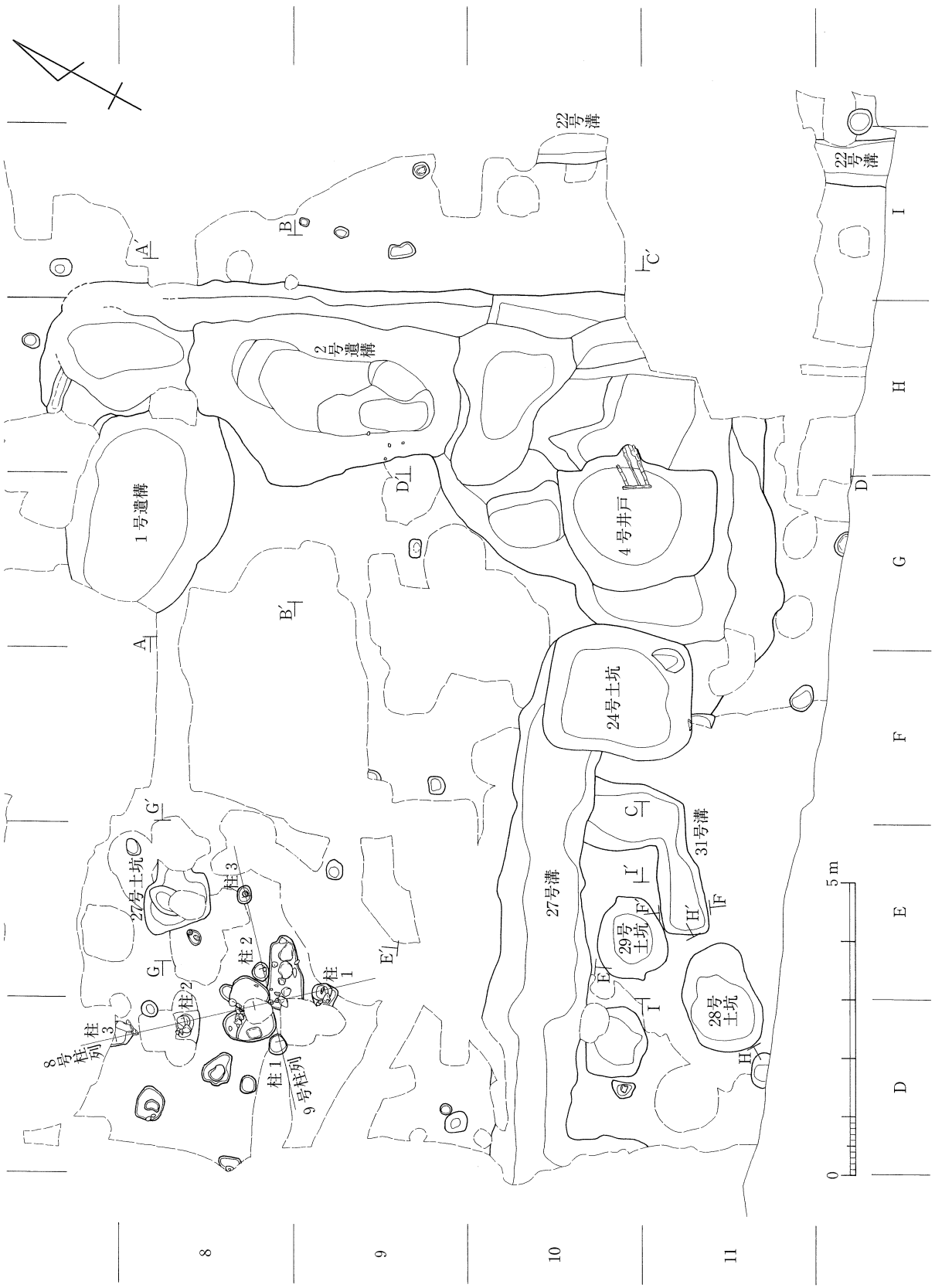
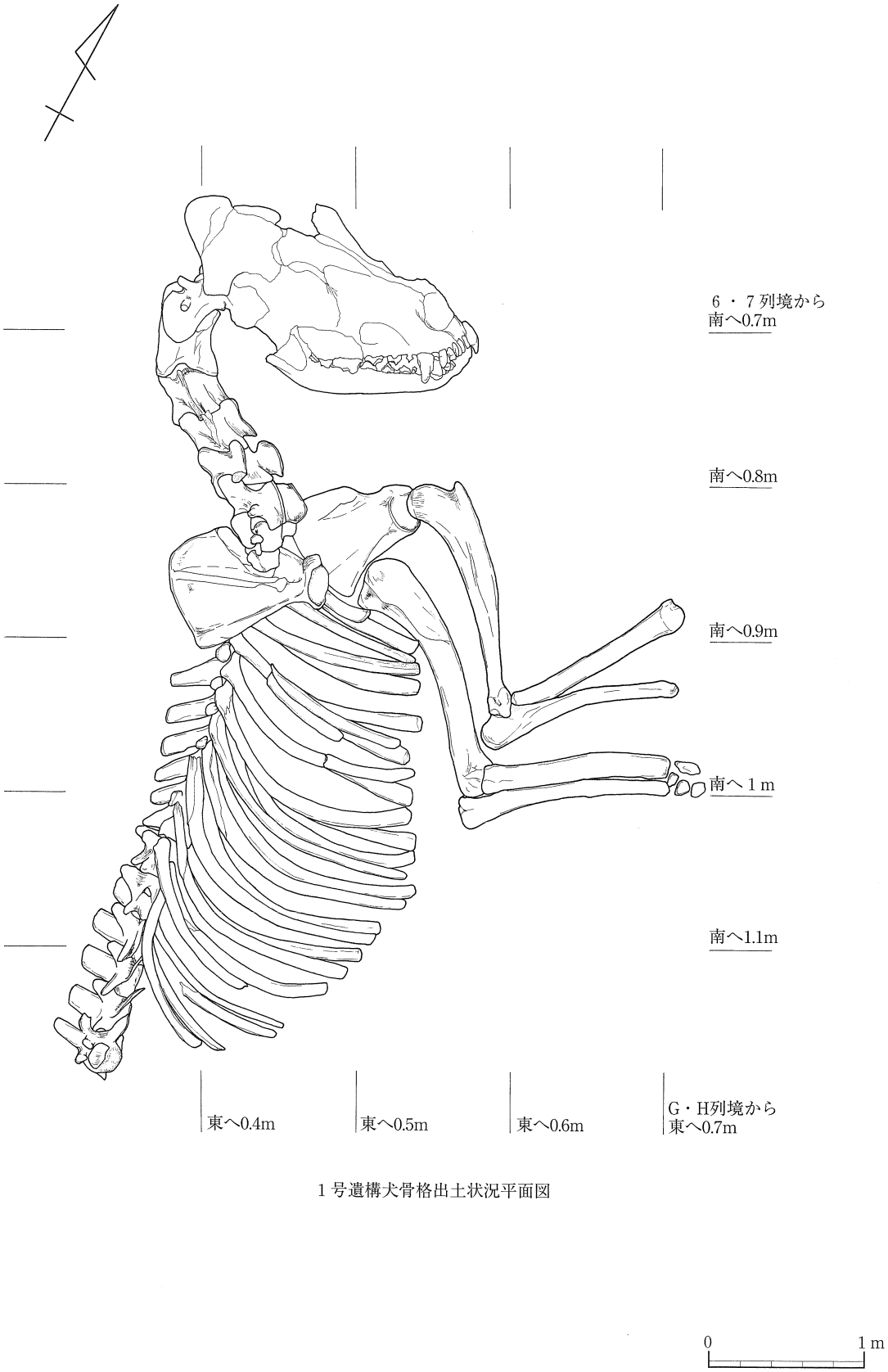
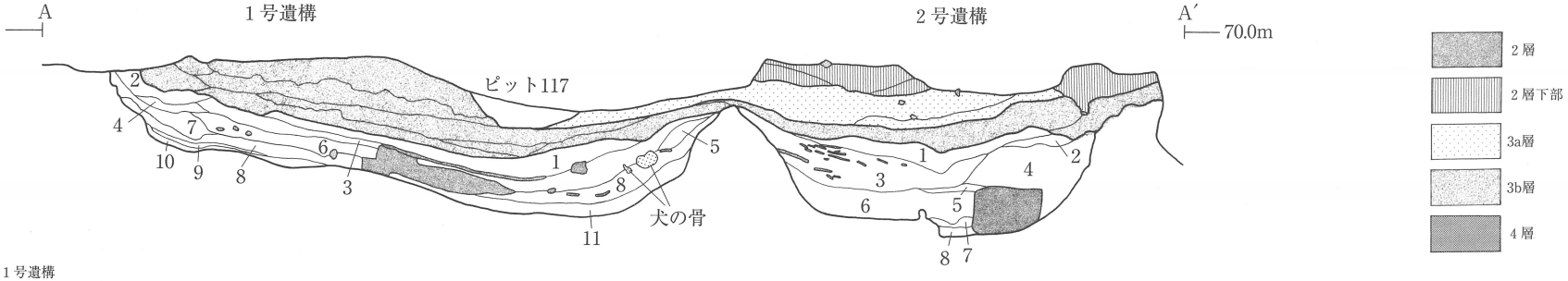


図38　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（4）
Fig.38　Features belonging to phase Ⅱ at BK7（4）



1号遺構犬骨格出土状況平面図

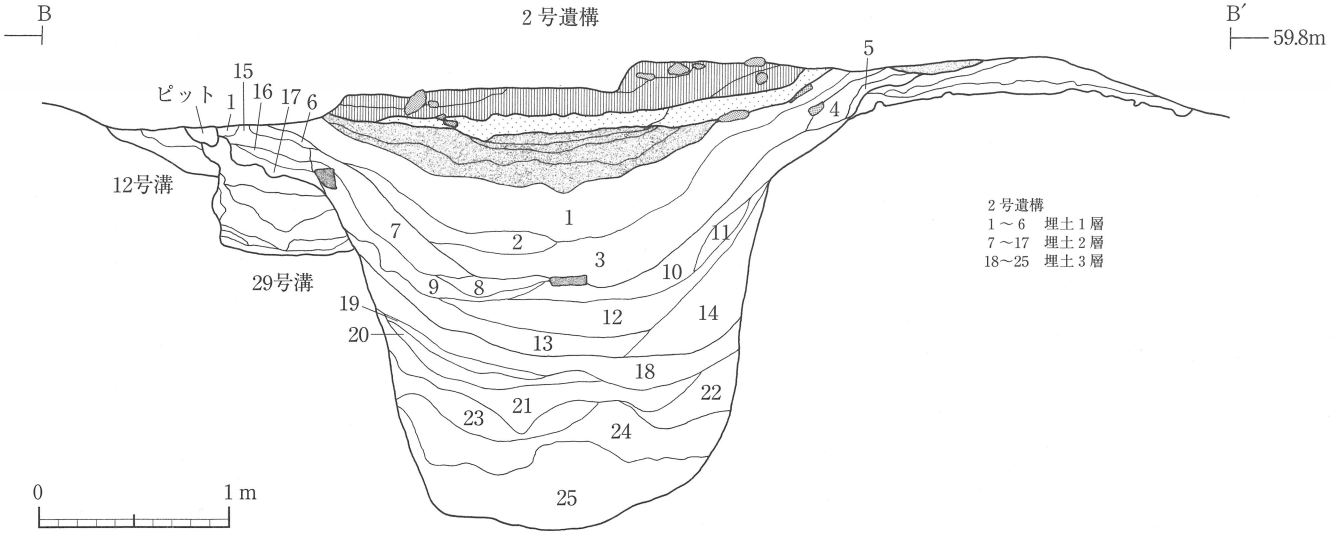
図39　武家屋敷地区第7地点II期の遺構（5）
Fig.39　Features belonging to phase II at BK7（5）



1号遺構
1　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性弱・しまり強　小礫・炭化物をわずかに含む
2　10YR2/1黒色　シルト　粘性弱・しまり弱　木質の繊維をラミナ状に含む
3　5Y4/1灰色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり弱　黄褐色土粒・炭化物をわずかに含む　犬の骨が出土
4　10YR4/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　小礫・炭化物をわずかに含む
5　2.5Y3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　炭化物をわずかに含む
6　5Y2/1黒色　粘土　粘性強・しまり中　炭化物・木質の繊維が層状に堆積する小礫を含む
7　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性強・しまり中　炭化物を多く含む
8　10YR2/2黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　炭化物をわずかに含む　木質の繊維が層状に堆積する
9　7.5Y4/1灰色　粘土　粘性強・しまり中　グライ化した層
10　5Y4/2灰オリーブ色　粘土　粘性強・しまり中　グライ化した層
11　5Y3/1オリーブ黒色　粘土　粘性強・しまり中　グライ化した層

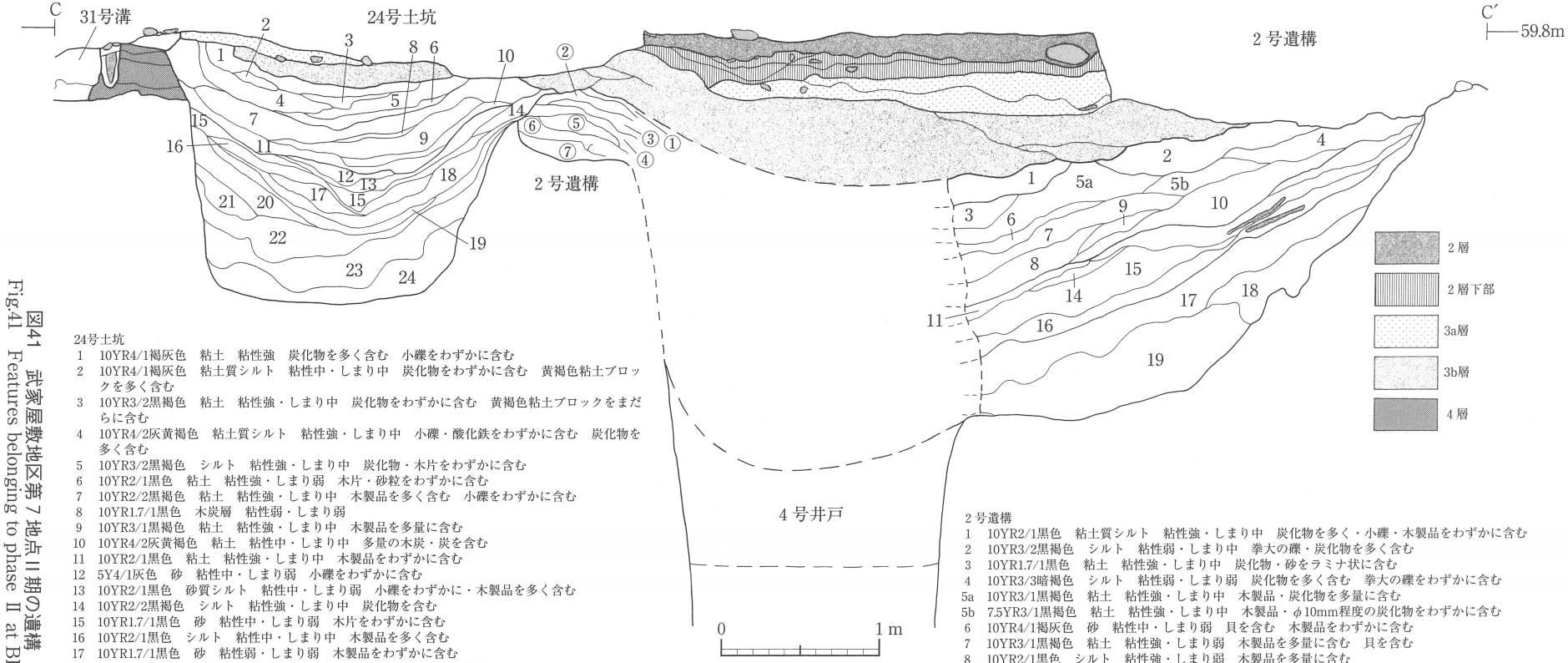
2号遺構　遺物取り上げ層名対応
1　5Y3/1オリーブ黒色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　炭化物を含む
2　10YR3/3暗褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　粗砂をラミナ状に含む
3　5Y2/2オリーブ黒色　粘土　粘性強・しまり中　炭化物・木製品を多量に含む
4　5Y3/1オリーブ黒色　粘土　粘性強・しまり中　炭化物をわずかに含む
5　5Y2/1黒色　粘土　粘性強・しまり中　φ2mm程度の炭化物をわずかに含む
6　7.5Y3/1オリーブ黒色　粘土質シルト　粘性強・しまり弱　小礫・砂を多量に含む　炭化物をわずかに含む
7　7.5Y2/1黒色　粘土　粘性強・しまり中　均質な堆積層
8　2号遺構埋土3

2号遺構
1・2　埋土1～2層
3　埋土2b層
5～8　埋土3層



2号遺構
1～6　埋土1層
7～17　埋土2層
18～25　埋土3層

図40　武家屋敷地区第7地点II期の遺構（6）
Fig.40　Features belonging to phase II at BK7 (6)



24号土坑
1　10YR4/1褐灰色　粘土　粘性強　炭化物を多く含む　小礫をわずかに含む
2　10YR4/1褐灰色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　炭化物をわずかに含む　黄褐色粘土ブロックを多く含む
3　10YR3/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　炭化物をわずかに含む　黄褐色粘土ブロックをまだらに含む
4　10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　小礫・酸化鉄をわずかに含む　炭化物を多く含む
5　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性強・しまり中　炭化物・木片をわずかに含む
6　10YR2/1黒色　粘土　粘性強・しまり弱　木片・砂粒をわずかに含む
7　10YR2/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　木製品を多く含む　小礫をわずかに含む
8　10YR1.7/1黒色　木炭層　粘性弱・しまり弱
9　10YR3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　木製品を多量に含む
10　10YR4/2灰黄褐色　粘土　粘性中・しまり中　多量の木炭・炭を含む
11　10YR2/1黒色　粘土　粘性強・しまり中　木製品をわずかに含む
12　5Y4/1灰色　砂　粘性中・しまり弱　小礫をわずかに含む
13　10YR2/1黒色　砂質シルト　粘性中・しまり弱　小礫をわずかに・木製品を多く含む
14　10YR2/2黒褐色　シルト　粘性強・しまり中　炭化物を含む
15　10YR1.7/1黒色　砂　粘性中・しまり弱　木片をわずかに含む
16　10YR2/1黒色　シルト　粘性中・しまり中　木製品を多く含む
17　10YR1.7/1黒色　砂　粘性弱・しまり弱　木製品をわずかに含む
18　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物をわずかに含む
19　10YR2/1黒色　シルト　粘性強・しまり中　炭化物を多く含む
20　10YR3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　木製品・炭化物を多く含む　地山起源の粘土ブロックをまだらに含む
21　2.5Y3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　地山起源の粘土ブロックをまだらに含む　木製品をわずかに含む
22　10YR2/1黒色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　木製品を多量に含む
23　2.5Y3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　木製品をわずかに含む
24　5Y5/2灰オリーブ色　砂質シルト　粘性強・しまり中

24号土坑		2号遺構	
1～6	埋土1層	1・2	埋土1層
7～11	埋土2層	3～10	埋土2層
12～24	埋土3層	11～16	埋土2b層
		17～19	埋土3層

2号遺構
1　10YR2/1黒色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　炭化物を多く・小礫・木製品をわずかに含む
2　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性弱・しまり中　拳大の礫・炭化物を多く含む
3　10YR1.7/1黒色　粘土　粘性強・しまり中　炭化物・砂をラミナ状に含む
4　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性弱・しまり弱　炭化物を多く含む　拳大の礫をわずかに含む
5a　10YR3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　木製品・炭化物を多量に含む
5b　7.5YR3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　木製品・φ10mm程度の炭化物をわずかに含む
6　10YR4/1褐灰色　砂　粘性中・しまり弱　貝を含む　木製品をわずかに含む
7　10YR3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり弱　木製品を多量に含む　貝を含む
8　10YR2/1黒色　シルト　粘性強・しまり弱　木製品を多量に含む
9　10YR3/1黒褐色　粘土　粘性中・しまり中　木製品をわずかに含む
10　10YR2/3黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　木製品・炭化物を多く含む
11　10YR3/3暗褐色　粘土　粘性強・しまり中　炭化物をわずかに含む
12　10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　ラミナ状の砂・炭化物をわずかに含む
13　10YR4/1褐灰色　シルト　粘性中・しまり弱　木製品・砂のブロックを多く含む
14　10YR2/1黒色　シルト　粘性中・しまり弱　炭化物を多量に含む
15　10YR1.7/1黒色　炭化物層　粘性中・しまり弱　礫をわずかに含む
16　10YR4/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　木製品を多く・炭化物をわずかに含む
17　7.5YR4/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　黄褐色土ブロックをわずかに含む
18　7.5YR4/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　黄褐色土ブロックを多く含む
19　2.5Y6/2灰黄色　粘土　粘性強・しまり中

①　10YR2/1黒色　シルト　粘性弱・しまり中　炭化物をわずかに含む
②　10YR2/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり弱　木製品・炭化物をわずかに含む
③　10YR3/1黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　小礫・木製品をわずかに含む
④　10YR1.7/1黒色　粘土　粘性強・しまり中　小礫をわずかに含む
⑤　10YR3/1黒褐色　砂　粘性中・しまり弱　炭化物をブロック状に含む
⑥　7.5Y3/1オリーブ黒色　粘土　粘性強・しまり中　木製品を含む
⑦　5Y4/1灰色　粘土　粘性強・しまり中

図41　武家屋敷地区第7地点II期の遺構（7）
Fig.41　Features belonging to phase II at BK7 (7)

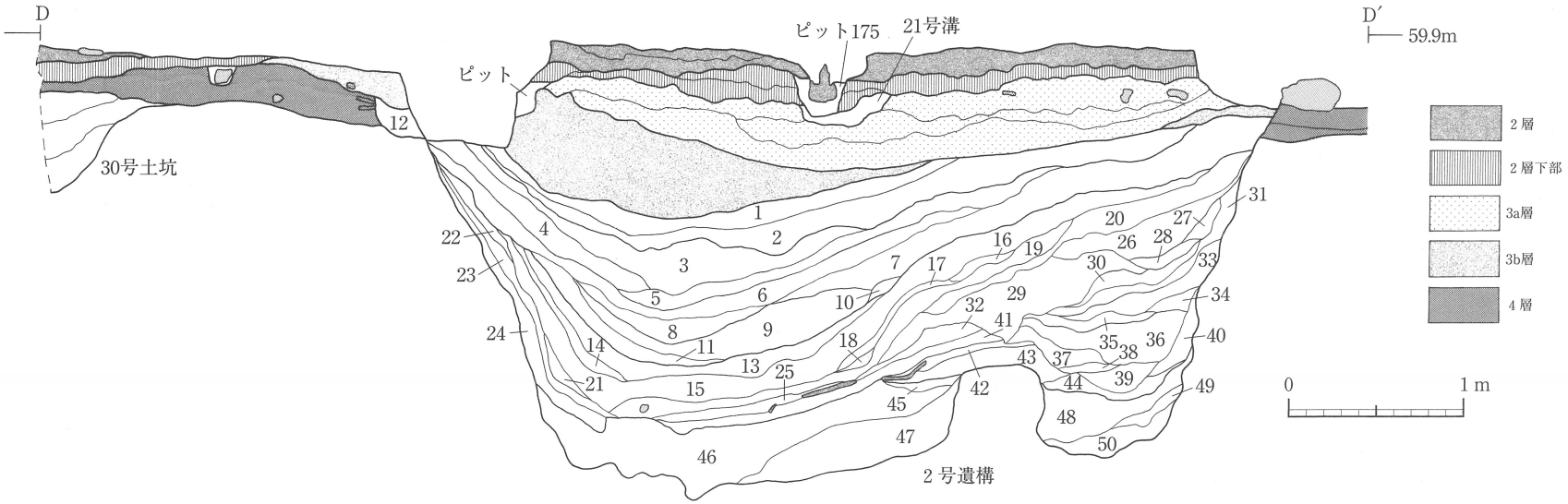
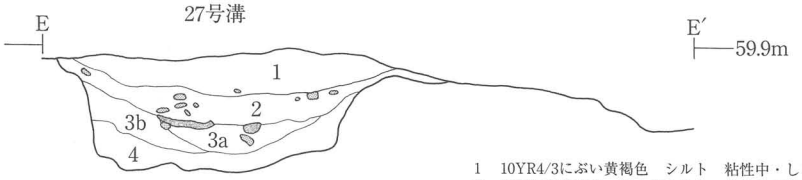


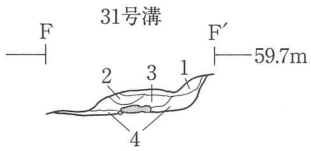
図42　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構（8）
Fig.42　Features belonging to phase Ⅱ at BK7 (8)

2号遺構
1　10YR2/1黒　粘土　粘性強・しまり弱　小礫・炭化物をわずかに含む
2　10YR3/1黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　小礫・木製品をわずかに、炭化物を多く含む
3　10YR1.7/1黒　砂質シルト　粘性強・しまり弱　小礫・木製品をわずかに、炭化物を多く含む
4　10YR2/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり弱　木製品・炭化物を多く含む
5　10YR2/1黒　砂質シルト　粘性強・しまり中　炭化物・木製品を多く含む
6　10YR1.7/1黒　シルト　粘性強・しまり中　炭化物・木製品を多く含む
7　10YR2/3黒褐色　シルト　粘性強・しまり中　黄褐色土ブロック・木製品・小礫を含む　炭化物を多く含む
8　10YR3/1黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物・木製品を多く含む
9　10YR3/1黒褐色　砂　粘性弱・しまり弱　木製品・礫を多く含む
10　10YR3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり弱　黄色粘土をラミナ状に含む
11　10YR2/2黒褐色　砂質シルト　粘性中・しまり弱　木製品を多量に含む
12　2号遺構埋土2層
13　10YR3/3暗褐色　粘土　粘性強・しまり弱　木質をラミナ状に含む　小礫をわずかに含む
15　10YR2/2黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物を多量に含む　炭化層
16　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色　粘土　粘性強・しまり中　炭化物をわずかに含む
17　10YR5/1褐灰色　シルト　粘性中・しまり弱　多量の炭化物を含む
18　10Y3/1オリーブ黒　砂　粘性弱・しまり弱
19　10YR2/1黒　粘土　粘性強・しまり中　炭化物・多量の木製品を含む　種子をわずかに含む
20　2.5Y3/1黒褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱　ラミナ状の砂を含む　礫・木製品をわずかに含む
21　10YR5/1褐灰色　シルト　粘性中・しまり弱　多量の種子を含む　17と同一層
22　2.5Y3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　炭化物・黄褐色粘土を含む
23　10YR2/2黒褐色　シルト　粘性強・しまり弱　木質をラミナ状に含む　炭化物を多く含む
24　10YR2/1黒　粘土　粘性強・しまり弱　多量の木製品を含む
25　7.5YR3/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり弱　木質をラミナ状に含む　木製品をわずかに含む
26　10YR3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり弱　木製品を多量に含む　黄色粘土・砂をわずかに含む
27　2.5Y3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり弱　小礫をわずかに含む
28　5Y3/1黒褐色　砂　粘性弱・しまり弱　木製品をわずかに含む
29　10YR1.4/1黒　シルト　粘性弱・しまり弱　木製品・炭化物を多く含む　黄色粘土をわずかに含む
30　10YR2/1黒　シルト　粘性強・しまり中　炭層をラミナ状に含む　木製品を含む
31　2.5Y3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　黄色粘土・木製品を含む
32　7.5YR3/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり弱　木質をラミナ状に含む　木製品をわずかに含む
33　10YR2/1黒　粘土　粘性強・しまり中　炭層をラミナ状に含む　木製品を含む
34　10YR3/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　炭化物・木製品をわずかに含む
35　10YR2/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　木製品を多く含む
36　2.5Y3/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　木製品・炭化物を多く含む
37　2.5Y3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　木製品・炭化物をわずかに含む
38　2.5Y2/1黒　粘土　粘性強・しまり中　炭化物をわずかに含む
39　2.5Y3/1黒褐色　砂　粘性弱・しまり弱　木製品をわずかに含む
40　5Y4/1灰色　粘土　粘性強・しまり中　黄色粘土・木製品を含む
41　10YR4/2灰黄褐色　粘土　粘性強・しまり弱　木製品を多量に含む
42　10YR3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり弱　下部に黄色粘土をラミナ状に含む
43　10YR3/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり弱　砂・黄色粘土・炭化物を含む
44　2.5Y3/1黒褐色　砂　粘性弱・しまり弱　黄色粘土・炭化物を含む
45　2号遺構埋土3層
46　10YR2/3黒暗褐色　粘土　粘性強・しまり中　炭化物を含む　下部に杭を打ち込んだ痕跡あり
47　10YR5/4黄褐色　粘土　粘性強・しまり中
48　7.5Y2/1黒　粘土　粘性強・しまり弱　黄色粘土をわずかに含む
49　7.5Y2/1黒　粘土　粘性強・しまり弱　黄色粘土を多く含む
50　5Y3/2オリーブ黒　粘土　粘性強・しまり弱　黄色粘土と砂をラミナ状に含む

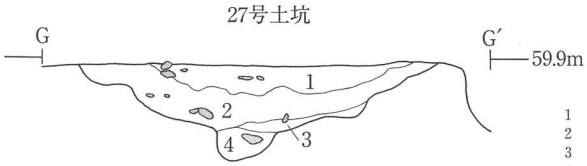
2号遺構
1・2　埋土1層
3～12　埋土2層
13～44　埋土2b層
45～50　埋土3層



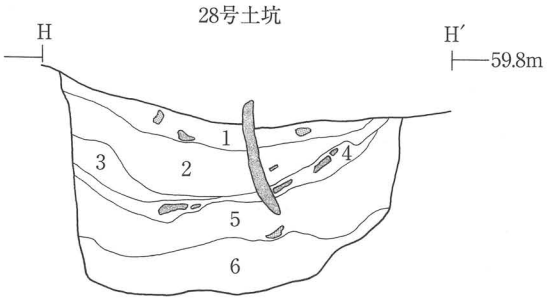
1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物・小礫を含む
2　10YR4/2黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　暗灰黄色土を粒状に含む　黒褐色土を中央部に多く含む　礫・炭化物・酸化鉄を含む
3a　5Y3/1オリーブ黒色　粘土　粘性強・しまり中　灰色粘土を底部に筋状に含む　拳大の礫を含む
3b　5Y3/1灰色　粘土　粘性強・しまり中　黄褐色粘土ブロックを含む　酸化鉄を多く含む　炭化物をわずかに含む
4　7.5Y4/1灰色　粘土　粘性強・しまり中　黒色・灰色粘土を斑状に含む



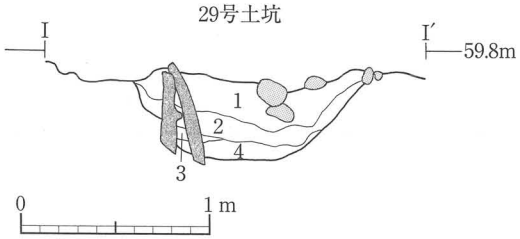
1　2.5Y5/1黒褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり中　木片を多く含む
2　5Y4/1灰色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり中　褐色土を斑状に含む　酸化鉄を含む
3　5Y3/1オリーブ黒色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり中　黄灰色粘土を含む　酸化鉄を少量含む
4　7.5Y4/1灰色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり中　黒褐色土を含む　酸化鉄・礫を含む



1　10YR8/6黄橙色　シルト　粘性弱・しまり強　礫を多く含む
2　2.5Y3/1黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物をわずかに含む
3　10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　炭化物をわずかに含む
4　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物をわずかに含む

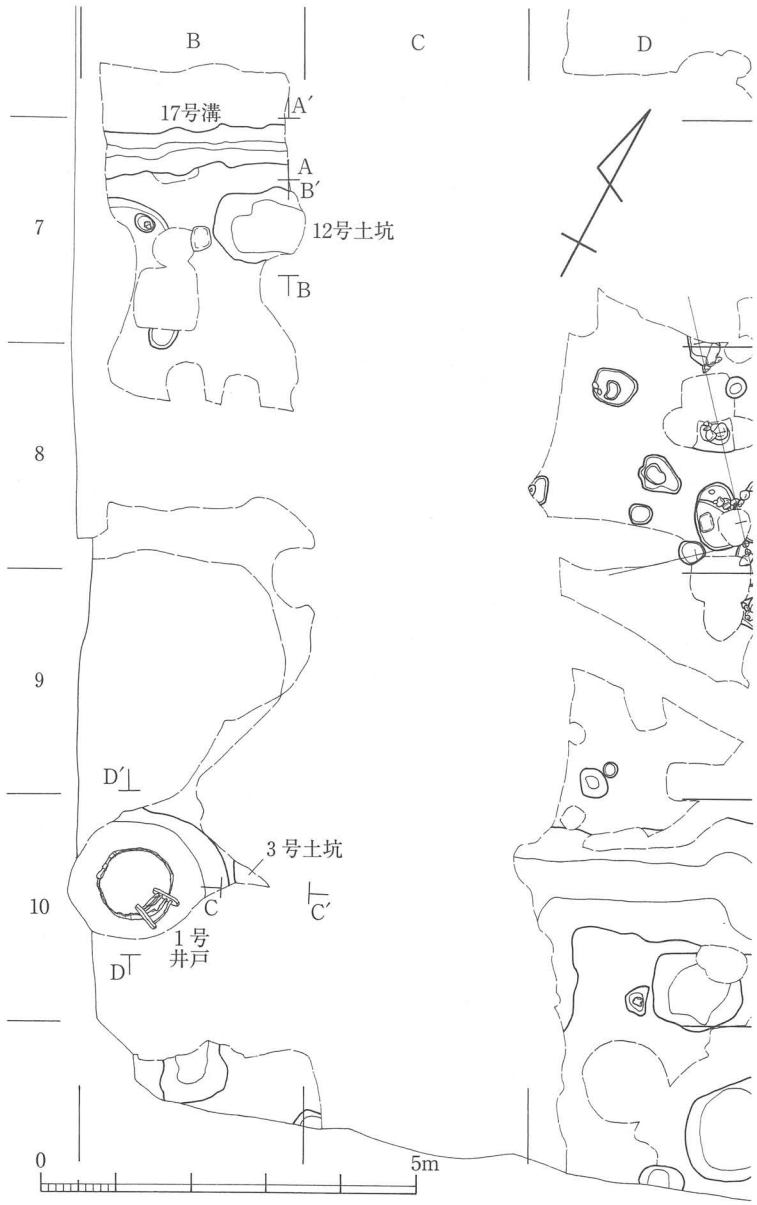


1　2.5Y3/2黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　砂を含む　礫・炭化物を含む
2　2.5Y3/1黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　砂を少量含む　礫・木製品を含む
3　5Y2/1黒色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　砂を含む
4　2.5Y3/1黒色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　木製品を多く含む
5　5Y3/1オリーブ黒色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　木製品を含む
6　7.5Y4/1灰色　シルト質粘土　粘性強・しまり中　灰色粘土を含む

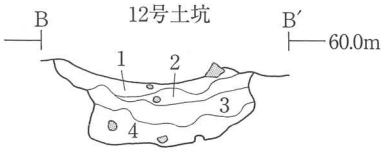


1　2.5Y3/1黒褐色　シルト質粘土　粘性強・しまり中　灰色粘土・褐色土・黄褐色土を含む　炭化物を少量含む
2　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　灰黄褐色土を含む　木製品を多量に含む　炭化物をわずかに含む
3　2.5Y4/1黄灰色　シルト質粘土　粘性強・しまり中　灰色粘土小ブロックを含む
4　2.5Y4/3オリーブ褐色　シルト質粘土　粘性強・しまり中　灰色粘土を筋状に含む　オリーブ褐色粘土の粒子を含む

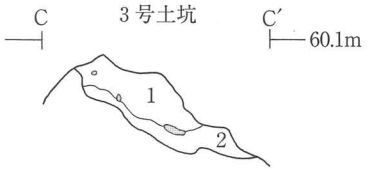
図43　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（9）
Fig.43　Features belonging to phase Ⅱ at BK7 (9)



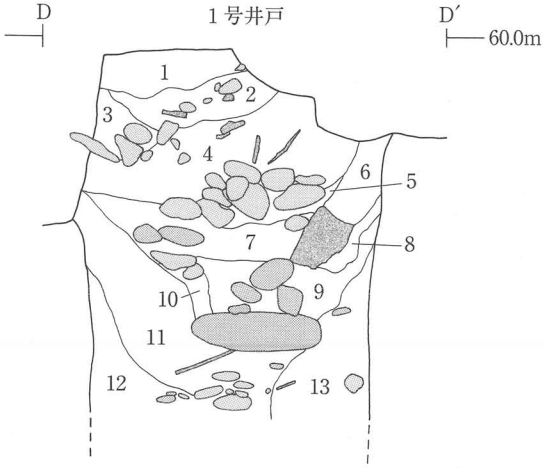
10YR3/2黒褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中
炭化物をわずかに含む　小礫・白色粒子を含む



1　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性やや強・しまり中　炭化物をわずかに含む　黄褐色土粒を含む
2　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物・小礫をわずかに含む　黄褐色土粒を含む
3　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物を多く、小礫・黄褐色土粒をわずかに含む
4　10YR2/2黒褐色　シルト　粘性弱・しまり中　炭化物・小礫・黄褐色土粒をわずかに含む



1　10YR2/2黒褐色　シルト　粘性弱・しまり中　黄橙色土ブロックを含む　炭化物・酸化鉄を少量含む
2　10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　白色粒子・黄褐色土ブロック・炭化物を多く含む

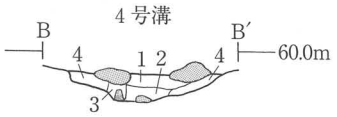


1　10YR3/2黒褐色　砂質シルト　粘性弱・しまりやや強　黄褐色土小ブロック・白色粒子・礫を多く含む　炭化物を少量含む
2　10YR3/3暗褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　黄褐色土を含む　礫を多量に含む　白色粒子・炭化物を少量含む
3　10YR2/3黒褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　礫・木片を含む　炭化物をわずかに含む
4　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　上部に粗砂を含む　礫を多量に含む　黄褐色土小ブロック・炭化物を少量含む
5　5YR3/1オリーブ黒色　粘土　粘性強・しまり中
6　5Y2/2オリーブ黒色　粘土　粘性強・しまり弱　黄褐色粘土ブロック・木片を含む
7　5Y3/2オリーブ黒色　粘土　粘性強・しまり弱　頭大の礫・丸太を含む
8　5Y5/2灰オリーブ色　粘土　粘性強・しまり弱　炭化物を含む
9　5Y4/1灰色　粘土　粘性強・しまり中
10　5Y4/2灰オリーブ色　粘土　粘性強・しまり中　頭大の礫を含む
11　5Y4/1灰色　粘土　粘性強・しまり中　砂ブロックを含む
12　5Y5/2灰オリーブ色　粘土　粘性強・しまり中
13　5Y4/2灰オリーブ色　粘土　粘性強・しまり弱　オリーブ黒色粘土を含む　拳～頭大の礫を含む　木片を少量含む

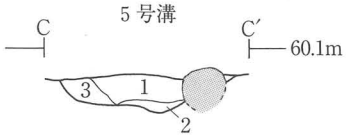
図44　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（10）
Fig.44　Features belonging to phase Ⅱ at BK7（10）

図45　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（11）
Fig.45　Features belonging to phase Ⅱ at BK7（11）

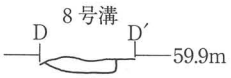
1　10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性中　しまり中　地山起源の黄褐色粘土ブロックを含む　白色粒子・炭化物を含む
2　10YR4/1　褐灰色　粘土質シルト　粘性やや強　しまり中　白色粒子・砂粒を含む



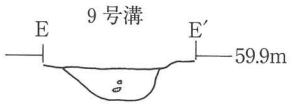
1　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり弱　炭化物・礫を含む
2　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中　しまり中　底部に砂礫を含む　炭化物を含む
3　10R4/6　赤色　粘土質シルト　粘性中　しまりやや強　底部に黒褐色シルトが堆積
4　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱　しまり弱　（掘り方埋土）



1　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物・小礫・褐色粘土ブロックを含む
2　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　上部に砂礫を含む　小礫を含む
3　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性弱・しまり弱　小礫を含む　堀方埋土

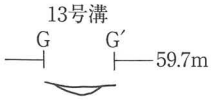


10YR5/3にぶい黄褐色　シルト　粘性弱・しまり中　褐色土ブロックを含む　小礫・炭化物をわずかに含む

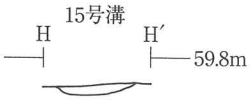


10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　酸化鉄が斑状に沈着　炭化物をわずかに含む

1　7.5YR4/2灰褐色　シルト　粘性中・しまり中　黄褐色土ブロックを含む
2　10YR3/2黒褐色　粘土　粘性きわめて強・しまり中　炭化物をわずかに含む
3　10YR4/1褐灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　灰褐色の砂を層状に含む



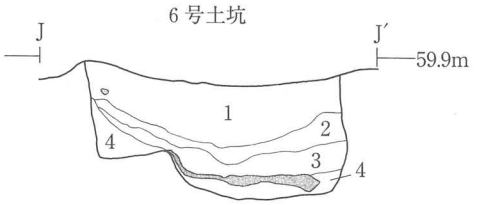
10YR4/4褐色　砂質シルト　粘性ほとんどなし・しまり弱　炭化物を多く含む



10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　黄褐色土をブロック状に含む　白色粒子・炭化物・小礫をわずかに含む

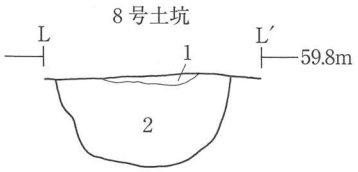
10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性弱・しまり中　炭化物を含む

図46　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（12）
Fig.46　Features belonging to phase Ⅱ at BK7（12）

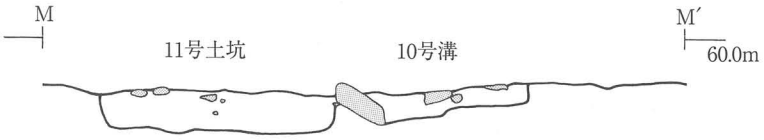


1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり強　小礫を多く含む　炭化物を若干含む　黄褐色粘土ブロックをまだらに含む
2　10YR4/4褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　酸化鉄を含む
3　10YR5/1褐灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　黄褐色粘土をブロック状にわずかに含む
4　7.5Y4/1灰色　シルト　粘性強・しまり中　グライ化層

10YR3/2黒褐色　シルト　粘性弱・しまり中　上部に炭化物・礫を多く含む　木片を含む　下部に黄褐色土を少量含む

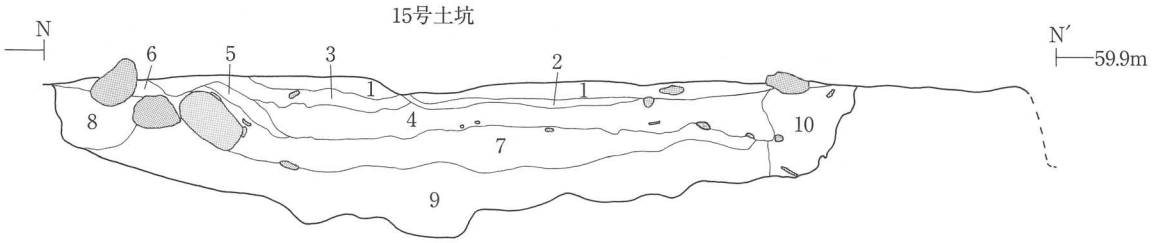


1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物を含む
2　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり弱　炭化物・小石を含む

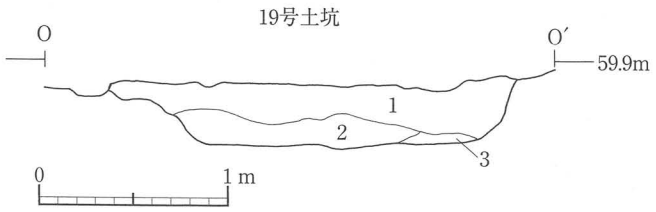


11号土坑
10YR4/2　灰黄褐色　シルト　粘性中　しまり中　褐色シルトブロックを含む　炭化物を少量含む　礫を含む

10号溝
10YR3/2黒褐色　粘土　粘性強　しまり中　炭化物をわずかに含む



1　10YR5/1褐灰色　シルト　粘性弱・しまり強　黄褐色土ブロックを多く含む　小礫を若干含む
2　10YR3/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　木片を薄く層全体に含む　黄褐色土ブロックをわずかに含む
3　10YR3/1黒褐色　シルト　粘性弱・しまり強　小礫・炭化物・黄褐色土ブロックをわずかに含む
4　10YR3/3暗褐色　粘土　粘性強・しまり中　黄褐色土粒・粘土ブロックをまだらに含む　炭化物・小礫をわずかに含む
5　10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　炭化物・黄褐色土ブロックをわずかに含む　黄褐色粘土ブロックを多量に含む
6　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性弱・しまり強　酸化鉄を多く含む
7　10YR3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　黄褐色粘土ブロックを含む　小礫・炭化物をわずかに含む
8　10YR3/1黒褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　下部に多量の木製品を含む　炭化物を多く含む　黄褐色土粒をわずかに含む
9　7.5GY5/1緑灰色　粘土　粘性きわめて強・しまり中　オリーブ黒色土ブロックを多く含む
10　7.5Y3/1オリーブ黒色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　明黄褐色土ブロック・炭化物をわずかに含む



1　10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　炭化物・白色粒子・小礫を若干含む
2　10YR4/1褐灰色　シルト　粘性中・しまり中　黄褐色粘土ブロックを多く含む　炭化物をわずかに含む
3　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　浅黄橙色粘土ブロックを多く含む

図47　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（13）
Fig.47　Features belonging to phase Ⅱ at BK7（13）

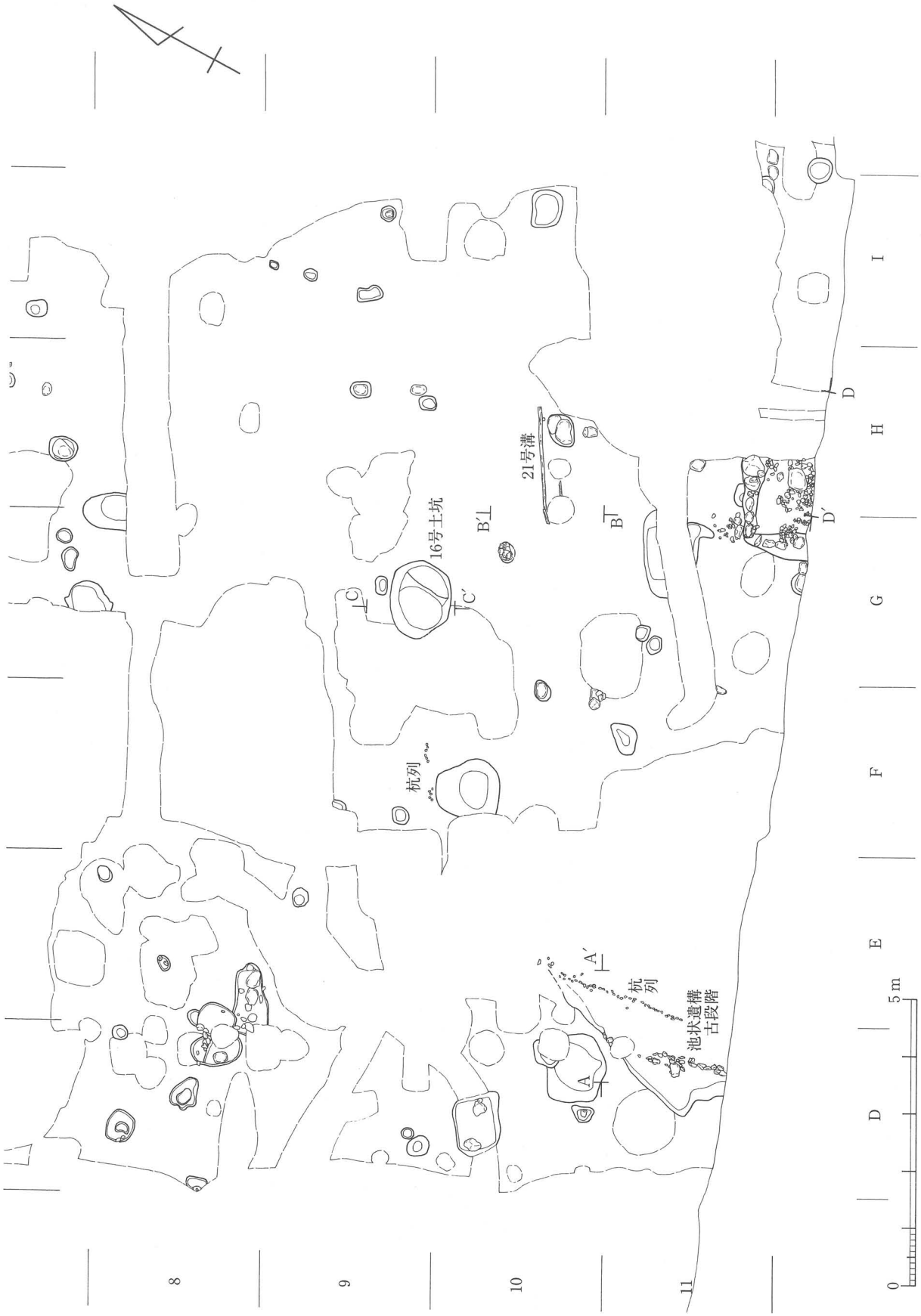
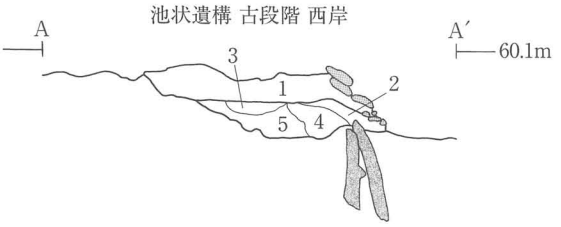
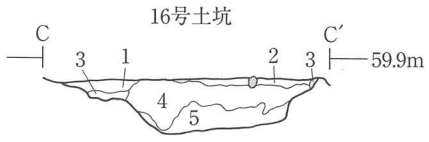


図48　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（14）
Fig.48　Features belonging to phase Ⅱ at BK7（14）

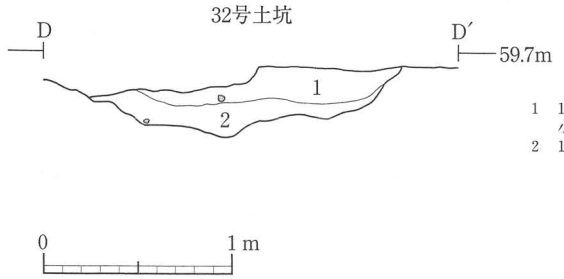


1　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性弱・しまりやや強　黄褐色粘土ブロックをまだらに含む　炭化物をわずかに含む　池状遺構新段階西岸堀方埋土
2　10YR6/4にぶい黄橙色　粘土　粘性強・しまり中　オリーブ灰色粘土小ブロック・赤褐色土粒を多く含む
3　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性やや強・しまり強　オリーブ灰色土小ブロック・炭化物を少量含む　褐色土粒・白色粒子を含む
4　2.5Y3/2黒褐色　シルト質粘土　粘性強・しまりやや強　オリーブ灰色粘土ブロックを含む　酸化鉄を多く含む
5　5Y3/1オリーブ黒色　粘土　粘性強・しまりやや強　黄褐色土粒・酸化鉄・白色粒子を含む

10YR2/1黒　粘土　粘性強・しまり中　炭化物をわずかに含む



1　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性弱・しまり強　小礫・炭化物をわずかに含む
2　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性弱・しまり強　小礫を含む　炭化物を若干含む
3　5Y3/1オリーブ黒色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　小礫・黄褐色土粒ブロックをわずかに含む
4　5Y3/2オリーブ黒色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　小礫・炭化物をわずかに含む
5　5Y4/1灰色　シルト　粘性強・しまりやや強　4層に類似した土をまだらに含む　鉄分を若干含む



1　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　小礫・炭化物をわずかに含む　黄褐色粘土小ブロックをわずかに含む
2　10YR4/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　小礫・炭化物をわずかに含む

図49　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（15）
Fig.49　Features belonging to phase Ⅱ at BK7（15）

北側も撹乱で一部壊されているが南北の長さ290cm程度で、深さは80cmである。埋土は、黒褐色を基調とする、有機質を多く含むものである。様々な種類の遺物が大量に出土している。特に、木製品が多い。木簡も８点出土している。特筆されることとして、東よりの場所から、犬の骨格が、解剖学的位置を留めたまま検出された（図39）。前肢の先端付近と、骨盤から後肢部分が欠けている。１号遺構の中央部に延びる、東西方向の撹乱によって壊されてしまったことによる。本来は全身の骨格がそろっていたものと考えられる。解剖学的位置を留めていることから、死亡した犬をそのまま埋めたものと考えられる。新たに埋納用の穴を掘った痕跡は確認できなかった。埋土の中に、他の遺物と同じように埋もれており、ゴミと一緒に廃棄されたような出土状況である。

【２号遺構】（図38・40・41・42、図版19・20・21）

Ｇ・Ｈ－７～11区で検出された、ゴミ穴と考えられる大規模な遺構である。基本層４層上面から掘り込まれており、ほとんど埋まった後に、上面に３ｂ層の整地が行われていることから、Ⅱ期に属する遺構である。年号を記載した木簡が多数出土しており、享保５年（1720）を前後する頃に使われていたと考えられる。

南東隅のＨ－10・11区に大規模な撹乱があり、この部分は大きく壊されている。東辺は、Ⅰ期の29号溝を切っている。先述のように、１号遺構と接しているが、両者はほぼ同時に使われていたと考えられる。南西側は24号土坑と接している。２号遺構の埋土を切って、24号土坑が造られており、24号土坑が新しい。ただし、出土遺物に違いは見られず、２号遺構がほぼ埋没した後、ほとんど間を空けずに24号土坑が造られたものと考えられる。２号遺構の底面からは、４号井戸が検出されている。４号井戸が完全に埋まってから改めて２号遺構全体を掘ったのか、４号井戸が埋まらない状態で周囲を掘り広げていったのか、どちらであったのかは明らかにはできていない。４号井戸の埋土は、埋没後に収縮して陥没していったと考えられる。そのため４号井戸の埋土と、２号遺構の埋土との関係が、明瞭につかめなかった。４号井戸を使用しなくなってから、さほど時間を空けずに２号遺構が造られた可能性が高いものと考えておきたい。

２号遺構の全体形状は、逆Ｌ字に近い平面形状を呈する。南北の最大長12.8m、南側での東西の最大長7.2mとなる。最も深いところで、約250cmの深さがある。底面には激しい凹凸があり、複数の土坑が連接したような形状を示している。壁は、いずれの場所でも急激に落ち込んでいる。このような形状が、ゴミ穴として使うために掘られた結果であるのか、あるいは別な目的で掘られたものであるのかは、はっきりしない。土取りなどの目的で掘られた穴が、ゴミ穴に転用された可能性もある。

埋土には、様々な遺物が含まれ、廃棄単位ごとに区分することも可能な状態であった。微細遺物の採集のために、Ｇ－11区の南北方向のセクションから、ブロックサンプルを採集した。それ以外の遺物の取り上げは、大きな段階として、埋土１層・２層・２ｂ層・３層と区分して行った。なお、東西方向のセクションの内、Ｇ－11区の部分は、断面図が作成できていない。２号遺構では、各所にベルトを設定して掘り進んでいったが、最後に残ったのがこの場所であった。突き出る形でベルトを残したところ、下部の余り締まっていない埋土がベルトの重みで変形し、ベルトが陥没し倒壊してしまったため（図版20－５）、断面図が作成できなかったものである。

有機質遺物が、とりわけ大量に含まれているのは、埋土２層と埋土２ｂ層である。鉋屑のような木材の削りカスが層をなしている部分もあったが、これらは遺物として取り上げてはいない。埋土１層は、埋土２層と比べると有機質遺物は比較的少ない。埋土３層は、全体に遺物はあまり含まれていないが、板材など比較的大型の木材は、埋土３層から出土している場合が多い。

出土遺物には、近世遺跡から出土する、あらゆる種類が含まれていると言ってよいほど、様々な種類の遺物がある。それらの遺物量も膨大で、一つの遺構から出土した遺物量としては、これまでの川内地区の調査では、最も多い。食物残滓も大量に捨てられており、種子や貝・骨も大量に含まれていた。ハエの蛹が密集している状態も検出されており、植物残滓などが腐敗したところに発生したものと思われる。食物残滓などの腐敗臭が漂い、ハエが群れをなしてたかっていた様子が想像される。

木簡は545点、墨書ある木製品も40点と、これまでの調査では最も多い量が出土している。木簡の記載内容から見て、これらは二の丸に運び込まれた物資に付けられていた荷札と考えられるものが主体を占める。いずれも破片数であるが、土師質土器Ⅲは１万５千点以上、白木の箸は２万５千点あまりと、膨大な量が出土している。二の丸で行われた宴席で利用されたものが、まとめて捨てられたものと考えて良い。このような出土遺物の様相は、武家屋敷地から出たゴミではなく、二の丸のゴミが運び込まれたことを示すものと言える。

【池状遺構古段階】（図48・49、図版22）

Ｄ・Ｅ－10・11区で検出した、池状遺構の古い段階の、西岸と考えられる遺構である。池状遺構の新段階は、Ⅲ期に下るものと考えられる。東岸は、一時期のみが検出され、新段階のものと考えられる。一方、西岸では、新段階の石組の下層に、もう一段階の石列、杭列、石敷が確認された。新段階の石組とほぼ同じ位置で検出されており、これを古段階とした。

古段階については、西側の岸が検出されただけとなる。東側については、新段階に造り替えられる際に、古い段階の岸は壊されたものと考えられる。底面も、新段階に造り替えられた際に、掘り下げられたと思われる。北側は撹乱によって破壊されている。Ⅱ期の28号土坑、29号土坑を切って造られている。

古段階の西岸に伴う掘り方は、途中で方向を変え、多角形状に掘られている。北東側の延びは、撹乱もあり明確でない。確認できた掘り方の深さは20cm程度である。掘り方内の西よりの所に、石列が1.6mの長さで直線的に延びている。10～15cm程度の大きさの川原石を並べたような形をしており、石を積み上げたような状況ではない。方向はＮ－19°－Ｗである。石列の東側にほぼ平行するように、2.7mの長さで杭列が確認されている。位置関係から、池状遺構古段階の西岸の護岸に関わるものと考えられる。杭列の東側には、10cm未満の小円礫が敷かれていた。杭列はほぼ直線的に延び、方向はＮ－９°－Ｗである。杭の形状は、丸材や丸材を割ったもので、太さ７～10cm程度である。打ち込まれた部分の長さは、50～60cm程度である。なおＦ－10区に、1.05mの長さで、東西方向に延びる杭列が確認された。池状遺構古段階西岸の杭列と関連するものである可能性も考えられるが、確実な関係はつかめなかった。

古段階の掘り方埋土からは、磁器、陶器、土師質・瓦質土器などが出土しているが、量は少ない。陶器には、18世紀代と考えられるものもあるが、細片のため詳しいことは判らない。

【７号柱列】（図45・46、図版23）

Ｄ・Ｅ－２区で検出された掘立柱列である。４号溝の南側に沿って、平行して造られており、同時に存在した可能性が高いと考え、４号溝と同じⅡ期とした。方向はＮ－25°－Ｗである。３基の柱穴が検出されており、柱間寸法は７尺４寸と、やや特殊な柱間寸法である。柱２が一部撹乱で壊されている。東側は、これ以上延びていかないようである。西側は、米軍共同溝による大規模な撹乱もあり、これより先の延びは不明である。柱穴の形状は、個々の差が大きい。柱１は、一辺20cm程度のほぼ方形を呈する。柱３は、長軸38cmの不整形である。深さは18～25cm程度である。柱痕跡は、柱３で太さ10cm程度のものが確認されている。遺物は、瓦の細片が出土しているだけである。

【４号溝】（図45・46、図版23）

Ｄ～Ｆ－２区で検出された。２層下部の下位で検出されていることからⅡ期に含めた。東西に延びる溝で、西側をⅢ期の２号溝に切られている。東側は撹乱やピットによって切られているが、鍵の手状に北側に曲がり、調査区外へ延びていく。８号土坑との切り合い関係は、両者が重なる部分に撹乱があり判らない。残存している東西の長さ約7.9m、幅約80cm、深さ約14cmである。東西方向は残存箇所で、Ｎ－64°－Ｅである。底面の標高は、西側で59.95m前後、東側で59.83m前後と、西から東に流れていたものと考えられる。Ｅ・Ｆ列境で５号溝と接続し、一連の溝であると考えられる。溝の肩の部分には人頭大の礫が置かれている箇所があり、石組溝であったことが推測される。また、石の抜き取り痕と考えられるピットも確認される。加えて、４号溝の南岸では、一部に

木材が据えられている箇所があった。この木材は保存状態が良くないため、木樋か、あるいは護岸の板材であったのか、はっきりしない。一部では、木材の上に石組が重なって検出されている。このことから、新旧２時期に分かれ、改修して石組溝とした可能性が考えられる。出土遺物には、陶磁器類、瓦、木製品などがある。陶器では大堀相馬産の糠白釉の中型丸碗や、青土瓶などが出土しており、19世紀前葉頃と思われる。出土遺物からは、Ⅱ期の中でも、最も新しい段階の遺構であると考えられる。

【５号溝】（図45・46、図版23）

Ｅ・Ｆ－２・３区で検出された。ピット68を切っている。南北方向に走る溝で、Ｅ・Ｆ－２区で４号溝と連結し、４号溝と一連の溝になる。一部に撹乱で破壊されている箇所があり、南端は途中で途切れ、確認できなかった。人頭大の礫が据えられている箇所があり、４号溝と同様に、石組溝であったと考えられる。残存する南北長約3.3m、最大幅92cm、深さ約20cmである。遺物は、陶磁器類がわずかに出土している。陶器では、灯明皿や大堀相馬産の糠白釉の土瓶などの破片がみられ、19世紀前葉頃と思われる。４号溝と同じく、Ⅱ期の中でも、最も新しい段階の遺構であると考えられる。

【８号溝】（図45・46、図版23・25）

南北方向に延びる素掘りの溝で、Ｈ－４～６区で検出された。ピット42と46に切られている。南北両端は撹乱によって壊されており、その続きは不明である。中央部付近も一部撹乱によって破壊されている。残存する南北長約3.5m、上幅約32cm、下幅20～25cm、深さ約８cmで、方向はＮ－28°－Ｗである。底面には細かな凹凸があるため、どちらの方向に流れたかは不明である。遺物は出土していない。すぐ西側には23号溝が位置しており、ほぼ同規模で同じ方向に並んでいるため、造り替えられた可能性もある。遺構の性格は不明である。２層より下位で検出されているが、この場所には２層下部や４層などが分布しないため、掘り込み面は特定できなかった。後述する23号溝や、それと関連があると思われる16号溝と、溝の方向や形状が類似しており、大きくは同じ段階に属すると考えられる。16号溝の掘り込み面が２層下部の下位であることから、８号溝も大きくは同じ時期のⅡ期に相当するものと推測される。

【９号溝】（図45・46、図版24）

Ｆ－３・４区で検出された素掘りの溝である。２層下部の下位から掘り込まれており、Ⅱ期のものと考えられる。Ⅲ期の４号建物の柱２に切られている。西側でほぼ直角に屈曲しており、南方向と東方向に向かうが、両端は撹乱によって破壊されており、続きを検出することはできなかった。９号溝の東方向には、Ｇ－３区に15号溝が位置しており、９号溝が15号溝に続いていく可能性もある。しかし、両者の間は10号溝に切られているため、つながりは不明である。また、これらの溝が重複する部分が、18号土坑の埋土上にあったため、18号土坑と９号溝、あるいは15号溝の埋土とを認識することが非常に難しく、溝のつながりを確認することはできなかった。上幅約60cm、下幅約30～35cm、深さ約16cmである。遺物は、磁器、瓦、土師質土器などがごくわすか出土しているが、年代が明らかになるようなものはなかった。

【10号溝】（図45・46・47、図版24）

Ｆ～Ｈ－２～４区で検出された。２層下部の下位から掘り込まれており、Ⅱ期に属する。Ｆ－４区、Ｇ－２区、Ｇ－４区、Ｈ－２区の３ヶ所で、ほぼ直角に屈曲する。またＦ－４区には、二股に分岐する箇所がみられる。北側は調査区外に続き、分岐した西端と南端は撹乱によって破壊されており、その続きを確認することはできなかった。Ⅱ期の15号溝、18号土坑、21号土坑、22号土坑を切っており、一部撹乱によって壊されている箇所がある。溝の上幅35～65cmで、北端では上幅100cm程に広くなる。下幅は15～45cm、深さ約14cmである。東西方向のＧ・Ｈ－２区の東西方向の部分はＮ－23°－Ｅ、Ｇ－２～４区の南北方向の部分はＮ－19°－Ｗで、Ｆ・Ｇ－４区の東西方向部分はＮ－30°－Ｗである。溝の底面には、部分的に大小の円礫がみられる箇所があった。これらの礫は溝全体に渡るものではなく、場所による粗密の差が大きい。特に密集する部分は、溝の内部に、礫を詰め

込んだような状況を呈している。礫が密集している箇所は、その下位に18号土坑や21号土坑が存在している場所にあたる。このことから、土坑の埋土にあたり、底面が柔らかい部分に礫を敷いている可能性が考えられる。しかし、これらの礫が何を目的としていたのかや、溝の用途などについては明らかにはできなかった。遺物は、陶磁器類、瓦などが若干出土している。陶磁器はおおよそ18世紀代のものと考えられるが、植木鉢や鉄釉甕など19世紀に下る可能性がある陶器などもわずかにみられる。

【13号溝】（図45・46、図版24）

Ⅰ－２区で検出された。南北方向に延びる素掘りの溝である。北端は調査区外に延び、南端は撹乱によって破壊されており、続きは不明である。２層の下面から掘り込まれているが、２層下部は存在しない箇所であるため、厳密な掘り込み面はわかならい。南北の残存長約2.6m、上幅20～25cm、下幅５～15cm、深さ約５cmで、方向はN－23°－Wである。下に重なって12号溝が位置する。12号溝の埋土上面は、中心付近がやや窪んでおり、そこに造られた小規模な溝である。窪んだところの排水を目的とする溝であろうか。12号溝より新しいため、Ⅱ期の可能性が高いものと考えたが、Ⅰ期に遡る可能性も残る。遺物は出土していない。なお、13号溝の周囲を含む、12号溝中央部の埋土上面には、礫がやや集中して分布していた。12号溝埋土上面の、地盤が緩い部分に敷かれた可能性がある。

【15号溝】（図45・46、図版25）

G－２・３区で検出された素掘りの溝である。G－３区でほぼ直角に屈曲すると思われるが、屈曲部分は撹乱によって破壊されている。11号土坑、18号土坑、19号土坑、22号土坑を切っている。北端、西端ともに10号溝によって切られている。北端の続きは不明である。西端では、10号溝をはさんだ西側に９号溝が位置するため、これにつながっていく可能性がある。ただし、これらの遺構が18号土坑の埋土上にあるため、埋土の識別が難しく、さらに10号溝に切られていたため、９号溝と15号溝のつながりを明確にすることはできなかった。南北部分の方向は、N－25°－Wである。南北の残存長約3.2m、上幅30～50cm、下幅15～30cm、深さは約４cmとかなり浅い。掘り込み面を確認することができなかったが、Ⅱ期の10号溝より古く、同じくⅡ期の11号土坑や、19号土坑などより新しいことから、15号溝もⅡ期に属するものと考えられる。遺物は陶磁器、瓦などが若干出土している程度である。

【16号溝】（図45・46、図版25）

南北方向に延びる溝で、H－３・４区で検出された。２層下部の下位から掘り込まれており、掘り込み面からⅡ期に所属するものと考えられる。北端はピット104によって切られ、その続きは明確でない。南端は撹乱によって壊されており、撹乱を隔てたH－５・６区には、16号溝のほぼ延長上に23号溝が位置している。同じ方向を示していることから、16号溝とつながる可能性があるが、詳細はわからなかった。残存する南北長約1.7m、上幅15～25cm、下幅５～15cm、深さ約４cmとかなり浅い。方向はN－29°－Wである。底面は場所によって凹凸があり、流れの方向は不明である。遺物は出土していない。

【17号溝】（図44、図版26）

B－７区で検出された東西方向に延びる素掘りの溝である。２層下部下面から掘り込まれており、大堀相馬産の灰釉碗や京焼系陶器など、18世紀代の遺物が出土している。これらの点から、Ⅱ期の遺構と判断した。東西とも撹乱によって破壊されており、その先の延びは不明である。残存していた長さは2.5mである。ほぼ直線的に延びており、方向はN－26.5°－Wである。上幅50～65cm、下幅10～15cm、深さ８cm前後で浅く、緩やかに落ち込んでいる。底面レベルは東側がわずかに低く、西から東へ流れていた可能性がある。遺物は、磁器、陶器、土師質・瓦質土器が出土しているが、量は少ない。先述のように、陶器には18世紀代のものが含まれる。

【21号溝】（図48・49、図版26）

G・H－10区で検出した東西方向の溝である。３ａ層上面から掘り込んでおり、２層下部に覆われていること

から、Ⅱ期の遺構である。20号土坑埋土でもある3a層が堆積した後、3a層を掘り込んで造られている。底面の南北両側に据えられた木材を検出したことで、溝が存在することが判明した。護岸のためのものと考えられるが、保存状態が良くないため、木材の本来の形状などは判らない。南北両側の木材の幅は約20cmである。北側の木材は、東西の長さ2.1m分が残存していた。南側はピットで壊された部分が多く、わずかしか残されていない。方向はN－31°－Wである。掘り方は、平面精査では把握できず、断面でのみ確認できた。上幅52cm、下幅30cm、深さ20cmで、断面形状は逆台形に近い。遺物は、磁器と土師質土器が、わずかに出土しているだけである。

【22号溝】（図35・36・38、図版26）

調査区の東端を南北に延びる溝である。北側のⅠ・J－2・3区と、南側のⅠ－10～12区において検出した。調査区東側の近代以降に造られた段差によって削平されており、残存状態は良くない。さらに、各所で撹乱によって壊されているが、北側では長さ5.7m、南側では長さ5.7mが検出された。直線的に延びていた場合、5・6列のわずかに残されている部分で検出されても良い位置関係にあるが、検出できていない。もともと存在しなかったのか、この区域では途切れていたのか明確にはできなかった。中間の検出できていない部分は問題が残るが、北側と南側の検出された部分は、ほぼ直線的につながって延びており、方向はN－26°－Wである。ほとんどの区域で、撹乱によって東側が破壊されており、幅は判明しない。調査区南壁に近い場所は両側が残存しており、ここでは上幅75～85cm、下幅42～60cmである。深さは50cm前後で、断面形状は逆台形を呈する。底面のレベルは、北壁際と南壁際で差がほとんど無く、流れていた向きは不明である。

22号溝は、撹乱などによって、2層下部や4層との関係は把握できなかった。出土遺物で、時期を限定できるようなものもない。そのため、区画溝と考えられるⅠ期の12号溝を、東にずらして造り直した可能性を考え、当期に含めたもので、異なる時期に動く可能性も残っている。Ⅱ期の2号遺構などが造られていた時期には、以前の12号溝の位置に重なることから、区画がずれていた可能性が高いと思われる。22号溝は、12号溝より東側に2mほどずれた位置にあり、位置関係としてはふさわしい。そのため、このⅡ期に、12号溝をずらして造り直した可能性が高いものと考えた。

磁器、陶器、土師質土器、瓦などが出土しているが、遺物量はわずかで、時期を決定できるようなものはない。軟質施釉土器が1点出土している。幕末に出現する焙烙とは異なるのか、詳細は判らない。犬を象った土人形が1点出土している。

【23号溝】（図45、図版25）

南北方向に延びる素掘りの溝で、H－5・6区で検出されている。Ⅲ期の1号建物の柱22～25、同じくⅢ期の2号建物の柱12、ピット46に切られている。南端は削平によって途切れ、北側は撹乱によって壊されている。撹乱の北側延長上には16号溝が同じ方向に位置しており、一連の溝となる可能性があるが、詳細はわからない。残存する南北長約3.8m、上幅30～45cm、下幅20～30cm、深さ約6cmで、方向はN－31°－Wである。ピットなどで切られている箇所が多いため、底面の高低差が不明確で、どちらの方向に流れていたかはわからなかった。すぐ東側には8号溝が位置している。これらは、ほぼ同規模で同じ方向に並んでいるため、造り替えられた可能性があるが、詳細は不明である。2層より下位で検出されていることは確実であるが、2層下部や4層などが分布しない場所であるため、掘り込み面は断定できなかった。8号溝や16号溝は、23号溝と方向や形状が類似しており、大きな段階は同じ頃ととらえて差し支えないものと推測される。16号溝の掘り込み面が2層下部の下位であることから、23号溝も大きくは同じ時期のⅡ期に相当するのではないかと考えられる。遺物は、陶器、瓦などが、ごくわずかに出土しているだけである。

【27号溝】（図38・43、図版27）

D～F－10区で検出した素掘りの溝で、Ⅱ期の24号土坑に切られ、Ⅱ期の31号溝を切って造られている。31号溝が4層上面から掘り込まれているため、27号溝もⅡ期に属する遺構であることが判明する。東端は24号土坑に

切られているため不明であるが、24号土坑の東側には延びていかないことから、24号土坑のところで途切れるものと考えられる。西側は撹乱によって破壊されており、その直前で南側に屈曲する。ほぼ直角に屈曲するものと思われるが、その先の延び方は、撹乱によって壊されており不明である。おおむね直線的に東西に延びており、検出できた東西の長さは9.4m、方向は直交する方向に直してN－24°－Wである。上幅120～195cm、下幅40～105cm、深さ65cm前後で、断面形状は逆台形に近い形状を示す。底面レベルには顕著な変化がなく、流れていた方向は判らない。遺物は、磁器、陶器、土師質土器、木製品がややまとまって出土している。木簡も1点出土している。陶磁器類の様相は、2号遺構などと類似し、これらに近い時期と考えられる。他には、土人形、瓦、金属製品、石製品が出土しているが、量は少ない。

【31号溝】（図38・43、図版27）

E・F－10・11区で検出した素掘りの溝で、4層上面から掘り込まれているため、Ⅱ期の遺構とした。27号溝に切られている。途中で屈曲しており、西側は途切れ、北側は27号溝に切られている。27号溝より北側には延びていないようである。西端に近い所は、Ⅲ期の池状遺構新段階によって削平されており、わずかに残存する程度である。南北部分の方向はN－19.5°－W、東西部分の方向は直交する方向に直してN－35°－Wである。底面レベルは、ほとんど変化がない。上幅50～118cm、下幅15～85cm、深さ22cm前後で、断面形状は逆台形を呈する。遺物は、磁器と木製品がわずかに出土しているだけである。

【1号井戸】（図44、図版27・28）

B－10区で検出された。Ⅱ期の3号土坑を切っている。Ⅳ期の1号土坑に切られている。円形の掘り方の中に、桶を据えて井戸枠としたものである。調査区東壁際にあり、崩落の危険性があったため、内部の掘り下げは、検出面から3.5mほどのところで中止した。セクション図も、190cmほど掘り下げたところまでにとどめている。掘り方の直径は180cmで、その中に直径95～100cmの桶を据えている。内部には、木製の梯子がほぼ完全な形で埋没していた。井戸の内部に置かれた梯子が、そのまま埋められたものと考えられる。梯子は、両側が太い角材を用い、横木は細い角材が使われている。埋土には、部分的に30～70cm大の礫が含まれており、これらの礫はある程度まとまっていることから、井戸を埋め戻す際に投げ込まれたものであると推定される。出土した磁器は18世紀前葉のものが中心であり、陶器は大堀相馬産の碗など18世紀のものが中心である。底面まで掘り下げていないため、これらの遺物が1号井戸の時期を示すものかどうか確実ではないが、埋められたのは、18世紀の可能性が高いと判断して、Ⅱ期に含めた。陶磁器以外では、土師質・瓦質土器、瓦、漆椀や漆塗りの皿などの木製品などが出土している。

【3号井戸】（図35・36、図版28）

G－3区で検出された。18号土坑を完掘後、その底面で検出されたため、掘り込み面は不明である。18号土坑より古く、出土した磁器が17世紀末より新しい時期のものと考えられることから、Ⅱ期に属するものと考えられる。直径114cm、検出面からの深さ約310cmである。18号土坑によって上部が破壊されていると考えられるため、本来の深さは、さらに深くなる。比較的整った円形をしており、形態からは素掘りの井戸と考えられる。ただし、1号井戸、4号井戸などと比べると、井戸の底面が標高57.7m程度と浅いところで検出されており、実際に井戸として機能していたかどうかは不明である。遺物は、磁器がごくわずか出土しているだけである。

【4号井戸】（図38・41、図版28）

G・H－10・11区の、2号遺構の底面で検出された。4号井戸の埋土が埋没後に収縮して陥没したと考えられることと、この部分の土層観察用セクションが陥没により変形・倒壊したため詳細な観察ができなかったことから、4号井戸の埋土と2号遺構の埋土との関係は充分明らかにできていない。そのため、4号井戸が完全に埋まってから改めて2号遺構全体を掘ったのか、4号井戸が埋まらない状態で周囲を掘り広げていったのか、どちらであったのかは明らかにはできていない。4号井戸を使用しなくなってから、時間を空けずに2号遺構が造られ

た可能性を考え、同じⅡ期に含めたが、Ⅰ期まで遡る可能性も残っている。

検出面が2号遺構の底面であり、遺構面よりすでに2mほど下がった場所であった。そのため、4号井戸の埋土は2号遺構の底面から50cmまで掘り下げたが、危険なため、それ以上の掘り下げは行っていない。掘り方の径230cm前後で、桶や石組などの施設は確認されておらず、素掘りの可能性が高い。東壁際に、太い竹が3本並んで、差し込まれたように、立って入れられていた。また、この3本の竹を固定したのか、横木状の木材も確認されている。埋土をほとんど掘り下げていないので、出土遺物は少ない。土師質土器の皿、瓦、木製品が少量出土しているだけで、時期などが判明する遺物はない。

【3号土坑】(図44、図版28)

B－10区で検出された土坑である。大部分が撹乱によって破壊されており、わずかに残った部分も、上端は1号井戸によって切られている。そのため、本来の全体形状は不明である。残存している部分の深さは40cmである。埋土は2層に分かれるが、いずれも均質な層である。遺物は、土師質土器の皿と竹製品がわずかに出土しているだけで、時期のわかるような遺物はない。1号井戸に切られていることから、Ⅱ期もしくはさらに遡る時期の可能性がある。Ⅰ期に遡らせる積極的根拠もないため、Ⅱ期に含めておいた。

【4号土坑】(図37、図版28・29)

B・C－2・3区で検出された土坑である。北側と西側は調査区外へと伸び、東側と南側も撹乱によって破壊されているため本来の形状や大きさは不明である。遺構の外縁は、南側の一部が残っているだけである。かなり大規模な遺構になることは確実であるが、ほとんど破壊されており、遺構の性格は明らかでない。残存部分の大きさは東西285cm、南北270cmで、これ以上の規模になることは間違いない。深さは110cmである。南側部分には大きさ30～80cmの礫が並んでいた。石組み状の構造を持っていた可能性もあるが明確にはできなかった。上部の埋土1・2層からは19世紀の陶磁器が、埋土5層以下の下部の埋土からは18世紀の陶磁器が出土しており、上部の埋土は異なる遺構の埋土である可能性も残っている。下部から出土した遺物の年代が、4号土坑が使われた時期を示すものと考え、Ⅱ期の遺構と判断した。出土遺物は比較的多く、磁器、陶器、土師質・瓦質土器が、ややまとまって出土している。その他には、瓦、硯や火打ち石などの石製品、漆椀や箸などの木製品など、様々な種類の遺物が出土している。底面には丸太が横たわっており、その上から植物繊維で編んだ俵が検出されている。下部のみが残されていたが、残された部分の形状からは、内部に土砂が詰められた状態で置かれていたと考えられる。このことから、藁などで編んだ俵を利用した、土嚢であったと考えられる。

【6号土坑】(図45・47、図版29)

G－2区の調査区北壁際で検出されており、北側は調査区外に延びているため、形状は不明である。2層下部の下位から掘り込まれており、Ⅱ期と考えられる。東西長約140cm、深さ約60cmである。遺物は、陶器がわずかに出土しているほか、加工木がやや多く出土している。6号土坑の東側約2mのところには、ピット5が検出されている。ピットとしたが、形態や規模が6号土坑に類似する。そのため、6号土坑とピット5は、規模の大きな柱穴であった可能性もある。ただし、柱痕跡などは検出できていない。

【7号土坑】(図45・47、図版29)

E－3区で検出された。西側が2号土坑によって切られており、全体形状は不明である。残存箇所で、南北幅約100cm、深さ約26cmを測る。埋土は1層で、土坑の底面には拳大～人頭大ほどの川原石がいくつかみられた。出土遺物は、磁器、陶器、土師質土器、加工木などが少量出土している。陶磁器では、志野産の小中皿が1点出土しているほか、特徴が判明する遺物はほとんどない。わずかに、大堀相馬産の灰釉陶器の細片が出土している。ごく細片のため混入の可能性も残るが、18世紀代の可能性高いものと考え、Ⅱ期に含めた。

【8号土坑】(図45・47、図版29)

F・G－2区で検出された。西側の上端部分は撹乱により一部破壊されているが、不整楕円形を呈するものと

推測される。23号土坑を切っている。４号溝との関係は、両者が重なる部分に撹乱があり判らない。残存する東西の長さ140cm、南北の幅は95cm、深さ約48cmである。磁器、陶器、土師質土器、加工木や木羽などが若干出土している。出土した陶磁器類は18世紀代のものと推測される。切り合い関係から、Ⅱ期の23号土坑よりは新しいが、出土遺物が18世紀代のものと考えられることから、８号土坑についてもⅡ期に相当するものと推測される。

【11号土坑】（図45・47、図版30）

Ｇ・Ｈ－２・３区で検出された。Ⅱ期の15号溝に切られており、同じくⅡ期の21号土坑と22号土坑を切っている。この切り合い関係から、Ⅱ期の遺構であると判断される。撹乱によって一部が破壊されているが、東西に長い長方形を呈していると思われる。長軸約270cm、短軸約120cm、深さ約20cmを呈する。埋土は１層である。土坑の用途は不明である。遺物は、陶磁器、瓦、土師質土器などが出土しているが、出土量はあまり多くない。

【12号土坑】（図44、図版30）

Ｂ－７区で検出された土坑である。２層下部の下面から掘り込まれており、大堀相馬産の灰釉陶器など18世紀代の陶器が出土しており、Ⅱ期の遺構と判断した。東側を米軍共同溝によって壊されているが、全体の形状は長方形に近い形を呈すると考えられる。残存部の大きさは東西方向で120cm、南北方向で90cm、深さは30cmである。磁器、陶器、土師質土器や瓦、木製品が出土しているが、いずれも出土量は少ない。

【15号土坑】（図45・47、図版30・31）

Ｅ－５～７区で検出された。２層下部を掘り下げた後に検出しており、２層下部の下位から掘り込まれていると考えられることからⅡ期に含めた。また、出土遺物も、Ⅱ期の遺構として差し支えない。南北方向に長い不整楕円形を呈しており、南側は溝状に延びていくようであるが、撹乱で壊されており詳細は不明である。Ⅰ期の24号溝、33号溝を切っている。残存している南北の長さは515cm、東西幅は125cm、深さ84cmを測る。埋土の下部からは、陶磁器類、瓦、木製品などが多量に出土しており、ゴミ穴であったと推測される。中でも加工痕のある木材や杉の樹皮の出土が非常に多く、木材工作をした後のゴミなどが主に廃棄されていたのではないかと推測する。北側では人頭大の川原石がまとまっている場所がある。出土した陶磁器には、大堀相馬産の糠白釉の中碗や、鉄釉の溲瓶などがみられ、18世紀末から19世紀前葉頃のものと考えられる。

【16号土坑】（図48・49、図版31）

Ｇ－９・10区で検出した。大堀相馬産陶器など、18世紀と考えられる陶器が含まれていることから、Ⅱ期に属するものと判断した。直接切り合わないが、２号遺構と極めて近い場所に造られており、同時に存在したとは考え難い。基本層３層や４層との関係は不明であるが、２号遺構などが使われなくなってから、造られたものと推定される。撹乱によって、西側の上部が削平されているが、東西にやや長い楕円形状を呈する。東西の長さ140cm、南北の幅105cm、深さ29cmである。底面は平坦でなく、段差がつく。磁器、陶器、土師質土器皿、煙管雁首が出土しているが、いずれもわずかな量である。

【18号土坑】（図35・36、図版31・32）

Ｆ・Ｇ－２・３区で検出された。２層下部の下位から掘り込まれており、Ⅱ期に含めた。出土遺物の様相も、Ⅱ期として差し支えない。一部、撹乱によって破壊されているが、南北方向に長い不整な楕円形を呈している。南北幅約450cm、東西幅約215cm、深さ約56cmを測る。10号溝と15号溝に切られている。ピット43と61は、18号土坑の埋土上面で検出されている。一方18号土坑は、21号土坑、23号土坑を切っている。また、18号土坑を完掘後、その底面からは３号井戸が検出されている。埋土は３層に分けられ、磁器、陶器、土師質土器、木製品、竹製品などが比較的多く出土しており、ゴミ穴として使われた可能性がある。陶器では、大堀相馬産の中型丸碗や灰釉腰折碗、京・信楽産の色絵中碗などが出土しており、18世紀代のものと考えられる。また、鉄釉の土鍋や東北産と考えられる甕なども出土しており、これらは18世紀でも新しい時期に下る可能性も考えられる。

【19号土坑】（図45・47、図版32・33）

G・H－3・4区で検出された。2層下部の下位から掘り込まれている。Ⅱ期の15号溝に切られ、同じくⅡ期の22号土坑の一部を切っており、Ⅱ期に含まれることが明らかである。撹乱によって破壊されている部分もあるが、おおよそ南北に長い長方形を呈するものと考えられる。南北幅約320cm、東西幅約196cm、深さ約32cmで、埋土は3層に分けられる。土坑の用途はわからない。陶磁器類、瓦などが出土しているが、出土量は少ない。陶器では、大堀相馬産の鉄絵を施した灰釉中皿などが出土しており、18世紀でも新しい時期、あるいは19世紀に入った段階の様相が伺える。

【20号土坑】（図37・41・42、図版32）

G・H－10・11区で検出された3b層上面の窪みである。2号遺構、1号遺構、24号土坑が埋まった後、これらのゴミ穴の上面を覆うように、地山起源の黄褐色粘質土の3b層が整地される。下部の2号遺構埋土や、あるいは更に下位の4号井戸の埋土が、収縮したのか陥没していったと思われる。それに伴い、3b層の上面も窪んだものと考えられる。この窪みを、20号土坑とした。人為的な遺構と言うよりは、自然に形成されたものと考えた方が良いであろう。陥没によって形成された落ち込みは、不整形を呈し、緩やかに落ち込む。南北375cm、東西405cm程度の大きさで、最も深いところで53cm程度の深さである。20号土坑に堆積した埋土が、基本層3a層である。3a層が堆積した後には、21号溝が造られている。遺物は、3a層として取り上げたものと、20号土坑として取り上げたものがある。様々な種類の遺物が、かなりまとまって出土しており、この窪みがゴミ穴として再利用されたものと考えられる。陶磁器類は、2号遺構などに近い様相を示しており、時期的にも近いものと考えられる。ただし、木簡は出土しておらず、この点では2号遺構と異なる。

また、20号土坑の北側のG－9区では、3b層と同様の黄褐色粘土を整地した上に、木の板を敷いた部分が見つかっている。時期的に3b層と一連の構造と考え、20号土坑と合わせて図37に図示しておいた。

【21号土坑】（図35・36、図版32・33）

G－2・3区で検出された。撹乱や、Ⅱ期の10号溝と18号土坑に切られている。また、同じくⅡ期の22号土坑を切っている。周囲に遺構や撹乱が多くあることから、掘り込み面を確定することはできなかったが、切り合い関係よりⅡ期の遺構と考えられる。全体形状は不明であるが、おおよそ南北に長い不整形を呈すると考えられる。南北両側は撹乱により破壊されているが、残存する南北の長さは約255cm、東西幅約60cmを測る。埋土は1層で、深さ約8cmと非常に浅く、土坑の用途はわからない。遺物は陶器と土師質土器がそれぞれ1点出土しているのみである。

【22号土坑】（図35・36、図版33）

G・H－2・3区で検出された。2層下部の下位から掘り込まれている。出土遺物に、18世紀代の大堀相馬産の中型丸碗が含まれることから、Ⅱ期に相当するものと考えられる。撹乱によって、一部破壊されている箇所がある。北側はピット5に切られ、さらに調査区外へ延びている。西側は21号土坑に切られている。全体形状は判らないが、おおよそ南北に長い不整形を呈している。南北の長さは最大で約410cm、東西幅150～165cm、深さ約48cmを測る。土坑の用途は不明である。埋土からは、陶磁器類や瓦などが出土しているが出土量はあまり多くはない。

【23号土坑】（図35・36、図版33）

F・G－2区で検出された。6号土坑、8号土坑、18号土坑に切られている。切り合い関係から、この区域に分布する土坑の中では、最も古い段階と考えられる。年代の判る遺物が出土しておらず、どこまで遡るかは判らない。23号土坑以外の一連の土坑や溝は、掘り込み面と切り合い関係から、全てⅡ期に所属することが明らかである。この区域の類似した土坑が、全てⅡ期のものであることから、23号土坑だけを、更に遡らせる特段の理由も無いので、Ⅱ期に含まれる可能性が高いものと考えた。南北に長い不整形を呈しているが、全体の形状は不明である。残存する南北幅約170cm、東西幅約110cm、深さ約16cmである。形状などから土坑の用途を推測するこ

とは困難である。出土遺物は、瓦質の擂鉢が１点出土しているのみである。

【24号土坑】（図38・41、図版19・33・34）

Ｆ・Ｇ－10・11区で検出した土坑で、大量の遺物が出土し、ゴミ穴と考えられる土坑である。４層上面から掘り込まれている。２号遺構と27号溝を切っているが、出土遺物の様相は共通しており、２号遺構と同様に享保５年（1720）頃に使われていたゴミ穴と考えられる。隅丸方形を呈し、南北255cm、東西220cm、深さ165cmで、壁は急に立ち上がる。南壁の東西両側に、小ピットが造られており、足場用のものかも知れない。埋土には大量の遺物が含まれ、その内容で細かく分層できるが、大きく３層に分けて遺物を取り上げた。埋土２層と埋土３層からは、木製品などの有機質遺物が大量に出土している。出土遺物には、様々な種類の遺物があり、遺物量も多い。全体の様相は、２号遺構出土の遺物と共通する。種子や貝などの食物残滓も大量に含まれていた。木簡も28点、墨書ある木製品も３点出土している。土師質土器皿と白木の箸が、大量に出土している点も、２号遺構と同様である。そのため、24号遺構も２号遺構と同様に、二の丸のゴミが運び込まれて捨てられたものと考えられる。

【27号土坑】（図38・43、図版34）

Ｅ－８区で検出された。掘り込み面は不明であるが、出土した陶磁器が18世紀代のものと考えられることから、Ⅱ期の遺構と判断した。Ⅳ期の１号建物の柱33、１号柱列の柱16に切られている。東側部分を１号建物の柱33に切られるため全体の形状ははっきりとはしないが、やや不整な、長方形に近い形を呈していた可能性がある。大きさは南北110cm、東西100cm、深さ50cmである。中央付近が、一段深くなっている。磁器、陶器、加工木などが、わずかに出土している。

【28号土坑】（図38・43、図版34）

Ｄ・Ｅ－11区で検出した。池状遺構古段階に切られている。４層は分布しないため、掘り込み面は明らかでない。陶磁器類が18世紀代のものと考えられることと、木製品が多数出土し、墨書ある木製品も１点出土するなど、出土遺物の様相が２号遺構などと類似するため、近い時期のものと考えⅡ期に含めた。北東から南西方向に長い、楕円形から長方形に近い形を呈している。長軸の長さ190cm、短軸の幅125cm、深さ120cmである。断面図に見える杭は、池状遺構古段階に伴うもので、28号土坑に伴うものではない。磁器、陶器、土師質土器、瓦、木製品、金属製品が出土している。木製品がややまとまって出土している以外は、遺物量は少ない。

【29号土坑】（図38・43、図版34）

Ｅ－10・11区で検出した。池状遺構古段階に切られている。４層は分布しないため、掘り込み面は明らかでない。陶磁器類が18世紀代のものと考えられることと、木製品が多数出土し、木簡も１点出土している。28号土坑と同様に、出土遺物の様相が２号遺構などと類似するため、近い時期のものと考えⅡ期に含めた。北東から南西方向に長い、楕円形に近い形を呈している。長軸の長さ150cm、短軸の幅120cm、深さ48cmである。断面図に見える杭は、池状遺構古段階に伴うもので、28号土坑に伴うものではない。磁器、陶器、土師質土器、瓦、木製品が出土している。木製品がややまとまって出土している以外は、遺物量はわずかである。

【32号土坑】（図49）

平面精査では確認できなかったが、調査区南壁のセクションの検討によって確認できたものである。南壁Ｈ列のセクションで確認したもので、掘り込み面が、２層下部より下位で、４層上面であることが確認できたため、Ⅱ期に所属する遺構であることが明らかとなった。平面形状は不明であるが、南壁セクションでは、上幅165cm、下幅115cm、深さ38cmで、壁は緩やかに立ち上がる。平面精査を行っていないため、出土遺物はない。

③Ⅲ期の遺構（図50～60、図版35～45）

基本層序の２層より下位で、２層下部の上面から掘り込まれている遺構をⅢ期とした。基本層の２層と２層下部の区分が難しい部分も多く、実際の調査においては、Ⅱ期とⅢ期の遺構を区別することは、あまりできていない。調査後の整理において区分している場合がほとんどである。その際、検出された時点の標高や、礎石の場合は石の上面の標高などを参考にして、掘り込み面を想定した遺構も多い。

Ⅲ期の開始については、Ⅱ期の下限との関係から、19世紀前葉頃と考えられる。下限については、次のⅣ期が屋敷が取り払われた後の時期であることから、明治初頭頃と考えられる。ただし、明治維新後、直ちに屋敷が取り壊された訳ではなく、若干の年数は経過していた可能性が高い。

Ⅲ期の遺構配置図も、２枚に分けて図示した。２つの配置図は、遺構を記した図面は同じであるが、建物跡や柱列の組み合わせを示すラインを、分けて示したものである。Ⅲ期では、１号建物と２号建物が、同じ場所で重なっており、両者を合わせて図示すると、煩雑で判りにくくなる。そのため、Ⅲ期の中でも最も新しい時期と考えられる１号建物のみを、２枚目の遺構配置図（図51）に示し、１号建物以外の遺構を図50に示している。ただし、１号建物のみが、新しい時期の遺構として分離されるものではない。あくまでも、判りやすく図示するための、便宜的な措置である。本来は、２枚の遺構配置図を合わせたのが、Ⅲ期の遺構配置図となるものと考えていただきたい。遺構の全体的な配置状況も、２つの配置図を合わせた形で記述する。

調査区の北東部に、建物跡や柱列が集中している。ほぼ同じ場所で、２号建物、３号建物、４号建物が造られている。これらの建物の周囲に、３～６号柱列が造られる。また、２号建物と一部が重なり、調査区北東部から中央部にかけて広がる１号建物が造られる。Ⅲ期の存続期間から見て、これらの建物などは、比較的短い時間で造り替えられていったものと考えられる。これら以外にも、調査区南東部にも礎石と考えられるものが分布している（図版37）。礎石の組み合わせが判明せず、建物を復元できなかったが、東南部にもⅢ期に礎石建物が存在したことは間違いないと思われる。Ｇ－11区には、かなり大きな礎石も検出されており、規模の大きな建物が存在した可能性もある。これらの礎石と一部重なるが、南東部では、19号溝、17号土坑、石敷遺構や、桶や枡を埋設した遺構が分布している。

２号建物や４号建物の西側にあたる、調査区の北半部でも、中程から西よりの区域には、２号溝、６号溝、18号溝・26号溝、木樋を埋設した７号溝が分布し、溝が多く造られていることが特徴である。その他には、ゴミ穴と考えられる２号土坑が分布する。北東部の建物や柱列が展開する区域とは、明らかに様相が異なっており、区域ごとに使われ方に差があったことを示すと考えられる。

調査区中程から南半部では、Ｄ・Ｅ列に南北方向の１号柱列や２号柱列が延び、屋敷地を区画するものと考えられる。１号柱列のすぐ東側の南壁沿いには、石組で護岸した池状遺構がある。

調査区西よりの、米軍共同溝より西側の区域では、14号溝や２号井戸がある程度で、遺構密度は低い。

【池状遺構新段階】（図57・58、図版40）

Ｄ～Ｆ－10～12区で検出された、石組で護岸された遺構である。形態から、池となる可能性が高いと考え、池状遺構とした。東岸は一時期の石組だけが検出されているが、西岸では石組の下層に、もう一段階古い護岸が確認されている。そのため、池状遺構は新古の２段階に分離した。古段階はⅡ期に遡る可能性があるため、Ⅱ期で記載した。ここでは新段階のみについて記載する。

新段階の掘り方は、２層下部の上面から掘り込まれており、Ⅲ期に所属すると考えられる。埋土からは陶磁器類が比較的多く出土しており、19世紀代に下る遺物が主体を占める。19世紀中葉以降に普及する軟質施釉土器の焙烙も出土している。このため、幕末ごろまで使用されていた可能性が高いと考えられる。

北側が攪乱によって壊されており、南側は調査区外へ延びる。東岸と西岸は緩やかに湾曲しており、北側で回り込みつながっていくものと思われる。南壁際での東西の幅は、石組の内側で測って4.3m程度である。東岸は、

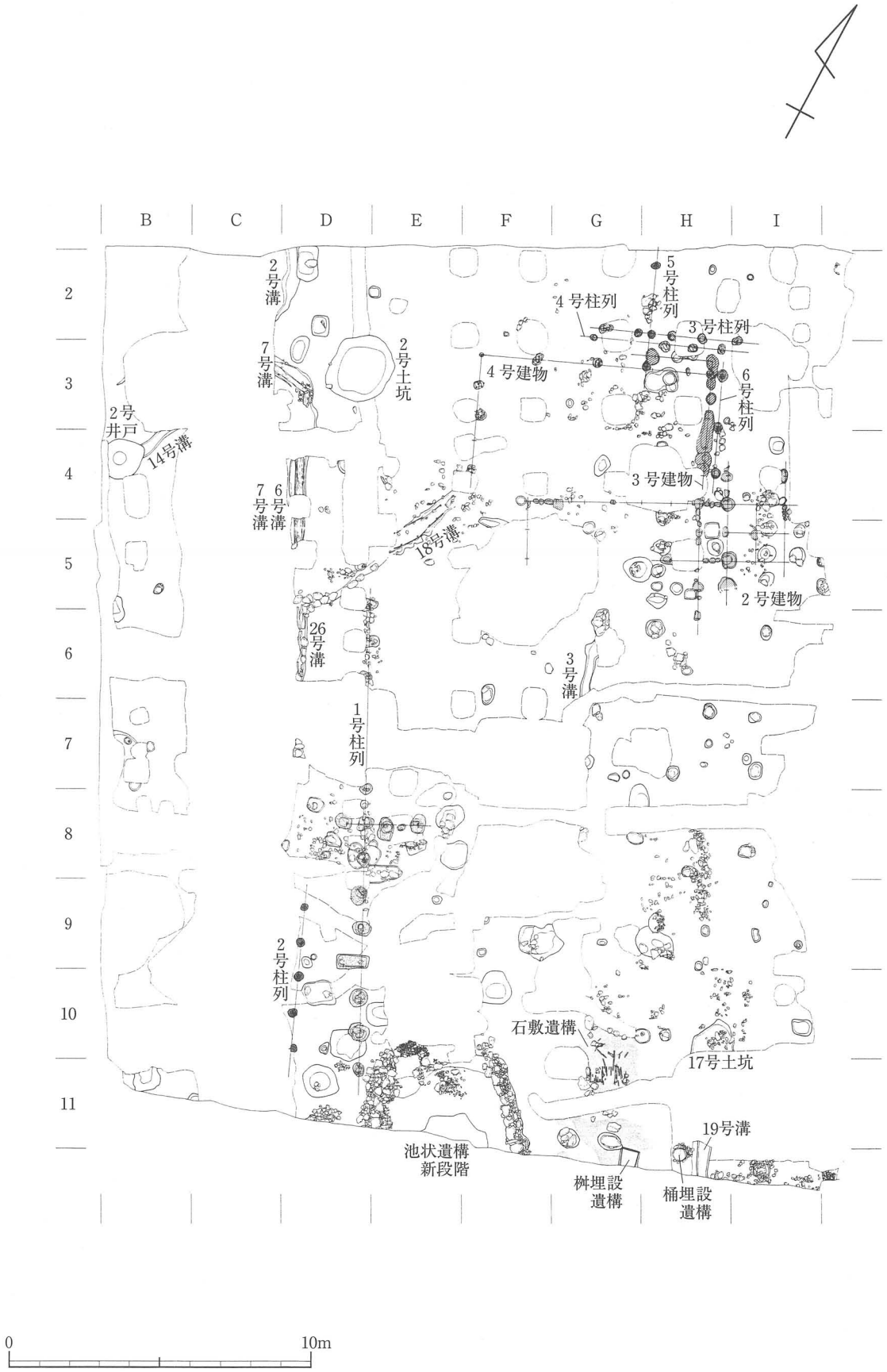


図50　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期遺構配置図（1）
Fig.50　Distribution of features belonging to phase Ⅲ at BK7（1）

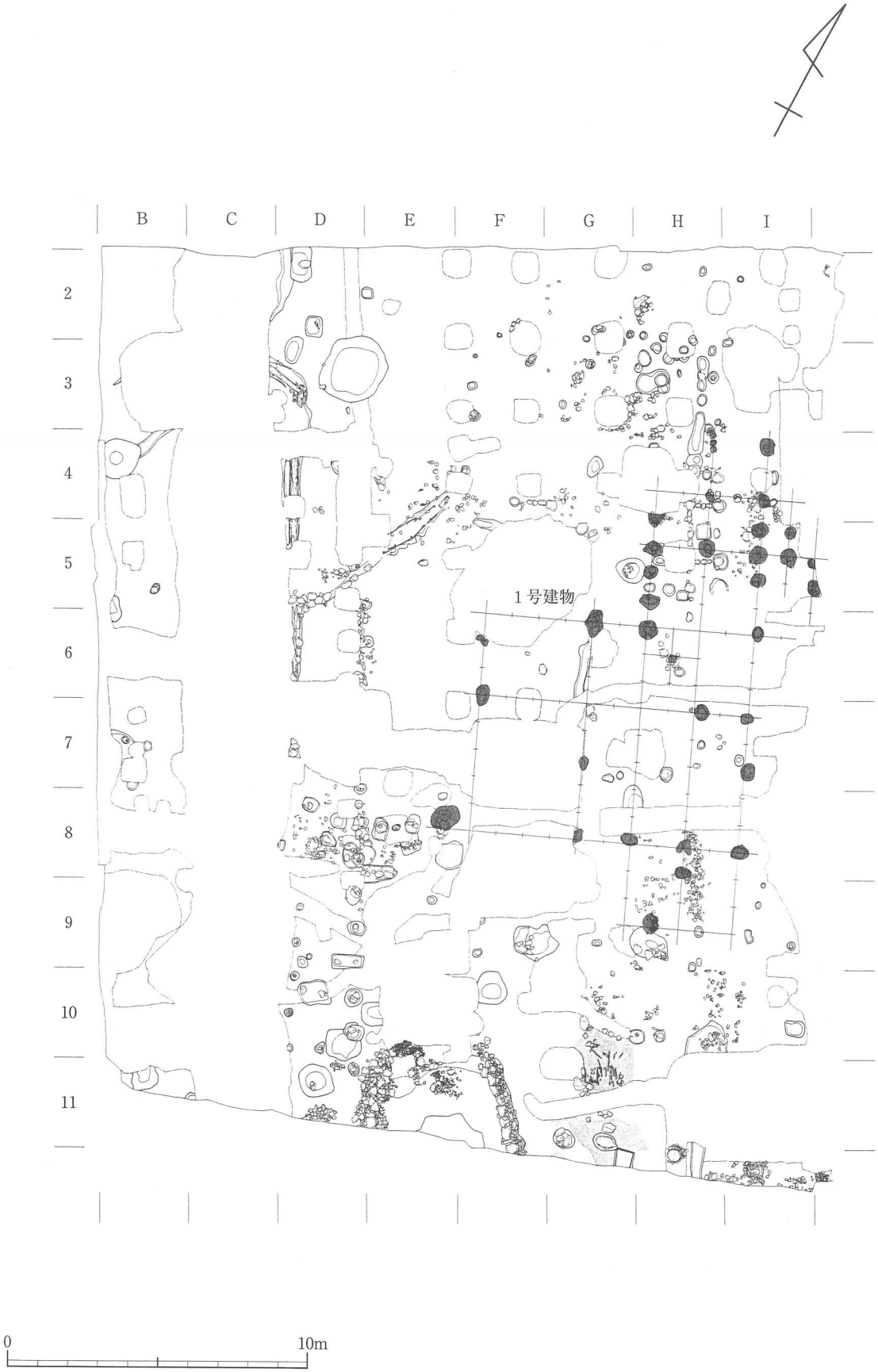


図51　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期遺構配置図（2）
Fig.51　Distribution of features belonging to phase Ⅲ at BK7（2）

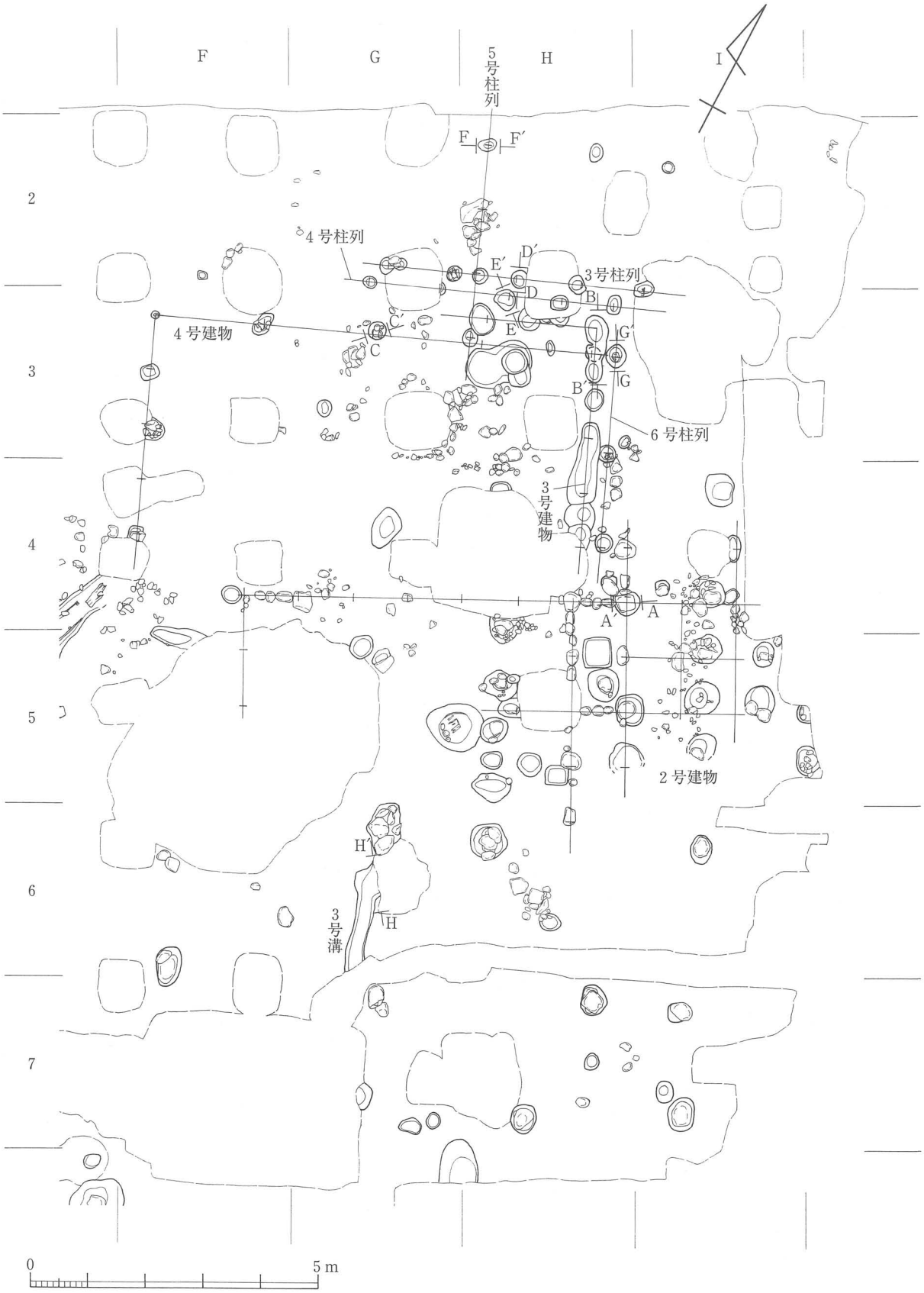
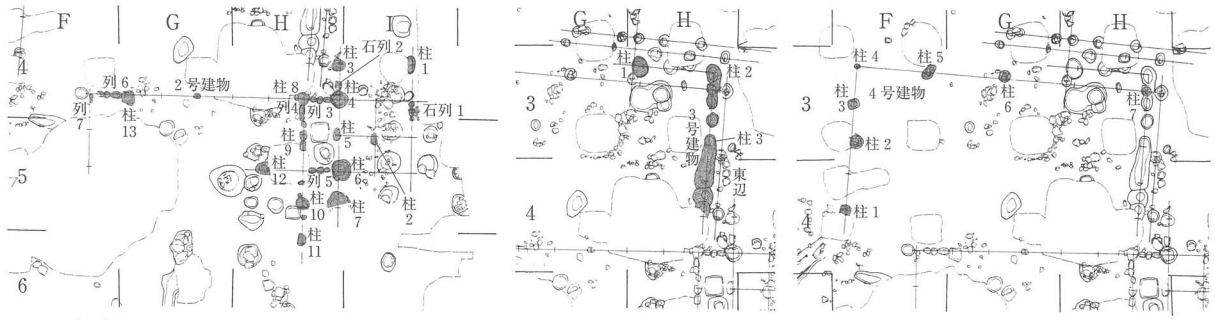
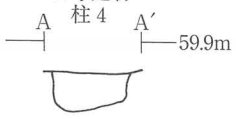


図52　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構（1）
Fig.52　Features belonging to phase Ⅲ at BK7（1）



2号建物
柱4

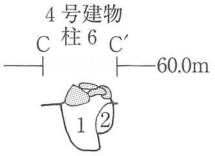


10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中　しまり中　白色土粒・黄色土ブロックをまだらに含む

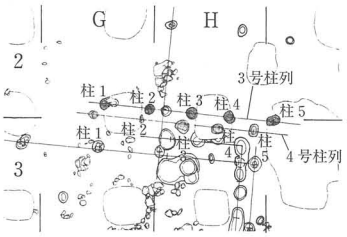
3号建物 東辺

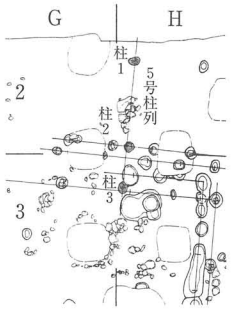
1　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性弱　しまり中　黄褐色土ブロック・褐色土ブロックを含む
2　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性弱　しまり中　褐色土ブロックを含む　炭化物・白色土粒を含む
3　1に同じ
4　1に同じ
5　2に同じ

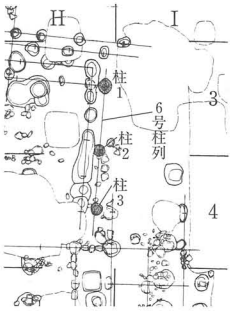
4号建物
柱6



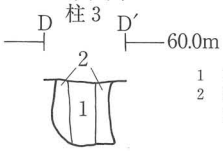
1　10YR5/2灰黄褐色　シルト　粘性中　しまり中　黄褐色シルトブロック・炭化物を少量含む　上部に礫あり
2　10YR3/4暗褐色　シルト　粘性中　しまり中





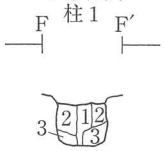


3号柱列
柱3



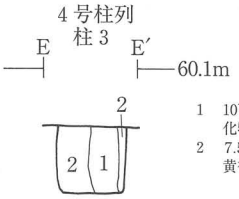
1　10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　粘性中　しまり中
2　2.5YR5/1黄灰色　シルト　粘性中　しまり中　褐色土ブロックを含む　炭化物を少量含む

5号柱列
柱1



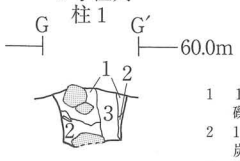
1　10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性中　しまり中　炭化物を少量含む　黄色土粒を含む
2　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性中　しまり中　炭化物を少量含む　白色土粒・黄色土粒を含む
3　10YR4/1灰褐色　シルト　粘性やや強　しまり中　白色土粒を含む

4号柱列
柱3



1　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性中　しまり中　炭化物を含む　褐色土を少量含む
2　7.5YR4/2灰褐色　シルト　粘性弱　しまり弱　黄褐色土を多量に含む　礫を含む

6号柱列
柱1



1　10YR4/4褐色　シルト　粘性中　しまり中　礫・褐色土ブロックを含む
2　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性中　しまり中　炭化物をわずかに含む　礫を含む
3　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性弱　しまり中　明黄褐色土ブロックを少量含む

3号溝

10YR3/3暗褐色　砂質シルト　粘性中　しまり中　小礫・白色土粒・黄色土粒を含む

図53　武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構（2）
Fig.53　Features belonging to phase Ⅲ at BK7（2）

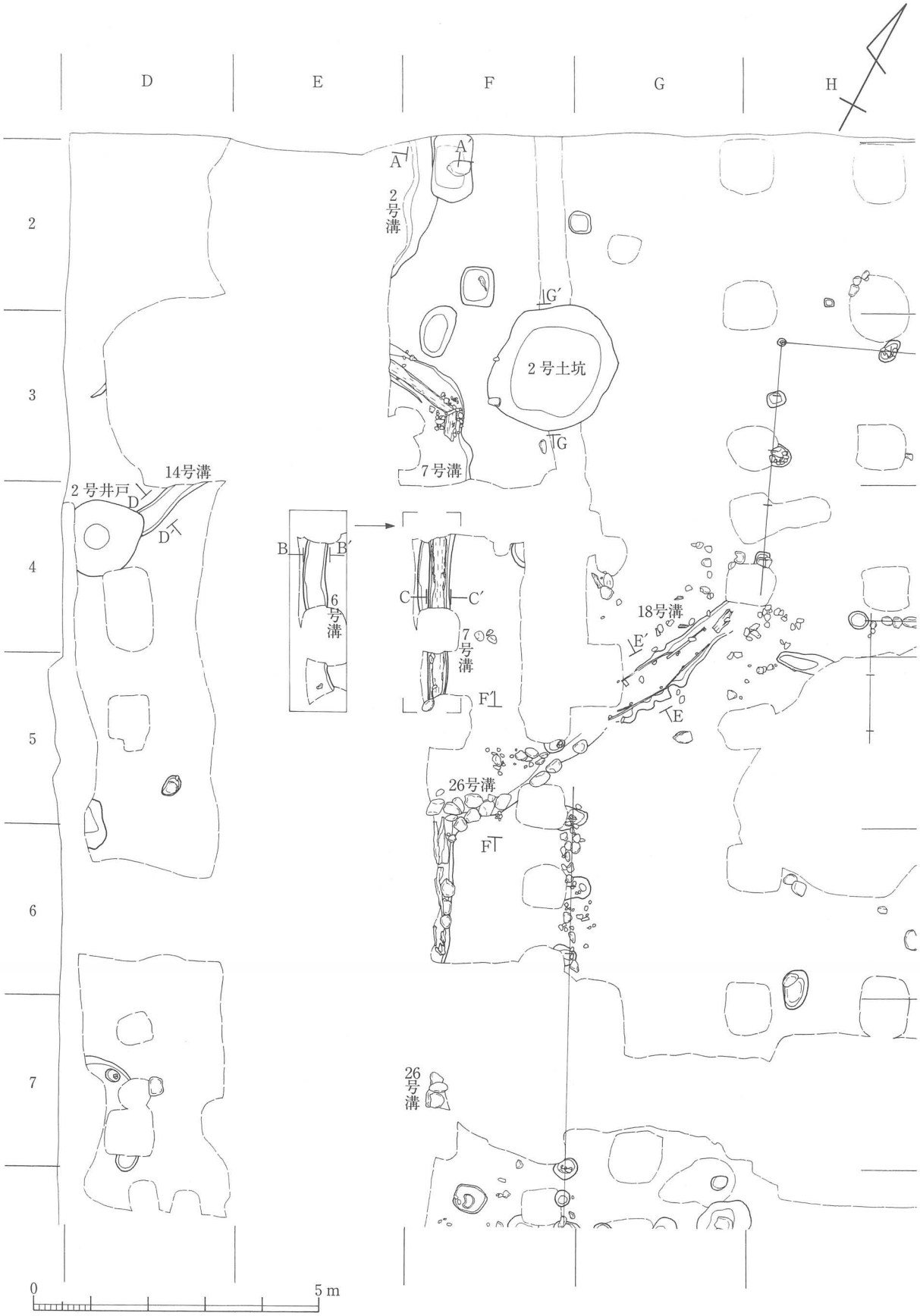
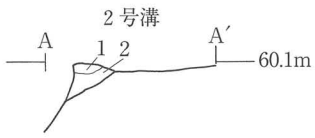
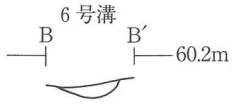


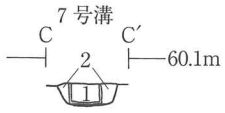
図54　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構（3）
Fig.54　Features belonging to phase Ⅲ at BK7（3）



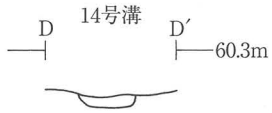
1　10YR4/1灰黄褐色　シルト　粘性きわめて弱・しまり中　炭化物・白色・黄色土粒を多く含む
2　10YR4/3にぶい黄褐色　砂　粘性ほとんどなし・しまり中　鉄分が多く沈着する



10YR3/3暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物・小礫をわずかに含む

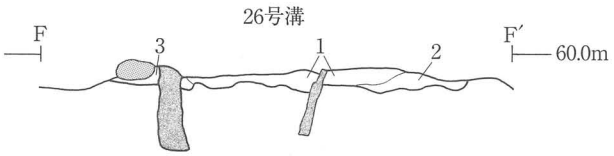


1　10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　炭化物をわずかに含む
2　7.5YR4/1褐灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　堀方埋土

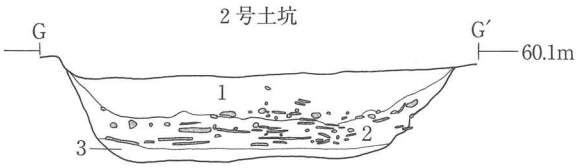


10YR4/2にぶい黄褐色　シルト　粘性弱・しまり弱　小礫をわずかに含む　鉄分・白色粒子を含む

1　10YR5/4　にぶい黄褐色　砂　粘性なし・しまり弱
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物を含む　堀方埋土

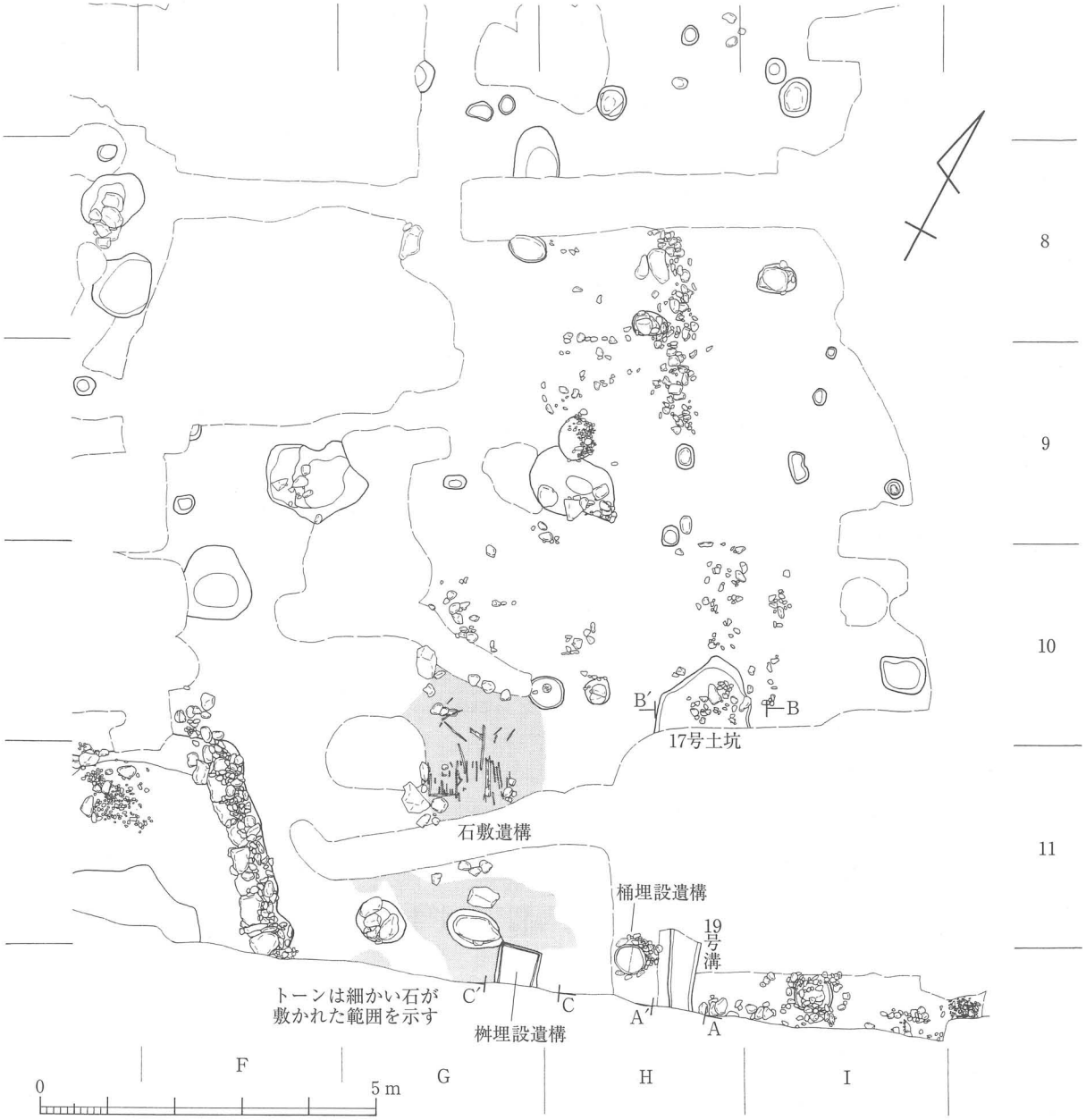


1　2.5Y3/2黒褐色　シルト　粘性ほとんどなし・しまり中　小木片を含む　炭化物をわずかに含む
2　10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　炭化物をわずかに含む
3　5Y3/1オリーブ黒　粘土　粘性強　しまり中　炭化物をわずかに含む　掘方埋土

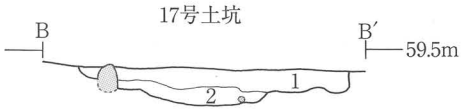


1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性やや強・しまりやや強　礫・炭化物を少量含む
2　5Y3/1オリーブ黒色　粘土　粘性強・しまり中　木製品出土
3　2.5GY4/1暗いオリーブ灰色　粘土　粘性強・しまり中　炭化物を含む

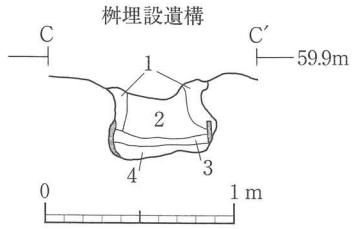
図55　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構（4）
Fig.55　Features belonging to phase Ⅲ at BK7（4）



10YR4/1褐灰色　シルト　粘性弱・しまり強　炭化物をブロック状に多く含む　小礫をわずかに含む



1　7.5YR3/1黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　明黄褐色土ブロック・炭化物をわずかに含む
2　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　明黄褐色土粒をまばらに含む



1　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性弱・しまり強　酸化鉄を多く含む
2　10YR4/1褐灰色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　黄褐色土粘土ブロックをまだらにわずかに含む　炭化物をわずかに含む
3　7.5YR3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　酸化鉄をわずかに含む　炭化物をわずかに含む
4　7.5YR3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　砂をブロック状に含む

図56　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構（5）
Fig.56　Features belonging to phase Ⅲ at BK7（5）

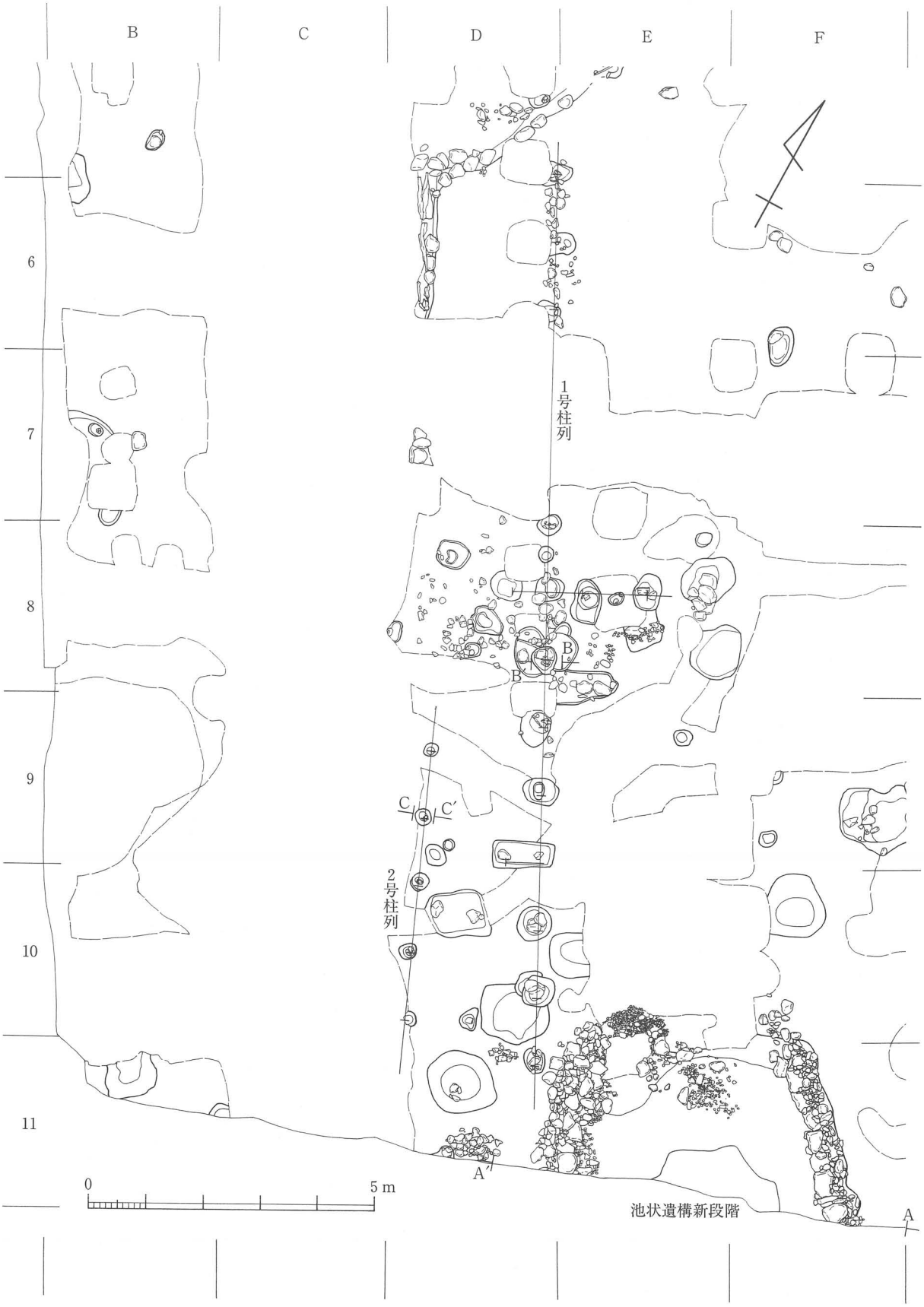
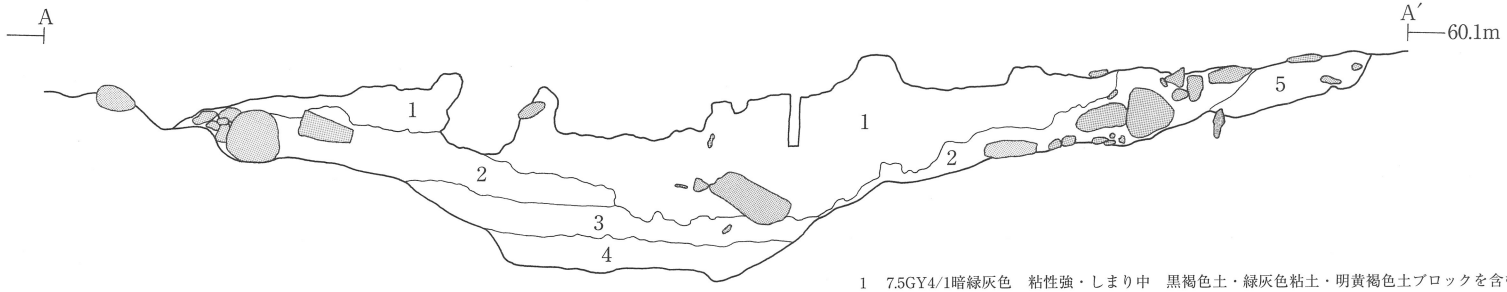


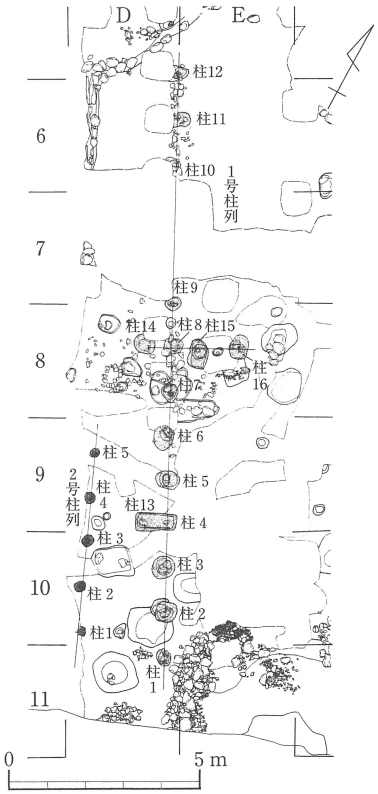
図57　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構（6）
Fig.57　Features belonging to phase Ⅲ at BK7（6）

池状遺構新段階



1　7.5GY4/1暗緑灰色　粘性強・しまり中　黒褐色土・緑灰色粘土・明黄褐色土ブロックを含む　礫・炭化物を含む
2　5Y3/1オリーブ黒色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり中　暗黒褐色粘土小ブロック・礫を含む　全体的に均質な層である
3　7.5Y3/1オリーブ黒色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり中　にぶい黄褐色粘土小ブロックを含む　炭化物を少量含む
4　10YR4/4褐色　砂　粘性なし・しまり弱　礫を非常に多く含む
5　2.5Y4/3オリーブ褐色　粘性弱・しまり中　炭化物をわずかに含む　黄褐色土ブロックをわずかに含む　西岸裏込

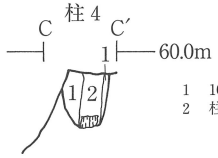
1号・2号柱列模式図



1号柱列
柱7

1　柱痕跡
2　掘り方埋土

2号柱列
柱4



1　10YR3/2黒褐色シルト　粘性中　しまり中　炭化物を少量含む　白色土粒を含む
2　柱痕跡

図58　武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構（7）
Fig.58　Features belonging to phase Ⅲ at BK7 (7)

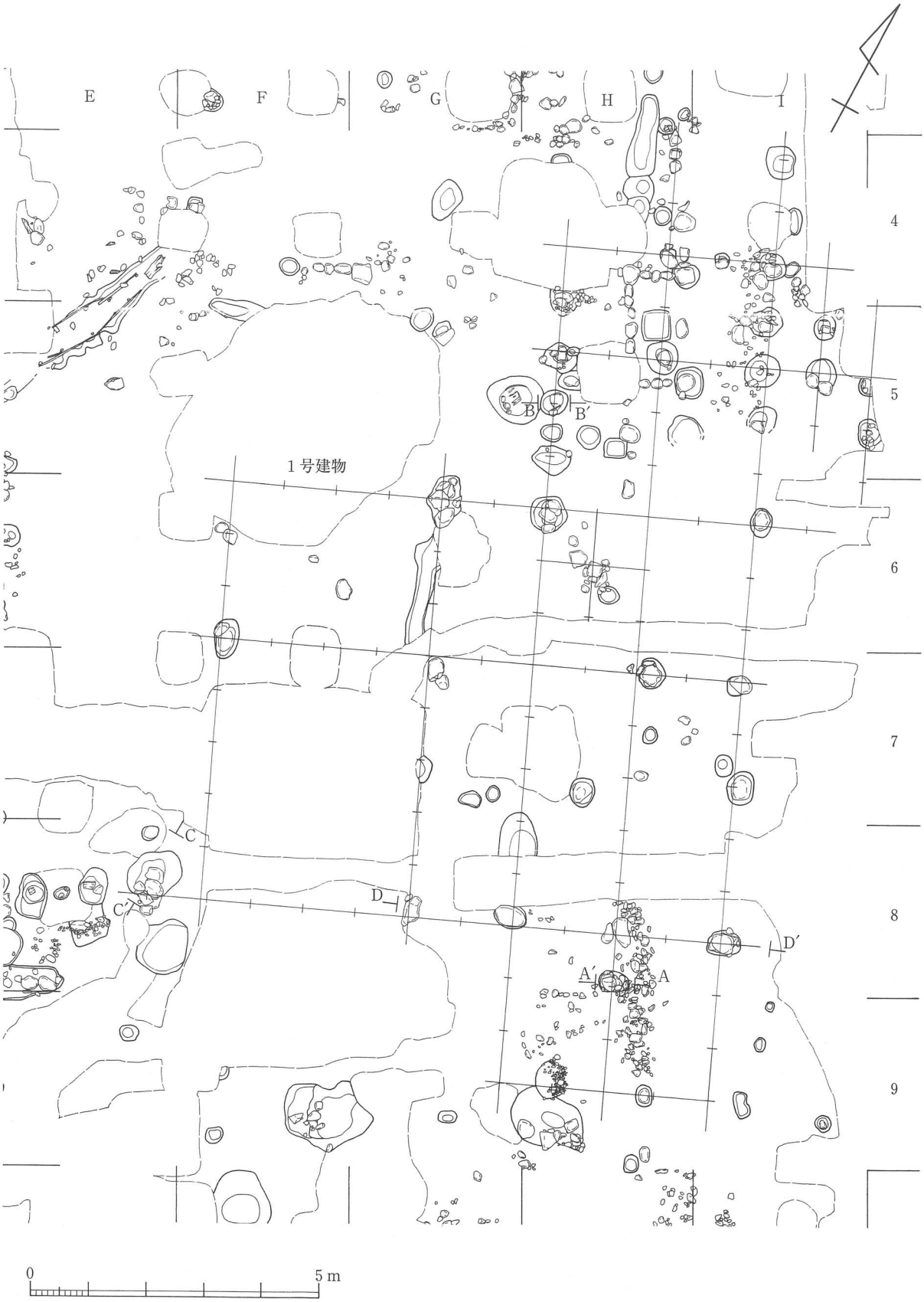
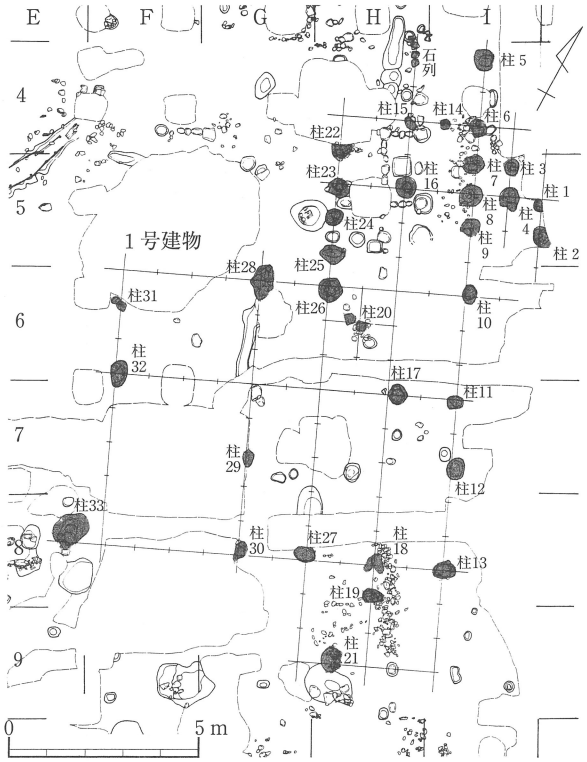
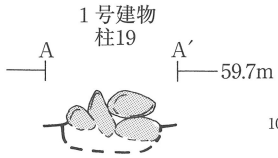


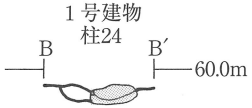
図59　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構（8）
Fig.59　Features belonging to phase Ⅲ at BK7（8）



1号建物模式図



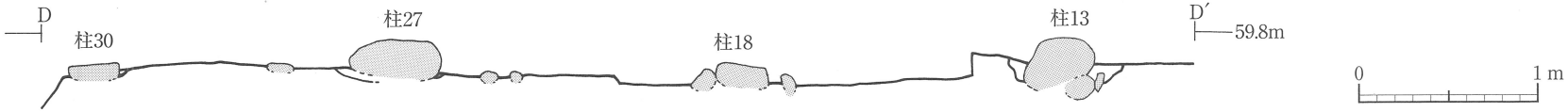
10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性中　しまり中　黄褐色土ブロック・礫を含む　炭化物を少量含む



10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性弱　しまりやや強　褐色土ブロック・礫をわずかに含む

10YR3/3黒褐色　粘土　粘性強　しまり強　にぶい黄褐色土ブロック・炭化物をわずかに含む

1号建物　柱13・18・27・30



柱30
10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性弱　しまりやや強　にぶい黄橙土小ブロック・酸化鉄をまだらに含む　礫を含む

柱27
10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性弱　しまりやや強　にぶい黄褐色土小ブロックを含む　炭化物を少量含む　礎石の下にφ2～5cm程の礫あり

柱13
10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性中　しまり強　褐色土小ブロックを少量含む　炭化物・酸化鉄を含む

図60　武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構（9）
Fig.60　Features belonging to phase Ⅲ at BK7 (9)

30～50cm程度の大きさの亜角礫を据えており、背後には10～15cm程度の川原石を詰めて、裏込めとしている。西岸は、東岸ほど石組の残存状況が良くなく、残された石は、東岸より小振りである。川原石で裏込めがなされているのは同じである。底面は南壁際の中央部で、一段深くなっている。南壁際での深さは110cmで、さらに深くなっていくものと考えられる。北側よりの底面には、細かな円礫が敷かれていたが、全体には及んでいない。調査区南壁のセクションにはかかっていないが、底面近くには、細かな円礫からなる砂礫層が北側に堆積していた。最上部の埋土１層はブロック状の土が混じり合うもので、ある程度埋没した後、人為的に埋め戻されたと考えられる。遺物は、磁器、陶器がややまとまって出土している。土師質・瓦質土器、軟質施釉土器、瓦はあまり多くない。他に、木製品、金属製品、石製品も出土している。

【１号建物】（図59・60、図版35）

Ｅ～Ｊ－４～９区で検出した礎石建物である。２層下部上面から掘り込まれていると判断し、Ⅱ期に含めた。いくつかのピットと切り合っているが、切り合い関係が判る場合は、いずれのピットよりも１号建物が新しい。２号建物の柱12が、１号建物の柱23と、わずかに重なるが、前後関係はあまり明確にできなかった。次に述べるように、柱間寸法から考えて、１号建物の方が２号建物より新しいと考えられる。

１号建物の柱間寸法は、１間が６尺と考えられる。６尺３寸の可能性も想定し、様々な可能性を検討したが、ズレが生じてしまう。一方、６尺と考えると、おおむね合致することから、１間の寸法は６尺であったと判断した。これまでの二の丸地区や武家屋敷地区の調査では、江戸時代には６尺が使われている例は無い。江戸時代初期に６尺５寸が使われた以外は、６尺３寸が使われている。一方、武家屋敷地区第４地点で発見された、明治時代の第二師団の建物では、１間の寸法が６尺となっていることが確認されている（年報13）。６尺が使われ始める時期については、事例が少なく確定できないが、明治時代以降に変化したと考えた方が良いであろう。その場合、１号建物の時期が問題となる。２層が薄い部分が多いため、１号建物が２層の下位から掘り込まれているという認識が誤っている可能性も完全には排除できない。しかし、２層を除去してから礎石の上面が露出しているものも多く、ここでは２層より下位から掘り込まれてⅢ期に相当するとしておきたい。ただし、柱間寸法から見て、１号建物がⅣ期に下る可能性は完全に否定できない。またⅢ期の存続時期は、明治初頭まで含む可能性が高いため、１号建物がⅢ期に属し、その中でも最も新しい明治初頭になる可能性は高い。しかし、明治初頭は屋敷が取り払われていく時期であり、その中で、なにゆえ新たに建物を建てたのか疑問が残る。

各所で撹乱と重なっており、本来礎石が存在したにもかかわらず、撹乱によって壊されている場合も多いと思われる。柱12や柱17は柱筋から微妙にずれるため、異なる遺構を構成する可能性もあるが、他の礎石との関係も考慮し、１号建物を構成するものと考えた。残されていない礎石があった可能性もあることから、建物の詳細な構成は明らかではない。南北方向の柱間は、１間間隔で柱筋が通ることが多い。一方東西方向は、１間間隔とならずに、１間半間隔をとる部分も多い。北半部では、半間間隔で礎石が設けられている部分が多い。南半部でも、比較的柱筋が通る場所の間に、半間間隔で礎石が認められる場所もある（柱20・21・33）。柱15の北側には、地覆石状に石が並んでいる部分もある（石列）。全体としては、南北方向では９間分、東西方向では６間半分を確認したこととなる。方向はＮ－24°－Ｗである。

礎石は、20～55cmの大きさの円礫から亜角礫を用いており、南側ほど大きな石が使われている傾向がある。掘り方内に直接礎石を据えている場合がほとんどで、根固め石となる小礫が入っているのは、柱21だけである。大きな石が、二重に重なっている場合もある。柱19や柱23など、複数の石を組み合わせたように積み重ねている場合もある。このような、大きな石を重ねたり、複数の石を組み合わせる礎石の据え方は、江戸時代の建物にはほとんど見られない方法である。遺物は、磁器、陶器、土師質土器皿、瓦、木製品が出土しているが、いずれも量はわずかである。

【２号建物】（図52・53、図版36）

Ｆ～Ｉ－４～６区で検出された礎石建物である。２層下部上面から掘り込まれており、Ⅲ期の遺構と判断される。３号建物とは直接の切り合い関係はつかめていないが、位置関係から見て、同時存在は難しいと考えられる。３号建物は礎石が全て取り払われているのに対して、２号建物は礎石がほとんど残されている。この点から、３号建物が古く、その礎石が取り払われた後に、２号建物が造られたと考えるのが自然であろう。撹乱で各所が壊されているものと思われる。遺物は出土していない。

礎石と礎石をつなぐ石列状の地覆石からなる。柱間寸法は１間を６尺３寸としており、場所によって半間間隔で礎石が据えられている。方向はＮ－27.5°－Ｗである。全体として、東西４間半、南北２間半の範囲が検出できたが、さらに広がっていたと思われる。礎石は25～35cmの川原石を用いており、幅35～50cmの掘り方に据えられている場合が多い。掘り方は20～30cm程度と深く、それを埋め戻した上に礎石を置いている。根固め石が詰められている例はない。礎石の中には、掘り方が明瞭にとらえられなかったものもある。掘り方がはっきりしない礎石には、床束を支える礎石であった可能性も考えられるであろう。

礎石をつなぐ地覆石と考えられる石列部分は、礎石より一回り小さい15～20cm程度の川原石を用いている。石列の部分は、石の周囲を少しづつ削りながら、掘り方の検出に努めたが、明確な掘り方はほとんど確認できなかった。石の大きさとほとんど同じ程度の範囲を、わずかに窪めた程度の掘り方であったと推定される。そのため石が動かされてしまうと、掘り方の検出は極めて難しくなってしまう可能性が高い。

地覆石は、本来は礎石の間をつなげていたと想定されるが、わずかしか石が残されていない場合も多い。柱１の南側には石列１があるが、他と比べると石の並びがはっきりしない。石列２は、柱３と柱４をつないでいるが、柱３より北側にも延びていた可能性がある。石列３は、柱４から柱８をつなぐが、柱８の西側にも１個だけ石が残されており、さらに西側へ石列が延びていたことは間違いない。柱８から柱９を経て、石列４が南へ延びるが、柱11までつながっていた可能性がある。石列５は、柱６から西へ延びるが、これとは別に、柱６の南にも石があり、南へも石列が延びていた可能性がある。石列６は柱13から西へ延び、半間のところで南に延びる石列７につながる。この石列６は、石列３と一直線に並んでおり、本来は石列がつながっていた可能性が高い。地覆石がある場所は、建物の主要な構造を支える部分と考えられるが、残されていない礎石や地覆石が存在した可能性もあることから、建物全体の詳細な構成は明らかではない。

【３号建物】（図52・53、図版37）

Ｈ－３・４区で検出した礎石建物である。礎石は残されておらず、掘り方のみが検出されている。柱１が５号柱列の柱３を切り、東辺が４号建物の柱７と６号柱列の柱３を切っている。直接の切り合い関係はないが、２号建物とは位置関係から見て、同時存在は難しいと考えられる。上述のように、礎石を取り除いた３号建物が古く、２号建物が新しい可能性が高い。このように、３号建物より新しい遺構も古い遺構もⅢ期と考えられることから、３号建物もⅢ期と判断した。礎石を取り除いた後の、浅い掘り方のみが残存していると考えられる。遺存状態は悪く、東辺の一部と、北辺の礎石掘り方１基を検出しただけである。方向はＮ－24°－Ｗである。６尺３寸を１間としていると考えられる。柱の礎石は１間間隔で据えられていたと推定した。北辺の柱１は単独で存在しているが、東辺は浅いピットが列状に連なっている。礎石をつなぐ形で、地覆石が列状に据えられていたと考えられる。掘り方の幅は、25～50cm程度で、深さは６～８cm程度と浅い。東辺の断面を見ると、図で１・３・４として示した層が、石の抜き取り跡の埋土で、２・５が掘り方の埋土であると考えられる。遺物は、磁器、陶器、土師質・瓦質土器、軟質施釉土器が出土しているが、いずれもわずかな量である。

【４号建物】（図52・53、図版37）

Ｆ～Ｈ－３・４区で検出した、掘立柱建物である。北辺と西辺のみが確認できており、それ以外の延び方は判明していない。１間を６尺３寸とした柱間寸法で造られている。西辺は、半間間隔で柱穴が配されている。北辺

は、１間間隔で柱穴が造られているが、柱６と柱７の間は、２間分の間隔が空いており、ちょうど中間に柱穴がみられない。柱７が、３号建物の東辺に切られている。また、撹乱によって破壊されている部分もある。方向はN－23.5°－Wである。柱穴の形状や規模は、違いが大きい。北西隅の柱４は、径15cm程度のほぼ円形で、極めて小さい。他の柱穴は、25～45cmの大きさで、ほぼ円形のものや、隅丸方形のものまで変化が大きい。礫が入れられているものが多く、柱の脇に詰めたと考えられる。遺物は、磁器、陶器、土師質土器Ⅲがわずかに出土しているだけである。

４号建物の周囲には、後述する３～６号柱列が造られている。いずれも方向がN－22.5～23.5°－Wで、４号建物とほぼ同じである。同時に存在したか否かは確定できないが、位置関係から見て、密接に関連する可能性が高いものと考えられる。４号建物は３号建物に切られているが、５号柱列と６号柱列も３号建物に切られており、切り合い関係からも、ほぼ同じ段階と考えて矛盾しない。６号柱列は、２層下部上面から掘り込まれており、Ⅲ期に属することは確実である。以上の点から、４号建物と３～６号柱列は、ほぼ同じ段階の遺構と考え、いずれもⅢ期の遺構とした。

【１号柱列】（図57・58、図版38）

Ｄ・Ｅ－５～11区で検出された、南北方向の掘立柱列である。控え柱を伴いながら、南北に長く伸びる柱列であることから、屋敷地を区画する塀であったと考えられる。２層より下位で、２層下部上面から掘り込まれていると考えられることから、Ⅲ期とした。Ⅰ期もしくはⅡ期の８号柱列、Ⅱ期の27号溝、池状遺構古段階を切っている。柱１より南側に延びていた場合、柱穴がもう１基、調査区内で検出されても良い位置関係にあるが、検出できていない。池状遺構新段階の西岸の掘り方によって壊されている可能性もあるが、明確にはできていない。そのこともあって、池状遺構新段階との前後関係は把握できていない。

南北方向の柱筋では、途中の７区で撹乱により壊されているが、12基の柱穴が検出されている。柱間寸法は３尺９寸と考えられる。撹乱で途切れる柱９と柱10の間は、この寸法では合わないため、この部分だけ異なる寸法が使われていた可能性がある。柱１から柱12まで、15.6mの長さを検出したこととなる。方向はN－27°－Wである。柱４と柱８には西側に控え柱の柱穴（柱13・14）が確認できた。柱14は独立した柱穴であるが、柱13は柱４と同じ掘り方に入れられている。南北の柱筋から控え柱までの寸法は２尺のようである。控え柱が付く柱８では、東側にも直交する柱筋が延びていく。南北の柱筋から２尺のところに柱15があり、さらに３尺９寸のところに柱16がある。控え柱を兼ねて、東側に延ばしたものであろうか。

柱穴は、径40～65cmのほぼ円形を呈するものが多いが、隅丸方形に近いものもある。控え柱を同じ掘り方におさめる柱４・13は、長さ108cm、幅50cmの長方形の掘り方である。柱穴の深さは32～66cmで、やや差が大きい。柱７では柱材が残されており、太さ12cm程度の丸材と思われる。川原石を詰め込んだものも多く、柱の脇に詰めるように入れたものと考えられる。東側に延ばされた柱15と柱16では、方形の板材を礎板として底面に敷いていた。遺物は、磁器、陶器、土師質・瓦質土器、軟質施釉土器、土鈴、瓦、弾丸、火打石が出土しているが、いずれも量はわずかである。

【２号柱列】（図57・58、図版38）

Ｄ－９・10区で検出された、南北方向の掘立柱列である。２層の下面より掘り込まれており、Ⅲ期に属すると考えられる。５基の柱穴が検出されており、柱間寸法は３尺９寸と考えられる。方向はN－23°－Wである。南側は撹乱によって破壊されている。北側は、対応する柱穴が見当たらないことから、これ以上延びていかないようである。Ⅱ期の27号溝を切っている。柱穴は、径25～30cmのほぼ円形で、深さは30cm前後である。柱２・３・４で柱材が残っていた。径10cm前後の丸材である。遺物は、 陶器と土師質土器の皿がそれぞれ１点出土しているだけである。

【３号柱列】（図52・53、図版38）

Ｇ～Ｉ－２・３区で検出された、東西方向の掘立柱列である。５基の柱穴が検出されており、柱間寸法は３尺７寸と考えられる。方向は、直交する向きに直して、Ｎ－22.5°－Ｗである。Ⅱ期の15号溝、11号土坑、21号土坑を切っている。撹乱によって削平されている部分もある。東側の延びは、Ⅳ期の落ち込みなどがあり、不明である。西側は、対応する位置に柱穴は検出されていない。柱穴は、径25～35cmのほぼ円形を呈し、深さは30cm前後である。柱３では柱痕跡が確認されており、太さは14cmである。柱２では、川原石が詰められたような状態で確認されており、柱の脇に詰めるように入れたものと思われる。遺物は、土師質土器皿と瓦がわずかに出土しているだけである。

【４号柱列】（図52・53、図版39）

Ｇ・Ｈ－２・３区で検出された、東西方向の掘立柱列である。３号柱列のすぐ南側に平行している。５基の柱穴が検出されている。このうち、西側の柱１から柱３までの２間分は、柱間寸法が４尺である。一方、東側の柱３から柱５までの２間分は、柱間寸法が３尺となっている。同じ柱列で、途中で柱間寸法が変わっている。方向は、直交する向きに直して、Ｎ－22.5°－Ｗである。Ⅱ期の15号溝、11号土坑、18号土坑を切っている。撹乱によって壊されている部分もある。東側の延びは、Ⅳ期の落ち込みなどがあり、不明である。西側は、対応する位置に柱穴は検出されていない。柱穴は、楕円形から隅丸長方形を呈し、長軸の大きさで25～38cm、深さは30～40cmである。柱１・３・５で柱痕跡が確認されており、太さは11～16cmである。遺物は、磁器、陶器、土師質土器皿がわずかに出土しているだけである。

【５号柱列】（図52・53、図版39）

Ｈ－２・３区で検出された、南北方向の掘立柱列である。３基の柱穴が検出されており、柱間寸法は３尺７寸と考えられる。方向はＮ－22.5°－Ｗである。柱１と柱２の間は２間分の間隔があいており、その中間には川原石がまとまって置かれていた。５号柱列と関係するものかもしれないが明確ではない。北側は調査区外へ延びていく可能性がある。南端の柱３の位置が、４号建物の北辺と一致するため、一連の構造となる可能性もある。柱３が３号建物の柱１に切られている。Ⅱ期の11号土坑、19号土坑を切っている。柱穴は、径25～30cmの円形から楕円形を呈し、深さは30cm前後である。柱３で柱痕跡が確認されており、太さは８cmである。出土遺物は磁器、土師質土器皿、瓦がわずかに出土しているだけである。

【６号柱列】（図52・53、図版39）

Ｈ－３・４区で検出された、南北方向の掘立柱列である。３基の柱穴が検出されており、柱間寸法は５尺５寸と考えられる。方向はＮ－23.5°－Ｗである。柱１が４号建物の柱７の、すぐ東側に並んでおり、一連の構造となる可能性もあるが、明確ではない。２層下部上面から掘り込まれており、Ⅲ期と判断した。柱２が、３号建物の東辺に切られている。２間分のみの検出であり、南北がさらに延びるかどうかは、はっきりしない。柱穴は、径30～40cm程度の、ほぼ円形を呈し、深さは30cm前後である。柱１では、底面に礎板として川原石が置かれていたが、柱痕跡の位置はずれていた。柱痕跡の太さは10cm程度で、柱のまわりに、川原石を詰めている。出土遺物は、陶器１点と土師質土器皿が１点出土しているだけである。

【２号溝】（図54・55、図版42）

Ｃ・Ｄ－２区で検出された。２層の下で検出されているが、２層下部が存在しない場所であるため、２層下部との関係はわからない。４号溝、ピット６を切っている。残存部分が南北に長い形状をしていることから溝と推測した。共同溝による撹乱の東側で検出されており、大部分が撹乱によって破壊されている。遺構の立ち上がりの東側部分だけが検出されており、遺構底面などは確認できない。そのため、本来の機能が溝であったのかどうかは確実でない。共同溝撹乱を挟んだ西側のＢ－２区では４号土坑が検出されており、４号土坑の規模などから、その東辺という可能性も考えたが、出土遺物の時期がずれるため、異なる遺構と判断した。残存部分の南北の長

さ245cm、深さは20cmである。陶器、土師質・瓦質土器などがごくわずか出土している。陶器では大堀相馬産の青土瓶の破片がみられ、19世紀前葉以降のものであろうと考えられる。掘り込み面は確定できなかったが、出土遺物からⅢ期に属する可能性が高いものと考えた。

【３号溝】（図52・53、図版42）

Ｇ－６区で検出された。２層を掘り下げて検出されているが、２層下部や４層が存在しない場所であるため、掘り込み面は特定できなかった。大堀相馬産の鉄釉を施した陶器の瓶が出土しており、19世紀に下る可能性があることから、Ⅲ期に属する可能性が高いと判断した。南北方向に延びる素掘りの溝であるが、南北それぞれが撹乱によって破壊されているため、展開などは不明である。Ⅰ期の33号溝を切っている。残存する長さ約1.8m、上幅約30cm、下幅約20cm、深さ約14cmと規模は非常に小さい。方向はＮ－16°－Ｗである。磁器、陶器、土師質土器、土人形、瓦が出土しているが、いずれもごくわずかである。

【６号溝】（図54・55、図版42）

Ｄ－４・５区で検出された南北方向に走る素掘りの溝である。２層下部の上面から掘り込まれており、掘り込み面から当期に属するものと考えられる。25号溝を切っている。溝の南北端や中央部は、撹乱によって破壊されているため、つながりなどの全体形状は不明である。検出できた長さは2.8mである。上幅は約34cm程度、下幅約25～30cm、深さ６cm程度で、方向はＮ－30°－Ｗである。６号溝の下位には、一部重なって同じ方向に７号溝が存在する。しかし、６号溝が断片的であることなどから、両者の関係は不明である。遺物は、陶器、土師質土器がごくわずか出土している程度である。

【７号溝】（図54・55、図版42・43）

Ｃ・Ｄ－３～５区で検出された。２層下部上面から掘り込まれており、25号溝を切っている。掘り込み面からⅢ期と判断される。木樋を据え付けた溝で、南北方向に延び、Ｄ－３区で「くの字」状に西に折れる。南北部分の方向はＮ－28°－Ｗ、屈曲部分より西側は、Ｎ－81°－Ｗである。ピット59を切っている。南端と西端は撹乱により破壊されているため、つながりは不明である。木樋の幅は約17cm、掘方幅は約32～60cmである。木樋の高さは残りのよいところで約８～10cm程度、板材の厚さ２～３cm程度であるが、保存状態が悪く、ほとんど残存していない箇所もある。木樋の屈曲部分は、木材を斜めに加工して、溝の曲がりに合わせて据えられている。木樋の残存状態があまり良くないため確実ではないが、木樋底面のレベルは北側でわずかに高いことから、北から南に向かって流れていたのではないかと推測される。遺物は、磁器、陶器、土師質土器皿、軟質施釉土器、寛永通宝が出土しているが、いずれもごくわずかである。

【14号溝】（図54・55、図版43）

Ｂ－４区で検出された素掘りの溝である。掘り込み面ははっきりしないが、比較的高いレベルで確認されたことから、Ⅲ期に含めた。北側部分を撹乱に、南側を２号井戸によって切られているため、本来の長さは不明である。残存部分の長さは1.4mで、上幅は40cm、深さは６cmとごく浅い。方向はＮ－70°－Ｗである。検出範囲が狭いため、流れていた方向は判らない。遺物は出土していない。

【18号溝】（図54・55、図版43・44）

Ｅ－４・５区で検出された。２層の下面から掘り込まれており、Ⅲ期の可能性が高いと考えたが、Ⅱ期に遡る可能性も残っている。Ⅰ期の14号土坑を切っている。南西から北東にのびる溝で、北側、南側ともに撹乱によって破壊されており、そのつながりは確認されなかった。検出した長さは約３mである。高さ８～10cmほどの薄い板が、溝の側板として据えられており、底面は素掘りのままである。側板の継ぎ目では、板が重なりをもって配置されている。側板の内側には杭が打たれ、側板が倒れないように作られている。溝の堀方には、石を抜き取ったような痕跡が確認される。このことから、本来は石組の溝であったが、後に側板を用いて作り替えている可能性が考えられる。側板の幅28～52cm、深さ約８cm、堀方の幅約48～76cmで、方向はおよそＮ－27°－Ｅであ

る。底面のレベルが北東側でわずかに低いことから、南西から北西に流れていた可能性が考えられる。18号溝の南西には26号溝が位置する。26号溝との関係については、後の26号溝で詳述するが、18号溝と26号溝は一連の溝であった可能性が高い。陶磁器類、瓦などが若干出土している。

【19号溝】（図56、図版44）

Ｈ－11・12区で検出された素掘りの溝である。２層の下位で、２層下部の上面から掘り込まれており、Ⅲ期に属する遺構である。北側部分は撹乱によって破壊され、その先の延び方は不明である。南側は調査区外に延びていく。Ⅰ期の29号溝を切っている。検出できた長さは1.2mだけである。方向はＮ－22°－Ｗである。幅は44cm、深さは16cmで、断面形状は船底状を呈する。磁器、陶器、土師質土器、土製品、鉄釘が出土しているが、いずれもごくわずかな量である。

【26号溝】（図54・55、図版43・44）

Ｄ・Ｅ－5・6区で検出された溝である。２層の下位で検出されていることから、Ⅲ期の可能性が高いと考えたが、Ⅱ期に遡る可能性も残っている。Ⅰ期の14号土坑と26号土坑を切っている。Ｄ－６区では南から北に延びている。検出した長さは2.8m、方向はＮ－25°－Ｗである。Ｄ－５区では北東に折れる。北東に延びる部分で検出した長さは3.1m、方向はＮ－28°－Ｅである。石組溝であったと推測されるが、石組みの抜けてしまっている箇所もある。Ｄ－６区では、溝の南端と、西側掘り方は撹乱によって破壊されている。Ｄ－５区でも溝の北西側では、石組みや掘り方は検出できなかった。溝の深さは約10～12cm程度で、底面のレベルから南から北東に流れていたものと推測される。

26号溝の北東には18号溝が位置している。２つの溝がつながる箇所にはちょうど撹乱があり、下面の14号土坑埋土と重複する箇所でもあるため、一連の溝かどうかを明確にすることができなかった。しかし、18号溝と26号溝の方向がほぼ同じであり、いずれも底面は北東方向に低くなっていること、18号溝には石組溝を作り替えた痕跡があり、元々は石組溝であった可能性があることなど、溝の特徴に共通点がみられる。また、26号溝のＤ－５区では、数本の杭が確認されているが、この場所は、26号溝北西側の石組や掘り方が検出できなかったところである。18号溝では、石組溝を側板と杭を用いて改修していることが推測された。26号溝でも、この箇所では石組が除去され、側板と杭を用いた改修が行われた可能性が考えられ、改修方法にも類似した特徴が推測される。これらのことから、18号溝、26号溝は、一連のものであった可能性が挙げられる。Ｄ－６区で検出された木材については、石組を補強したものなのか、埋土に残された木材であるのかは残存状況がよくなかったため、不明である。遺物は陶磁器、木製品などが若干出土している。

【２号井戸】（図54、図版44）

Ｂ－４区で検出された遺構である。西側部分を撹乱で破壊されており、14号溝を切っている。掘り方はほぼ円形を呈し直径は132cm、深さは約180cmである。井戸枠や石組などは伴っておらず、素掘りである。形状から井戸と考えたが、１号井戸や４号井戸と比べると浅いため、井戸として機能できたか疑問が残る。半割して約60cmほど掘り下げたところで埋土が崩落したため、断面図は作成できなかった。底面には、ほとんど分解していない植物質からなる層が、厚く堆積していた。掘り込み面ははっきりしないが、調査の早い段階で検出され、検出面のレベルも比較的高いため、Ⅲ期に属すると判断した。磁器、土師質・瓦質土器、加工木が出土しているが、ごくわずかな量で、時期などが判るものは無い。

【２号土坑】（図54・55、図版45）

Ｄ・Ｅ－２・３区で検出された。２層を掘り下げている際に検出されており、２層下部の上面が掘り込み面と考えられる。掘り込み面や出土遺物から、Ⅲ期に属すると推測される。南北約230cm、東西約200cmの不整円形を呈する土坑で、深さは約112cmである。浅い撹乱により、南北方向に土坑の中心付近が一部破壊されていた。Ⅱ期の７号土坑を切っている。埋土は３層に分けられ、埋土２層からは陶磁器、瓦、土師質土器、瓦質土器、木

製品など多数の遺物が出土している。特に、陶磁器、木羽や加工木、樹皮などの出土が多く、ゴミ穴の可能性が考えられる。また、木製の鍬が完形に近い状態で出土している。大堀相馬産の糠白釉、青釉や鉄絵の土瓶などが出土しており、19世紀前葉から中葉頃のものと考えられる。

【17号土坑】（図56、図版45）

Ｈ・Ｉ－10区で検出された。掘り込み面は確定できなかったが、比較的高いレベルで検出されていること、陶器に19世紀に下るものが含まれることから、Ⅲ期の遺構と考えた。南側が撹乱によって壊されており、全体の形状は判らない。東西の幅145cm、南北の残存幅105cm、深さ20cmである。埋土には礫がやや多く含まれている。土師質土器皿がやや多く出土しているが、下層に存在する20号土坑や２号遺構などに本来含まれていたものが、混じり込んだ可能性がある。それ以外には、磁器、陶器、土鈴、瓦、加工木が出土しているが、いずれもごくわずかである。

【石敷遺構】（図56、図版41）

Ｇ・Ｈ－10～12区では、２層下部上面に細かな礫や川原石が敷きつめられていた。石敷きの範囲は不整形であるが、東西3.3m、南北4.9mの範囲に及んでいる。南側は、調査区外まで延びていくものと考えられる。石敷きの北よりの部分は、石敷きの上に、細い木材が並べて敷かれている。木材が敷かれている範囲は、東西125cm、南北120cmである。この部分は、石敷きの上面が若干窪んでおり、その区域に木材が敷かれていた。ちょうど、下層の２号遺構や４号井戸の上にあたり、これらの遺構埋土が沈み込んだ関係で、窪んだ地盤の弱いところに敷きつめたものと考えられる。木材が敷かれた窪んだ場所には、砂質土が堆積していた。磁器、陶器、土師質・瓦質土器、軟質施釉土器、土製品、瓦、加工木が出土しているが、いずれも少量である。陶器には、相馬産の糠白釉で駒絵を描いた端反小碗が含まれており、幕末まで下る可能性がある。

【桝埋設遺構】（図56、図版41）

調査区南壁際の、Ｇ－11・12区で検出した。側面部分に方形の木材が残存しており、桝形のものを埋設した遺構であると考えられる。２層より下位で２層下部を掘り込んでいることから、Ⅲ期の遺構と判断した。Ⅲ期の石敷遺構とＩ期の30号土坑を切っている。南側は調査区外へ延びる。東西の幅55cmの掘り方に、ほぼ同じ大きさの桝状の木製品を埋設している。掘り方の深さは約40cmである。遺物は出土していない。

【桶埋設遺構】（図56、図版41）

調査区南壁際の、Ｈ－11・12区で検出された、桶が埋設された遺構である。桶は上部を除いて、ほぼ完全な形で残っていた。撹乱で削平された中で検出されているため、掘り込み面は判らない。すぐ南側の調査区南壁での基本層序の標高と比較して、２層下部上面から掘り込んでいる可能性があるものと考えてⅢ期とした。しかし、判断に悩む微妙な高さであり、掘り込み面が２層下部下面の可能性も残る。その場合にはⅡ期に遡ることとなる。直径80cmの掘り方の中に、径45cmの桶が埋設されている。掘り方の内部には、桶の周囲を取り囲むように、径15～20cmの円礫を敷き詰めている。掘り方の深さは80cm程度で、埋土は１層である。桶の内部に堆積した埋土は２層に分かれる。遺物は磁器、陶器、土師質土器皿、瓦、木製品が掘り方から出土しているが、いずれもごくわずかな量である。

④Ⅳ期の遺構（図61～64、図版46～47）

２層上面から掘り込まれている遺構をⅣ期とした。

Ⅳ期は、畑として利用されていることから、この区域の武家屋敷が取り払われた後の時期にあたる。やや不確実な部分も残るが、Ⅳ期は明治初期から明治20年前後までの間に限定され、中でも明治10年代を中心とする可能性が高いと考えられる。

調査区北よりのＥ～Ｈ－２・３区で、畑の可能性がある畝状遺構が検出されている。二の丸北方武家屋敷地区第４地点では、畝状遺構を取り囲む溝が検出されており、畑の区画が判明したが（年報13）、今回の調査では、畑の区画を示すような遺構は検出されていない。今回の調査区では、２層の残存状態があまり良くないため、畑がどれだけの広がりを有していたのかは明らかにできなかった。

畝状遺構以外の遺構は少なく、遺構密度は低い。溝が２条と、土坑２基、石列１条などが検出されているだけである。また、落ち込みとしたものが２基ある。２層の上部を覆う土が、直接入り込むもので、異なる埋土で埋められている遺構とは区別して、落ち込みとした。２層上面の最後の段階で掘られて、そのまま整地で埋められたものと考えられる。

これらの遺構は、南西側に、やや集中する傾向がある。これらの遺構が広がる区域では、畑は造られていなかった可能性を示すものであろう。

【畝状遺構】（図62・64、図版46）

Ｅ－２・３区で３列、Ｇ・Ｈ－２・３区で４列の畝状の高まりが、東西方向に、平行して並んでいる。２層上面が畝状に高まっており、２層が畑の耕作土として使われたと考えられる。２層の残存状態が良くなく、撹乱で破壊されている場所も多い。そのため、それぞれの畝状の高まりが、もともと途切れていたのかどうかは判然としない。畝状遺構を取り囲む溝のような、畑を区画する遺構は検出されていない。畝状の高まりの下幅は50～75cm、上幅は15～35cm、高さは３～６cm程度と低く、残り具合は良くない。方向は、平均的な場所で計測すると、Ｎ－65°－Ｅである。

【１号溝】（図63・64、図版46）

Ｄ・Ｅ－８・９区で検出した溝で、新古の２段階に分かれる。いずれも２層上面から掘り込まれていると考えられることから、Ⅳ期とした。

古段階の溝は、両側に径10cm未満の小ピットが並んでおり、杭を打った痕跡と考えられる。杭を立て、その外側に板を置くことで護岸としていた可能性が考えられる。西側は撹乱によって破壊されている。検出した長さは1.8mで、方向はＮ－25°－Ｅである。掘り方の幅50～70cmで、南北の杭列の間の幅は20～25cmで、深さは28cm前後である。検出した範囲が狭いため、どちらに流れていたかは明らかでない。東側には、径５～10cm程度の円礫を敷き並べた部分がある。礫が密に敷かれている範囲は、東西の長さは130cm、南北の幅50cm程度である。この石敷が検出された場所は、撹乱による削平が大きく、石敷を造る際の掘り込み面は確認できなかった。１号溝の東側に連結する位置に造られていることから、一連の遺構と考えた。特に、新段階の溝の、石組の内側の幅に対応する可能性がある。

新段階の溝は、古段階の溝とほぼ同じ位置で造られている。両岸に川原石を並べた石組溝である。幅65cmほどの掘り方の中に、長軸の長さ25～40cm程度の川原石を並べており、深さは20cm前後である。検出した範囲が狭いため、どちらに流れていたかは明らかでない。北岸が北側へ屈曲しており、ほぼ直角に曲がって北側へ延びていたものと思われるが、西側が撹乱によって破壊されており、詳しいことは判らない。１号溝の南側にも、南北方向に類似した大きさの石が並んでおり、１号溝と関連する可能性もある。しかし、南岸の対応する位置には延びていないようであり、関係は不明である。東側には、古段階で述べたように石敷きがあり、それにつながっていた可能性が高い。検出した長さは、北岸の石組で東西2.6mである。東西部分の方向は、Ｎ－63°－Ｅで、

図61　武家屋敷地区第７地点Ⅳ期遺構配置図
Fig.61　Distribution of features belonging to phase Ⅳ at BK7

図62　武家屋敷地区第７地点Ⅳ期の遺構（1）
Fig.62　Features belonging to phase Ⅳ at BK7（1）

図63　武家屋敷地区第７地点Ⅳ期の遺構（2）
Fig.63　Features belonging to phase Ⅳ at BK7（2）

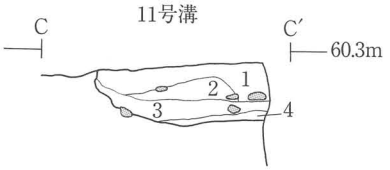
畝状遺構

1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性弱・しまり強　炭化物・礫をまだらに含む　酸化鉄・白色粒子を多く含む

5号土坑

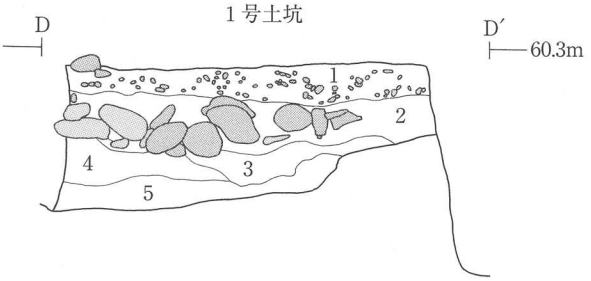
10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　炭化物を多く含む　白色・褐色土粒を多く含む

11号溝



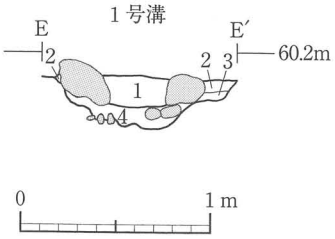
1　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　小礫・炭化物・白色粒子をわずかに含む
2　10YR3/3暗褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　多量の砂をブロック状に含む
3　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物を多量に含む　小礫をわずかに含む
4　10YR3/3暗褐色　砂質シルト　粘性強・しまり中　炭化物をわずかに含む

1号土坑



1　10YR4/6褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　黒褐色土・黄褐色土を互層に含む　炭化物・円礫を含む
2　2.5Y3/1黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　褐色土をまだらに含む　炭化物を少量含む　礫を含む
3　7.5Y5/2灰オリーブ色　シルト質粘土　粘性強・しまり弱　黒褐色土・黄褐色土をまだらに含む
4　2.5Y5/4黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中
5　7.5Y3/1オリーブ黒色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　緑灰色粘土質土ブロック・炭化物をわずかに含む

1号溝



1　10YR3/1黒褐色　シルト　粘性弱・しまり強　黄褐色土をまだらに含む　小礫・炭化物を少量含む　新段階埋土
2　10YR4/1褐灰色　シルト　粘性中・しまり強　小礫をわずかに含む　新段階堀方埋土
3　10YR3/3暗褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　白色粒子・黄褐色粘土粒をわずに含む　新段階堀方埋土
4　10YR3/3暗褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　白色粒子・黄褐色粘土粒をわずかに含む　古段階埋土

図64　武家屋敷地区第７地点Ⅳ期の遺構（3）
Fig.64　Features belonging to phase Ⅳ at BK7（3）

古段階とほぼ同じである。

磁器、陶器、土師質・瓦質土器、瓦など、各種の遺物が出土しているが、遺物の量はさほど多くない。

【11号溝】（図63・64、図版47）

Ｂ－６・７区で検出された溝である。２層上面で検出されたことから、Ⅳ期の遺構であると判断した。北側、東側、西側の３方向が撹乱によって破壊されているため、全体の形状ははっきりしないが、東西方向に延びる溝と考えられ、方向はＮ－63°－Ｅである。検出した長さは2.4mで、北側が破壊されているため幅は不明であるが、残存する幅は110cmである。深さは32cm前後で、断面形状は逆台形に近い。検出した範囲が狭いため、どちらに流れていたかは明らかでない。磁器、陶器、土師質・瓦質土器、瓦、硯など、各種の遺物が出土しているが、遺物の量はさほど多くない。

【１号土坑】（図63・64、図版47）

Ｂ－８～10区で検出された土坑である。調査区の西よりの区域では、２層がほとんど分布しないので、掘り込み面は明らかでない。出土した磁器や陶器の様相から、幕末から明治初頭に下る可能性が高いと考えられるため、Ⅳ期の遺構であると判断した。西側は調査区外へ延び、南東部分が２層の落ち込みに切られているため大きさは不明であるが、本来は長方形、あるいは隅丸方形を呈したものと考えられる。残存部分の大きさは、南北方向で410cm、東西方向で280cm、深さは75cmである。埋土の堆積はほぼ水平である。上部の埋土には礫が大量に含まれており、人為的に埋め戻されたことが確実である。特に埋土２層には、大きいものでは径20cmほどの礫が多数含まれている。磁器、陶器、瓦、土師質土器、硯などが出土している。また底面付近で、長さ約150cmの角材が出土している。

【５号土坑】（図62・64、図版47）

Ｃ・Ｄ－３区で検出された。２層上面から掘り込まれており、掘り込み面からⅣ期と判断される。西側は米軍共同溝による撹乱により破壊されており、北側の一部はピット３により切られているため、全体形状は不明である。残存部分の最大長50cm、深さ約34cmである。遺物は出土せず、遺構の性格も不明である。

【１号石列】（図63、図版46）

１号溝の南側のＤ－９区で検出されたもので、長軸の大きさ15～25cm程度の川原石を一列並べたものである。２層上面で造られており、Ⅳ期とした。北東－南西方向に延びており、方向はＮ－58°－Ｗである。両側とも撹乱によって破壊されており、残存していた長さは1.15mである。石列をはさんで両側の２層上面の標高は、特に変わることもない。遺構の性格は判らない。

(3) 小結

検出遺構の報告の最後に、各時期の遺構の様相について簡単にまとめるとともに、いくつかの問題点を指摘しておきたい。

江戸時代以前の遺構は、縄文時代の陥し穴になる可能性のある土坑が挙げられるだけである。他にも古代の遺物が出土しているが、遺構は見つかっていない。いずれにせよ、江戸時代以前には、遺構・遺物はわずかで、この地点の利用は、限定的であったと考えられる。

江戸時代以降は、各時期を通じて、様々な遺構が造られる。整地層との関係から、Ⅰ期からⅣ期に区分できた。この内のⅣ期は、明治時代に入って、武家屋敷が取り払われた時期と考えられる。畑の畝状の遺構が検出されており、他の遺構は少ない。Ⅳ期については、屋敷が取り払われて以後の様子を示すので、これ以上の検討は、特に加えない。以下では、江戸時代の武家屋敷として使われていたと考えられる、Ⅰ期からⅢ期について、若干の検討を加えてみたい。

Ⅰ期からⅢ期の遺構を比べると、各時期によって、遺構の様相が異なっている。その内容を考えるにあたって、今回の調査区が、絵図に見られる屋敷地の区画の中で、どのような位置にあたるのかを検討しておきたい。

本章の1．(2) において、調査区の位置が、城下絵図で示されたどの場所にあたるかを検討した（図15)。東を裏下馬通、西を大堀通、北を亀岡通、南を中ノ坂通に囲まれた、方形の区画の中に、今回の調査区が入ることは間違いない。その中での詳細な位置関係については、道路の位置が特定できていないことから、明確でない。南北方向の裏下馬通の位置は、千貫橋の位置からほぼ確実であるが、それ以外の道路については、詳細な位置を推定することはできない。特に、東西方向の道路の位置は、推定する手掛かりがまったく無く、おおよその位置を示したにすぎない。そのため全体の位置関係から推測するに留まるが、四方を道路に囲まれた区画の中で、東西・南北ともに、道路に近いところとは考え難い。道路から内側に入った、奥まったところに位置する可能性が高いと考えられる。

今回の調査区では、Ⅲ期の東側を除くと、建物跡が極めて少ない。特にⅠ期は、区画施設と考えられる溝以外には、遺構が極めて少ない。Ⅱ期でも調査区の各所でゴミ穴が検出されており、表の主要な建物が造られた場所でないことは確実であろう。このことは、今回の調査区が、屋敷地の裏手の、あまり建物が建てられていない区域であったことを示す可能性がある。絵図の検討結果と、このような遺構の様相は、おおまかには対応するものと考えて良いであろう。このように考えた場合、調査区の中に屋敷地の境界が入ってくる可能性が高い。しかし、屋敷地を区切る区画施設と考え得る遺構は、Ⅰ期からⅢ期を通じて、あまり検出されていないことは問題である。Ⅰ期の12号溝、Ⅱ期の22号溝、Ⅲ期の1号柱列・2号柱列などが屋敷を区画する施設になる可能性がある遺構である。これらだけで、江戸時代の全ての期間を通じて区画していたと考えるには、その数が少ないと言わざるを得ない。この点に関しては、屋敷の境となる施設を、道路に近い表側はともかく、裏手の部分でどれだけ整備していたのかについて、改めて考えてみる必要があるだろう。必ず、溝や塀で区画していたのかどうかは、再検討の必要がある。簡素な区画施設や、生け垣などが使われていた場合、発掘調査でその痕跡が検出できるかどうか問題である。考古資料以外の様々な面から、今後検討を加えていく必要があるだろう。

調査区が位置すると考えられる四方を道路に囲まれた区域は、大きくは4つに区画されている（図16・17、表6)。今回の調査で検出された遺構との関係で注目されるのは、南東の区画である。この区画は、延宝6～8年(1681～83) の絵図では「月畊和尚」とされているが、その前後の絵図では記載が無いか、「明屋敷」とされている。すなわち、寛文4年（1664）から元禄4・5年（1691～92）の絵図まで、一時期を除くと、空き屋敷であったと考えられる。続く、享保9年（1724）以後とされる絵図では、南東部の区画は3つに区分され、それぞれに人名が書かれている。

Ⅱ期の2号遺構、1号遺構、24号土坑は極めて大規模なゴミ穴で、ゴミ穴に捨てられた膨大な廃棄物の内容や

木簡の記載内容から、二の丸のゴミが運ばれて捨てられた可能性が考えられる。ところが、家臣が使用している屋敷地に、二の丸のゴミを運び込むことは考え難い。空き屋敷であった場合には、その空き地にゴミ穴を掘って捨てたと考えることも可能であろう。Ⅱ期に大規模なゴミ穴が造られていた調査区の南東部が、絵図で空き屋敷とされている南東部の区画に入るとすると、ゴミ穴が造られた理由を説明し易くなる。

2号遺構などから出土した木簡の記載された年号は、享保5年（1720）を中心として、若干の幅がある。新しいところでは、確実なものとしては享保12年（1727）まであり、確実ではないが可能性のあるものとしては享保18年（1733）まである。人名が記されるようになる絵図の年代は、享保9年を上限とすると考えられているもので、実際にはもう少し下る時期に作成された可能性もある。微妙な部分が残っているが、年代的には合致する可能性はある。

しかし、このように考えた場合には、Ⅱ期の22号溝や、先行するⅠ期の12号溝などが問題となる。これらの溝が屋敷地を区画する施設であった場合、2号遺構などは、区画の西側となってしまう。溝との位置関係が逆であれば問題がないが、残されている絵図では、南西の区画が空き屋敷であったことは無い。あるいは、絵図が残されていない、元禄4・5年（1691～92）から享保9年（1724）ごろまでの間に、南西部の区画が一時的に空き屋敷であった可能性を想定することもできなくもないが、現状では根拠が薄いであろう。いずれにせよ、これ以上検討を進めていく材料はなく、確実なことは言えない。今後、周辺の調査が進んだ段階で、再度検討することが必要である。

Ⅲ期になると北東部に建物跡が集中する他、それまで区画施設の見られない場所に、1号柱列や2号柱列が造られている。これらのことは、屋敷の区画が変化した可能性を示すものであろう。絵図では、享保9年（1724）以後の絵図から、区画が細かく分割されるようになる。一つの区画が小さくなるため、それまで奥まった場所にも、建物を建てる必要が生じたことが推測される。区画が細かくなっていく時期は、Ⅲ期の年代とは合わないが、変化の方向としては合致すると言えるだろう。

このように、検出された遺構を絵図と関連させて解釈することは簡単ではない。明解な結論を得ることが難しいが、大まかな様相では、一定の関連が見られそうである。周辺区域の調査の進展に合わせて、更なる検討を加えていくことによって、少しずつであっても、解明していくことが必要であろう。

最後に、調査区域の様相を検討するにあたっても、様々に関連すると思われる礎石建物の保存状況について、触れておきたい。江戸時代では、簡素な構造の建物には掘立柱建物が残ると考えられるが、主要な建物は礎石建物に変化していったと思われる。建築史的検討が必要であるが、少なくとも18世紀後半以降は、民家建物においても、母屋は礎石建物となっている可能性が高い。ところが、川内北地区の調査においては、礎石建物の検出事例が少ない。掘立柱建物や掘立柱列は多数発見されるのに、礎石建物はあまり見つからない。この問題を考える上で、Ⅲ期の2号建物や3号建物の調査成果は、重要であると思われる。2号建物や3号建物では、掘り方が深い礎石もあるが、わずかに掘り窪めた程度で石を据えている場合も多い。地覆石の場合、その傾向が特に強い。このような場合、石が取り除かれると、掘り方の検出は極めて難しい。あるいは、後世の削平がわずかでも、痕跡が残らなくなってしまう。このような事例を見ると、礎石建物が検出されなかったとしても、もともと存在しなかったのかどうか、慎重に検討する必要がある。同時に、礎石建物のわずかな痕跡を見落とさないために、丁寧な調査の方法が求められるであろう。

〈引用・参考文献〉

阿刀田令造　1936　『仙台城下絵図の研究』斎藤報恩会博物館図書部研究報告４
坂田啓編　1995　『私本仙台藩士事典』創栄出版
佐藤　巧　1979　『近世武士住宅』叢文社
鈴木省三　1937　『仙台風俗志』（1977年歴史図書社より再刊）
仙台市教育委員会　1967　『仙台城』
仙台市教育委員会　2005　「仙台市若林城跡（第５次調査）」『平成17年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』55～60頁
仙台市史図録編纂委員会篇　1980　『増補改訂版　目で見る仙台の歴史』宝文堂
仙台市史編さん委員会編　1997　『仙台市史資料編３　近世２城下町』仙台市
仙台市史編さん委員会編　1997　『仙台市史特別編４　市民生活』仙台市
仙台市史編さん委員会編　2001　『仙台市史通史編３　近世１』仙台市
仙台市史編さん委員会編　2004　『仙台市史通史編５　近世２』仙台市
高倉淳ほか編　1994　『絵図・地図で見る仙台』今野印刷
高橋富雄ほか編著　1979　『角川日本地名大辞典４宮城県』角川書店
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1985　『東北大学埋蔵文化財調査年報１』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1986　『東北大学埋蔵文化財調査年報２』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1990　『東北大学埋蔵文化財調査年報３』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1992　『東北大学埋蔵文化財調査年報４・５』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1993　『東北大学埋蔵文化財調査年報６』
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1994　『東北大学埋蔵文化財調査年報７』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1997　『東北大学埋蔵文化財調査年報８』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1998　『東北大学埋蔵文化財調査年報９』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1998　『東北大学埋蔵文化財調査年報10』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　1999　『東北大学埋蔵文化財調査年報11』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2000　『東北大学埋蔵文化財調査年報13』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2001　『東北大学埋蔵文化財調査年報14』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2001　『東北大学埋蔵文化財調査年報15』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2005　『東北大学埋蔵文化財調査年報18』
西和夫　1990　『図解古建築入門』彰国社
本田勇編著　2003　『史料仙台伊達氏家臣団事典』丸善
三浦正幸監修　2002　『最新日本名城古写真集成』別冊歴史読本第27巻第14号　新人物往来社
宮城県図書館　1993　『宮城県図書館所蔵絵図・地図解説目録』
村上直・木村礎・藤野保　1988　『藩史大事典第１巻北海道・東北編』雄山閣
吉岡一男ほか編　2005　『絵図・地図で見る仙台　第二輯』今野印刷
渡辺信夫ほか編著　1994　『宮城県姓氏家系大辞典』角川書店

REPORT

OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH ON THE CAMPUS OF

TOHOKU UNIVERSITY

Vol.19-1, MARCH 2006

The Archaeological Research office

On the Campus, Tohoku University

1-1,Katahira,2chome,AobaWard,Sendai 980-8577 JAPAN

Summary

On the campus of Tohoku University a lot of archaeological sites are known. Among them, Sendai Castle is the most famous and largest one. Almost all of the south part of Kawauchi campus is located on its secondary citadel area. The north part of Kawauchi campus is located on the sites of samurai residences. Tomizawa campus includes Jomon and Kofun period site.

In Japan, if existing circumstances need to be changed in the known site area, excavation research on the buried cultural properties must be carried out. According to legal procedures, the commission for research, which was organized in 1983, carried out many salvage excavations for 11 years. It was reorganized into the Center in 1994, to improve conditions of research. The Center mainly carries out salvage excavations of archaeological sites on the campus, analyzes these records and remains and publishes excavation reports. Conservation and exhibition of archaeological heritage, studies about structure of sites, artifacts, technique of excavation and preservation are important duties.

This volume carries the report of salvage excavations of TM5 on Tomizawa campus and BK7 on Kawauchi campus, which was conducted by the Archaeological Research Center on the Campus of Tohoku University in 2001. In the excavation of BK7, a lot of artifacts have been excavated. So these are reported in the book in separate volumes. This report is the first separate volume, and describes about the archaeological features of BK7. We report about the artifacts and analyses of natural science on the 2nd to 5th separate volume.

TM5 site (the 5th excavation of Ashinokuchi site at Tomizawa campus)

This area was excavated prior to construction of a building for the GeV γ -ray experimental device at the Laboratory of Nuclear Science. The area of the excavation was 512㎡.

A ditch, 10 clay mining pits and 3 pits were found from this area. This ditch had been already found at TM3 and TM4, and these are parts of the same ditch. Because there is no artifact clearly dated from this ditch, the date of this ditch is unknown.

Ten clay mining pits at TM5 are similar to those at TM4. The clay mining pits at TM4 were dated to the Final Jomon period based on the artifacts. But the size and distribution of the clay mining pits at TM5 are smaller than TM4. A haji-ware vessel belonging to the early Kohun period was found from clay mining pit No.3. So it is inferred that these clay mining pits are dated to the Kohun period.

BK7 site (Loc.7 of samurai residences located at the side of north outer moat of Ninomaru, i.e. Secondary Citadel of Sendai Castle)

This area was excavated prior to construction of a building for Multimedia Education and Research Complex. This area was samurai residences located at the side of north outer moat of Ninomaru in Edo period. At BK7, a trap pit was the only archaeological features before Edo period. A lot of archaeological features were found that are dated from Edo period to Meiji period. And these archaeological features are classified into 4 major stages.

Phase Ⅰ

Phase Ⅰ is from around the initial period of the 17th century to the end of the 17th century. At the east part of this excavation area, there was a ditch running in north and south direction. And being crossed this ditch at right angles, there were also some small-scale ditches. It is supposed that the ditch was the facility to divide the area into individual residences, but its detailed date is not clear. There are a few features. From No.14 earthen pit, some porcelain and glazed ceramics dated to the initial Edo period are excavated. It shows that this area was occupied since the initial Edo period.

Phase Ⅱ

Phase Ⅱ is from around the initial period of the 18th century to the early part of the 19th century. There were some huge garbage pits at the southeast part of this excavation area, and a lot of wooden tablets and wooden implements written in black ink (Indian ink) were found from these garbage pits. The era name of around 1720 was written on these wooden tablets. The contents of these wooden tablets show that the garbage was carried in and dumped here from the Secondary Citadel of Sendai Castle. Besides, a lot of earthen pits and ditches were found overlapped on each other at the northeast part of this excavation area.

Phase Ⅲ

Phase Ⅲ is from around the early part of the 19th century to around 1870(the early part of Meiji period). Some buildings were constructed on foundation stones, some buildings were with pillars embedded directly in the ground and some lines of pillar-holes were reconstructed over and over around the northeast part of this excavation area. At the south part of this excavation area, a pond was found, its bank was protected by stones.

Phase Ⅳ

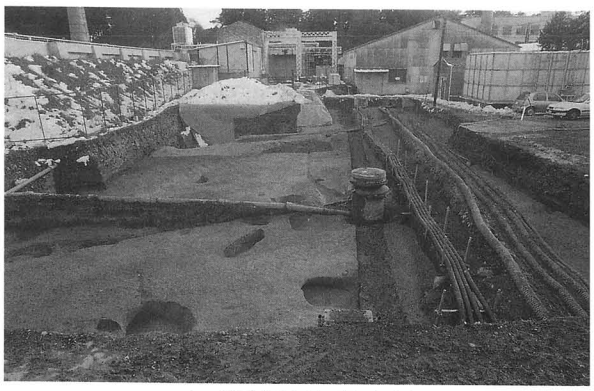
Phase Ⅳ is from around 1870 to around the 21st year of Meiji (1888), when the Japanese Imperial Army was disposed at the site. Some structural remains such as ridges were found at the north side of this excavation area. There are a few ditches and earthen pits. But the density of the archaeological features was low. It was the result that the samurai residence area had been abolished at the Meiji Restoration period.

The aspects of the archaeological features at each major stage are different. It reflects the differences in land-use patterns at each stage.

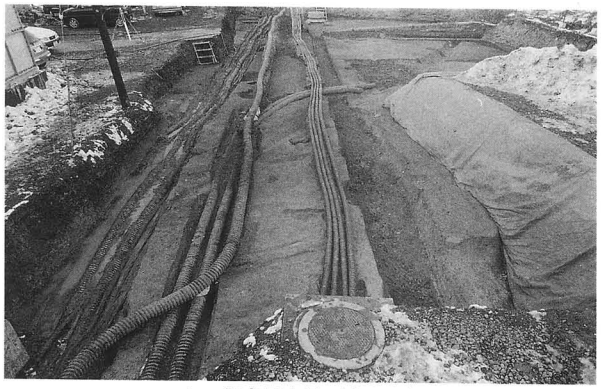
写　真　図　版

図版１～４：芦ノ口遺跡第５次調査（TM５）検出遺構・出土遺物
図版５～47：仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（BK７）検出遺構

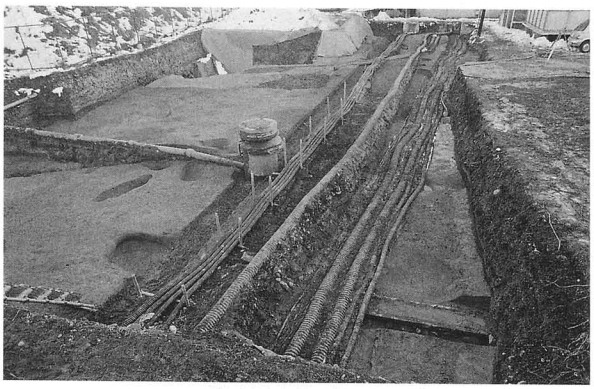
1．調査区全景（北東から）



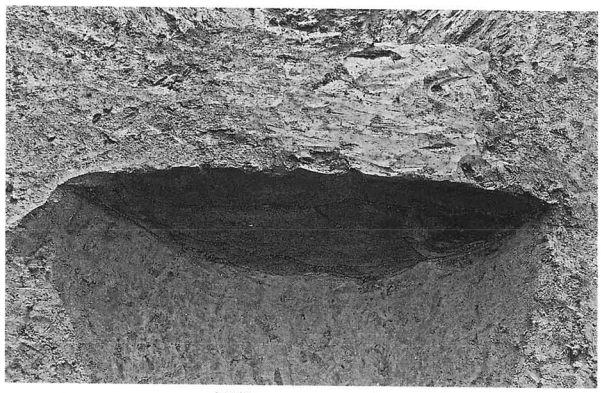
2．調査区全景（北から）



3．調査区全景（南から）

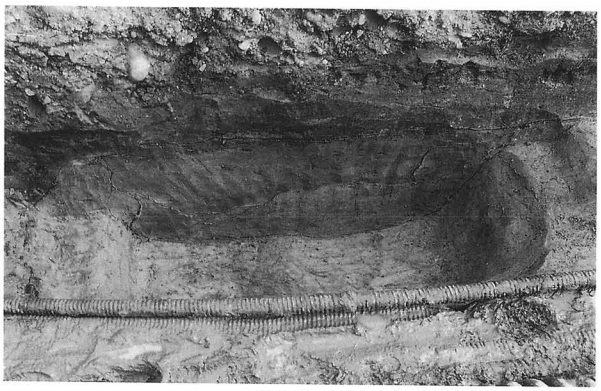


4．調査区全景（北西から）



5．1号溝セクション（北から）

6．1号土坑セクション（西から）



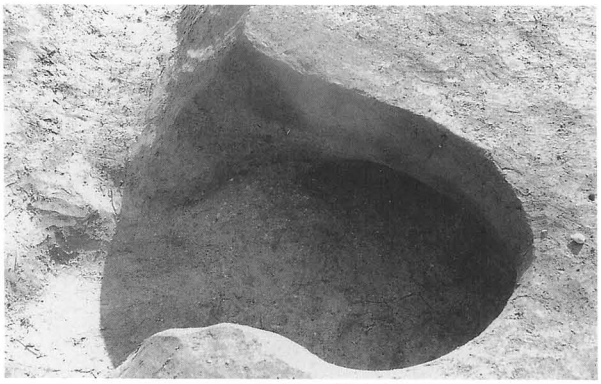
7．2号土坑（西から）

8．3号土坑セクション（北から）

図版1　芦ノ口遺跡第5次調査全景・検出遺構（1）
Pl.1　Views and features at TM5（1）

1．3号土坑（南から）

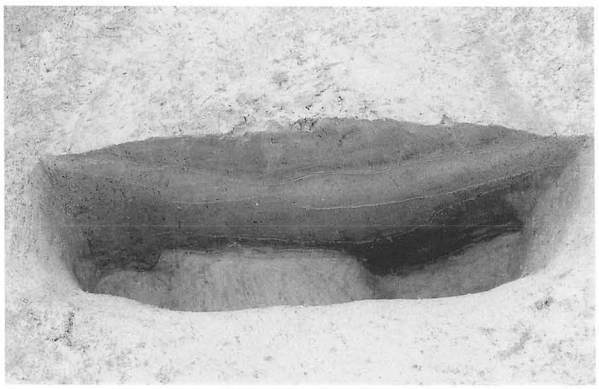
2．4号土坑セクション（南から）



3．4号土坑（北から）

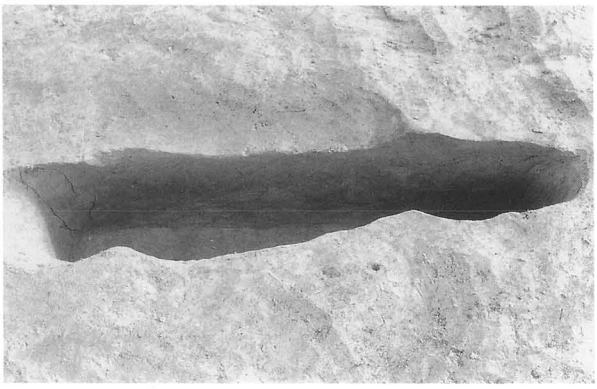
4．5号土坑セクション（北から）

5．5号土坑（北から）



6．6号土坑セクション（北から）

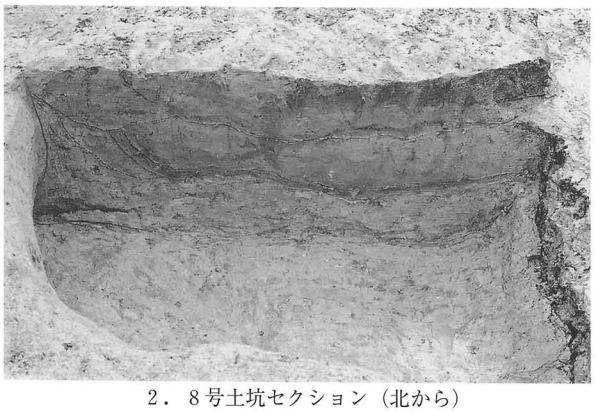
7．6号土坑（北から）



8．7号土坑セクション（西から）

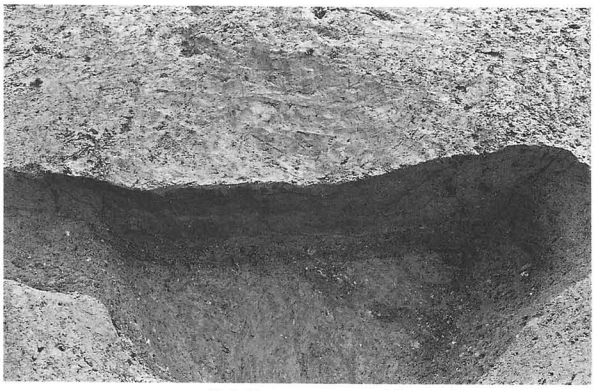
図版2　芦ノ口遺跡第5次調査検出遺構（2）
Pl.2　Features at TM5（2）

1．7号土坑（東から）



2．8号土坑セクション（北から）

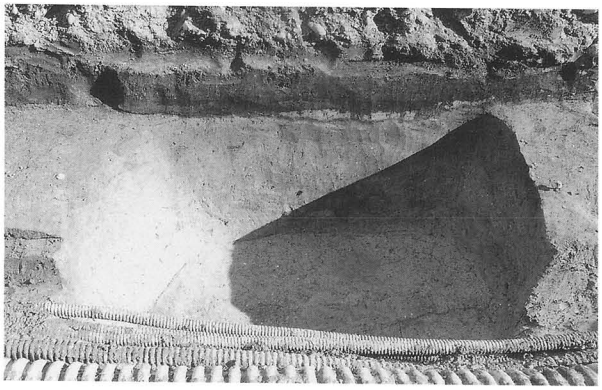
3．8号土坑（西から）



4．9号土坑セクション（北から）

5．9号土坑（南から）

6．10号土坑セクション（西から）



7．10号土坑（東から）

8．ピット1セクション（南から）

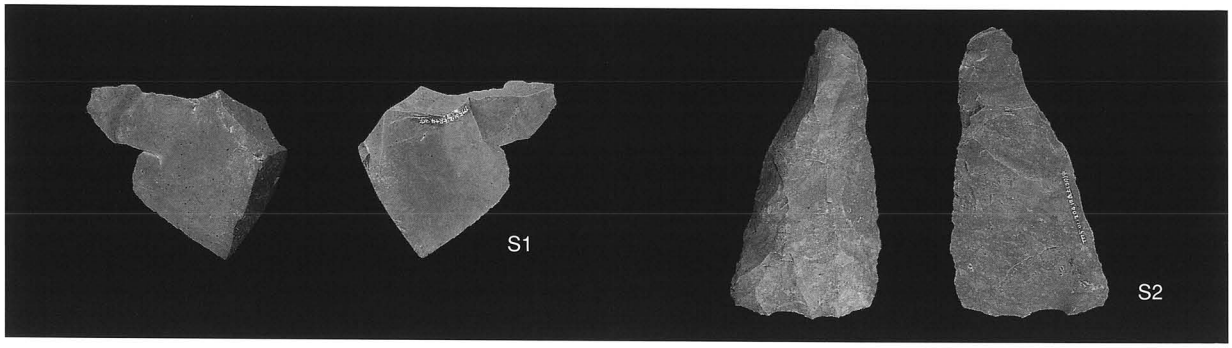
図版3　芦ノ口遺跡第5次調査検出遺構（3）
Pl.3　Features at TM5（3）

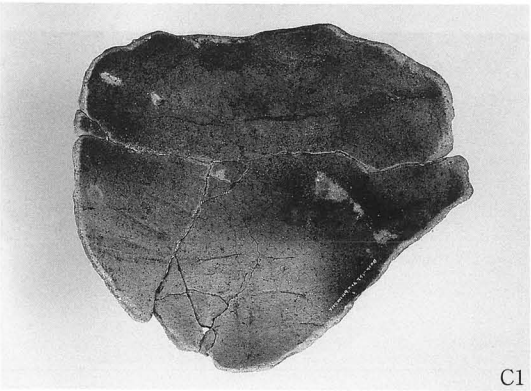
1．ピット1（西から）

2．ピット2セクション（北から）

3．ピット3セクション（東から）

4．ピット3（西から）



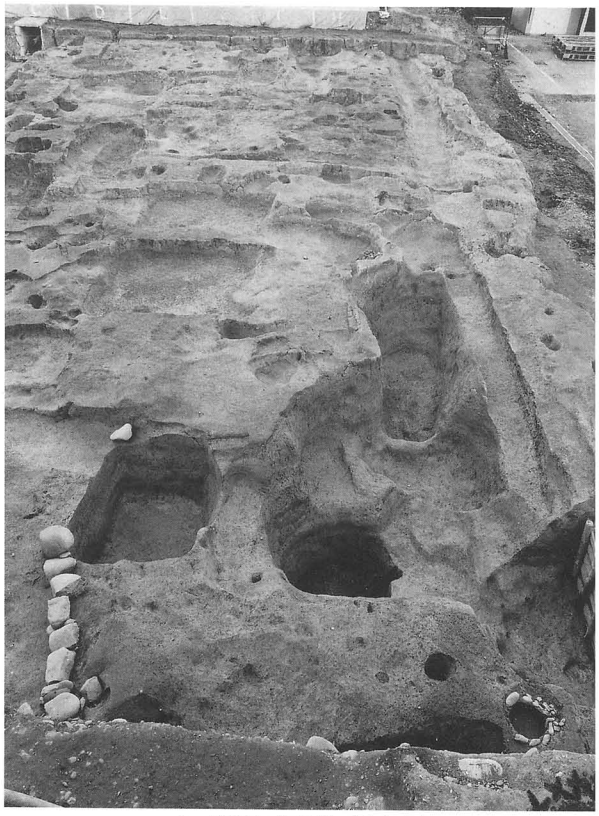


S1・2　S=1：2
C1　S=1：3

図版4　芦ノ口遺跡第5次調査検出遺構（4）・出土遺物
Pl.4　Features at TM5（4）, pottery and stone implements from TM5

1．調査前全景（北西から）

2．東側最終状況（南から）



3．東側最終状況（南から）

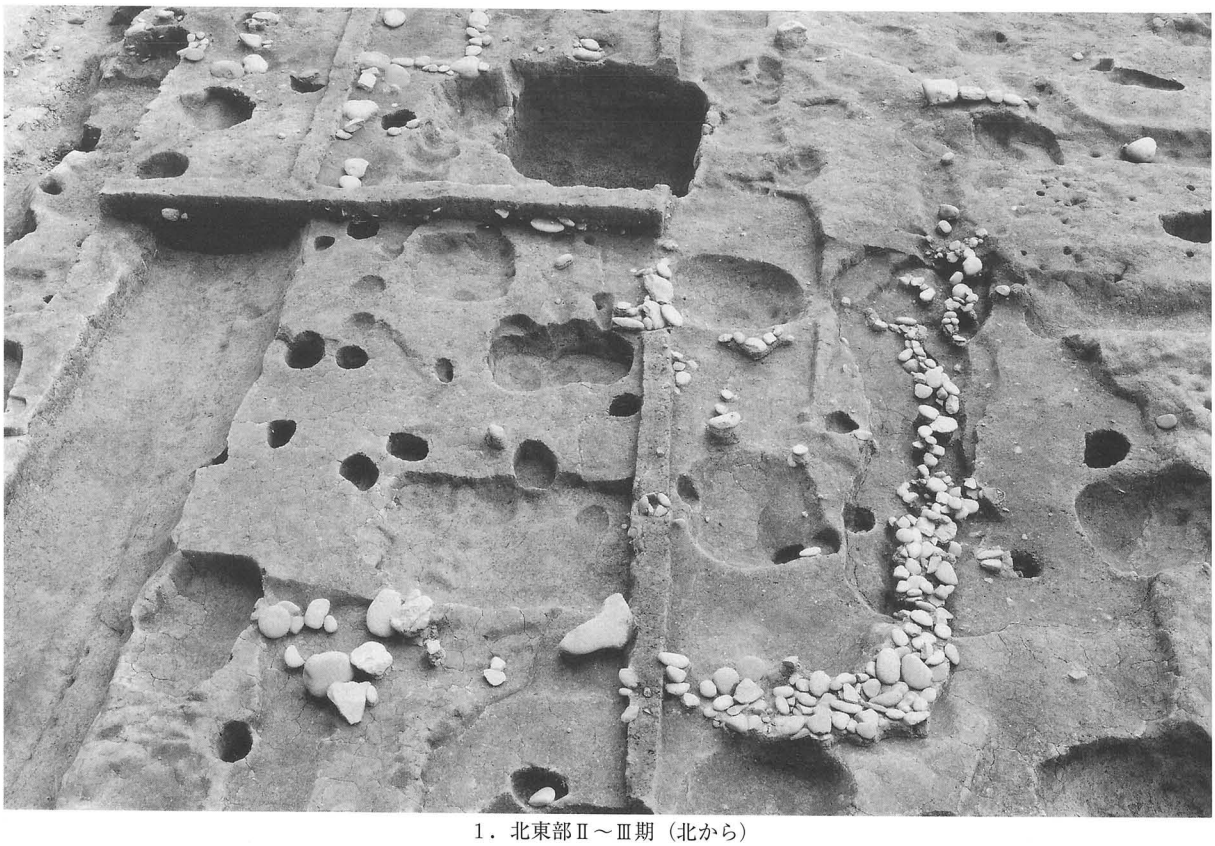
4．西側最終状況（南から）

図版５　武家屋敷地区第７地点全景（1）
Pl.5　Views of BK7(1)

1．西側最終状況（北から）

2．東側最終状況（北から）

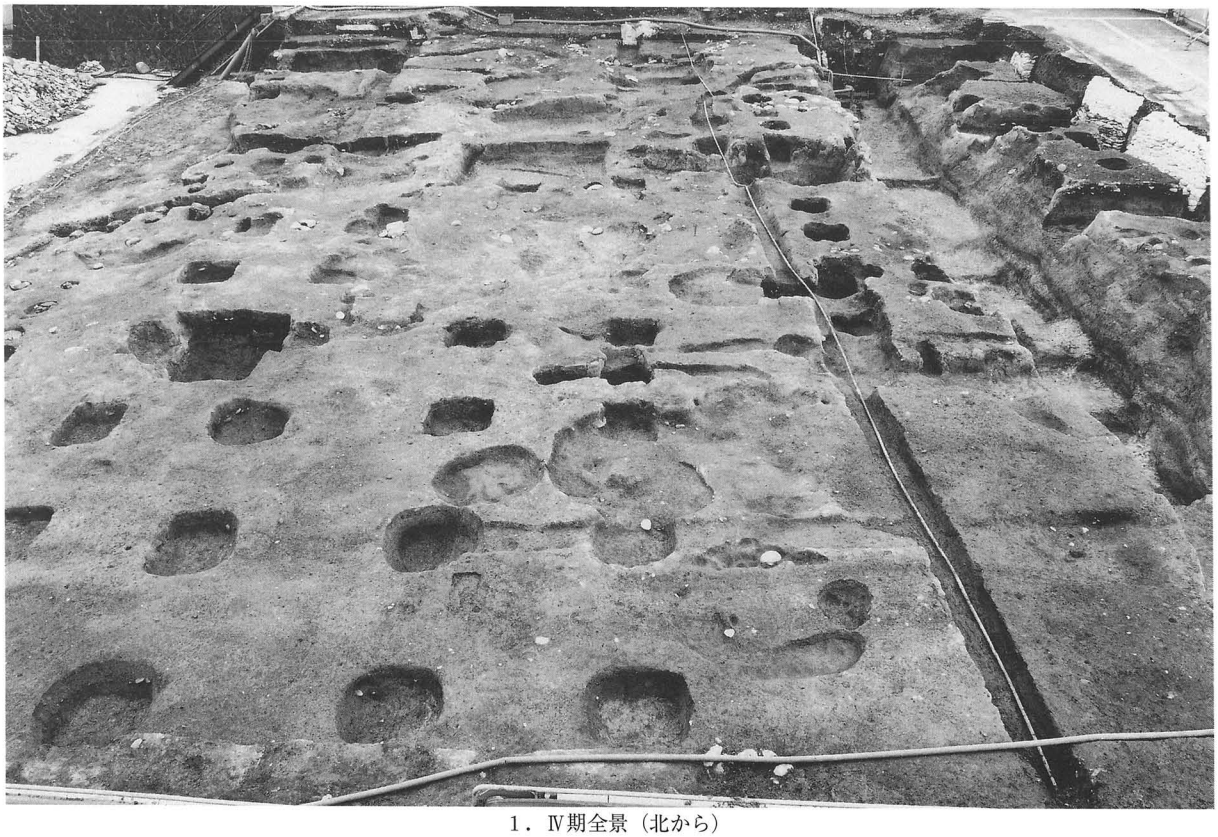
図版６　武家屋敷地区第７地点全景（2）
Pl.6　Views of BK7(2)



1．北東部Ⅱ～Ⅲ期（北から）

2．南東部Ⅱ～Ⅲ期（南から）

図版７　武家屋敷地区第７地点全景（3）
Pl.7　Views of BK7(3)



1．Ⅳ期全景（北から）

2．Ⅳ期全景（西から）

図版８　武家屋敷地区第７地点全景（4）
Pl.8　Views of BK7(4)

1．調査区北壁Ｂ列セクション（南から）

2．調査区北壁Ｄ列セクション（南から）

3．調査区北壁Ｅ列セクション（南から）

4．調査区北壁Ｆ列セクション（南から）

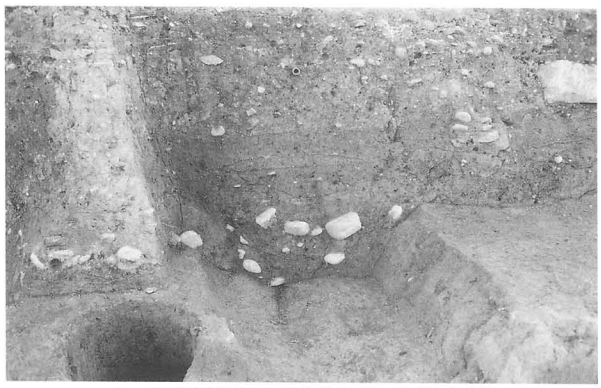
5．調査区北壁Ｇ列セクション（南から）

6．調査区北壁Ｈ列セクション（南から）

7．調査区北壁Ｉ列セクション（南から）

8．調査区北壁Ｉ・Ｊ列セクション（南から）

図版９　武家屋敷地区第７地点広域セクション（1）
Pl.9　Cross sections of BK7(1)



1．調査区南壁Ｉ列セクション（北から）

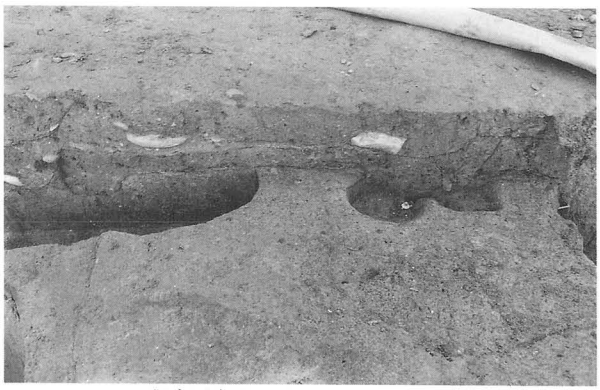
2．調査区南壁Ｈ・Ｉ列セクション（北から）

3．調査区南壁Ｈ列セクション（北から）

4．調査区南壁Ｇ列セクション（北から）

5．調査区南壁Ｆ・Ｇ列セクション（北から）

6．調査区南壁Ｄ・Ｅ列セクション（北から）

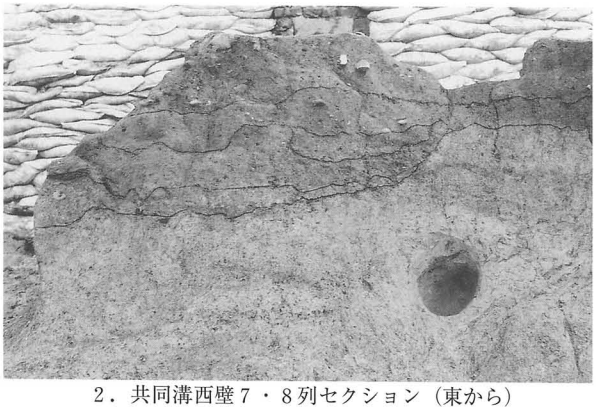


7．調査区南壁Ｄ列セクション（北から）

8．調査区南壁Ｂ列セクション（北から）

図版10　武家屋敷地区第７地点広域セクション（2）
Pl.10　Cross sections of BK7(2)

1．共同溝西壁８・９列セクション（東から）



2．共同溝西壁７・８列セクション（東から）

3．共同溝西壁７列セクション（東から）

4．共同溝西壁６・７列セクション（東から）

5．共同溝西壁６列セクション（東から）

6．共同溝西壁４・５列セクション（東から）

7．共同溝西壁４列セクション（東から）

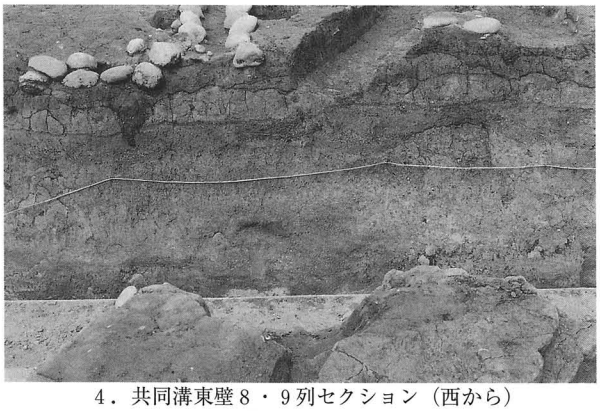
8．共同溝西壁２列セクション（東から）

図版11　武家屋敷地区第７地点広域セクション（3）
Pl.11　Cross sections of BK7(3)

1．共同溝東壁２・３列セクション（西から）

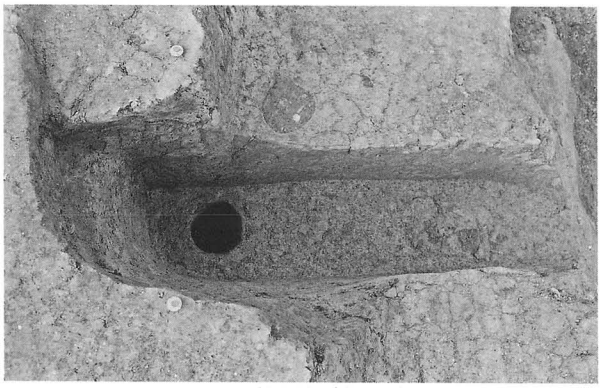
2．共同溝東壁４・５・６列セクション（西から）

3．共同溝東壁７列セクション（西から）

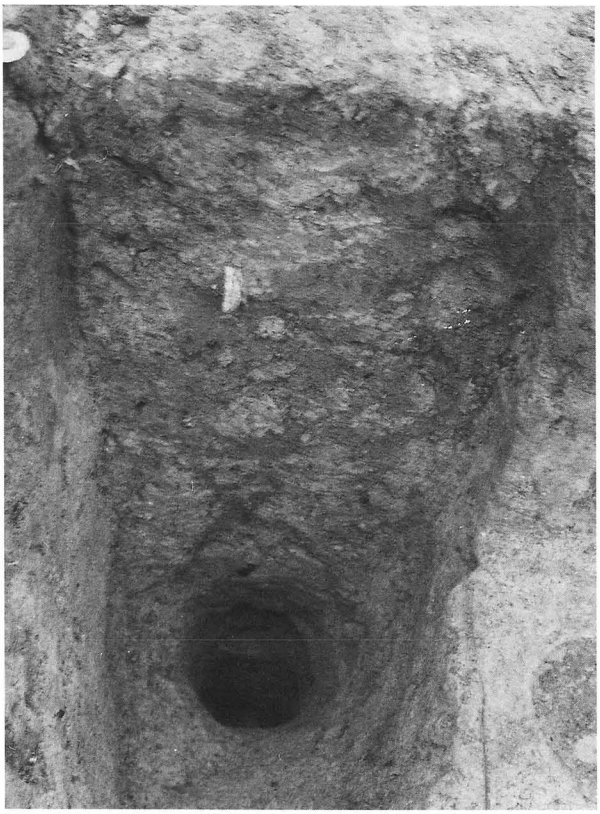


4．共同溝東壁８・９列セクション（西から）

5．共同溝東壁10・11列セクション（西から）

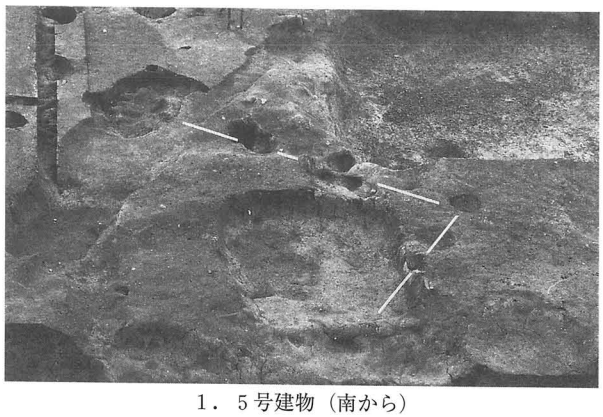


6．33号土坑（南から）

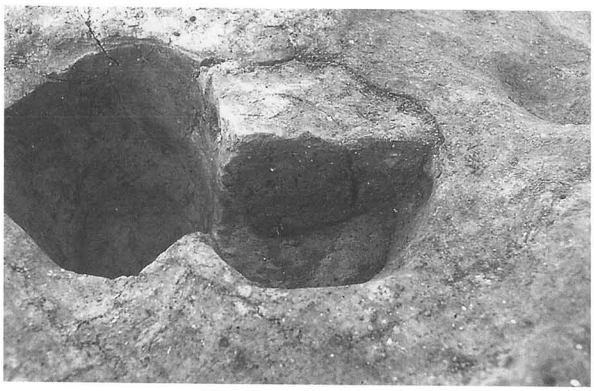


7．33号土坑セクション（東から）

図版12　武家屋敷地区第７地点広域セクション（4）、縄文時代の遺構
Pl.12　Cross sections and features of Jomon period at BK7

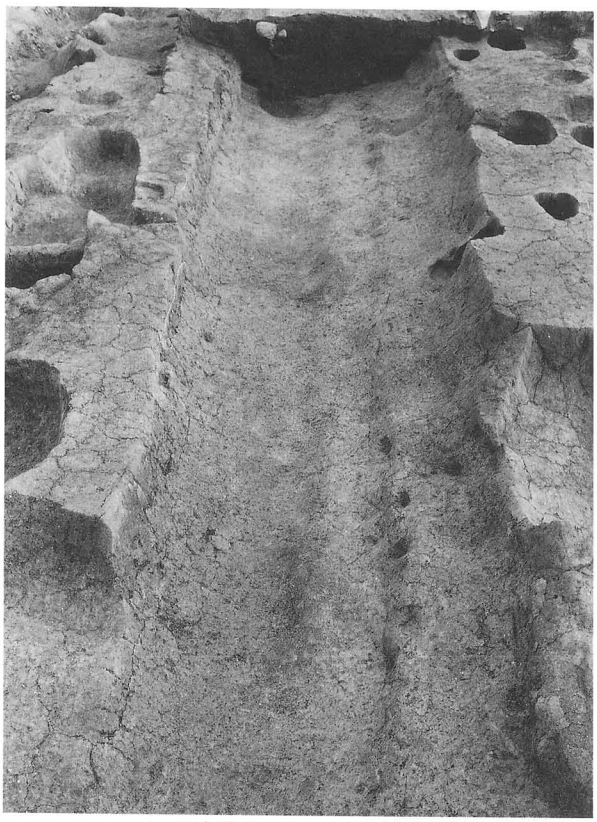


1．5号建物（南から）



2．5号建物セクション（南から）

3．12号溝（北から）

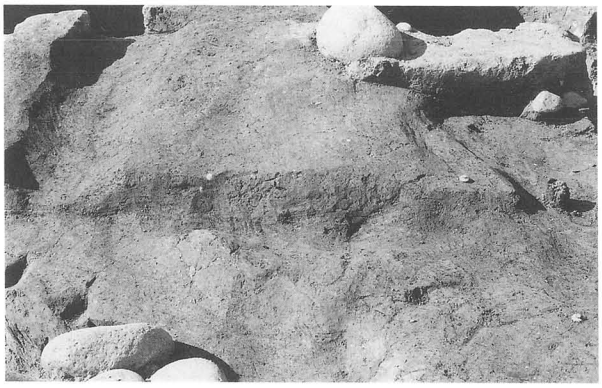


4．12号溝Ⅰ－2・3区（北から）

5．12号溝3・4列境ベルト北側セクション（北から）

6．12号溝調査区北壁セクション（南から）

図版13　武家屋敷地区第7地点Ⅰ期の遺構（1）
Pl.13　Features of phase Ⅰ at BK7(1)

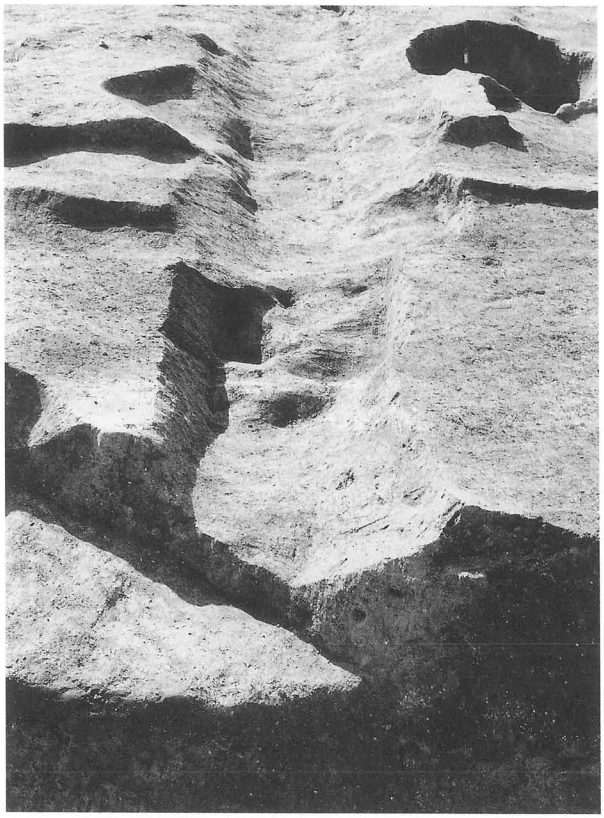


1．24号溝（東から）

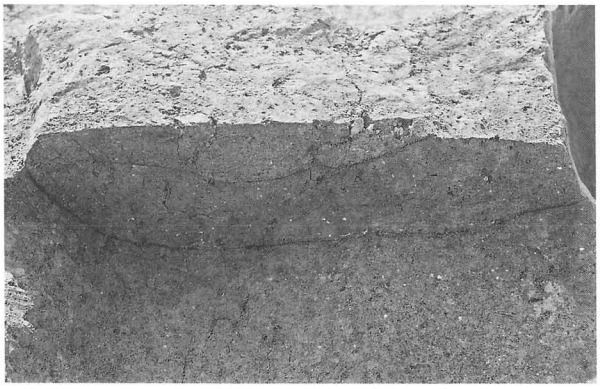
2．24号溝セクション（北から）

3．25号溝（南から）

4．25号溝セクション（東から）



5．28号溝（東から）

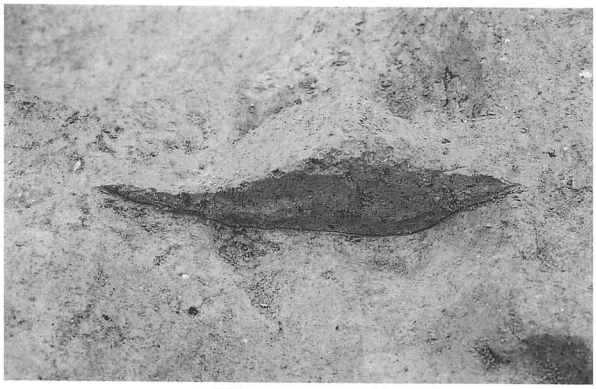


6．28号溝セクション（東から）

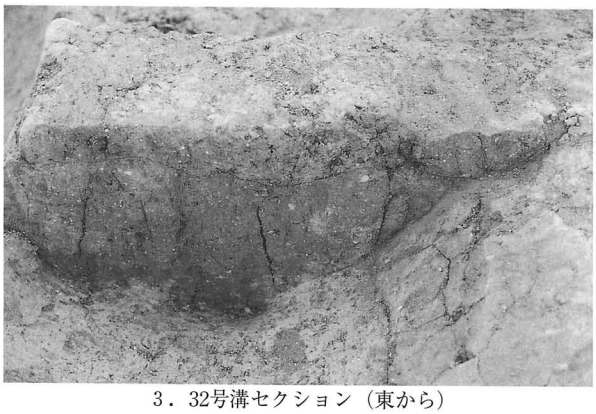
7．29号溝・12号溝セクション（北から）

図版14　武家屋敷地区第７地点Ⅰ期の遺構（2）
Pl.14　Features of phase Ⅰ at BK7(2)

1．29号溝（南から）



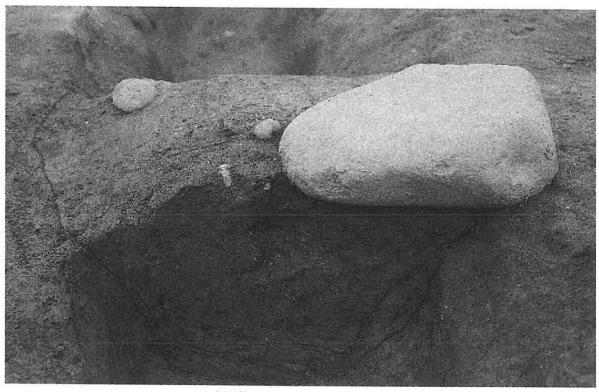
2．30号溝セクション（南から）



3．32号溝セクション（東から）

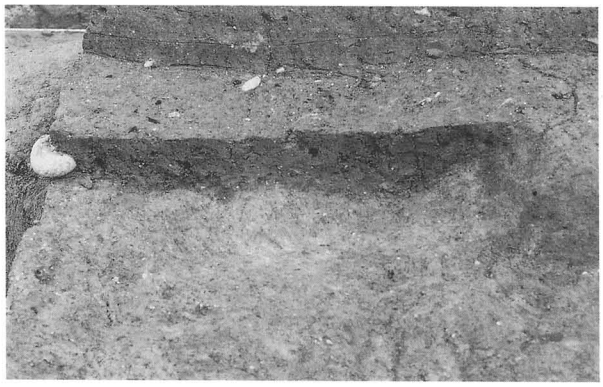
4．33号溝D・E－6区（東から）

5．33号溝F～H－6区（南から）

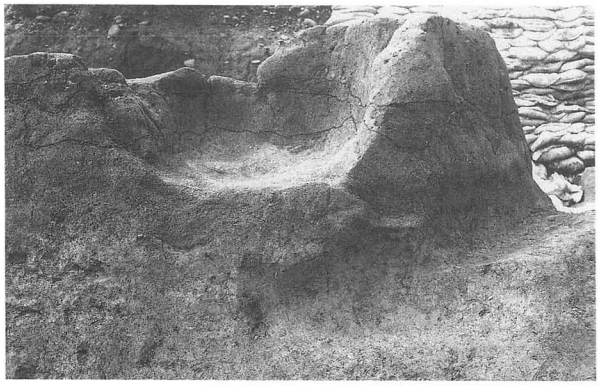


6．33号溝セクション（西から）

図版15　武家屋敷地区第7地点Ⅰ期の遺構（3）
Pl.15　Features of phase Ⅰ at BK7(3)

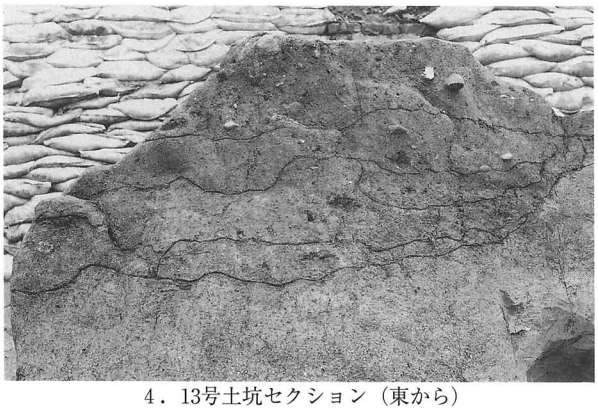


1．9号土坑（西から）

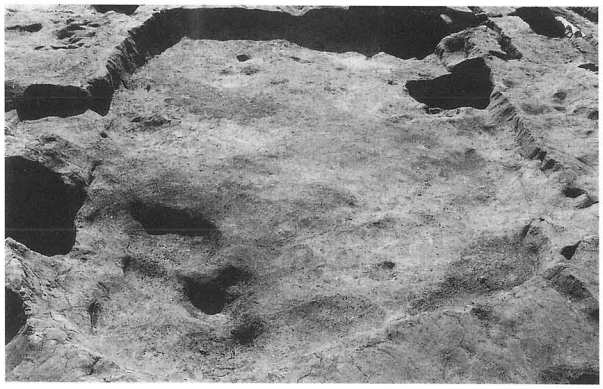


2．9号土坑セクション（東から）

3．13号土坑（南から）

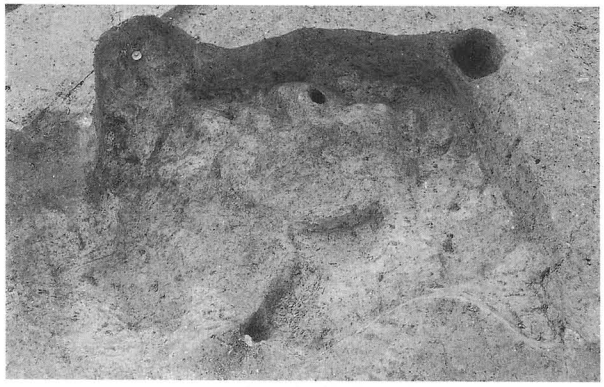


4．13号土坑セクション（東から）



5．14号土坑（北から）

6．14号土坑セクション（北から）



7．25号土坑（南東から）

8．25号土坑セクション（南西から）

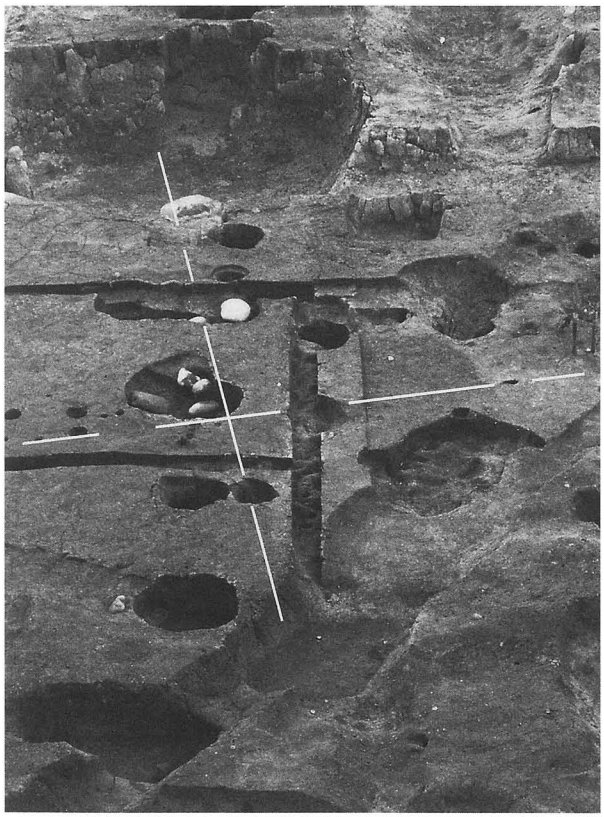
図版16　武家屋敷地区第７地点Ⅰ期の遺構（4）
Pl.16　Features of phase Ⅰ at BK7(4)

1．26号土坑（東から）

2．26号土坑セクション（東から）

3．30号土坑セクション（東から）

4．31号土坑調査区南壁セクション（北から）



5．8号柱列・9号柱列（南から）

6．8号柱列柱1セクション（北から）

7．9号柱列柱2セクション（北から）

図版17　武家屋敷地区第7地点Ⅰ期・Ⅰ～Ⅱ期の遺構
Pl.17　Features of phase Ⅰ and phase Ⅰ～Ⅱ at BK7

1．1号遺構（南から）

2．1号遺構南北セクション（東から）

3．1号遺構・2号遺構G～I－8区東西セクション（南から）

4．1号遺構G・H－8区東西セクション（南から）

5．1号遺構埋土3層遺物出土状況（西から）

6．1号遺構埋土3層犬骨格出土状況（西から）

7．1号遺構埋土3層編籠出土状況（南から）

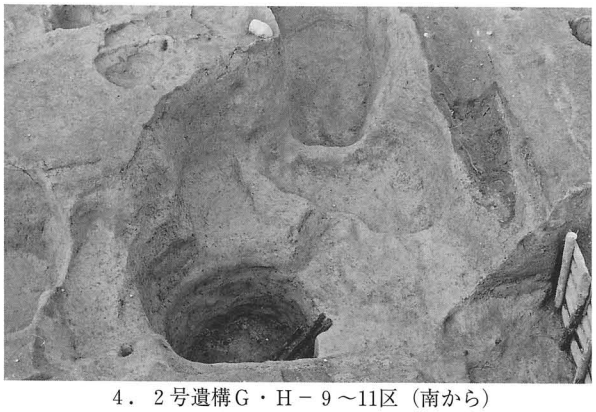
8．1号遺構埋土3層陶磁器出土状況（北から）

図版18　武家屋敷地区第7地点II期の遺構（1）
Pl.18　Features of phase II at BK7(1)

1．２号遺構・24号土坑（南から）

2．２号遺構Ｇ・Ｈ－７～９区（南から）

3．２号遺構Ｈ－７・８区（北から）



4．２号遺構Ｇ・Ｈ－９～11区（南から）

5．２号遺構Ｇ・Ｈ－９～11区（東から）

6．２号遺構Ｇ・Ｈ－９～11区（西から）

7．２号遺構Ｈ－８・９区（西から）

8．２号遺構Ｈ－８・９区（東から）

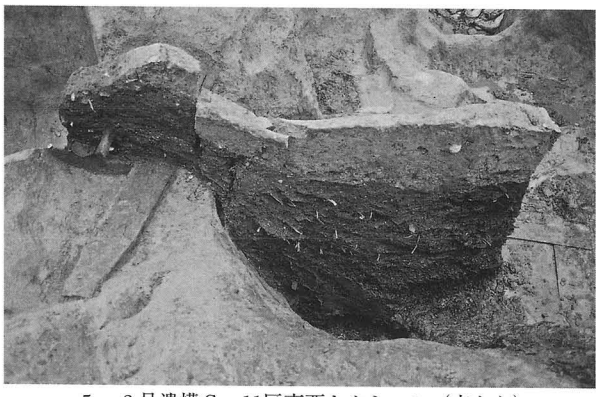
図版19　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（2）
Pl.19　Features of phase Ⅱ at BK7(2)

1．２号遺構Ｈ－９区南北セクション（東から）

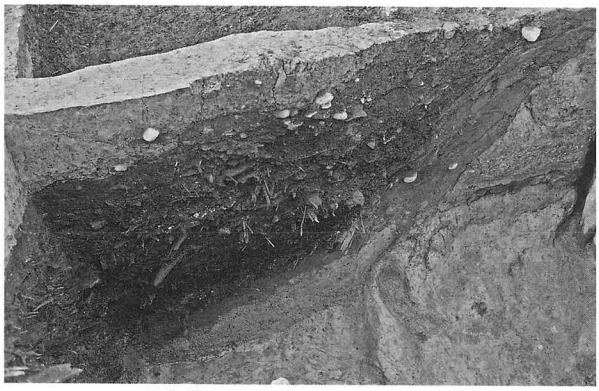
2．２号遺構Ｈ－８区南北セクション（東から）

3．２号遺構Ｈ－10・11区南北セクション（東から）

4．２号遺構Ｈ－10区南北セクション細部（東から）



5．２号遺構Ｇ－11区東西セクション（南から）



6．２号遺構Ｈ－11区東西セクション（南から）

7．２号遺構Ｈ－８区東西セクション（北から）

8．２号遺構Ｈ－８区東西セクション細部（北から）

図版20　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（3）
Pl.20　Features of phase Ⅱ at BK7(3)

1．２号遺構Ｈ・Ｉ－８区東西セクション（南から）

2．２号遺構Ｈ－７・８区埋土３層遺物出土状況（北から）

3．２号遺構Ｈ－７・８区埋土４層遺物出土状況（東から）

4．２号遺構Ｈ－８区埋土２層遺物出土状況（北から）

5．２号遺構Ｈ－８区埋土２層アワビ貝殻出土状況（北から）

6．２号遺構Ｈ－11区埋土漆器出土状況（北から）

7．２号遺構Ｈ－11区埋土２ｂ層漆器出土状況（東から）

8．２号遺構Ｈ－11区埋土２層ハエの蛹出土状況（北から）

図版21　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（4）
Pl.21　Features of phase Ⅱ at BK7(4)

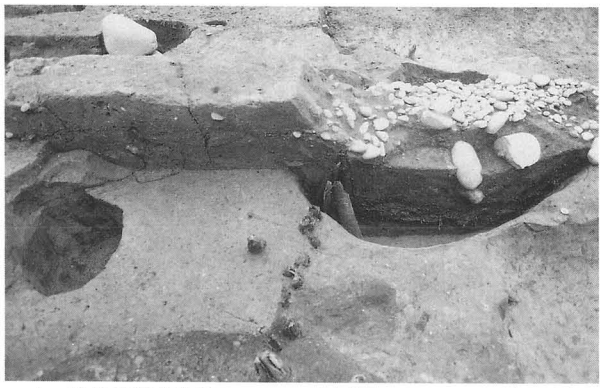
1．池状遺構古段階（南から）

2．池状遺構古段階（北から）

3．池状遺構古段階西岸（東から）

4．池状遺構古段階西岸杭列（東から）

5．池状遺構古段階D－11区東西セクション（南から）

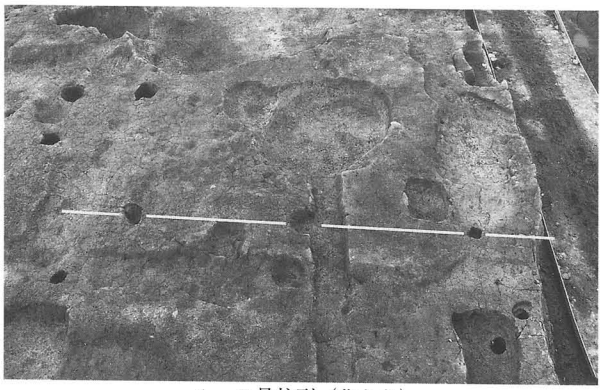


6．池状遺構古段階D・E－11区東西セクション（南から）

7．池状遺構古段階西岸礫出土状況（南から）

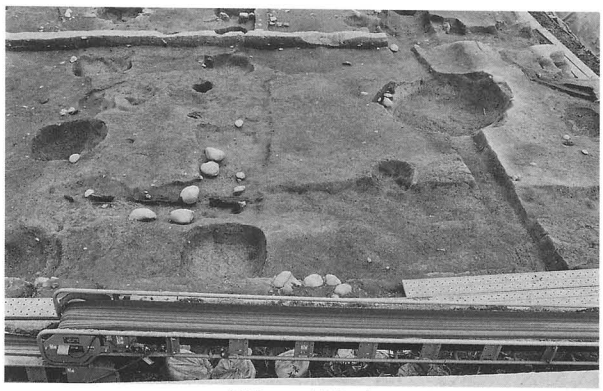
8．池状遺構古段階西岸の石敷確認状況（東から）

図版22　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（5）
Pl.22　Features of phase Ⅱ at BK7(5)



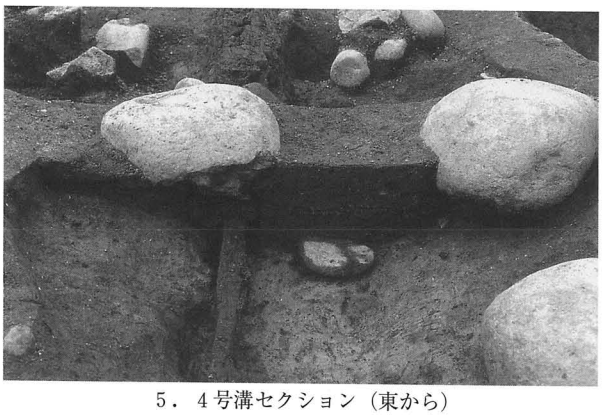
1．7号柱列（北から）

2．7号柱列柱3セクション（東から）



3．4号溝・5号溝（北から）

4．4号溝木材出土状況（北から）



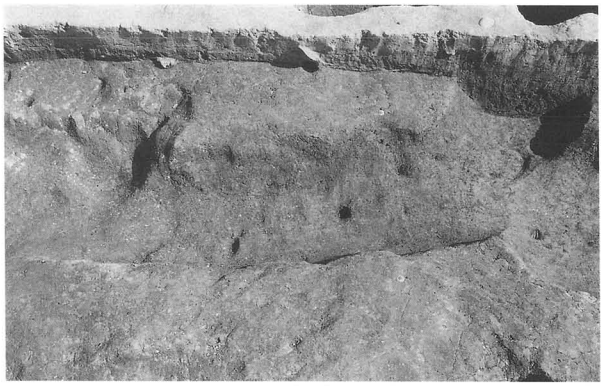
5．4号溝セクション（東から）

6．5号溝セクション（南から）

7．8号溝（東から）

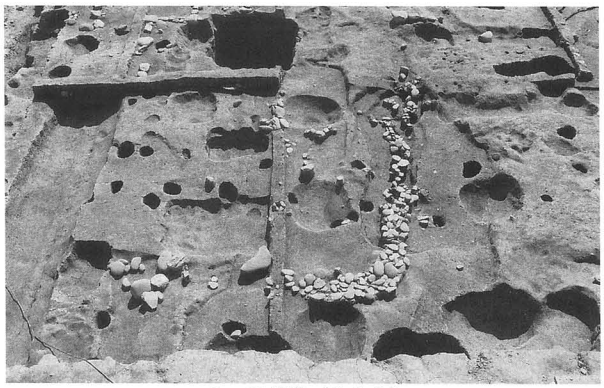
8．8号溝セクション（北から）

図版23　武家屋敷地区第7地点II期の遺構（6）
Pl.23　Features of phase II at BK7(6)

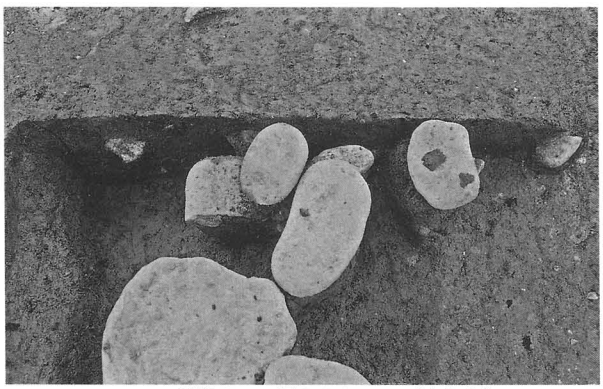


1．9号溝（北から）

2．9号溝セクション（東から）



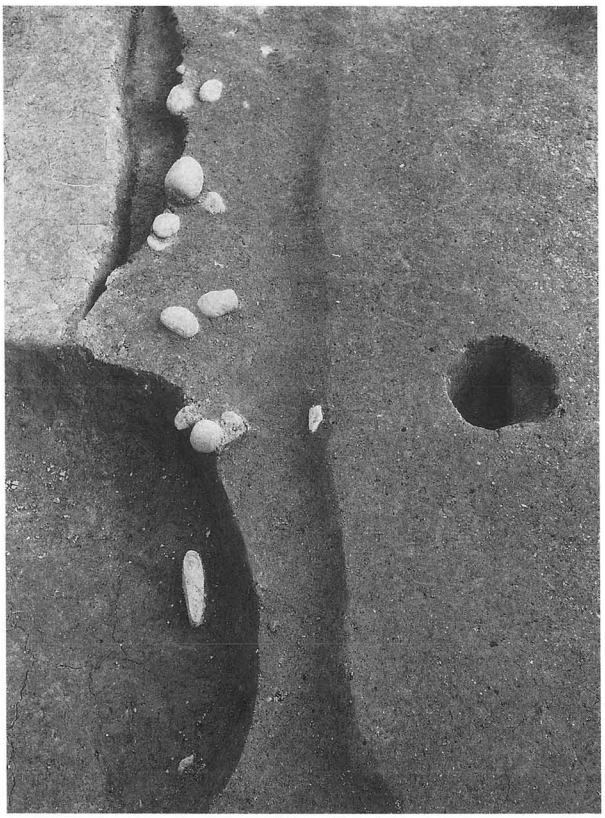
3．10号溝（北から）



4．10号溝G－3区セクション（南から）

5．10号溝F－4区セクション（西から）

6．13号溝セクション（南から）



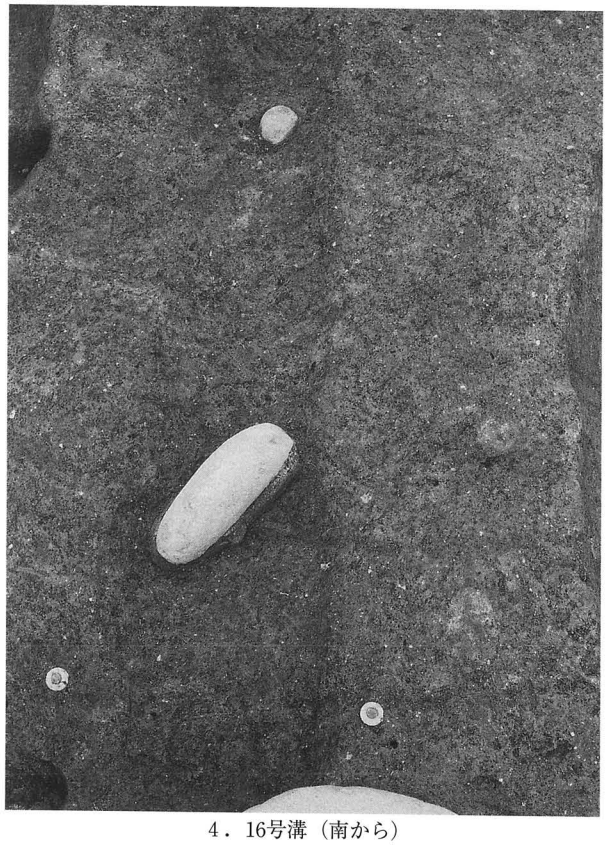
7．13号溝（北から）

図版24　武家屋敷地区第7地点II期の遺構（7）
Pl.24　Features of phase II at BK7(7)

1．15号溝（南から）

2．15号溝セクション（東から）

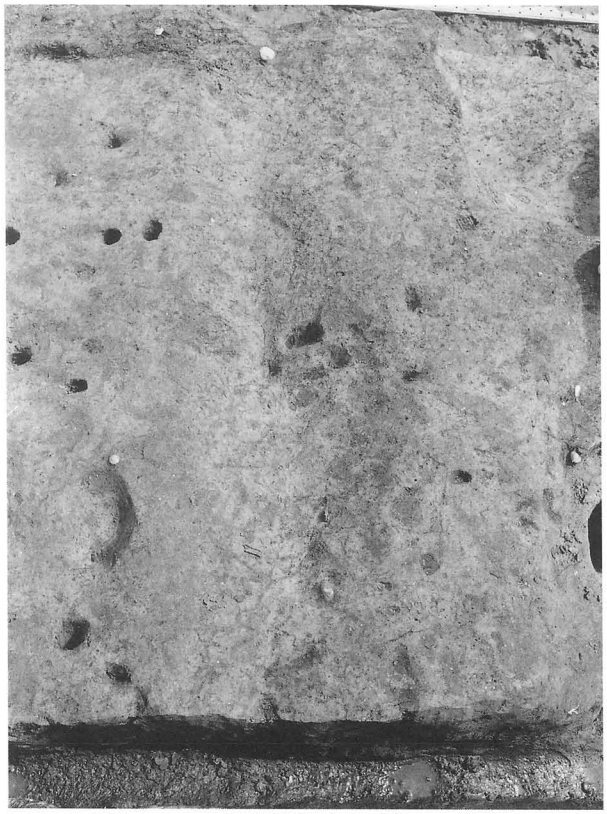
3．16号溝セクション（北から）



4．16号溝（南から）

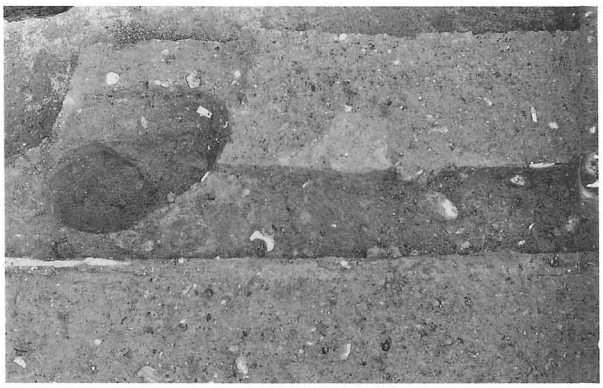
5．23号溝・8号溝（南から）

図版25　武家屋敷地区第7地点II期の遺構（8）
Pl.25　Features of phase II at BK7(8)



1．17号溝（西から）

2．17号溝セクション（西から）



3．21号溝（北から）

4．22号溝Ⅰ・Ｊ－２・３区（北から）

5．22号溝調査区北壁セクション（南から）

6．22号溝調査区南壁セクション（北から）

図版26　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（9）
Pl.26　Features of phase Ⅱ at BK7(9)

1．27号溝（西から）

2．27号溝セクション（東から）

3．31号溝（南から）

4．31号溝セクション（東から）

5．1号井戸（西から）

6．1号井戸梯子検出状況（北から）

7．1号井戸セクション1回目（東から）

8．1号井戸セクション2回目（東から）

図版27　武家屋敷地区第7地点II期の遺構（10）
Pl.27　Features of phase Ⅱ at BK7(10)

1．1号井戸セクション3回目（東から）

2．3号井戸（北東から）

3．4号井戸（北西から）

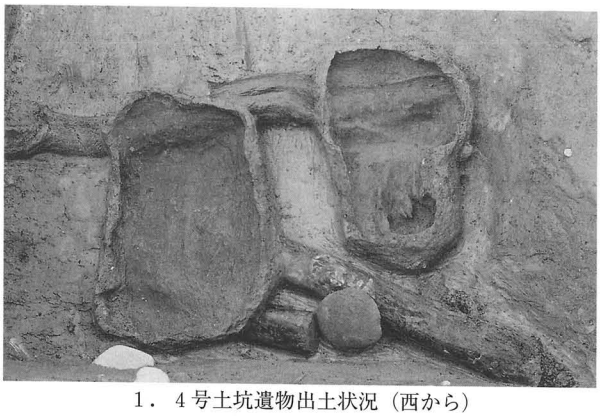
4．4号井戸（東から）

5．3号土坑（南から）

6．3号土坑・1号井戸セクション（南から）

7．4号土坑（北から）

図版28　武家屋敷地区第7地点Ⅱ期の遺構（11）
Pl.28　Features of phase Ⅱ at BK7(11)



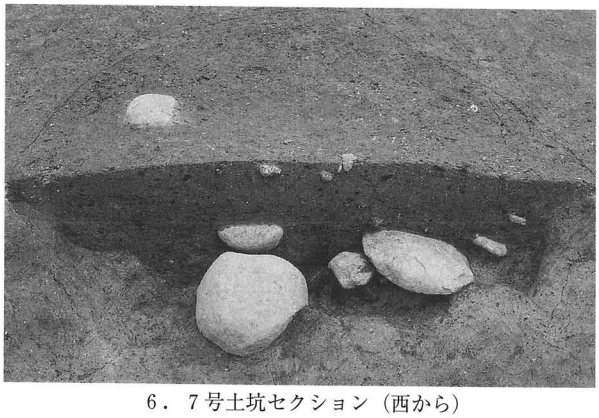
1．４号土坑遺物出土状況（西から）

2．４号土坑出土南側俵（東から）

3．４号土坑セクション（東から）

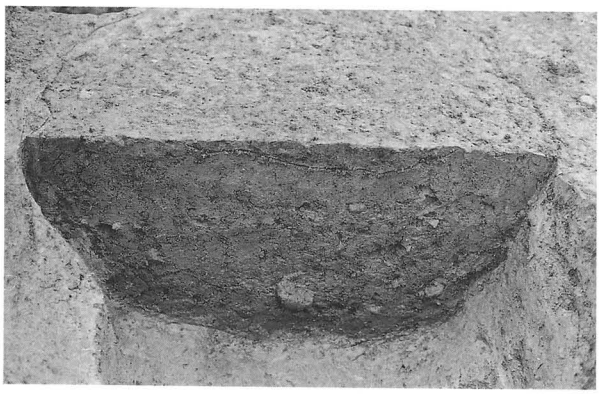
4．６号土坑セクション（南から）

5．７号土坑（東から）



6．７号土坑セクション（西から）

7．８号土坑（北から）



8．８号土坑セクション（西から）

図版29　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（12）
Pl.29　Features of phase Ⅱ at BK7(12)

1．11号土坑（東から）

2．11号土坑（北から）

3．11号土坑セクション（東から）

4．12号土坑（北から）

5．12号土坑セクション（東から）

6．15号土坑（西から）

7．15号土坑木材出土状況（東から）

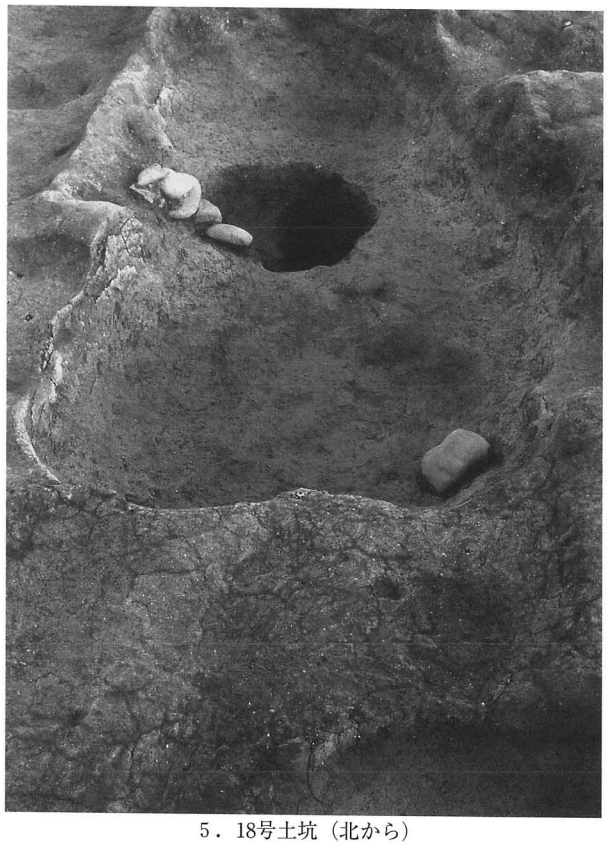
図版30　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（13）
Pl.30　Features of phase Ⅱ at BK7(13)

1．15号土坑セクション上部（西から）

2．15号土坑セクション下部（西から）

3．16号土坑（西から）

4．16号土坑セクション（西から）



5．18号土坑（北から）

6．18号土坑（西から）

7．18号土坑セクション（西から）

図版31　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（14）
Pl.31　Features of phase Ⅱ at BK7(14)

1．18号土坑遺物出土状況（西から）

2．19号土坑セクション（北から）

3．20号土坑（北から）

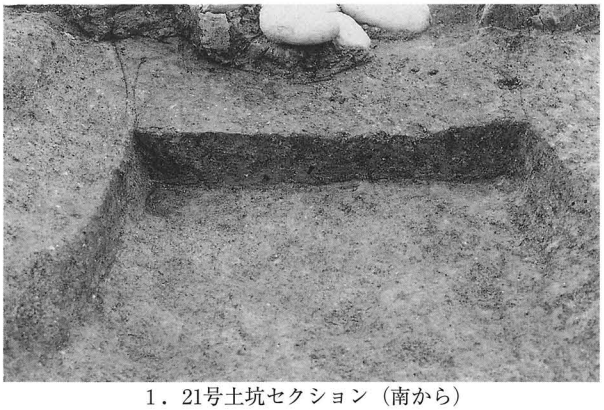
4．20号土坑南北セクション（東から）

5．20号土坑H－10区底面遺物出土状況（東から）

6．G－9区板敷状遺構（北から）

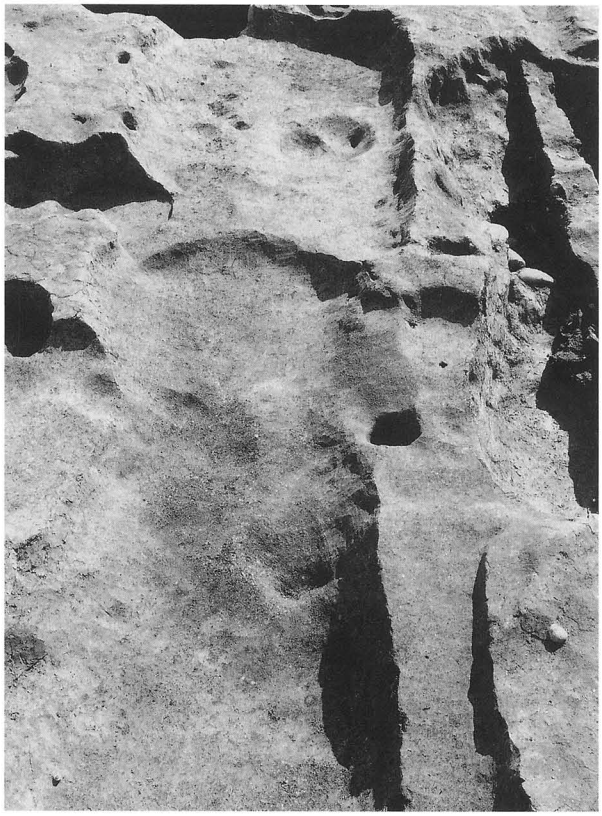
7．21号土坑（北から）

図版32　武家屋敷地区第7地点II期の遺構（15）
Pl.32　Features of phase II at BK7(15)



1．21号土坑セクション（南から）

2．23号土坑セクション（北から）



3．19号土坑・22号土坑（北から）

4．23号土坑（北から）

5．24号土坑（南から）

6．24号土坑（北から）

図版33　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（16）
Pl.33　Features of phase Ⅱ at BK7(16)

1．24号土坑セクション（南から）

2．24号土坑F－11区埋土２層下駄出土状況（北から）

3．27号土坑セクション（南から）

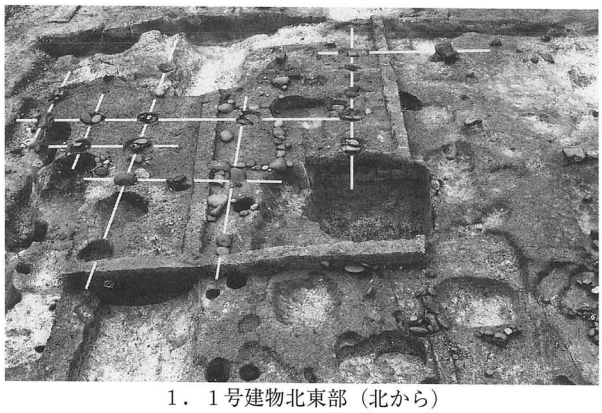
4．28号土坑（南から）

5．29号土坑（東から）

6．28号土坑セクション（南から）

7．G・H－11・12区礎石等検出状況（南から）

図版34　武家屋敷地区第７地点Ⅱ期の遺構（17）
Pl.34　Features of phase Ⅱ at BK7(17)

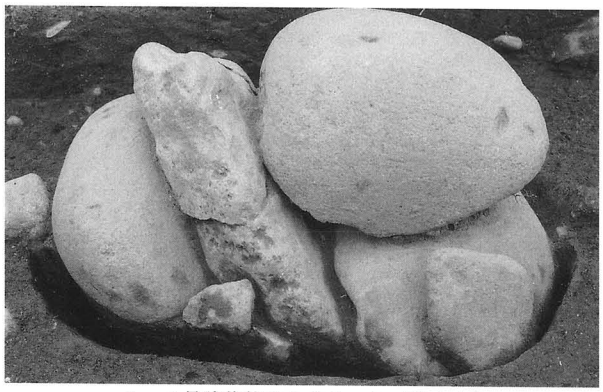


1．１号建物北東部（北から）

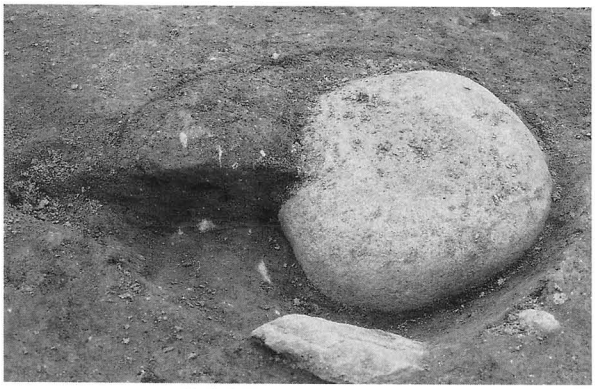
2．１号建物南東部（北から）

3．１号建物北東部（東から）

4．１号建物北東部（西から）



5．１号建物柱19セクション（北から）

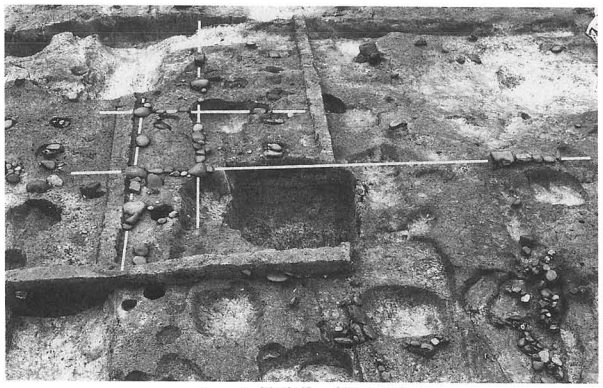


6．１号建物柱24セクション（南から）

7．１号建物柱13セクション（南から）

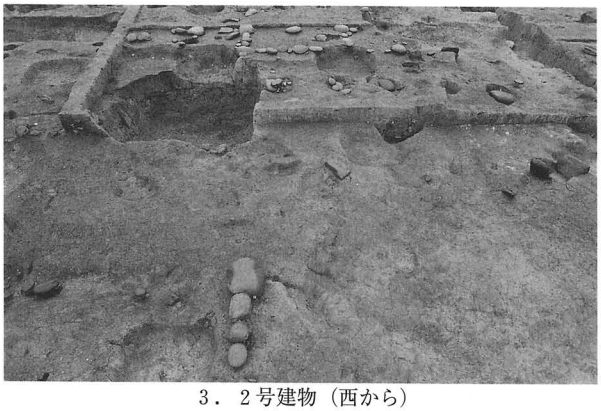
8．１号建物柱27セクション（南から）

図版35　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構（1）
Pl.35　Features of phase Ⅲ at BK7(1)



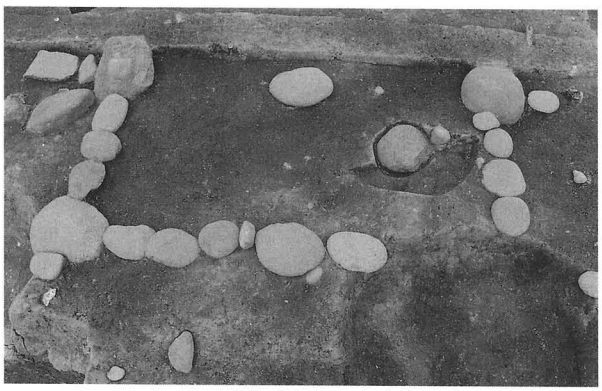
1．２号建物（北から）

2．２号建物東部（北から）



3．２号建物（西から）

4．２号建物東部（西から）



5．２号建物石列３～５（西から）

6．２号建物石列３・４（南から）

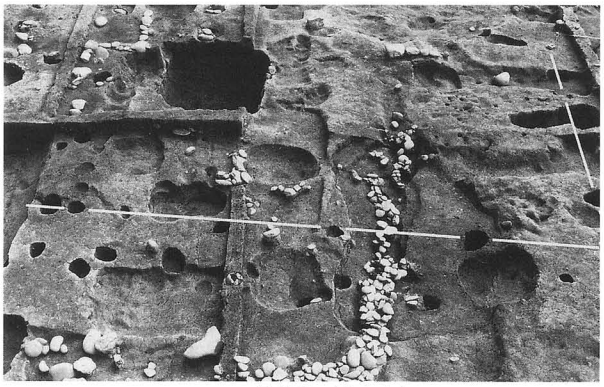
7．２号建物石列６（北から）

8．２号建物柱４セクション（北から）

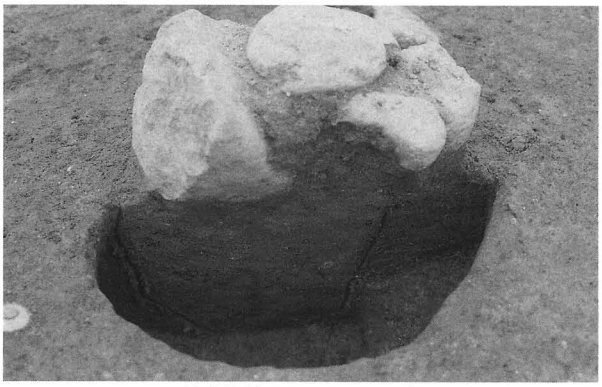
図版36　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構（2）
Pl.36　Features of phase Ⅲ at BK7(2)

1．３号建物（北から）

2．３号建物東辺セクション（東から）



3．４号建物（北から）



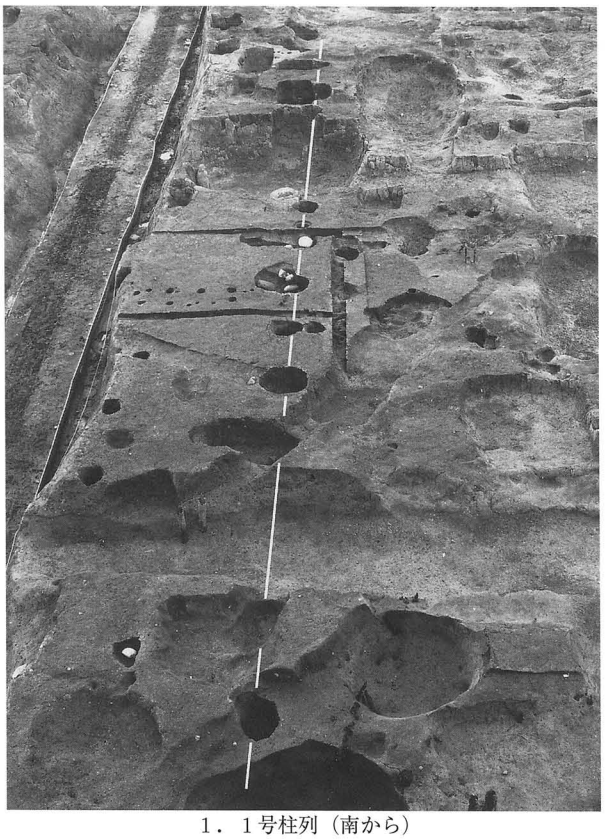
4．４号建物柱６セクション（南から）

5．東南部礎石等（南から）

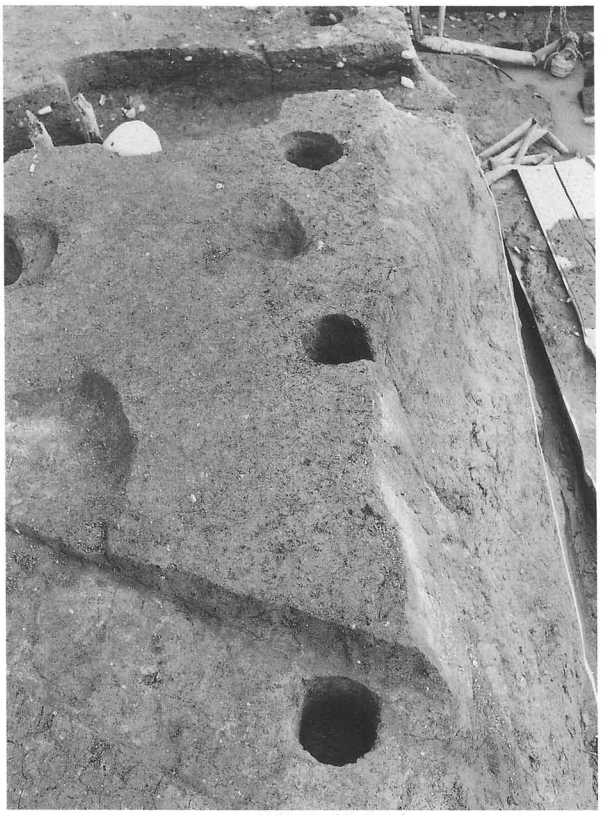
6．東南部礎石等（北から）

7．Ｇ－11区礎石等検出状況（北から）

図版37　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構（3）
Pl.37　Features of phase Ⅲ at BK7(3)



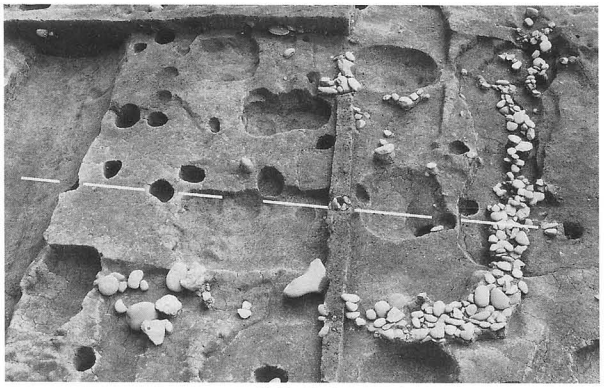
1．1号柱列（南から）



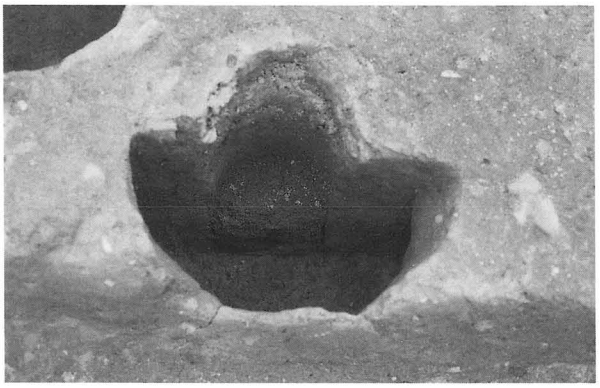
2．2号柱列（北から）

3．1号柱列柱7セクション（北から）

4．2号柱列柱4セクション（南から）

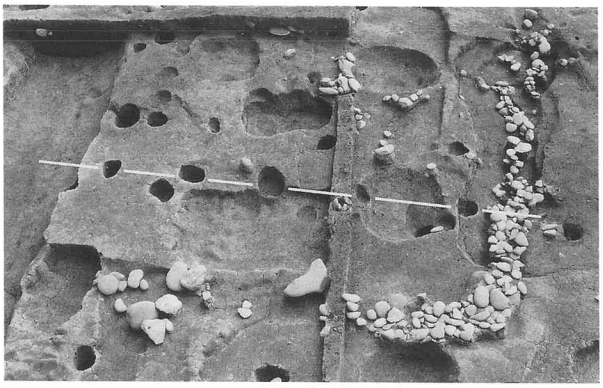


5．3号柱列（北から）

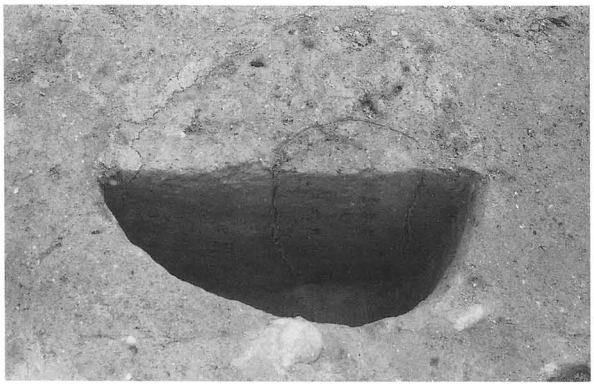


6．3号柱列柱3セクション（東から）

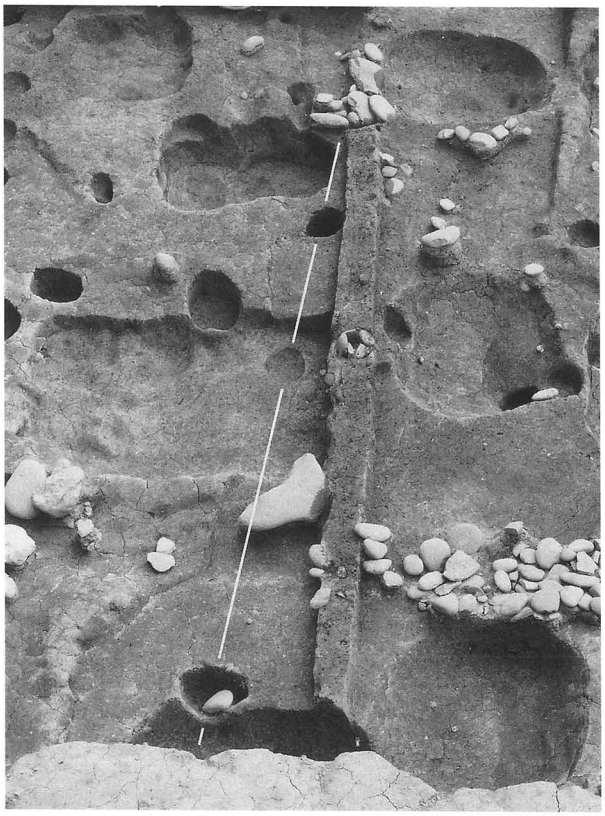
図版38　武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構（4）
Pl.38　Features of phase Ⅲ at BK7(4)



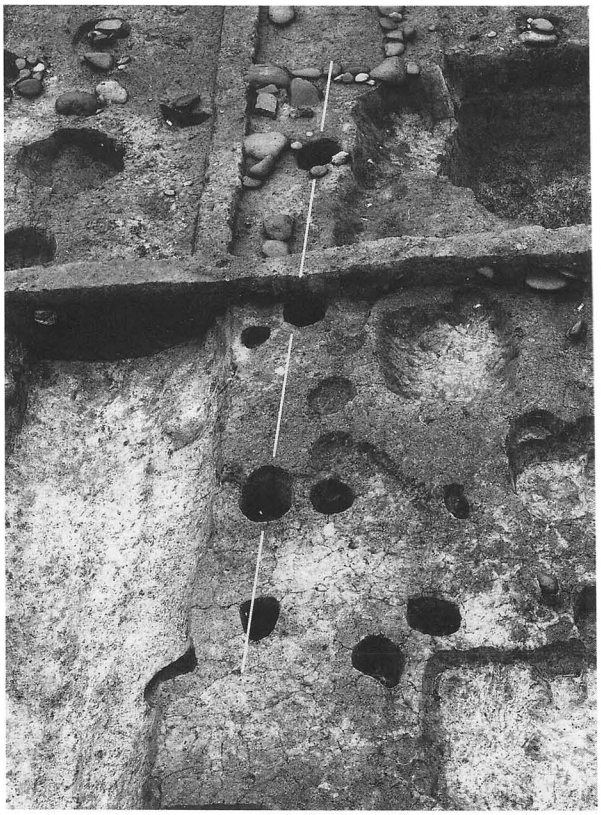
1．4号柱列（北から）



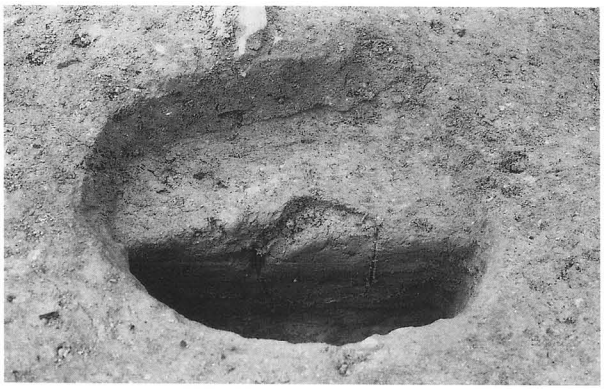
2．4号柱列柱3セクション（東から）



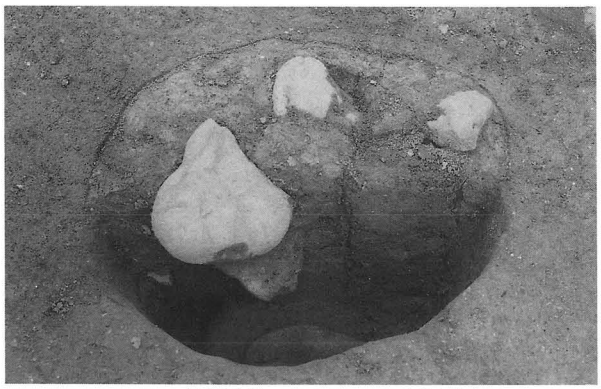
3．5号柱列（北から）



4．6号柱列（北から）



5．5号柱列柱1セクション（南から）



6．6号柱列柱1セクション（東から）

図版39　武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構（5）
Pl.39　Features of phase Ⅲ at BK7(5)

1．池状遺構新段階（西から）

2．池状遺構新段階（南から）

3．池状遺構新段階東岸石組（西から）

4．池状遺構新段階調査区南壁セクション（北から）

5．池状遺構新段階砂礫層・遺物検出状況（南から）

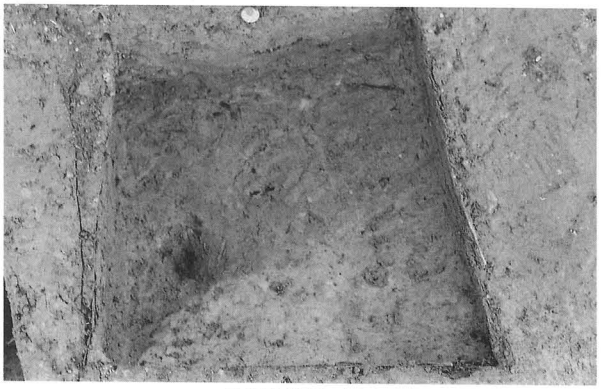
6．池状遺構新段階砂礫層推積状況（西から）

7．池状遺構新段階Ｅ－11区遺物出土状況（南から）

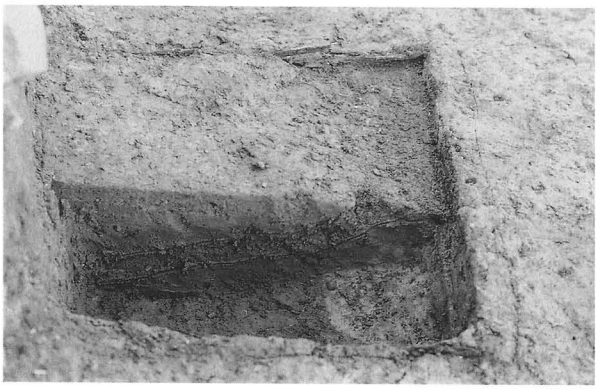
図版40　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構（6）
Pl.40　Features of phase Ⅲ at BK7(6)

1．石敷遺構上部の木材（南から）

2．石敷遺構（南から）

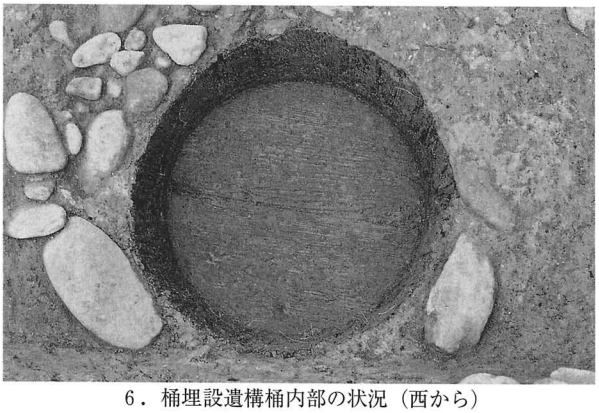


3．桝埋設遺構（北から）



4．桝埋設遺構セクション（東から）

5．桶埋設遺構（西から）



6．桶埋設遺構桶内部の状況（西から）

7．桶埋設遺構セクション（南から）

8．桶埋設遺構掘方セクション（西から）

図版41　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構（7）
Pl.41　Features of phase Ⅲ at BK7(7)

1．2号溝（北から）

2．2号溝セクション（南から）

3．3号溝セクション（東から）

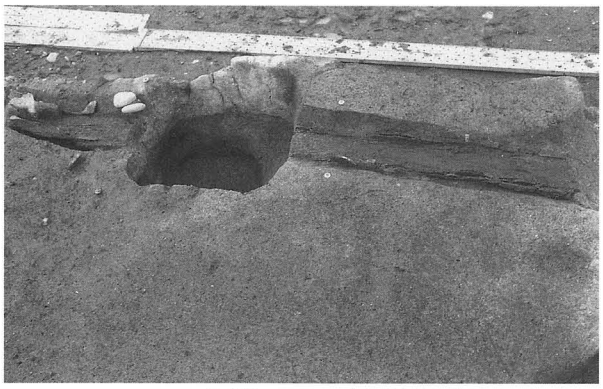
4．6号溝（北から）

5．6号溝セクション（南から）

6．7号溝D－3区（東から）

図版42　武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構（8）
Pl.42　Features of phase Ⅲ at BK7(8)

1．7号溝（北から）



2．7号溝D－4・5区（東から）

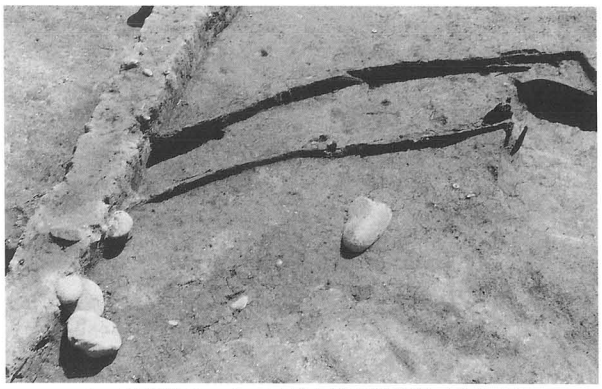
3．7号溝セクション（北から）

4．14号溝（南から）

5．14号溝セクション（南西から）

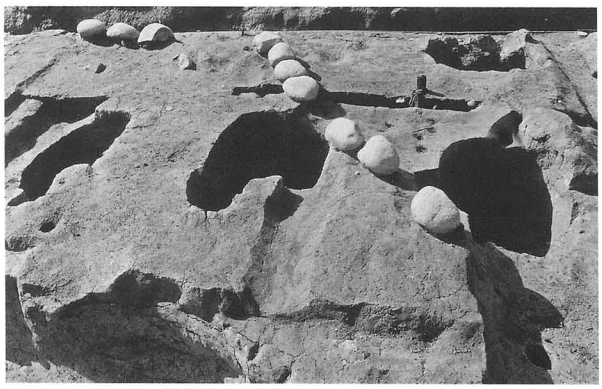
6．18号溝・26号溝D－5区（南西から）

図版43　武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構（9）
Pl.43　Features of phase Ⅲ at BK7(9)

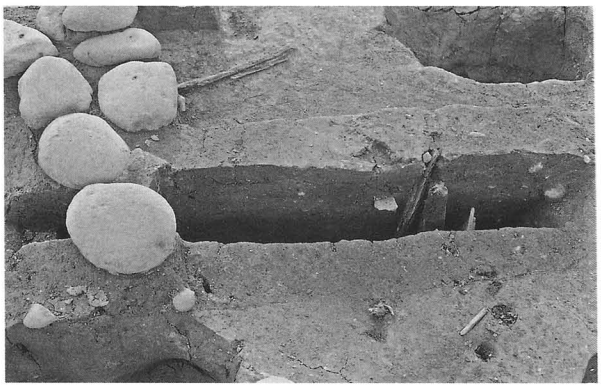


1．18号溝Ｅ－４・５区木材検出状況（北から）

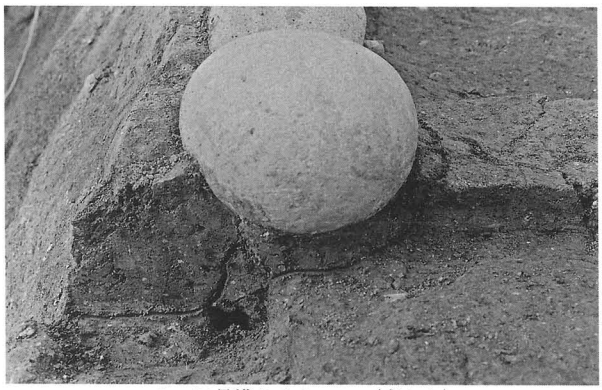
2．18号溝セクション（北東から）



3．18号溝・26号溝Ｄ－５・６区（東から）

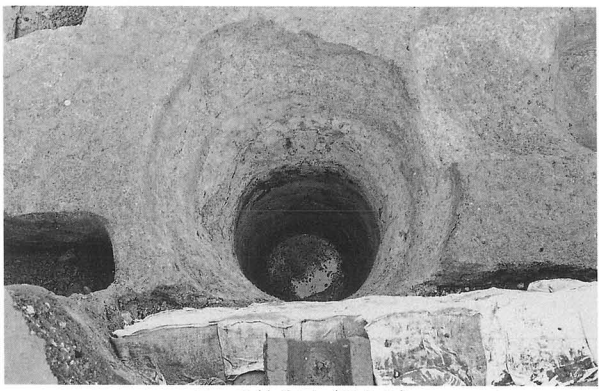


4．26号溝セクション（東から）



5．26号溝セクション（南から）

6．19号溝セクション（北から）



7．２号井戸（西から）

8．２号井戸セクション（北から）

図版44　武家屋敷地区第７地点Ⅲ期の遺構（10）
Pl.44　Features of phase Ⅲ at BK7(10)

1．2号土坑（北から）

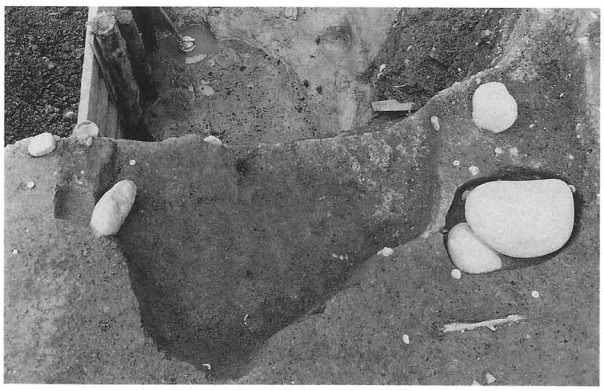
2．2号土坑セクション（東から）

3．2号土坑遺物出土状況（北から）

4．2号土坑木製鍬出土状況（南から）

5．2号土坑下駄出土状況（南から）

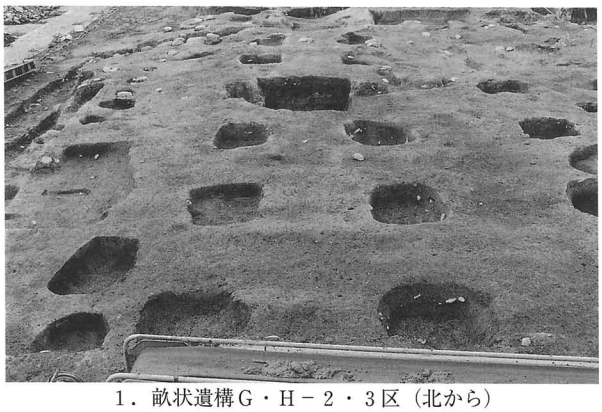
6．2号土坑漆椀出土状況（東から）



7．17号土坑（北から）

8．17号土坑セクション（北から）

図版45　武家屋敷地区第7地点Ⅲ期の遺構（11）
Pl.45　Features of phase Ⅲ at BK7(11)

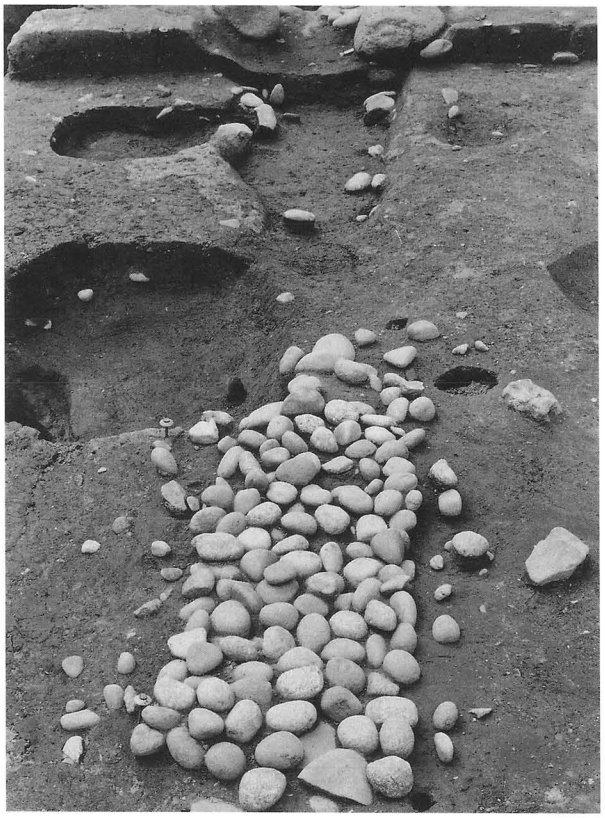


1．畝状遺構G・H－2・3区（北から）

2．畝状遺構G・H－2・3区（北東から）

3．畝状遺構E－2区（北から）

4．1号溝新段階・1号石列（東から）



5．1号溝古段階（東から）

6．1号溝新段階セクション（東から）

7．1号溝古段階セクション（東から）

図版46　武家屋敷地区第7地点Ⅳ期の遺構（1）
Pl.46　Features of phase Ⅳ at BK7(1)

1．11号溝（西から）

2．11号溝セクション（東から）

3．1号土坑（西から）

4．1号土坑（南から）

5．1号土坑セクション（南から）

6．5号土坑セクション（西から）

図版47　武家屋敷地区第7地点Ⅳ期の遺構（2）
Pl.47　Features of phase Ⅳ at BK7(2)

報告書抄録

ふりがな	とうほくだいがくまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう
書名	東北大学埋蔵文化財調査年報
副書名	
巻次	19
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	阿子島 香・藤沢　敦・柴田恵子・高木暢亮
編集機関	東北大学埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒980-8577　宮城県仙台市青葉区片平二丁目１－１　TEL022-217-4995
発行年月日	西暦2006年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
仙台城跡 二の丸北方 武家屋敷地区	宮城県 仙台市 青葉区川内41	04100	01033	38° 15′ 32″	140° 50′ 57″	2001.5.7～11.23	810	マルチメディア総合研究棟新営
芦ノ口遺跡	宮城県 仙台市太白区 三神峯 一丁目他	04100	01315	38° 13′ 35″	140° 51′ 20″	2001.11.26 ～12.20	512	GeV γ線実験室新営

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仙台城跡 二の丸北方 武家屋敷地区 第７地点	城館	近世	建物跡・廃棄土坑・溝・塀跡・池状遺構・ピット	陶磁器・瓦・木製品・木簡・金属製品・土製品・石製品	
芦ノ口遺跡 第５次調査	集落跡	縄文時代 古墳時代	溝・土坑	縄文土器・土師器・石器	

東北大学埋蔵文化財調査年報19　第１分冊

平成18年３月31日

発行　東北大学埋蔵文化財調査研究センター
〒980-8577 仙台市青葉区片平２丁目１－１
東北大学生命科学研究科内
ＴＥＬ　022（217）4995

印刷　株式会社　東　北　プ　リ　ン　ト
ＴＥＬ　022（263）1166